

室川貝塚第3～4次発掘調査概報

高宮廣衛・島袋優子・阿利直治・島袋 洋

I はじめに

室川貝塚の発掘調査は沖縄国際大学考古学研究室によって、1974年以来数次にわたって実施されてきた。第1～3次の調査成果については、その一部を本誌創刊号（註1）および第2号（註2）において報告した。今回は第3～4次調査のうち整理の終了した発掘区について調査の概要を報告したい。

本遺跡は本誌創刊号にも記したように、沖縄市による駐車場造成工事が端緒となって発見されたものである。発見当時、遺跡の東北端部はブルによって大きく削りとられ、遺物包含層の黒色土層が露出し、その縁端部では島尻層（第3紀層）の露頭さえ見受けられた。そのような状況から本遺跡はほとんど壊滅の状態にあり、そのまま放置すれば現在残っている包含層さえ浸蝕、風化等の自然破壊にさらされ、完全に湮滅してしまうのではないかと案じられた。

このような状況から、本遺跡の調査は、当初、露頭部における遺物の蒐集保存を目的として開始された。前回報告したMトレンチは露頭部における調査報告である。この第1次発掘調査の結果、包含層の上部はかなり削り取られているものの、包含層の下部はまだ周辺に残っていることが分った。

第1次発掘調査では、Mトレンチの調査と平行して、露頭部東方における文化層の有無を確認するため、2m四方のテスト・ピット（S-5）を東北端部に設定し、試掘調査を行った。その結果、露頭部東方一帯に未攪乱層の残存していることが明かになった。その

ため第2次調査は露頭部東方地区を重点的に行うことにした。

第2次発掘調査は1975年の夏実施した。まず、前記のテスト・ピット（S-5）を南へ8m延長し、これをSトレンチと呼ぶことにした。同トレンチでは第Ⅲ層下に一部焼土面が現われ、その性格について検討する必要が生じた。そのためには現発掘区を拡張して、その広がりを追跡し遺構か否かの検討も行なはねばならないが、時間的余裕がなく、第2次調査は一応この焼土面で中止した。焼土は南から北へ10ないし30度で傾斜しており、住居床面とは考え難かったが、念のためそれ以下の調査を保留したのである。

他方、第1次調査の際着手できなかったMトレンチのピット3、5、7についても調査を実施し、一先ず終了することができた。

第3次発掘調査（1976）はSトレンチの焼土の検討から始めることにした。そのためSトレンチに東接してTトレンチを設定し、同トレンチにおける焼土の広がりを検討した。その結果、Tトレンチでは焼土面の傾斜が急で、Sトレンチにおける傾斜およびその他の状況を考慮した場合、住居床面の可能性はほとんどないことが分った。

そこでSトレンチについては焼土層以下の調査を開始することにした。

Sトレンチの調査と平行して、中央区東北端部における堆積層の状況を調べるため、QR-7でも試掘調査を実施したところ、ここでも焼土面が確認された。焼土は比較的水平方向に広がっていた。しかし、拡張してその性格を追求する時間がなかったので、焼土面

で試掘作業を中止した。

ところで、Sトレンチでは最下層の地山で新形式の土器を確認した。これが室川下層式土器であるが、地山は本来無遺物層であり、この土器の文化層が本地域のどこかにあるはずである。室川下層式土器の文化層を突きとめることが今後の大きな課題となってきた。

他方Sトレンチにおける第2～3次発掘調査の結果、焼土層を一つの基準として、その上下に時代の異なる何枚かの文化層が確認され、土器の編年研究に有望であることが分り、かつ、S-9区では伊波式が荻堂式の下層より検出され、両者の先後関係がおさえられるのではないかと考えられた。しかし、Sトレンチの資料だけでは十分ではないので、さらに発掘区を拡張し、資料を得る必要が生じ、また、先述のように、室川下層式土器の文化層を突き止める必要もあって、第4次調査をSトレンチ以西で行うことにした。

第4次発掘調査は1977年8月1日より同月23日までの23日間実施した。まず11～13ラインをSトレンチから西方へ延長し、新たに8ピットを設け、Sトレンチを含めこの地区を中央区と呼ぶことにした。焼土層はこの中央区西方にも延びていたが、時間の都合もあって、発掘作業はこの焼土層を確認した段階で中止した。

第4次調査は中央区の発掘調査と平行して、ほか2ヶ所でも遺跡の範囲確認調査を行った。

その一つは中央区に南接する段々畑の最下段で行うことにし、Tトレンチを南へ延長し、畑地の中央部にT-16・17の2ピットを設け、調査を開始した。その結果、地表下2.5～3mの位置で2枚の未攪乱埴貝土層を確認した。同層では後述のように新形式の室川式土器を多量採集することができた。

他の一つは東南部における遺物層の有無を

確かめるため、台地下の斜面に接する最上段の畑地内で行った。ここをT・P. (テスト・ピット) 区と称している。試掘範囲(2×3m)は狭かったが、予想以上に深かったことと雨天続きだったために、後述のように完掘するのに3次におよぶ調査を余儀なくされた。

以上が第1～4次調査の概要であるが、今回は調査を終了した発掘区のうちT-16・17区、テスト・ピット、Q・R-7の3区について調査の概要を報告する。

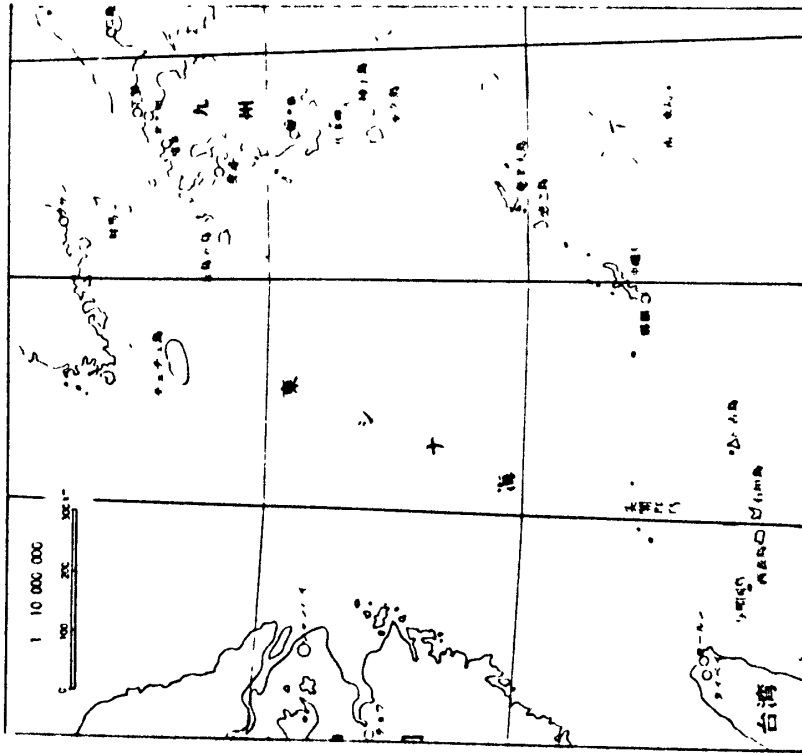
発掘調査に際しては沖縄市教育委員会の山城清輝委員長をはじめ幸地清裕課長、新城長助係長、仲本朝彦、嘉手川繁秀、西銘厚、前係長棚原敏雄の諸氏から多大の便宜を頂き、照屋正雄室川幼稚園長は同幼稚園を快く宿舍に提供され、また幼稚園の諸先生方からも物心両面にわたるご援助を頂いた。沖縄市区画整理課の兼島兼忠氏のご多忙中にもかかわらず、昨年同様地形図の作成を担当して下さいました。以上の方々の熱心な御協力によりスムーズに調査を実施することができた。厚くお礼申し上げたい。

本貝塚の石器や自然礫等の石質については琉球大学木崎甲子郎教授に、また獣骨については国立科学博物館の長谷川善和博士に、そして土器の胎土に含まれるテンパーについては琉球大学の古川博恭教授に同定をお願いした。また、テスト・ピットにおける各層の堆積状況を沖縄県立博物館の大城逸郎氏にご検討願った。記して心より感謝申し上げる次第である。

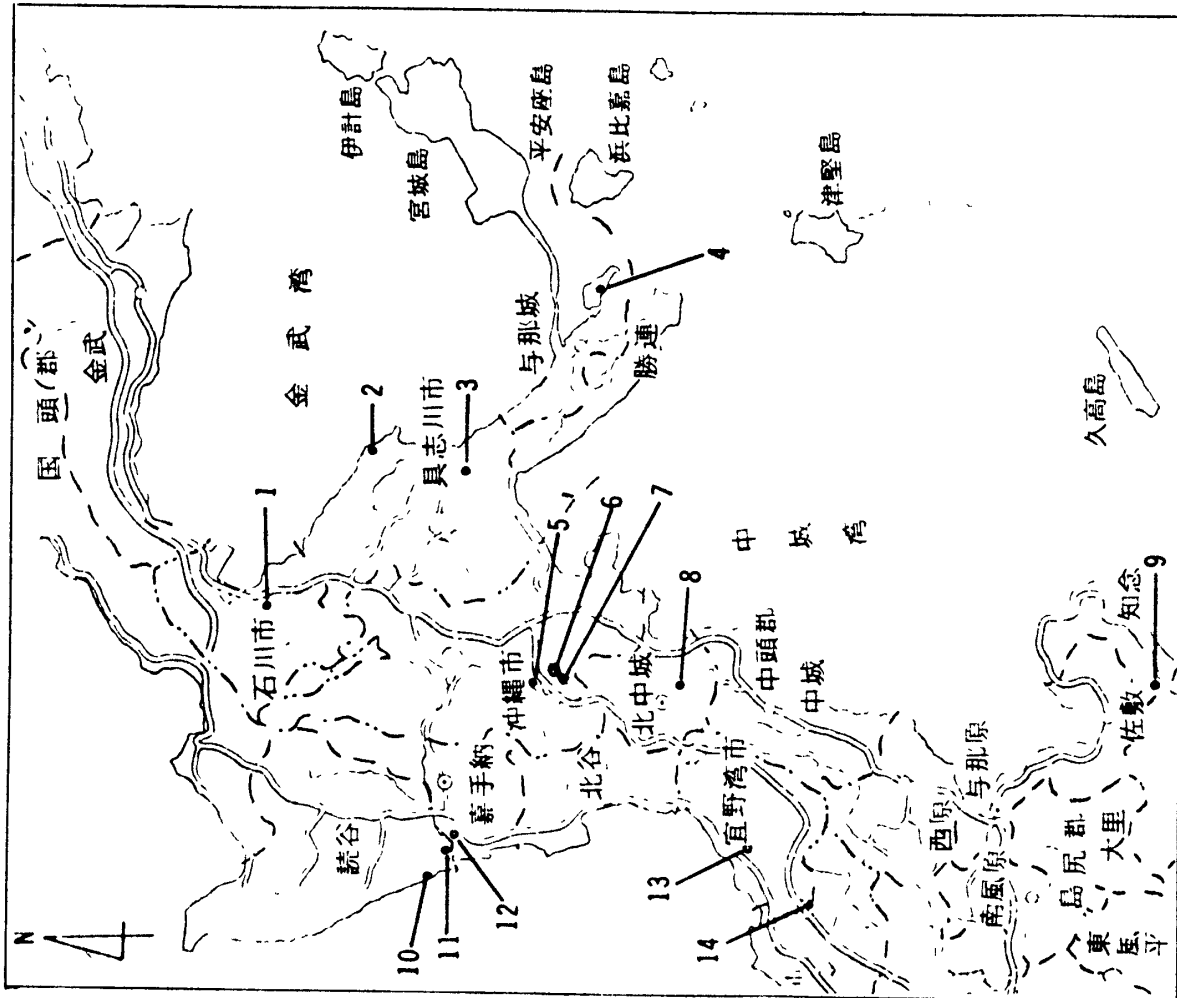
本報告を作成するにあたり、遺物の整理、図表の作成および執筆を下記の通り分担し、これをそれぞれの項において高宮が補訂した。また、写真は比嘉栄哲、湖城清両氏が担当した。なお、本遺跡の自然環境については前号に述べたので、今回はこれを省略する。

記

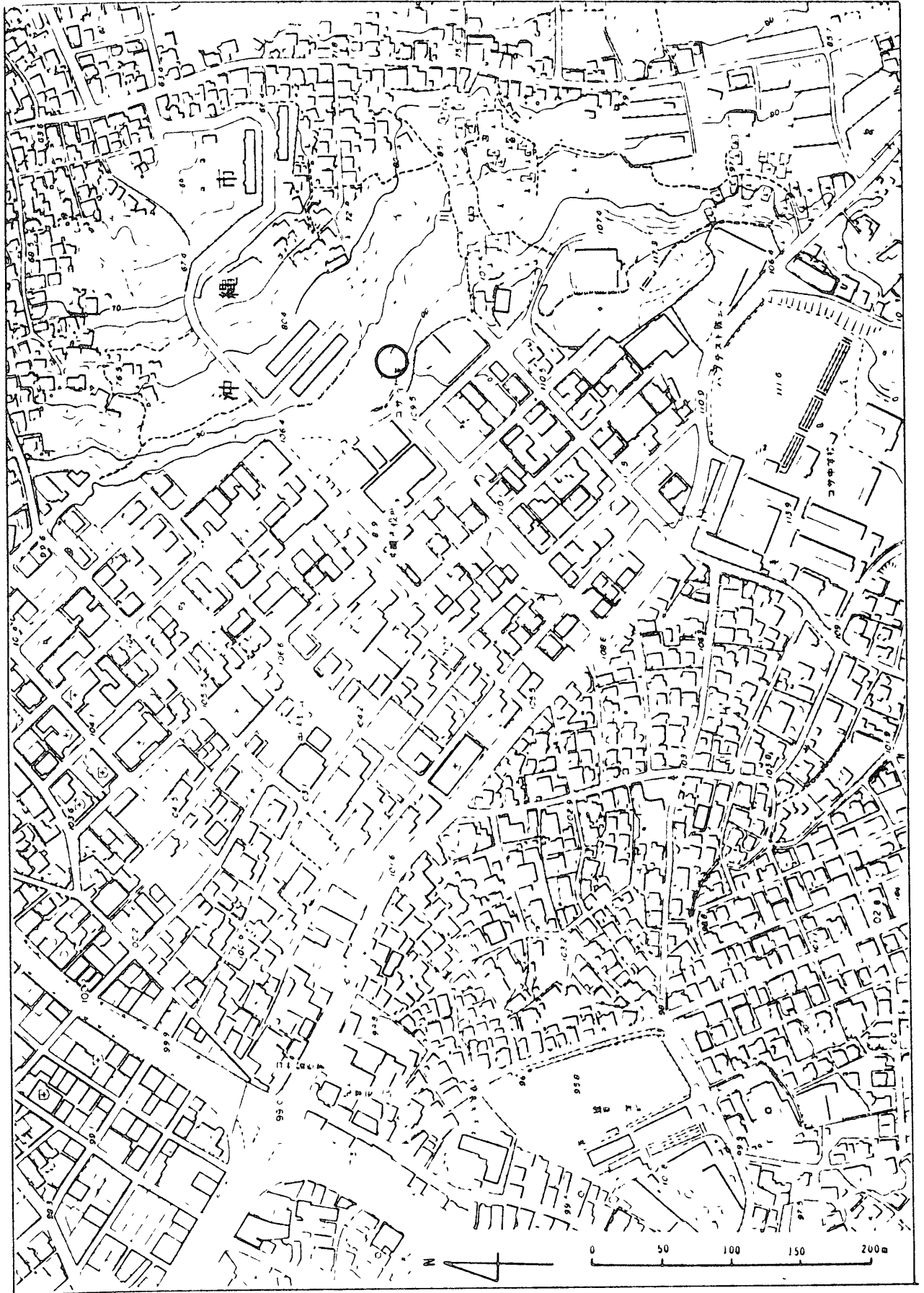
- 1 Tトレンチ(T-16・17区) 島袋 洋
- 2 テストピット(T・P.区) 阿利直治
- 3 Q・R-7区 島袋優子



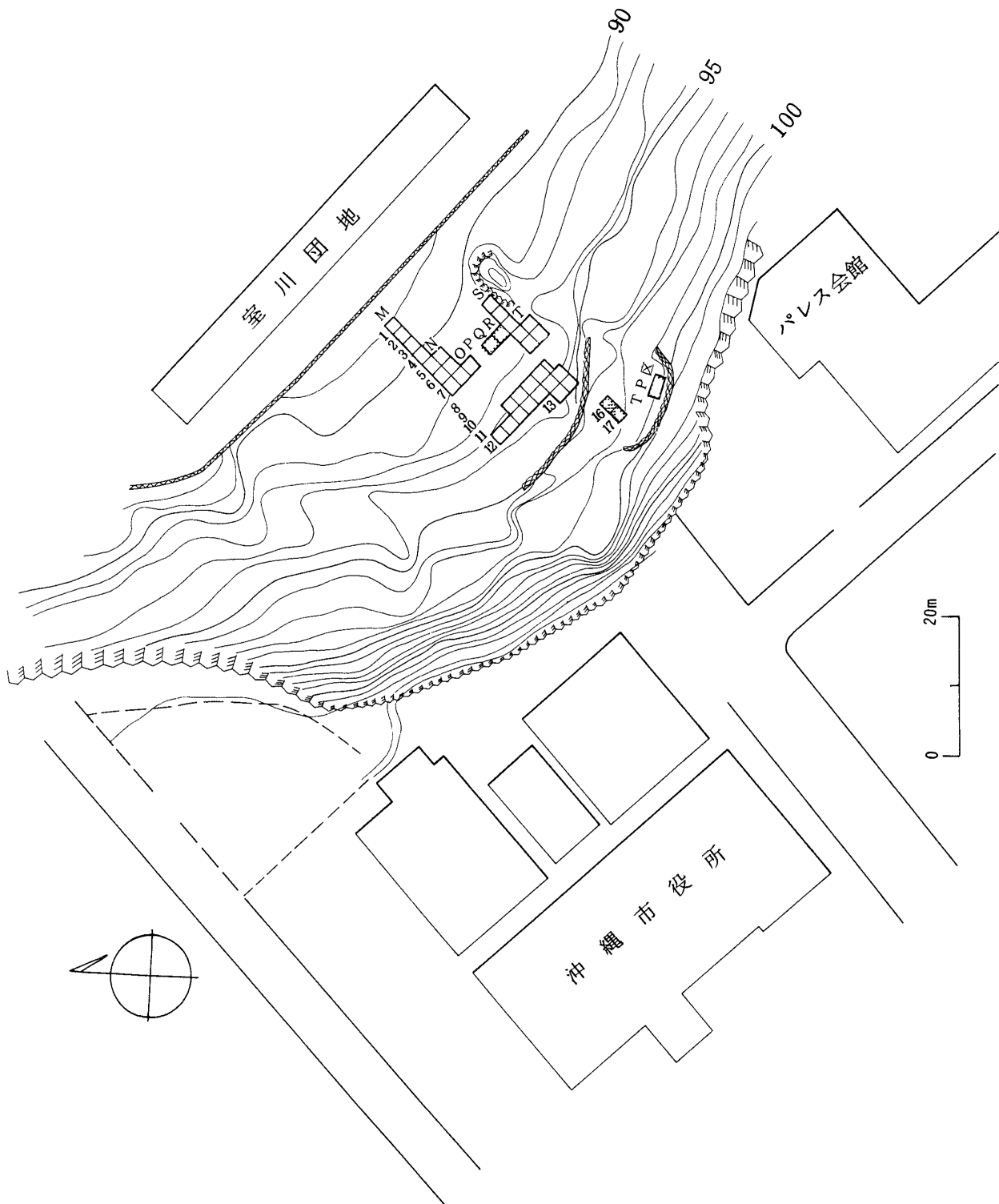
- | | | | |
|---|-------------|----|----------|
| 1 | 伊波貝塚 | 8 | 荻堂貝塚 |
| 2 | 隅原遺跡 | 9 | 熱田原貝塚 |
| 3 | 地荒原貝塚 | 10 | 渡具知木綿原遺跡 |
| 4 | ヤブチ洞穴遺跡 | 11 | 渡具知東原遺跡 |
| 5 | 八重島貝塚 | 12 | 嘉手納貝塚 |
| 6 | 室川貝塚 | 13 | 大山貝塚 |
| 7 | 仲宗根貝塚 | 14 | 浦添貝塚 |



第1図 室川貝塚の位置



第 2 図 遺跡附近の地形（○は室川貞塚）



第3図 Tトレンチ、T.P.区および Q・R-7区

II T トレンチ (ピット 16・17 区)

A はじめに

本トレンチは第3図にみるように、第1 - 3次調査を行った中央メイン発掘区より一段高くなった旧耕地内に設定されたもので、前記中央区との比高は約3 m、両者の境界には石灰岩の石垣が積まれている。この石垣の築造年代は不明である。この地域は、いわは段々畑の最下段にあたっている。段々畑は石灰岩台地東北縁の崖にそって、ほぼ東西方向に細長く構築されており、幅は最も広い所で約7 m、狭い所で約5 mである。

本地域の調査目的は二つあった。その一つは、斜面下方(段々畑)における遺物包含層の有無を確かめることと、もう一つは室川下層式土器を包含する文化層の発見である。後者については中央区における発掘調査の結果から、斜面側の段々畑に期待がもたれたからである。そのため中央発掘区のTトレンチを南へ延長し、前記旧耕地の比較的広い箇所にて2つのピットを設け、Tトレンチの呼称に従って北側をT-16、南側をT-17とした。試掘調査の結果、室川下層式土器の文化層を突き止めることはできなかったが、下部に未攪乱の混貝土層を2枚確認した。

本文では、前記両ピットの調査結果について報告する。

B 層 序

この地区は予想以上に深く、地山までの深さは約3 mであった。その間、8枚の層がみられたが、上位5層は攪乱を受けていた。堆積層は全体的に南→北の方向に傾斜し、下方(北側)へ厚くなる傾向を示していた。

以下、各層について説明する。

第I層

表土攪乱層で、発掘区全面にみられ、全般的に南から北へ傾斜し、10~70 cmの厚さを有し、南壁側で薄く、北壁側で厚い。アフリカマイマイやビンの破片などに混して先史遺物も散見された。

第II層

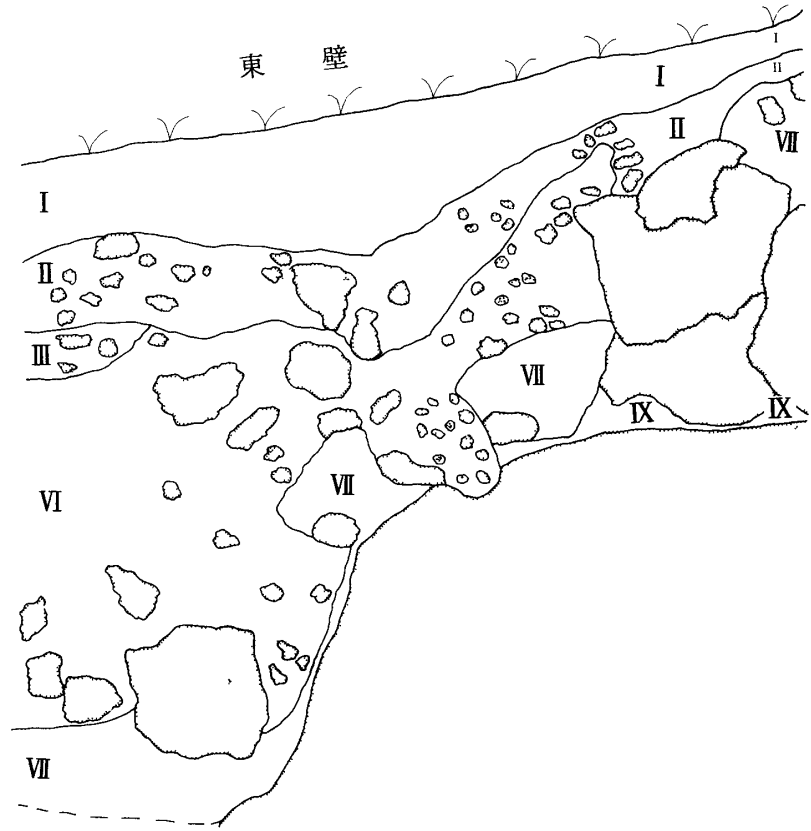
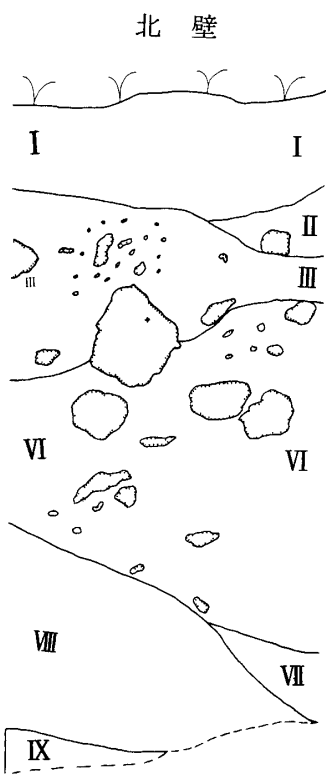
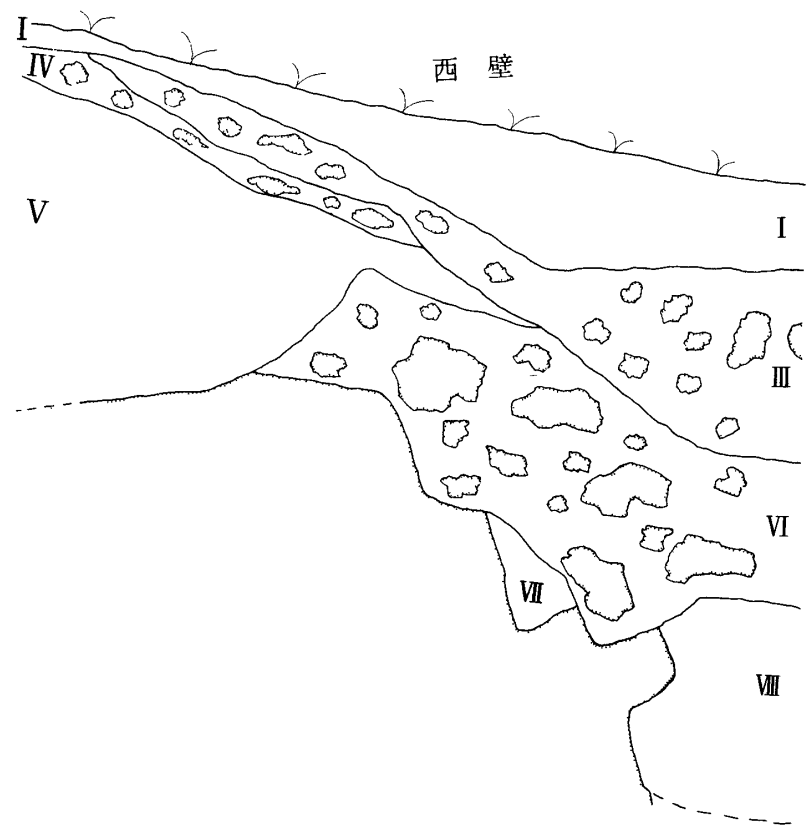
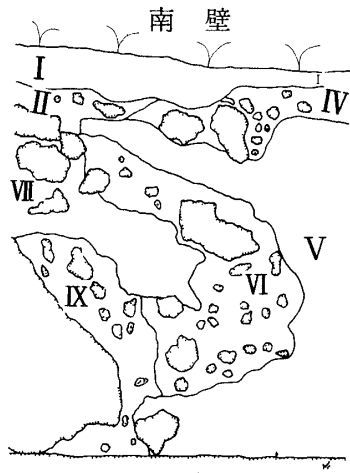
トレンチの東半部にみられる黄褐色混礫土層で、南壁の中央付近から東壁にのび、さらに北壁の東側に及んでいる。表層と同じく北壁側へ傾斜し、ビニール、空カン、ビンなどに混して先史遺物も散見された。薄い所で10 cm、厚い所は45 cmであった。

第III層

主として西北側に分布する黒褐色混礫土層で西壁で見ると、南西隅から約30 cmのところから始まり、北側へ傾斜しながら厚さを増し、北壁面で最も厚く、東壁側へ厚さを減ずる。層厚は10~85 cmで、二次堆積による攪乱層。ガラスの破片などが検出されたが、先史遺物としては室川式土器が最も多く、次いで宇佐兵式土器が多かったが、他に後期的な焼成の良い、凸帯文を貼付した口縁破片も1点出土している。その他、石器やチャートの破片も少量検出された。

第IV層

南西隅を中心に南壁・西壁の1部にみられた暗褐色の混礫土層で、T-17にのみ存し下方のT-16に及んでいない。南壁面では西半分に帯状に拡がり、西壁面では北壁側へ傾斜し、トレンチ中央付近で消滅する。層厚は10~30 cmで、人工遺物は検出されな



第4図 Tトレンチ (T-16, 17区) の側壁図

○ は石灰岩礫

ったが、下位の第V層との関係でみるとこの層も二次堆積によるものと考えられる。

第V層

南西隅に厚く堆積したシルト質泥岩の層で南壁面でみると東壁近くまでのひ、西壁面ではT-16の南側1/3のところまで消滅する。この層は第3紀層であり、本来なら琉球石灰岩の下位にくる地層であるが、本トレンチでは一部石灰岩の上に乗っており、また、ガラスの破片などを含むことから二次堆積によるものと思われる。土器片も若干検出された。本層の下端は未確認。

第VI層

暗褐色混礫土層で、上位の混礫層に比べ、石灰岩礫の大きなものが目立つ。この層は、かつて全面に広がっていたと思われるが、南西隅では第V層（シルト質泥岩）によって切

られている。全体的に北壁側へ傾斜し、東北隅で最も厚い。層厚は30～155cm。人工遺物は土器片が最も多く、完形の局部磨製石斧も1点検出された。本層下部では獣魚骨なども散見された。本層以下は未攪乱である。

第VII層

黒褐色混貝土層で、一応、総ての壁面に見られたが、一枚の連続した層としてではなく、主として東壁側に断続的に認められ、全体的に北側へ傾斜している。また、T-16では一部西壁にもおよんでいる。層厚は20～50cm。本層に含まれる貝の主体はアラスシケマンガイで、他にリュウキュウサルホウ、リュウキュウサルガイなどが散見された。獣魚骨も比較的多かった。土器は破片が大型になり、型式の上では室川式が目立つ。その他、骨製貝製の人工品も僅かながら検出された。

第1表 T-16・17区の出土遺物

層序	種類	人工遺物					自然遺物			合計
		土器	石器	骨器	貝器	後世遺物	獣骨	魚骨	自然礫	
I		61	1			63		2	6	133
II		5				27				32
III		66	1			35			16	118
IV						15				15
V						5				5
VI		141	1				11	31	20	204
VII		450	5	1	4		55	273	47	835
VIII		248	1	1	3		69	295	42	659
計		971	9	2	7	145	135	601	131	2,001

(注) 貝類を除く。

第VIII層

暗褐色混貝土層で、北西隅にのみ認められ

た。層中に含まれる貝の種類やその比率は第VII層とほぼ同じであった。層厚は北西隅で最

も厚く80 cmを測り、東壁側へ薄くなり、やがて消滅する。本層の主体土器は室川式土器である。その他、貝製品や骨製品も若干検出された。

第IX層

赤褐色混礫土層（俗名マージ）で、地山層にあたり、主として南壁側及び北壁側にみられ、トレンチ中央部は石灰岩の岩盤になっていた。マージの量は全体的に少なく、以下に包含層が及んでいないかどうかを確かめるため、この地山層において一部試掘を試みたが、人工遺物を包含する層は認められなかった。

C 出土遺物

第1表にみられるように、本トレンチでは先史遺物のほか後世遺物も若干検出されたが、

本文では先史遺物についてのみ報告する。

先史遺物は人工遺物と自然遺物に大別される。

1 自然遺物

貝類・獣魚骨・自然礫などがあり、その大半が第VII層およびVIII層からの出土であった。

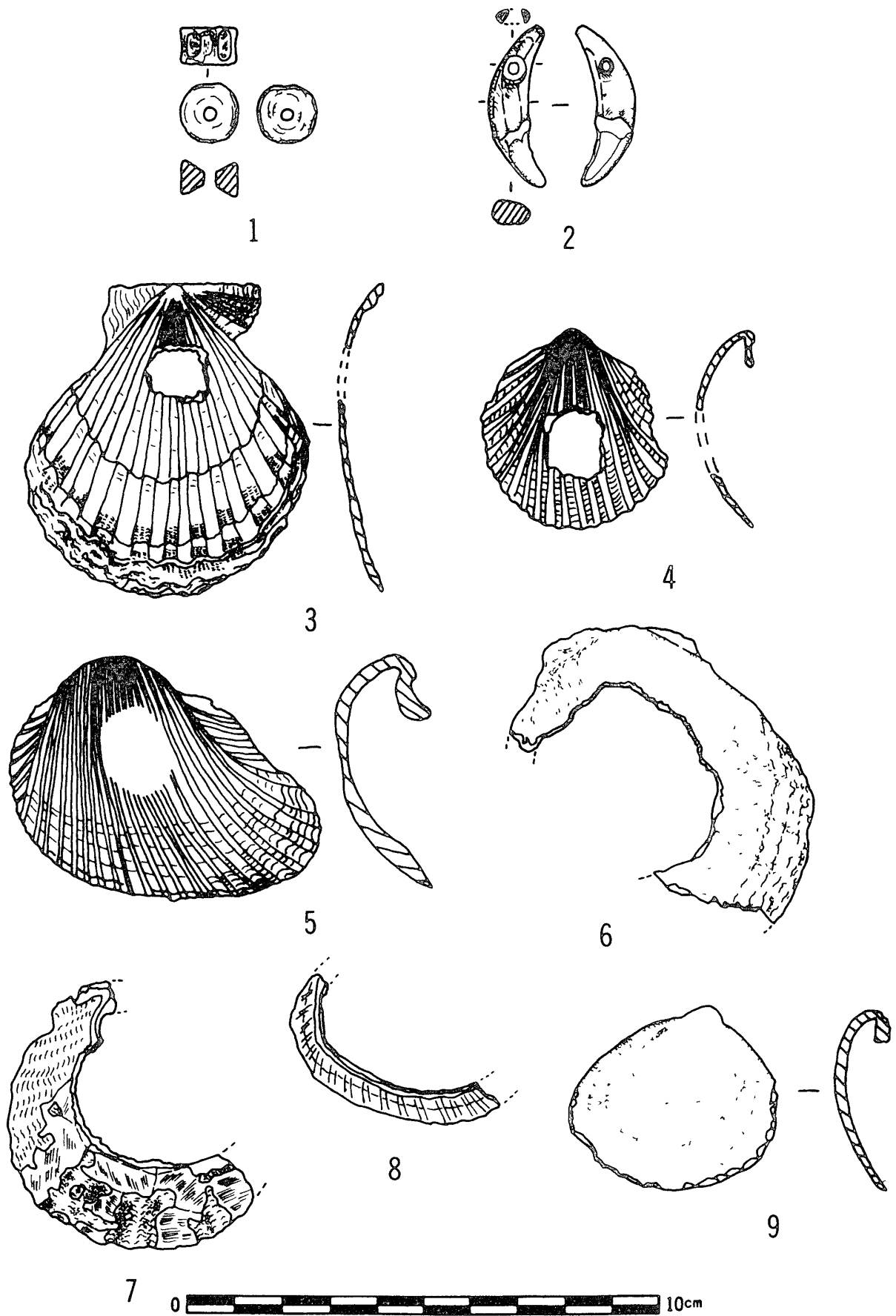
自然礫および石器の石質については木崎甲子郎琉球大学教授に同定して頂いた。その結果、自然礫（石灰岩を除く）は6種類認められ、出土量は第2表の通りであった。

その他の自然遺物については正式な鑑定を経た上で報告することにするが、貝類ではアラスジケマンガイが最も多く、獣骨ではイノシシやイヌなども見受けられ、魚骨ではブダイの頭骨などもみられた。これについては後日正式に報告したい。

第2表 T-16・17区出土の自然礫

種 類 層 序	砂 岩	千 枚 岩 質 輝 緑 岩	砂 質 千 枚 岩	黒 色 千 枚 岩	砂 岩 (島 尻 層)	シ ル ト 岩	合 計
I	$\frac{1}{50}$	$\frac{1}{573}$	$\frac{1}{2666}$		$\frac{2}{170}$	$\frac{1}{10}$	$\frac{6}{26239}$
II							
III	$\frac{10}{285}$		$\frac{3}{47.57}$		$\frac{3}{220}$		$\frac{16}{55257}$
IV							
V							
VI	$\frac{6}{420}$	$\frac{1}{170}$	$\frac{4}{100}$		$\frac{6}{390}$	$\frac{3}{815}$	$\frac{20}{1895}$
VII	$\frac{18}{1,100}$	$\frac{2}{150}$	$\frac{7}{170}$		$\frac{19}{2,185}$	$\frac{1}{5}$	$\frac{47}{3,610}$
VIII	$\frac{23}{2,170}$		$\frac{8}{80}$	$\frac{1}{2133}$	$\frac{7}{700}$	$\frac{3}{215}$	$\frac{42}{3,18633}$
計	$\frac{58}{4,025}$	$\frac{4}{32573}$	$\frac{23}{42423}$	$\frac{1}{2133}$	$\frac{37}{3,665}$	$\frac{8}{1,045}$	$\frac{131}{9,50629}$

※ 分子は個数、分母は重量 (g)



第5図 Tトレンチ (T-16・17区) 出土の骨・貝製品

2 人工遺物

土器・石器のほか、貝製・骨製の人工品も得られた。出土量は土器片が最も多く、他の製品は少なかった。以下、各製品について記述する。

イ) 骨製品

骨製品はT-16から2点出土した。いずれも装身具と考えられるものである(第3表)。

第5図1はサメの脊椎骨に孔を穿ったもので、径1.1cm、高さ0.7cm。類例は本遺跡でも数点出土している。第VII層の出土。

同図2は犬の歯を利用し、骨質部に1孔を

設けたもので、孔は両側より穿たれている。完形品である。本県での出土例はこの標品をもって嘴矢とする。長さ3.4cm、骨質部の最大径0.8cm。第VIII層の出土。

ロ) 貝製品

骨製品と同じく、T-16だけから7点の出土をみた(第3表)。

第5図3はリュウキュウオオギガイに1孔を設けたもので、孔は粗雑である。孔の周辺に使用痕は認められない。第VII層の出土で、類例は萩堂貝塚(註3)で知られ、削子に使用されたであろうと推定されている。重さ9.90g。

第3表 T-16・17区出土の骨製・貝製品

種 類 層 序	貝 製 品							骨 牙 製 品			合 計
	有 孔 オ オ ギ ガ イ	貝 刃	貝 輪 (メ ン ガ イ)	貝 輪 (ザ ル ボ ウ)	有 孔 ザ ル ガ イ	ザ ル ボ ウ を 研 磨 し た も の	小 計	ペ ン ダ ン ト (犬 の 歯)	ビ ー ド (サ メ の 脊 骨)	小 計	
I											
II											
III											
IV											
V											
VI											
VII	1	1	1	1			4		1	1	5
VIII			1		1	1	3	1		1	4
計	1	1	2	1	1	1	7	1	1	2	9

同図4(図版5の4)はリュウキュウザルガイに1孔を設けたもので、製作はラフであるが、輪郭は方形に近い。第VIII層の出土で、

類例はアカジャンガー貝塚(註4)などにあり、垂飾りと考えられている。

同図5(図版5の5)はリュウキュウザルボウ

の殻頂に近い部分を研磨して平坦にしたもので、中央白色部が加工面である。ここ以外に加工痕は認められない。用途は不明。未成品かもしれない。重さ 3859 g。第Ⅷ層の出土。

同図 6～8 は貝輪の破片と思われるもので 6 と 7 はメンガイを使用している。加工部は粗く、摩耗などの使用痕は見受けられないから未成品と思われる。6 は重さ 1367 g で第Ⅶ層、7 は重さ 958 g で、第Ⅷ層の出土。

同図 8 はリュウキュウサルボウの腹縁部を細長く切りとったもので、加工面は前者同様ラフであり、摩耗などの使用痕はみられない。これも未成品であろう。第Ⅶ層の出土で、重さは 279 g。

同図 9 は二枚貝（ハマグリ？）の腹縁部にチップングを加えたもので、類例は渡喜仁兵衛原貝塚（註 5）などから報告がなされ、貝刃とされているものである。重さ 729 g。第Ⅶ層の出土。

ハ) 石 器

本トレンチでは 9 個（T-16 で 6 個、T-17 で 3 個）の石器が得られたが、ほとんど破損しており、完形品は少なかった。石器の種類及び層位的出土状況は、第 4 表の通りである。

第 6 図 10 は局部磨製の石斧で、本トレンチ出土の唯一の完形品である。まず、調整剝離を行い、次に刃部を中心に研磨を行っているが、研磨は表裏とも一部胴の前半分におよんでいる。しかし、徹底しているわけではなく刃部や胴前半部で研磨のおよばない部分もある。刃は片刃の両刃である。かなり使用されたとみえ、調整剝離部にも手なれようの摩耗がみられる。刃部は一部破損しているが、まだ、鋭利な刃を残している。小型の石斧で、長さ 7.7 cm、重さ 6950 g。千枚岩質輝緑岩

製。T-16 第Ⅵ層の出土。

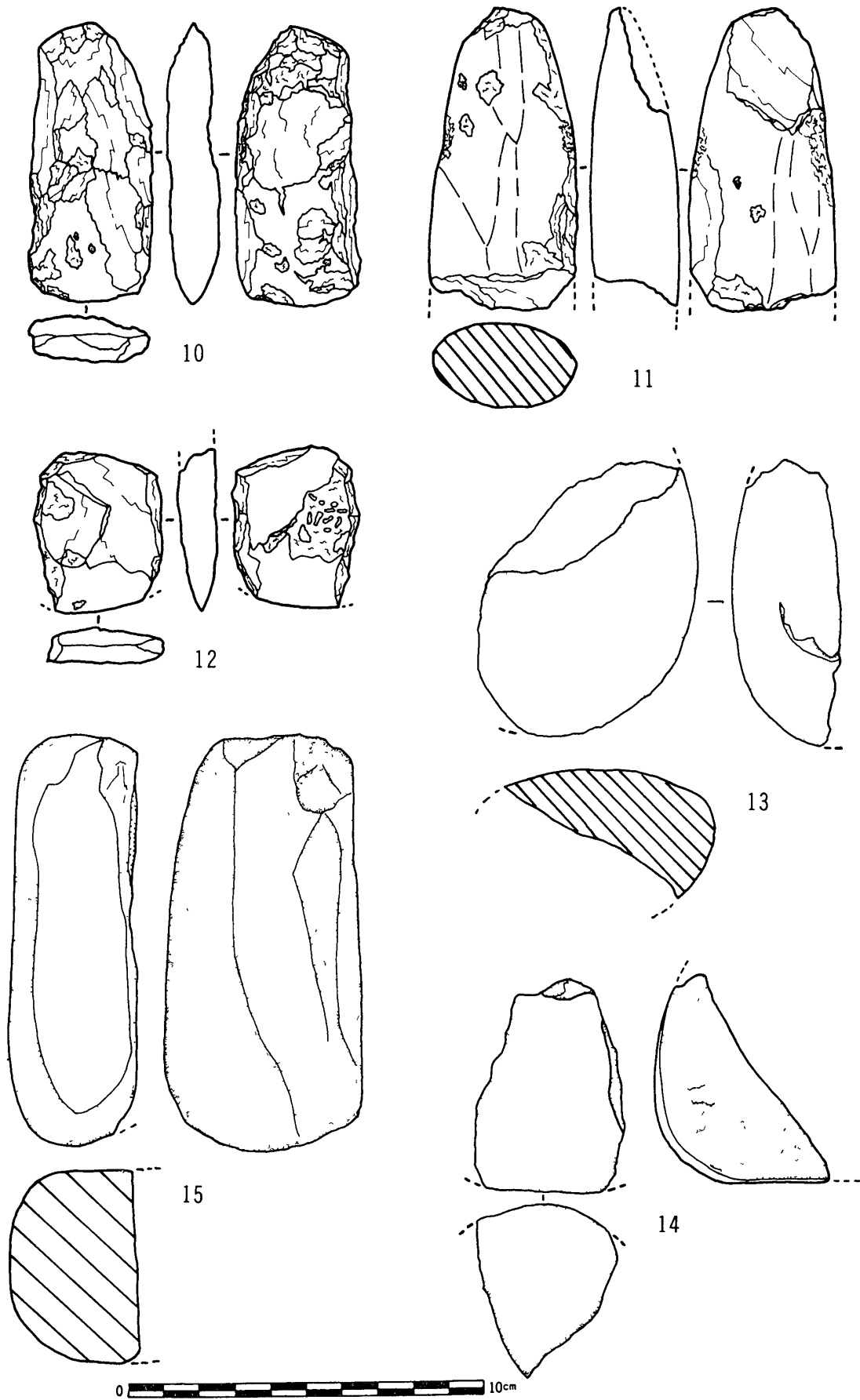
同図 11 は磨製石斧の破片で、刃部を欠き、頭部も一部破損。研磨は比較的徹底しており全体的に滑沢を有するが、側面では敲打痕の消え切らない部分もある。側縁の 1 つには敲打により浅い抉りを設けた箇所もある。横断面は楕円形で、いわゆる乳棒状の石斧に属するものである。砂岩製、T-16 第Ⅷ層の出土。現存の重量は約 132 g。

同図 12 は局部磨製石斧の刃部破片で、両刃である。刃部は一部破損しているが、刃部における研磨は徹底しており、剝離面を残さない。胴部の調整剝離面では、使用による摩耗痕が観察される。横断面は扁平。千枚岩質輝緑岩製で、重さ 2665 g。T-17 第Ⅵ層の出土。

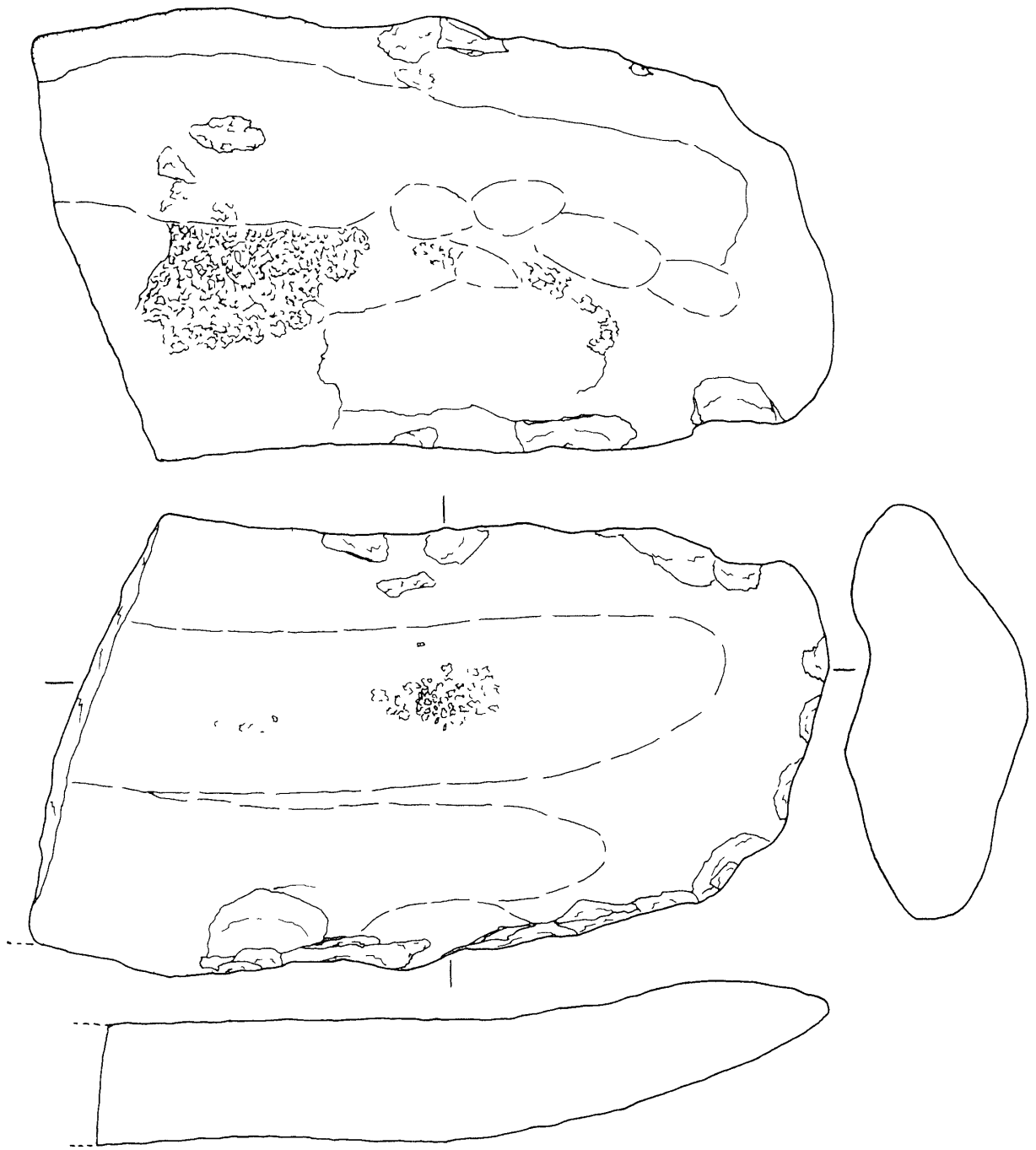
同図 13 は磨石の破片と考えられるものである。著しく破損しているが、原形は石鱗状を呈していたと思われる。平面は滑沢を有するほど研磨されている。しかし、側縁では砥磨痕も観察される。砂岩製で、重さ約 161 g。T-16 第Ⅲ層の出土。

同図 14 も磨石の破片と考えられるもので、表面は滑沢を有すほど研磨されている。残念ながら著しく破損しているため、原形を復元し得ない。石質は砂岩で、重さ 10122 g。T-17 第Ⅶ層の出土。

同図 15 は石皿の破片を叩石に転用したもので、石皿の側縁部を再利用しているが、一部に製粉用の磨面を残している。長軸の両端は叩きに使用した痕跡を残している。現存部の重量は約 372 g で、石質は砂岩。T-17 第Ⅰ層の出土。



第6図 Tトレンチ (T-16・17区) 出土の石器



16

0 10cm

第7図 Tトレンチ出土の石器（T-16区第Ⅶ層）

第4表 T-16・17区出土の石器

図番	種類	石質	出土層位	産出層	備考
第6図10	石斧	千枚岩質輝緑岩	VI層	名護層	
11	石斧	砂岩	VIII層	名護層	
12	石斧	千枚岩質輝緑岩	VII層	名護層	
13	磨石	砂岩	III層	嘉陽層	
14	磨石	砂岩	VII層	嘉陽層	
15	叩石	砂岩	I層	嘉陽層	
	不明	粗粒角閃岩	VII層	名護層	慶良間産
	不明	砂岩	VII層	嘉陽層	

第7図16は砥石と考えられるもので、一面には長軸の方向に幅約5cmの溝が設けられ、中心部（破損面）へ向って次第に深くなっている。半欠品であるが、第三紀砂岩を利用しているところから、砥石とみられる。重量は約2540g。T-16第VII層の出土。

その他に研磨痕を有する破片が、T-16第VII層で2点検出されているが、小破片のため用途を推測し得ず、実測を省略した。

二) 土器

本トレンチでは総数971点の土器片が採集された。その内訳は口縁部63点、胴部894点、底部14点である。土器片はほとんどが小破片のため完全に復元しうるものはないが推定復元の可能なものは3点ある。そのうちの2点は室川式、他の1点は室川期のカヤウチバンタ式である。

第5表 T-16・17区出土の土器

型式 層序	口縁及び有文胴部									無文胴部						合計	
	伊波式	荻堂式	伊波か荻堂か不明	大山式	室川式	室川上層式	宇佐浜式	奄美系	後期系	小計	A	B	C	D	不明		小計
I	3		2		2		1			8	8	41	1	2		52	60
II												4		1		5	5
III					4		1		1	6	10	31	4	11	2	58	64
IV																	
V																	
VI		2			3					5	15	107	9	2	4	137	142
VII	3	3	5		25			1		37	37	364	4	2		407	444
VIII	1	1			22					24	13	205				218	242
計	7	6	7		56		2	1	1	80	83	752	18	18	6	877	957

(注) A=伊波・荻堂・大山式、B=室川式、C=室川上層式、D=宇佐浜式の胴部破片。その他に底部が14点得られた（伊波～大山期の底部が4点、室川式Aの底部が4点、室川式Bの底部が6点である）。

本トレンチ出土の土器を型式別にみると、第5表のように伊波式、荻堂式、室川式、室川上層式、宇佐兵式などがあり、他に奄美的文様を施すものや凸帯を貼付した土器（後期）もそれぞれ1点ずつ検出されている。

本トレンチの土器は室川式が圧倒的に多く、他の型式はそれぞれ少量検出されたに過ぎないか、大山式は全く見受けられなかった。

以下、各型式について古い順に略述する。

2 伊波式土器

伊波式土器は極めて少なく、伊波式に含めてよいと考えられる標品を合わせて7点の出土であった（第8図17～23、図版8の1～7）いずれも小破片で、復元して全形を示し得るものはない。第1～3次発掘調査の結果、本遺跡の伊波式土器は3種に大別されたが（註2）、本トレンチ出土のものは破片が小さく、分類困難なものもある。念のため上記3種について再記すると、次の如くである。

イ) 第1種

上段（口縁部）および下段（胴上部の肩部）に点刻文、連点文、短枕線文、長枕線文などを1～2条水平方向に施し、両者の間、つまり、中段（頸部）を無文のまま放置するグループ。

ロ) 第2種

第1種土器のうち、中段を数種の文様で埋めるグループ。

ハ) 第3種

文様を施さない、つまり、無文の伊波式土器。

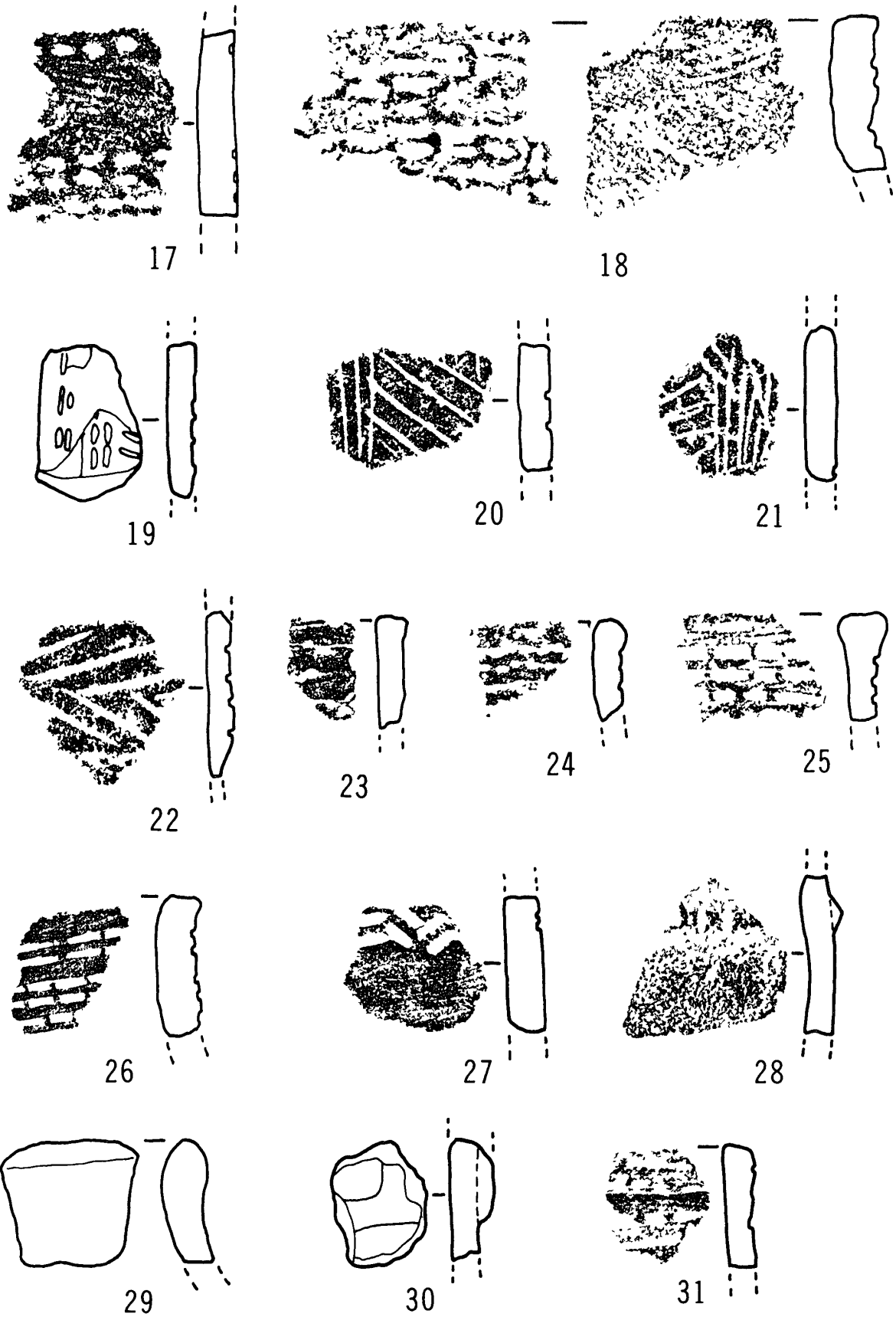
第8図17は口唇部を欠くが頸部の上下に点刻文を横走させる例で、上記の分類に従え

は頸部無文の第1種に属するものである。器面は両面ともナデによって調整されている。

同図18は口縁の破片で、口唇上は無文。口頸部には少なくとも横位の点刻文が3条見受けられ、破片の右端下部では縦位点刻文の一部が認められる。点刻文は力強く描かれ、施文は深く、ヘラを止めた部分は土が僅かに盛り上っている。器形（口縁の外反の仕方）および点刻文を文様要素としている点は伊波的であり、したがって本項に含めたが、三列の横位点刻文は等間隔に施されており、文様構図からすれば荻堂的である。表面はナデ仕上げ、裏面には斜行の擦痕が見受けられる。いずれもT-16で検出されたもので、17は第VII層、18は第VIII層の出土。

同図19は頸部の破片で、縦位凸帯の下端部を残している。凸帯はかなり破損しているが、凸帯上面および側縁の器面接合部にも縦位の点刻文がわずかに見受けられ、また、頸部下辺では横位文の一部が認められる。ただし、上・中・下の三つの文様帯のうち、中段を無文としたか、あるいは何らかの文様で充填したかは不明。器面調整についてみると、表面は摩滅していて分らないが、裏面では一部ナデが観察される。

同図20は頸部の破片で、数本を単位とする斜枕線を交互に組み合わせたもので、同図21の文様もこれに属するであろう。同図22は羽状文を横位に配した頸部破片である。この3点はいずれも頸部の破片で、上・下段の文様を欠くか、文様を含めた他の特徴はすべて伊波的であり、伊波式と認めてよいと思われる。たとすると中段を埋めるグループに属し、前記の分類に従えば第2種である。同図20は表裏ともナデによって調整されたと思われるが、他の2点は器面摩耗のため調整の方法は不明。後者の4点はT-17で得られ



第8図 Tトレンチ (T-16・17区) 出土の土器

たもので、19は第Ⅰ層、他の3点は第Ⅶ層の出土。

以上、6点の伊波式土器は多量の石英と少量のチャートを含み、焼成は普通である。器色は基本的には茶褐色ないしは赤褐色だとみられるが、煤けた部分は暗褐色を呈している。この6点のうち、同図19の1点だけは第Ⅰ層、他は第Ⅶ、Ⅷ層の出土であるが、この5点の古さを出土層位との関係で決定することは困難のようである。

同図23は口唇、口頸部ともに無文である。器面は両面ともナデによって調整され、焼成は良く堅緻である。表面は黒褐色、内面は茶褐色。胎土には石英やチャートが含まれている。口縁部は直口を呈している。小破片なので確信はできないが、無文の伊波式の可能性が強い。

㊦ 荻堂式土器

第8図24～29(図版8の8～13)に示した6点の小破片で、復元可能のものはなかった。24～26は深鉢形の口縁破片で、2～4条の連点文が認められる。いずれも口唇は無文である。24は文様が萎縮した感じを受ける。26は文様の方向から山形口縁へ移行する部分の破片であろう。25の表面には擦痕がみられるが、裏面および他の2片はいずれもナデによって調整されている。24は第Ⅶ層、25・26は第Ⅶ層の出土。

同図27は鋸歯文のみを残す胴部破片である。鋸歯文は連点文によって描かれているが、深く押し込まれているために、凹線となって現われている。同図28は文様帯下端部の胴部破片で、刻目をもつ凸帯を横走させている。いずれも器面はナデによって調整されている。27は第Ⅵ層、28は第Ⅶ層の出土。

荻堂式土器は、文様を中心に分類すると

次の5種に大別される(註2)。

- 第1種 連点文・点刻文・その他の文様と鋸歯文を組み合わせたもの。
- 第2種 連点文・点刻文・その他の横位文様の下部を斜行文で締めくくるもの。
- 第3種 横走文のみに終始するもの。
- 第4種 凸帯文を貼付するもの。
- 第5種 無文

本トレンチの上記5点の荻堂式は、いずれも文様の一部を残すだけで、全形を知り得ず、そのため前記5種のいずれに属するか不明であるが、同図27だけは鋸歯文を有することから第1種に属することは間違いない。しかし、第1種は鋸歯文の位置によってさらに3種に細分されるけれども、そのいずれに属するかは不明である。

以上の5点は比較的多量の石英と少量のチャートを混入する。焼成は一般的に良く、器面のくずれたものはみられない。器色は茶褐色や赤褐色を基調とするが、煤けた部分は暗褐色となっている。

同図29は壺形の口縁破片で、口径は推算10cmである。黄褐色の器色を有し、焼成は悪く脆弱。胎土は砂質でザラザラしている。混入物は見受けられない。荻堂期の壺形口縁の破片であろう。第Ⅵ層の出土である。

同図30は縦・横の凸帯文の1部を残す資料で、凸帯文はT字形に交っている。器面は摩耗し、篋描きの文様は見られない。器色は赤褐色。石英を多量に含み、焼成は不良。表層の出土。同図31は口縁の破片で、器面は表裏ともナデにより調整され、滑かである。石英を多量に含む茶褐色の土器で、表面には幅の狭い単篋工具による押し引き文が浅く描かれている。現標品には1条認められるがも

ともと何本描かれていたかは不明。口唇上は無文。この標品も第Ⅰ層の出土。

以上、2点の破片は伊波～大山期の製品に間違いはないが、特徴がはっきりせず、どの型式に含めてよいか、分類が困難である。ただ、同図30の凸帯文土器は特徴が荻堂期のものに近く、また、31の標品は施文手法からみて大山期の所産かと考えられる。

c 室川式土器

本トレンチの下部貝層（第Ⅶ、Ⅷ層）を代表する土器で、①器形、②胎土混入物、③器色などにこの土器の特色が現われている。詳細は後項で述べることにして、まず、一般的な、あるいは印象的な特徴を挙げれば、①器形では口唇が誇張されること、②混入物ではサンゴ・有孔虫・貝殻など石灰質の砂粒を含み、器面での観察が容易なこと、③赤褐色、黄褐色などの明るい器色を有する（他の発掘区では栗色に近い暗褐色のものも多数発見されている）。しかし、口唇部の誇張されないものなど、かなりのヴァリエーションがある。

器 種

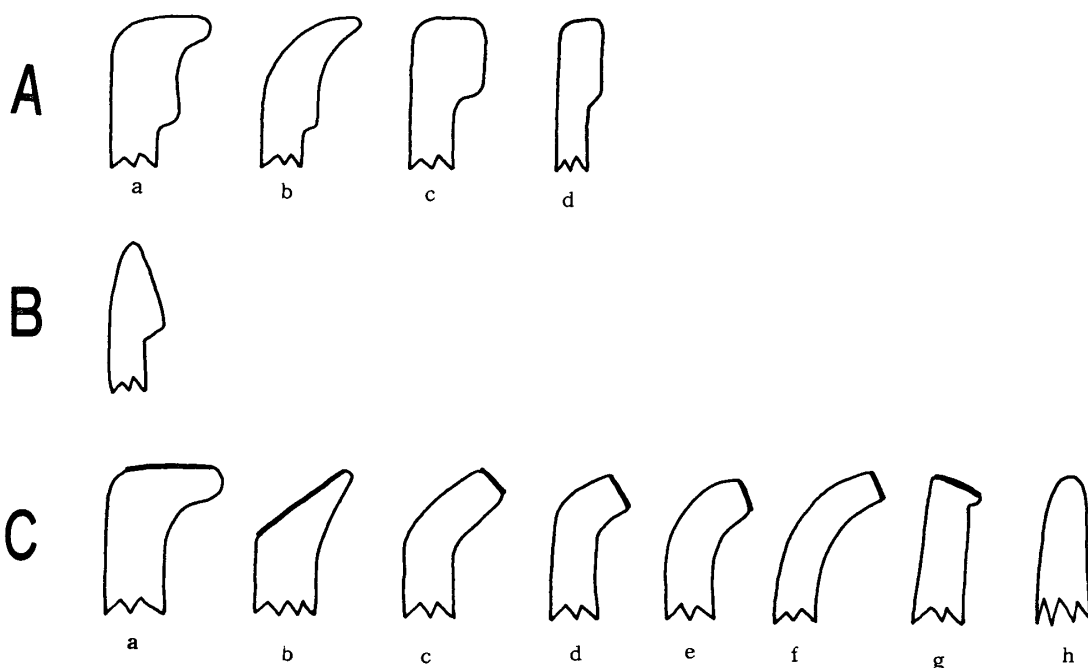
深鉢形と壺形の2種が認められる。しかし後者はきわめて少い。

壺 形

今回の採集品は、第13図82（図版11の16）に示す1点だけで、口径は推算13cm。肩の張るタイプとみられる。口縁部の断面は方形に近く、深鉢形におけるような口唇の誇張はみられない。器色は黄褐色。器面は両面ともナデによって調整され、滑かである。混入された石灰質のテンパーは器面で観察できるが、粒はかなり小さく後述のタイプAに類するような細かさである。器厚は7mm前後。焼成は比較的良い。T-17 第Ⅶ層の出土。

深 鉢 形

完形土器がきわめて少なく、器形全体を一般化してイメージすることは困難だが、口縁部および底部にこの土器の特徴を見出すことができる。



第9図 室川期の深鉢形土器の種類

1. 口縁部

まず、口唇を誇張するところに大きな特色があり、口縁部をいろいろに屈折させて擬似的な肥厚をつくる傾向も見受けられ、口縁部にまず本型式の特徴が現われる。

室川式にふれる前に室川期の深鉢形について概観してみよう。この期の深鉢形は口縁部の特徴から次の3種に大別される。第9図は、その特徴を模式化したものである。

Aはカヤウチパンタ式口縁に属するもので、a・bの如く口唇を誇張するところに本期の特徴があり、いろいろの形態がみられるが、本文では数例のみ模式化した。c・dは肥厚部が小型化（方形化）したもので、典型的なカヤウチパンタ式からは外れているが、矢張りその系統に属するものであろう。かって高宮が壺川式あるいは地荒原C式と仮称しようかと考えたグループの土器である。c・dの中にはその特徴がCと区別しにくいものもあり、いずれに分属せしめるべきか、あるいは上記とは別に独立して取扱うべきか今後の研究課題である。

Bは口縁部の断面やその形状が宇佐兵的特徴を示すもの。ただし、肥厚の形態が前後のものとのように異なるかは、未だ掴めていない。

Cは上記2種とは異なる肥厚あるいは擬似肥厚を示すもの。

室川期の深鉢形には以上の3種が認められるが、特にCを室川式と呼ぶことにし、AとBはそれぞれカヤウチパンタ式や宇佐兵式土器の中でその位置を決定したいと思う。そこで本文ではA・B2種の土器を当面、単に室川期のカヤウチパンタ式あるいは宇佐兵式土器と呼ぶことにする。これらの土器は室川式と同じように石灰質の砂粒を混入し、その点でも典型的なカヤウチパンタ式や宇佐兵式と

異っている。いずれも後出のものともみなければならない。

さて、前図に示した室川式口縁のうち太線は口唇を示すが、口唇が水平方向のものから口縁部が外反するために口唇が斜め方向を示すものまであり、それぞれの特徴を簡単に説明すれば次の通りである。

- a 口唇部が水平方向に広がっているもの。
- b 口唇は広く、内傾しているもの。
- c 口縁を「く」の字状に、角度をもって屈折させたもの。
- d 上記cと同様の屈折を示すが、屈折部が短小なもの。外見的に肥厚口縁にみえる。
- e 軽微な外反を示し、外見的には肥厚口縁にみえる。
- f 比較的大きな外反を示すもの。
- g 口唇部をわずかに強調したもの。
- h 肥厚せず、直口状のもの。

以上のように、口唇あるいは口縁部がいろいろの変化をみせるのが、この型式の一つの特徴である。

2. 底部

底部は平底であるが、立ち上りの部分に変化がみられるようになる。平底は大別して2種認められ、そのうちの1つは伊波～大山期の平底と同じ形態をとるもの（第15図92）と、他の一つは底部から胴部への立ち上りの部分が内彎状のカーウを示し、底径も若干小さくなる傾向があり（同図96）、中には厚底的なもの（同図98）もみられるようになる。

今のところ尖底は見受けられない。

底部の特徴のうち、現在注意を惹くのは以上の2点であるが、完形の資料が増加すればその特徴もさらにはっきりするものと考えら

れる。第15図92～95(図版12の8～11)は室川式A、96～98(同12～14)は同Bの底部である。

3. 大きさ

完形品がないので、深鉢形の大きさについては破片から推測せざるを得ない。

まず、口径についてみると破片50点のうち22点が推算可能である。この22点の中には室川期のカヤウチバンタ式が3点、同期の宇佐兵式が2点含まれているから、室川式の口縁は17点ということになる。個々の推計を第6表に示した。

第6表 室川式土器の推定口径

番号	実測図	推定口径	タイプ	備考	番号	実測図	推定口径	タイプ	備考
1	10 図 34	166	A		12	12 図 63	130	B	
2	" 40	156	"		13	64	186	"	
3	" 46	152	"		14	66	180	"	
4	11 図 50	308	B		15	13 図 67	208	"	
5	" 55	218	"		16	68	170	"	
6	" 56	186	"		17	69	222	"	
7	" 57	160	"		18	74	190	A	○
8	" 58	172	"		19	75	126	A	○
9	12 図 59	184	"		20	79	168	B	▷
10	60	280	"		21	80	186	"	▷
11	61	190	"		22	14 図 83	270	"	○

(注) ○…カヤウチバンタ式 ▷…宇佐兵式 他は室川式(単位はcm)

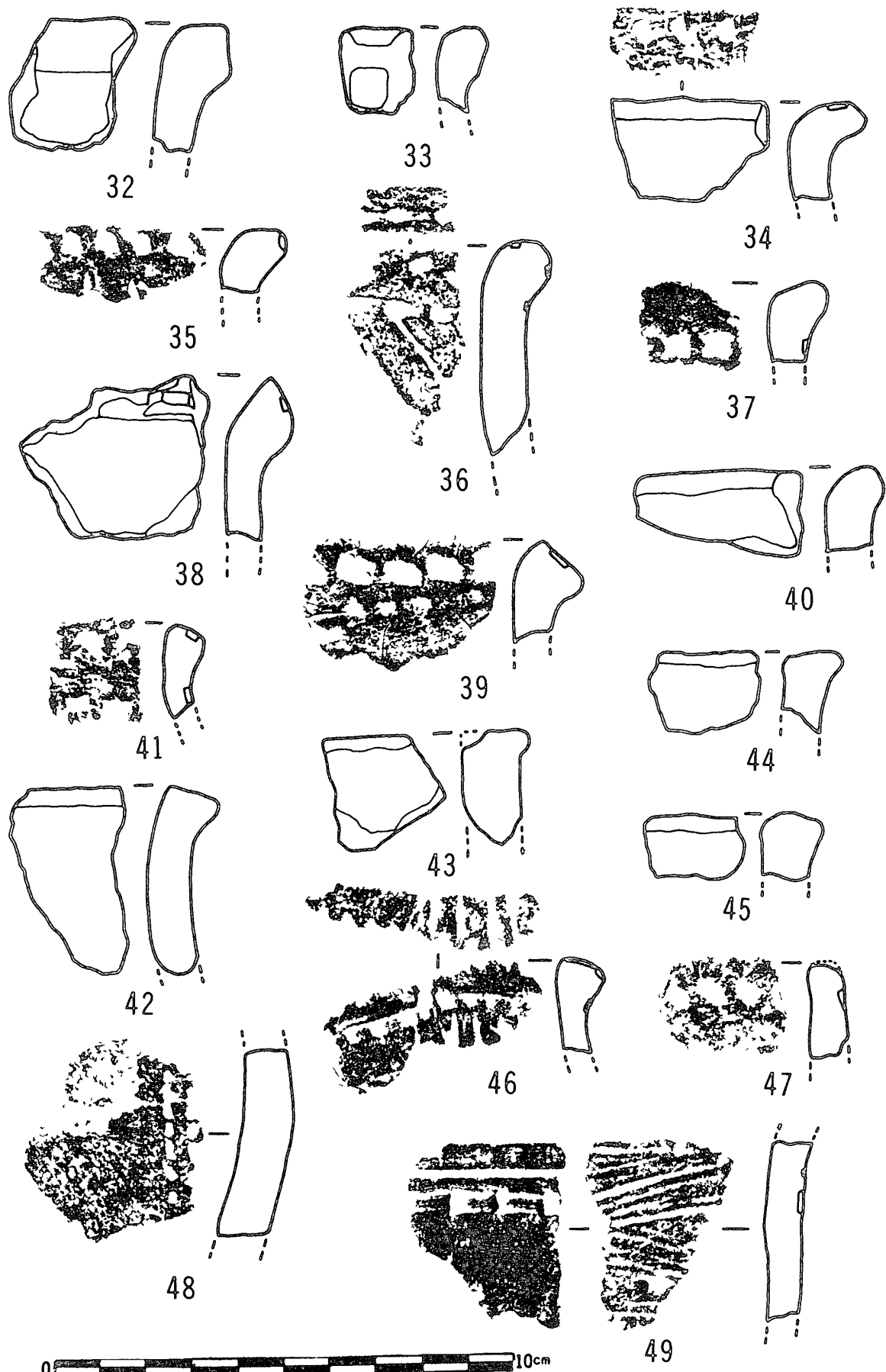
口径の最大は約30cm(第11図50、図版35のA)で、この資料は破片が比較的大きかったので、推定復元を試みた。最小は約13cmである。これをもう少し具体的にみると15cm前後(13～17cm)のものと20cm前後(18～22cm)のものが比較的多く、前者が7個、後者が8個で、口径の大きさは、15cm前後から20cm前後のものが一般的であったと思われる。

次に高さであるが、先述のように今回の資料はすべて破片であるので、確実な資料に欠けるが、推定復元を試みた2例はそれぞれ、249cmと235cmであり、大きいグループの標

準的な高さを示しているかと思われる。

4. 施文具

本トレンチのものについてみると3種の施文具が使用されている。すなわち(1)工具の先端を叉状に分岐したもの、(2)半截竹管状工具および(3)先端が3～5mmの幅を有する単篋工具(3mm幅のものが最も多い)の3種である。出土量を見てみると(1)は2点(第10図48、図版9の17・第12図64、図版10の13)、(2)は1点(第10図49、図版9の18)、そして(3)は26点あり、単篋工具が一般的であったといえる。



第10図 Tトレンチ (T-16・17区) 出土の土器

第7表 室川式土器に使用された施文具と文様

文様 層序	工具	単 篋 工 具					合 計
	又状工具	半截竹管	横捺刻文	押し引き文	横捺文 + 沈 線	小 計	
I							
II							
III		(1)	(1)		(2)	(3)	(4)
IV							
V							
VI			2			2	2
VII	1		6 (3)	2 (1)	1	9 (4)	10 (4)
VIII	1		6	1	1	8	9
計	2	(1)	14 (4)	3 (1)	2 (2)	19 (7)	21 (8)

※ () はT-17区、他はT-16区出土

これらの施文具を口縁部形状（断面の形状＝第9図）との関係でみると、又状工具の1点（他の1点は胴部のため不明）はcのサブタイプにみられ、単篋工具はa～dのサブタイプに多く用いられているが、その中ではaとcが比較的多い。半截竹管状工具のものは胴部破片であり、口縁部形状との関係は不明である。

施文具の種類を層位との関係で見ると又状工具使用のものは第VII、VIII層でそれぞれ1点、半截竹管状工具使用のものは第III層（攪乱）で1点、単篋工具使用のものは第III層（攪乱）で3点、第VI層で2点、第VII層で13点、第VIII層で8点の出土となっている。

5. 施文部位

本トレンチ出土のものについて施文部位を観察してみると、概ね下記の4種に大別される。

- ㊶ 口縁肥厚部のみ 8点
- ㊷ 口縁肥厚部+頸部 15点
- ㊸ 口縁肥厚部+頸部+胴部 1点
- ㊹ 頸部のみ 1点
- ㊺ ㊶か㊷か不明 1点

以上4種のうち口縁肥厚部と頸部に施文するものが最も多く、口縁肥厚部のみに施文するのがその次に多い。したがって、この2種が最も一般的であったといえる。

第8表 室川式土器の施文部位

種類 層序	㊶ 口 縁 肥 厚 部			㊷ 肥 厚 部 + 頸 部			㊺ か ㊻ か 不 明	㊼ 肥 厚 部 + 頸 部 + 胴 部	㊽ 頸 部 の み	計
	口唇のみ	口唇 + 口縁外面	口縁外面 のみ	口唇 + 頸部	口唇 + 口縁外面 + 頸部	口縁外面 + 頸部				
I										
II										
III					(3)					(3)
IV										
V										
VI	2									2
VII	2	1			5 (4)		1	1		10 (4)
VIII	1	1	1		2	1			1	7
計	5	2	1		7 (7)	1	1	1	1	19 (7)

※ () はT-17区、他はT-16区出土

口縁の肥厚部のみに施文する例についてみると、(1)口唇部にだけ施文するものは5点、(2)口唇部+肥厚外面の2面に施文するものは2点、(3)肥厚部外面だけのものは1点となり口唇部だけに施す例が相対的に多い。

口縁肥厚部と頸部の両方に施文する例についてみると、前項(2)、——すなわち口唇部+肥厚部外面に施文するもの——と頸部文様の組み合わせる例が最も多く14点を数え、前項(3)——肥厚部外面だけに施文する例——と頸部文様との組み合わせが1点、前項(1)——口唇部だけに施文する例——と頸部文様との組み合わせはみられなかった。

施文は前述の如く口頸部に限られるが、第12図64のように胴部に及ぶとみられるものも1点ある。しかし、破片が小さく、胴のどの部分まで施文したかは不明である。頸部のみに施文するとみられるものは第10図37(図

版9の6)の1点だけである。

6. 文 様

文様を施文するものは29点(うち口縁破片26点)で、種類としては概ね下記の4種認められる。

- | | | |
|---|---------|------------|
| 1 | 点刻文 | 2点 |
| 2 | 横捺刻文 | 13点+(不明5点) |
| 3 | 横位押し引き文 | 2点+(不明2点) |
| 4 | 横捺刻文+沈線 | 5点 |

点刻文を施文するのは第10図48と第12図64の2点で、前者には縦位の対の点刻文が1組認められるが、文様の全体的展開状況は不明である。焼成は良く、石灰質の砂粒を多量含む。器色は暗褐色で大山期のものに近く、器色、器面調整、焼成等、混入物が石灰質砂粒である1点を除けば古さを感じさせる破片で、サブタイプAの資料である。第Ⅷ層の出土。

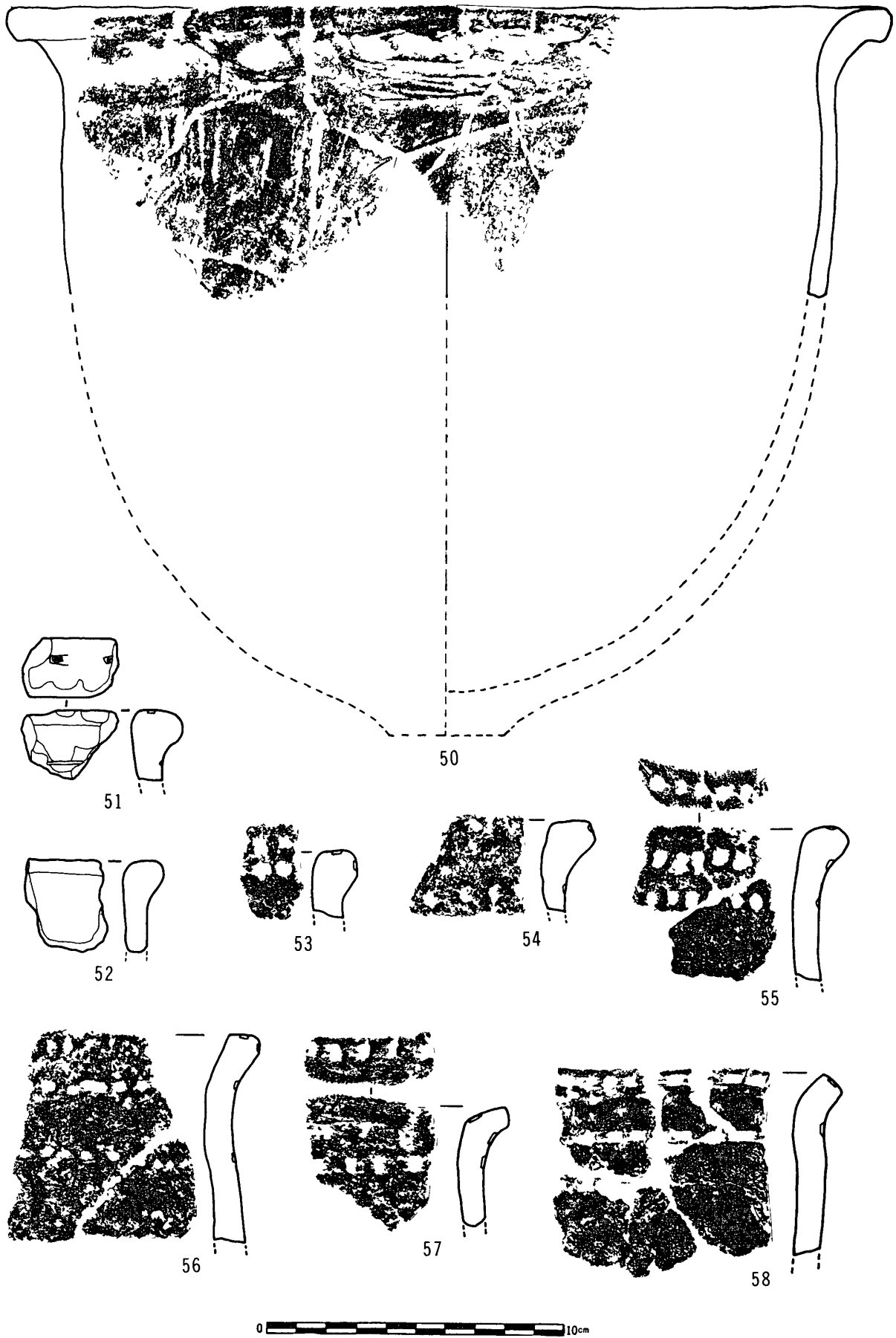
第9表 室川式土器の文様

層序	種類	点刻文	横捺刻文	横 捺 押し引き文	横捺文+沈線		不 明		計
					横位沈線	斜 沈 線	横捺刻文+	横位押し引き+	
I									
II									
III					(1)	(2)	(1)		(4)
IV									
V									
VI			1				1		2
VII		1	4 (3)	1		1	2	1 (1)	10 (4)
VIII		1	5	1	1		1		9
計		2	10 (3)	2	1 (1)	1 (2)	4 (1)	1 (1)	21 (8)

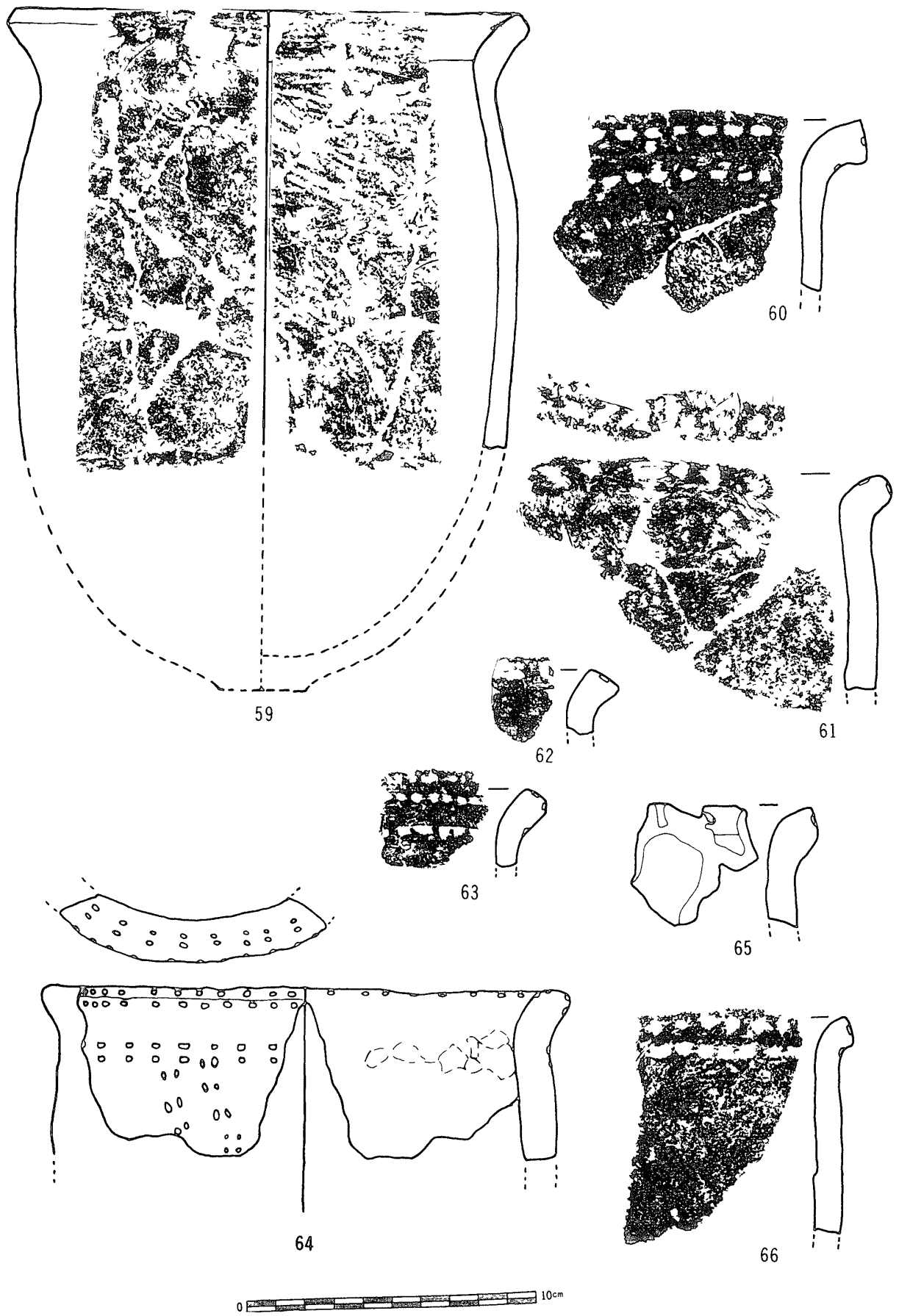
※ () は T-17 区、他は T-16 区 出土、「不明」は上記文様に終始したかどうか不明のもの。

第12図64は叉状工具を使用し、口唇の内面と外面および頸部に横方向の点刻文を施し頸部以下では点刻文を斜行させる。口径約18cm、中等の大きさである。胎土に含まれる石

灰質の混入物は比較的大型で、肉眼で容易に観察できる。器色は明るい褐色。叉状工具を使用している点を除けば、他の特徴は典型的な室川式Bに属する。第Ⅶ層の出土。



第11図 Tトレンチ (T-16, 17区) 出土の土器



第12図 Tトレンチ (T-16・17区) 出土の土器

他は半截竹管あるいは先端の平坦な単篋による横捺刻文あるいは押し引き文と、それに沈線を組み合わせた文様を施文する。横捺刻文（単篋工具によって刻文を断続的に施文）に終始するものは13点（他に小破片のため不明のもの5点）で最も多く、横位の押し引き文（単篋工具によって押し引きしながら連続的に施文）の確実なものは2点（他に不明なもの2点）で少なかった。

以上の他に横捺刻文（あるいは押し引き文）と沈線を組み合わせた文様がある。出土量は僅少であった。第10図49は半截竹管による押し引き文の直上に沈線を横走させている。胴部の破片であるから、文様の全体的な展開状況は不明である。外面はナデによって調整され、内面には条痕が施されている。この土器は石灰岩を混入する点を除けば大山的特徴を有しており、大山期に比定できるかと考えている。第11図51は口縁部に横捺刻文を施すもので、口縁部では横走の細沈線が1条認められる。口縁部に横捺刻文が施されていたかどうか不明。第Ⅷ層の出土。以上の2点は横位沈線を施す例である。

第10図36は横捺刻文の下方に斜沈線を施す例で、この標品の左端は沈線にそって破損しており、そのことから沈線の間隔は1cm前後であったかと推察される。石灰質砂粒を混入する点を除けば、他の特徴は大山期のものに類似している。第Ⅶ層の出土。第10図35は肥厚外面に横捺刻文、口縁部に縦位沈線の上端と思われる文様が2列認められる。しかし、どのような沈線であったかは不明。第Ⅲ層の出土。同図46（図版9の15）は山形口縁の破片で、山形頂部は若干厚くなっている。口縁外縁部と山形頂部には刻文が施されている。口縁部では押し引き文を水平方向に施し、山形頂部の

下方には縦位沈線文を施している。縦位沈線文の左右は無文である可能性が強い。第Ⅲ層の出土。35、46の2点も石灰質砂粒を混入するという点を除けば大山期の特徴を有し、特に46には荻堂的特徴もみられる。この種の土器は将来、室川式から分離されるかも知れないが、今は資料が少ないので室川式に含めておく。

以上のように室川式にみられる文様は、まれに点刻文も認められるが、横捺刻文（あるいは押し引き文）が支配的であり、また、他の文様要素と組み合わさる場合も、単篋工具による文様がほとんどであり、文様の点からも大山式に後続する時期に比定してよいと思われる。第9表の「不明」の欄は横捺刻文や押し引き文のみに終始したか、他の文様と組み合わされていたか不明のものである。

7. 胎土混入物

室川式土器の大きな特徴の一つは石灰質の砂粒を混入していることである。これらの破片は器面に露出し、肉眼観察が容易である。破片は比較的細かなものと粗いものに大別され、前者を砂とするなら、後者を細礫とすることができよう。今、仮りに前者をAグループ、後者をBグループとすると、Aグループは室川式の中では古い時期を代表する特徴を有しているように思われる。

混入物は石灰質砂粒を主体とするが、石英や磁鉄鉱を少量混えるものもある。石灰質砂粒の中には明らかに貝と同定できるものがあり、特にBグループに貝片の目立つものが多い。これらの混入物を胴部破片について調べたものが第10表である。本トレンチではBグループの出土が多かった。

第10表 室川式に含まれるテンパー (Temper)

タイプ 種類 層序	サブ・タイプ A				サブ・タイプ B				計
	石灰岩片 + 貝片	石灰岩片 のみ	石灰岩片 + 石英	石灰岩片 + 磁鉄鉱	石灰岩片 + 貝片	石灰岩片 のみ	石灰岩片 + 石英	石灰岩片 + 磁鉄鉱	
I		(1)			6 (25)	(8)	2 (1)		8 (35)
II					(4)				(4)
III	(1)			(3)	(27)		(4)		(35)
IV									
V									
VI		1			87	21	1		110
VII	13	35 (5)	1	2	195 (88)	16 (16)	18		280 (109)
VIII	6	32	5		153	3	28		227
計	19 (1)	68 (6)	6	2 (3)	441 (144)	40 (24)	49 (5)		625 (183)

※ () は T-17区、他は T-16区出土、石灰岩片としたものは貝類以外の石灰質砂粒を示す。

8. 器色

大別すれば、器色は3種認められる。①暗褐色を呈すもので、一見、伊波～大山期の雰囲気を漂わせ、3種の中では最も焼成は良くまた、細砂粒を含むものが多い。②はやや黄味を帯びたオリーブ・グリーンに近い器色を有するもので、細砂を含む傾向がみられる。③は赤褐色など明るい褐色の器肌を有するもので、この土器は焼成は悪く、粗い石灰岩や貝殻を含むものが多い。本トレンチにおける出土量は3→1→2の順に減少する。①と②は室川式Aの、③は同Bの特徴といえる。

9. 焼成

前項器色のところでもふれたが、本トレンチのものについてみると暗褐色の器色を有するものが一般的に良く、そして赤褐色など明るいものは概して悪い。したがって、暗褐色の破片には焼成時の器面を保持するものが多いが、赤褐色系統のものは器面が破損しやすい傾向にある。その中間に位する黄褐色系統

のものは、どちらかといえは焼成は良い方に属する。

10. 室川式のサブ・タイプについて

以上、室川式土器の一般的特徴を記したが、この土器は主として器色、器面調整、胎土混入物などの点からA・Bの2種に細分することができる(註6)。

室川式Aとしたものは暗褐色の器色を有し器面はナデ調整を行っており、無文胴部についてみると、一見、伊波～大山期の感しを抱かせるもので、後者との大きな相違は胎土混入物にある。つまり、伊波～大山期のものが石英を主体にチャートをわずかに含むものに対し、室川式土器は石灰質砂粒を混入することで、特にグループAは微砂粒を含む傾向がみられる。先述のオリーブ・グリーンに近いような器肌のものもグループAに含めてよいと思われる。

本トレンチで検出されたグループAは106点、全体のほぼ15%にあたり、量的に多いとは

いえない。そのうち口縁破片や有文の胴部破片18点を第10図32～49(図版9の1～18)に示した。

口縁の断面形態でみると32～36の5点は第9図の模式図のaに近似するもので、正方形あるいはそのくずれた形をとっており、aの祖型的なものかと考えられる。つまり、肥厚部は小型のものが多く、口唇がより強調されるのはグループBの時期になってからかと推察されるのである。同図32の胎土混入物は石英のみであり、その点他と異っているが知花出土の室川式(註7)との関係も今後検討せねばならないだろう。

本トレンチ出土の標品で断面形態の明瞭なものは少ないが、前述の模式図に従えば、37はb、38はc、39と40はd、41～45はgに分類されるであろう。

同図46(図版9の15)は特殊なもので、低平な山形口縁をつくり、口唇上にも施文し、口縁部では1条の押し引き文、山形頂部の直下では縦位沈線が認められ、伊波式類似の文様を施文する。47は横捺刻文、48は縦位点刻文、49は横位の沈線と半截竹管状工具による押し引き文を施文し、裏面には擦痕を施している。この4点は伊波～大山期の文様を施文しているが、石灰質砂粒を混入するという点で、ここに含めた。

室川式Bは赤褐色の明るい色を帯び、石灰質の粗砂粒を混入する。砂粒が粗いため器面での観察も容易である。器面はナデ調整を行うものが多い。焼成は悪く、吸水性の強い土器である。本トレンチでは697点の出土があり、ほぼ85%にあたる。第Ⅰ～Ⅲ層の攪乱部でも若干の出土をみたが、第Ⅵ層以下に集中していた。第15図96～98はグループBの底部で、伊波～大山期のものと異っている。

口縁の断面形態でみると、第11図50～56(図版35のA、図版10の1～6)はaに含めうるかと考

えるが、56は肥厚部が小型であり、先述のグループAに類似のものが多い。50、51、54、55の4点は典型的なものに近い。50は推定復元を試みたもので、口径の大きい割には高さはそう高くない、球形に近い器形が想定される。施文には単篋工具を使用し、文様は横位の刻文や押し引き文に限られる。

口縁形態がbに属するとみられるものは同図57の1点だけで、内傾した幅広の口唇を有し、口唇上および口縁部に押し引き文を施している。器面は摩耗し、そのため文様は消えかかっている。

口縁形態がcに属するものは第11図58(図版10の8)、第12図59～64(図版34のB、図版10の9～13)の7点で、典型的なものは口縁上端でくの字型に屈折する。第12図59～61は典型的なものともみていいだろう。63は粘土帯を口縁上端に貼付して口縁部を肥厚させる。64は叉状工具で施文しているが、他は単篋工具を用いている。64にみられる斜行文は伊波～大山期にみられなかったものである。

口縁形態がdに属するものは第12図65、66と第13図67の3点で、口縁上端をcのように折り曲げるが、屈折部がcのように長くないものをdとした。2点は単篋工具による文様を施文している。

口縁形態がgに属するものは第13図68～71の4点で、若干幅広い口唇をつくるが、明瞭な肥厚を示さないものである。2点には単篋工具による押し引き文や刻文がみられる。

同図72、73の2点は室川式Bに属するが口唇の形態が不明なもので、72は器壁が比較的厚く、73は下端が厚いことからカヤウチバンタ式の口縁破片かとみられる。

以上、室川式A・Bについて説明したが、それらのうち口径の推算できるものを第6表に示した。なお、第13図81は横捺刻文を1

条横位に施す胴部破片で、室川式Bの特徴を有するが、口縁形態の不明のものである。焼成は良く、器面はナデ調整を行っている。

d 室川期のカヤウチバンタ式土器

本トレンチでは4点の口縁破片が得られ、うち1点については推定復元を試みた。いずれも深鉢形の口縁資料である。

第13図74は直口形の口縁破片で、口径は約19cm、肥厚部は厚みや幅が小さくなり、典型的なカヤウチバンタ式からずれている。肥厚部外面には横捺刻文を力強く描いている。

この土器は黒褐色の器色を有し、表裏面には僅かながら擦痕も見受けられるが、両面ともナデによって仕上げ、焼成も比較的良く、口縁部肥厚という特徴を除けば、一見、伊波～大山的な雰囲気をかもし出している。ただ混入物が比較的粗い石灰質の砂に限られ、かつまた口縁部の肥厚が退化している点、室川期に比定できるかと考えるが、先述の諸特徴は室川式Aと一致しており、室川期でも古い時期に位置つけられるのではないかと考えている。あるいは大山末期におくべきかもしれない。

この種の土器は将来、室川期のものから分離される可能性もある。ただ現時点では資料が少なく、一つの型式と認めることができないので、本文ではとりあえず室川期のカヤウチバンタ式に含めておく。第VII層の出土。

第13図75の口縁は比較的厚みのある肥厚を示し、肥厚部の幅は小さいが、幅広い口唇を形成している点、室川式の影響を受けたカヤウチバンタ式とみることかできる。器色はやや黄味の強い褐色を呈し、石灰質の微砂粒を多量含有する。器色といい、混入物の特徴といい典型的な室川式Aと一致し、前項の口縁（第13図74）に次ぐ古さをもつものと考

えられる。口径は約13cm。第VII層の出土である。

同図76はカヤウチバンタ式肥厚の矮小化したもので、器色は茶褐色、胎土は粗く、多量の石灰質砂粒を含む。器面はナデ調整を行い、全体的には大山期の土器に類似した特徴を有している。室川式A期に比定できるものであろう。第VII層の出土。

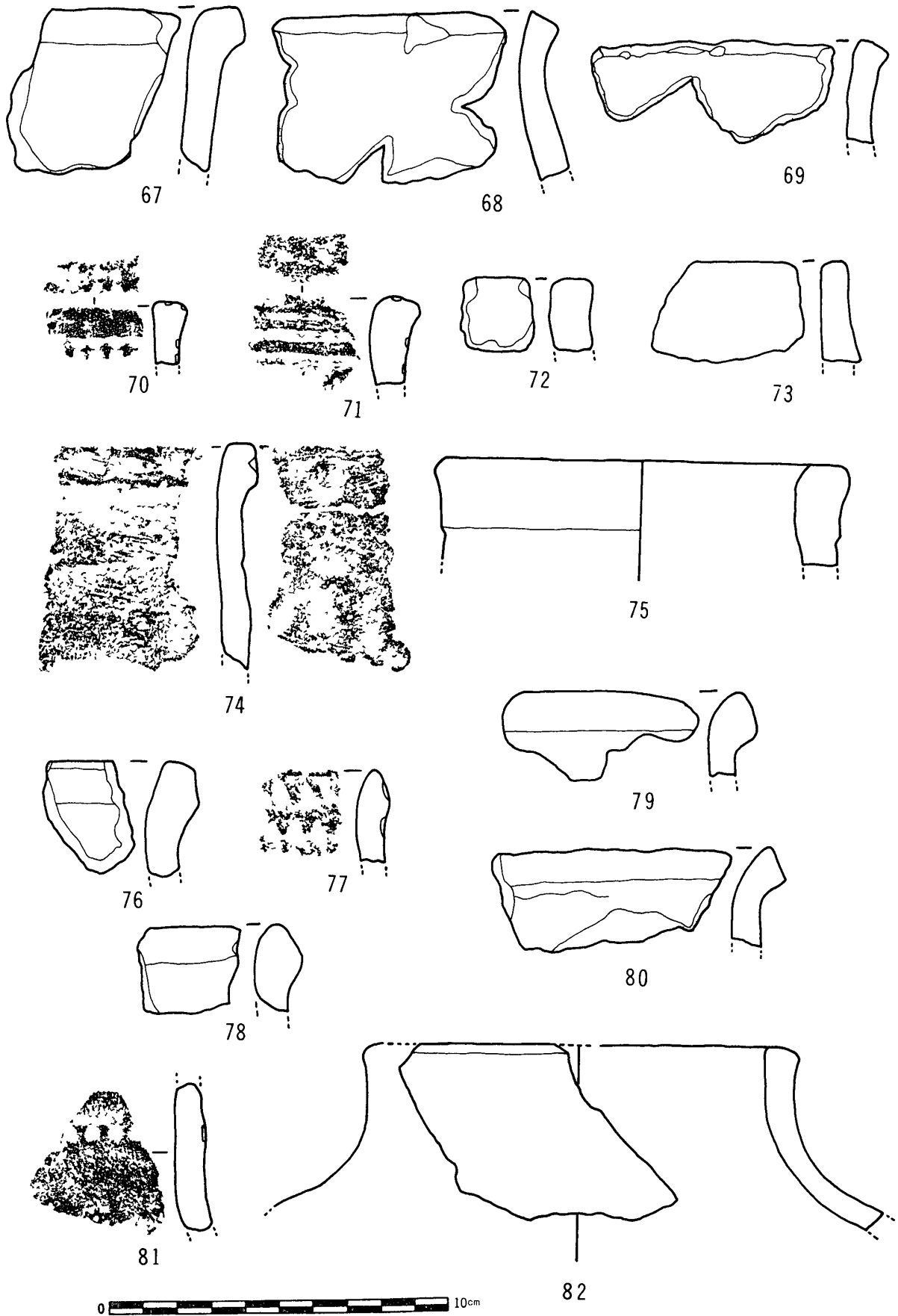
第14図83（図版35のB）は口径約27cm、高さ約30cm、比較的大型の深鉢型である。先述のように、この時代のカヤウチバンタ式土器は室川式の影響を受けて幅広い口唇を形成する。ここに示したカヤウチバンタ式土器はそれほど口唇部を強調していないが、若干幅広い円味をもつ口唇に室川式の影響を認めることができる。

この土器は茶褐色の焼成の良い土器で、石灰質砂粒を多量に含み、単篋による押し引き文を口縁肥厚部の上下にそれぞれ1条施し、部分的に縦位の文様を交えている。この土器はちょうど縦位文様の部分で破損しているので、何本の縦位文様を施文したかは不明である。焼成は良く堅緻である。底部は底径の小さい平底を想定している。第VIII層の出土。

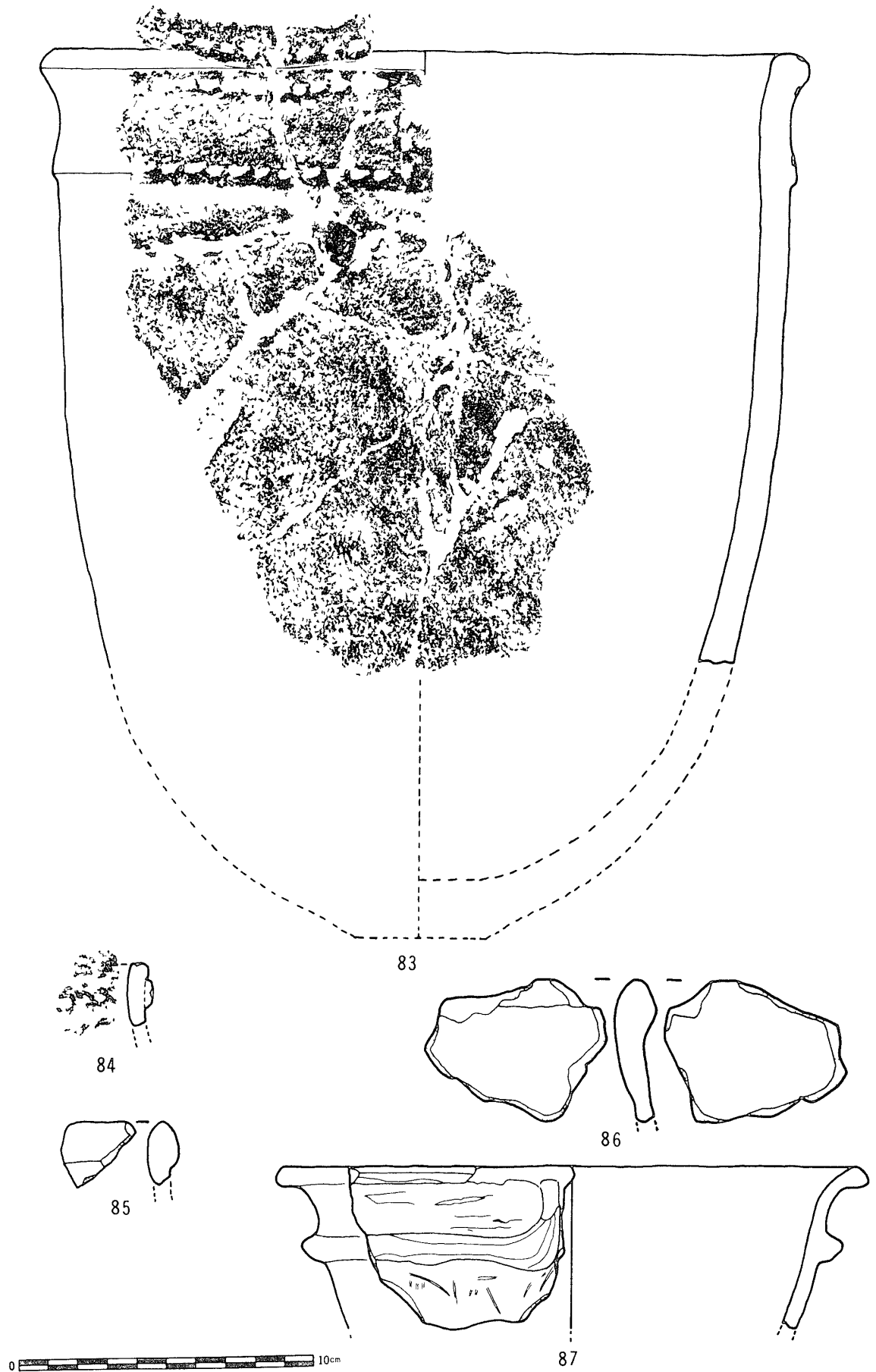
e 室川期の宇佐浜式土器

第13図77は宇佐兵的肥厚を示す口縁破片で、後記78と同様の特徴（貝片や石灰質砂粒を含む）を有している。本トレンチ出土の宇佐兵系統における唯一の有文破片で、肥厚部及びその直下にそれぞれ1列の刺突文が認められる。器色は赤褐色で室川期の特徴を示し、表面は暗褐色で一見、大山期の器色に類似した色を有している。深鉢形の口縁破片と思われるが、口径は不明。表裏面ともナデによって調整され、焼成はやや良い。第VI層の出土。

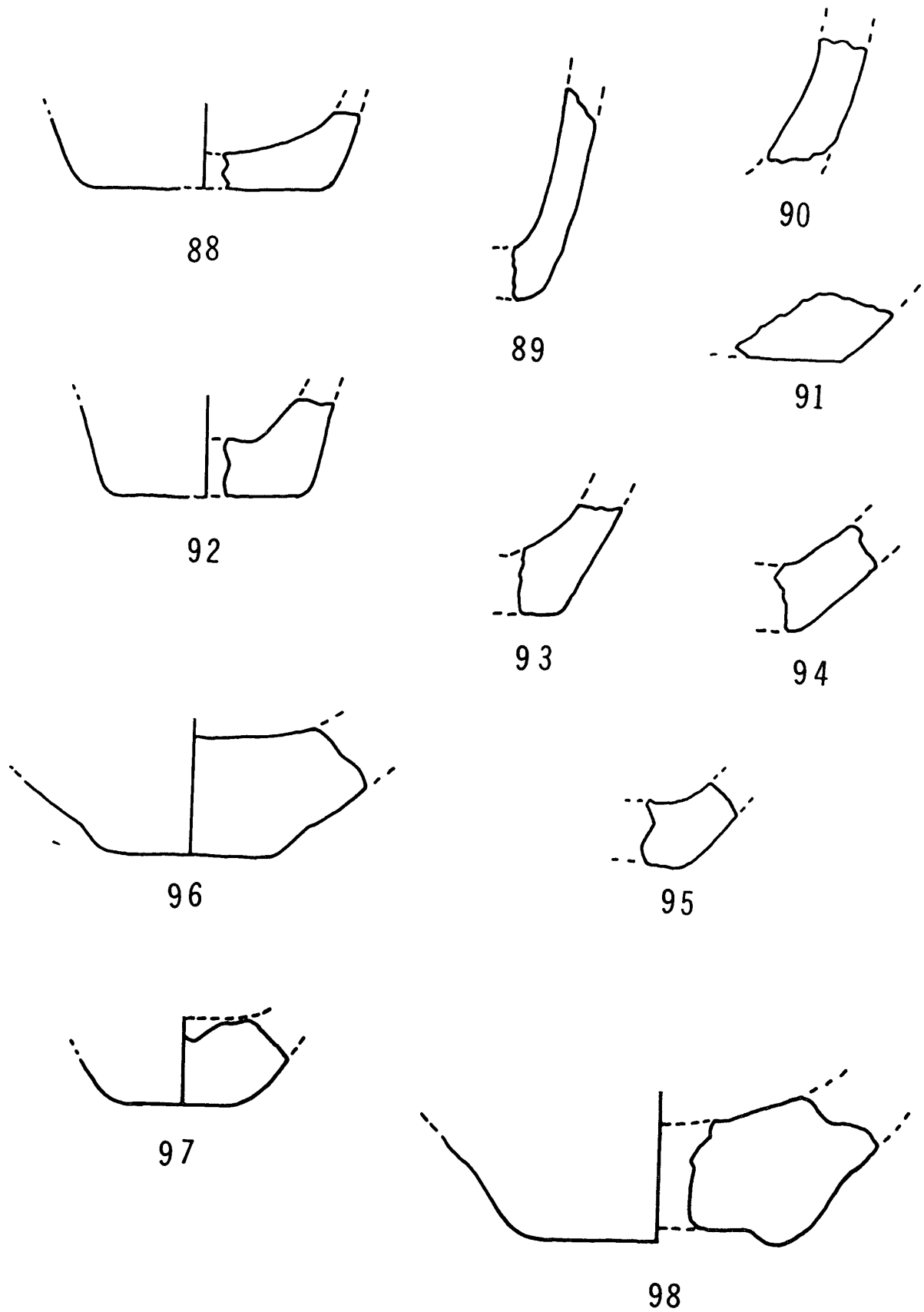
同図78も宇佐兵的肥厚を示す口縁破片で



第13図 Tトレンチ (T-16・17区) 出土の土器



第14図 Tトレンチ (T-16・17区) 出土の土器



第15図 Tトレンチ出土の底部, 伊波一大山期の底部 (88-91), 室川式A (92-95), 室川式B (96-98)

器色は赤褐色を呈し、混入物として石灰質砂粒や貝片を含むが、貝片は粒が粗く肉眼観察が容易で、室川式B期の特徴を示している。表裏ともナデにより調整され、文様はみられない。口径・器形ともに不明。器厚は約10mmと厚手で焼成は比較的良い。第Ⅷ層の出土。

第13図79は口径約17cmの宇佐浜式土器の口縁破片で、器形は深鉢形が想定され、石灰質の砂粒を多量混入する。色調は茶褐色。器面はナデによって調整されている。焼成は普通。この土器も混入物を除けば、器色、器面調整・焼成等の特徴は大山期のものに類似し、室川式Aに対比されるものである。第Ⅵ層の出土。

同図80も宇佐浜的肥厚を示す口縁破片で、口径は推算18cm。深鉢形の器形が想定される。この土器も器面は両面ともナデによって調整され、茶褐色の器色を有し、焼成はきわめて良い。多量の石灰質砂粒を混入するが、石英も散見される。以上の特徴は古式の様相を示しており、この土器も室川A期に比定できる。第Ⅷ層の出土。

f 奄美の土器

ここで奄美の土器と分類したものは、先端三角形の施文具により連続刺突文を施した文様をもつ土器で、第14図84(図版12の1)に示すものである。この標品は口縁部の破片で、横位の凸帯が1条認められる。三角形刺突文は凸帯とその上方の口縁外面に施され、おのおの走向を異にしている。刺突は比較的力強く施されている。口唇にも同種の刺突を1列施しているが、摩耗のため消えかかっている。凸帯下方では左下りの斜虎線文の一部が認められる。

赤褐色(表面は焼けて一部暗褐色)の薄手の土器で厚さは約5mm、石英粒を多量混入。焼成は普通。三角形刺突文を別にすれば沖縄

の土器特徴と一致し、沖縄産とみてよい。ただ、三角形刺突文は奄美に普遍的な文様であるので、奄美の土器としたが、沖縄産であることを重視すれば、奄美系土器とした方が正しいのかもしれない。奄美的特徴を有するのは、本トレンチではこの1点だけであった。T-16第Ⅶ層の出土。

g 宇佐浜式土器

高宮編年(註6、右表)の前Ⅴ期(従来の中期)を代表するとみられる土器で、破片が18点得られたが、大半は攪乱部の出土である。そのうち口縁破片が2点あり、第14図85、86(図版12の2・3)に図示した。

1点は口縁の断面が三角形、他の1点はカマボコ状を呈している。器色は茶褐色で、器面はナデられある程度滑らかに調整されているが、宇佐浜式特有のサラサラした感触は消えきっていない。石英粒を多量含み、焼成は比較的よい。前者は第Ⅲ層。後者は第Ⅰ層でいずれも攪乱部よりの出土。

h 後期の土器

第14図87(図版12の4)に示す口縁の破片で口径は推算21cm。この破片から復元される器形は鉢形が想定される。つまり、口縁部へ直線的に開く器形で、口縁上端でわずかに外反する。外面では凸帯が1条、縦位から横位の方向に施されており、同種の凸帯が幾組か貼付されていたものと推察される。凸帯の横断面は円形である。

この土器の器壁の厚さは約5mm、焼成はきわめて良く、堅緻。器色は茶褐色。表面はナデられてスムーズであるが、裏面では一部斜位横位の擦痕が認められる。胎土には石英を混入するが、混入量は少なく、また、赤色の物質(土塊?)もわずかながら見受けられる。

時期区分		土器型式	沖縄諸島発見の 縄文・弥生式土器	その他の年代資料
前 期	I	ヤブチ式土器 東原式土器	} 爪形文土器	ヤブチ式 6670 ± 140 y. B. P. 東原式 6450 ± 140 y B. P.
	II	曾畑式土器 条痕文土器 室川下層式土器	曾畑式土器 条痕文土器	曾畑式(渡具知東原) 4880 ± 130 y. B. P.
	III	?		
	IV	伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式(熱田原) 3370 ± 80 y B. P. 伊波式(室川) 3600 ± 90 y B. P.
	V	室川上層式土器 宇佐兵式土器		宇佐兵式は黒川式 並行とみられる
後 期	I	?	板付Ⅱ式 亀ノ甲類似土器	
	II	具志原式土器	山ノ口式土器	
	III	アカジャンガー式土器		アカジャンガー式は成川 式並行とみられる
	IV	フェンサ下層式土器		類須恵器

Table 1 Tentative Chronology of Okinawan Neolithic Pottery

T-16 第Ⅲ層の出土。

この土器は後期の土器である。しかし、攪乱部の出土であるため、後期でもどの時期に位置づけるべきか決定は困難である。ただ、口縁部を観察するかぎり、鉢形に開く器形が想定され、あるいは古い型式に属するものかとも考えられる。

D 小 結

以上、本トレンチの出土遺物について概要を記した。人工品についてみると土器・石器のほか骨器や貝器も見受けられたが、土器以外は僅少であった。

骨製品は装身具的なものが2個得られた。その中で特に犬の歯に1孔を穿った製品は、本県では初めての出土であり、注目すべき資料である。第Ⅷ層の出土で、これまで伊波～大山期の遺跡で発見報告のないことから室川期に比定してよいかと思われる。

貝製品は7個の発見があったが、装身具的なものが多かった。中でも貝刃と呼ばれるハマグリの腹縁部にチップングを加えた製品は最近県下でも類例は増加しつつあり、今後利器として注目すべき資料かと思われる。

石器は用途不明も含め9点の発見があった。最も多かったのは石斧で、その他に磨石、石皿、砥石なども検出された。第Ⅵ～Ⅷ層は室川期に比定されると考えられるところから磨製・局部磨製の石斧もこの期のものとみていいかと思う。砥石としたものは砂岩（第三紀）を用いており、研磨の対象が何であったかは今のところ明らかにし得ないが、半欠品とはいえ原形が推定可能なところから、矢張り留意すべき資料かと思える。

土器は出土量が最も多かった。7型式の土器が検出されたが、後期系の1点を除けば、他は下位の第Ⅵ～Ⅷ層でも認められた。前記

3層における各型式の出土状況は第5表の通りで、室川式が他を凌駕し、そのためこの3層とも室川期に比定してよいと考えられた。

室川式土器は本トレンチ第Ⅶ～Ⅷ層の主体土器を標式としたもので、本トレンチのものについてみると壺形で確実なものは1点だけで、他は深鉢形に属するものである。

壺型は口縁部の破片が1点得られただけであるから、全形は復元しえないが、口径は推算13cm、深鉢形と比較すると中等の大きさであったかと推察される。この土器には他の深鉢形にみられるような口唇部の誇張はみられないが、他のすべての特徴は室川期のものと一致しているから、室川式に含めてよいと思われる。

深鉢形の室川式土器は口径15～20cm大のものが一般的であったと思われる。完形土器がないので、器高を示し得ないが、推定復元を試みた2点はそれぞれ249cmと235cmあり器高の一端をうかがうことができる。

室川式の最も大きな特徴は口唇を強調すること、胎土に貝殻の碎片など石灰質砂粒を混入することなどで、底部についても、例えば底径が小さくなり、立ち上りの部分が幾分内彎気味になる変化が現われはじめる。今のところ尖底は見受けられない。本トレンチの室川式についてあと一つ付言するなら極めて明るい褐色、つまり赤褐色に近い器色を有するものが多いことである。しかし、器色は前にも述べたように①明るい褐色、②黄褐色、③暗褐色の3種に大別され③→①の順に編年される可能性がある。また、混入物の砂粒についても精粗の差があり、今後、資料が増加すればこの土器の細分編年も可能かと思うが、現段階ではそのような作業は困難であり、当分の間、室川式の概念を上記の諸特徴で示しておきたい。

Ⅲ テスト・ピット (T. P. 区)

A はじめに

前項 T-16・17 区の東南側に、さらに一段高くなった休耕地があり、それ以南は石灰岩台地へ続く斜面となっている(第3図)。この斜面は傾斜が急で、かつ大きな石灰岩塊が無数に転っており、巨木、雑草なども繁茂していて、現状では試掘溝を設定することは困難である。そこで、斜面下方における遺物層の有無を確認する意味で設定したのが、本テスト・ピットである。

この地区は前述のように、かつて耕地であったから上面は平坦である。この平坦面は低平な石垣を隔てて、さらに東方に延びるが、西方へは幅を減じながら、ゆるやかに傾斜して前述の T-16・17 地区につながる。畑地の北縁は 1 m 前後の崖となっている。われわれが調査を行ったのは石垣以西の地区で、平坦面の広さはおよそ 40 m²、本地区の調査目的に従い、3×2 m のテスト・ピットを斜面下端にそって設け、調査を行った。次に、調査結果について報告する。

B 層 序

本テスト・ピットは地表下約 3 m で基盤に達するか、その間 15 枚の層が認められた。本地区の調査は第 4 次発掘調査(1977)の中途より開始したか、天候に恵まれず、第 4 次、第 5 次と調査範囲の狭い割には多くの日数を費した。しかし、本ピットの調査により遺跡東南部の状況をおよそ知ることができた。次に、本地区の層序について説明する。

第 I 層(表土層)は暗褐色の土層で、ピット全面にみられ、厚さは 10~20 cm と薄く、全体的に南から北へ傾斜している。人工遺物

としては土器片のほか、後世遺物も若干出土した。後者は第 2 層以下ではみられなかった。

第 2 層は第 1 層より色のやや薄い暗褐色土層で、ピットの北半にみられ、南から北へ傾斜し、北壁側で最も厚かった(40 cm 前後)。土器、石器のほか、自然遺物も少量検出された。

第 3 層は厚さ 20~70 cm の黄褐色土層で、南から北へ傾斜し、東北隅で一部大形の石灰岩塊によって切られていたか、一応ピットの全体に及び、東壁側で最も厚かった。土器の出土量は最も多く、他に自然遺物なども出土した。

第 4 層は 20~60 cm の黄褐色混土礫層で、拳大から人頭大くらいの石灰岩礫を密に含み、円礫化したものが多い。この層は南壁面にみられるようにピット東半部では一部第 6・7 層で切られていたか、ほぼピット全面に認められた。この層からは人工遺物のほか獣魚骨等も少量検出された。

第 5 層は 10~20 cm のシルト質泥岩の層で、東壁から北壁側の東半部にのみみられ、南から北壁側へ傾斜している。無遺物層である。

第 6 層は黒色粘土質土層で、ピット東半部にみられ、南壁面で最も厚く(約 40 cm)、東壁側へ傾斜しながら厚さを減し、ピット中央部あたりで消滅する。南壁側では同層上面は直接第 1 層下部に接していた。第 27 図 207 と第 28 図 211 の土器はこの層から出土した。

第 7 層は 10~40 cm の黒色土層で、第 6 層より粘土分が少なく、サラサラした感じである。最下部に貝を含み、一部焼土もみられた。遺跡の東半にのみ存し、南壁側で最も厚く、北壁側へ急傾斜しながら厚さを減する。下部の貝の量は散発的である。室川式土器、室川

上層式土器等かみられたか、前者が主体で、他にサメの歯を利用したペンタントか一点出土した。

第8層は混礫土層で、拳大以下の石灰岩礫（角礫）を密に含む。東半部に現われ、南壁側で厚く（約60cm）、北壁へ向って厚さを減し、ピット中央部で消滅する。礫は上部ほど小さく、下部に人頭大の大きさのものが多い。無遺物層。

第9層は暗褐色混礫土層で、礫は拳大以下のものが多い。一部に貝（アラスジケマンカイ）の混入もみられたか、貝は散発的であった。この層はピットの西半部にみられ、全体的に南から北の方向に傾斜し、北西隅で最も厚かった。人工品は見受けられなかった。

第10層は南西隅にみられた黒褐色土層で、北へ傾斜しながらピット中央部あたりで消滅する。下部では石灰岩礫を混える。遺物は検出されなかった。

第11層は赤色土を混えた暗褐色土層で、南壁面で厚く（20～100cm）、北へ傾斜しながら消滅する。この層から比較的少量の人工品が検出された。

第12層は暗褐色土層で、貝を少量含む。南壁面で厚く（10～50cm）、北へ傾斜しながら消滅する。東壁や北壁におよんでいない。土器、石器のほか自然遺物も少量出土した。

第13層はシルト質泥岩の層で、ピットの南半分のみみられ、北壁におよんでいない。下位の新鮮シルト質泥岩より若干黒ずんでおりかつ風化によって軟質化している。西半部ではこの層の下に石灰岩礫層の存することから二次堆積を示すものと思われる。第三紀層に属し、本来人工遺物を含まないのだから、本層上部では土器片のほか獣魚骨等が若干出土した。おそらく上層からの陥入であろう。

第14層は混土礫層で、西半部で厚く、東

壁側で薄かった。この礫層の上部はやや黄味が強く、下部は橙に近い色を有していた。上部で暗褐色土の混じる部分もあり、そこでは人工品もわずかなから見受けられた。この層は西北隅で最も厚く、その下部を確かめるはすであつたか、時間の都合で途中で試掘を中止した。

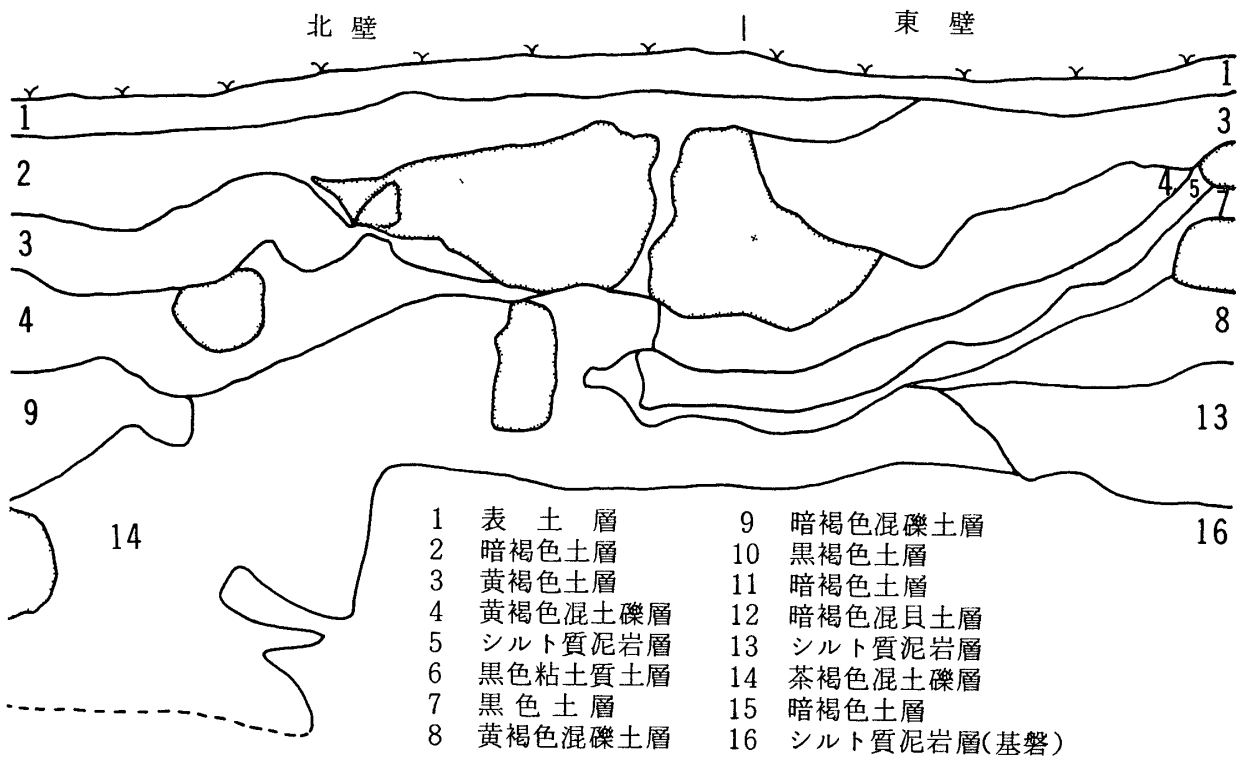
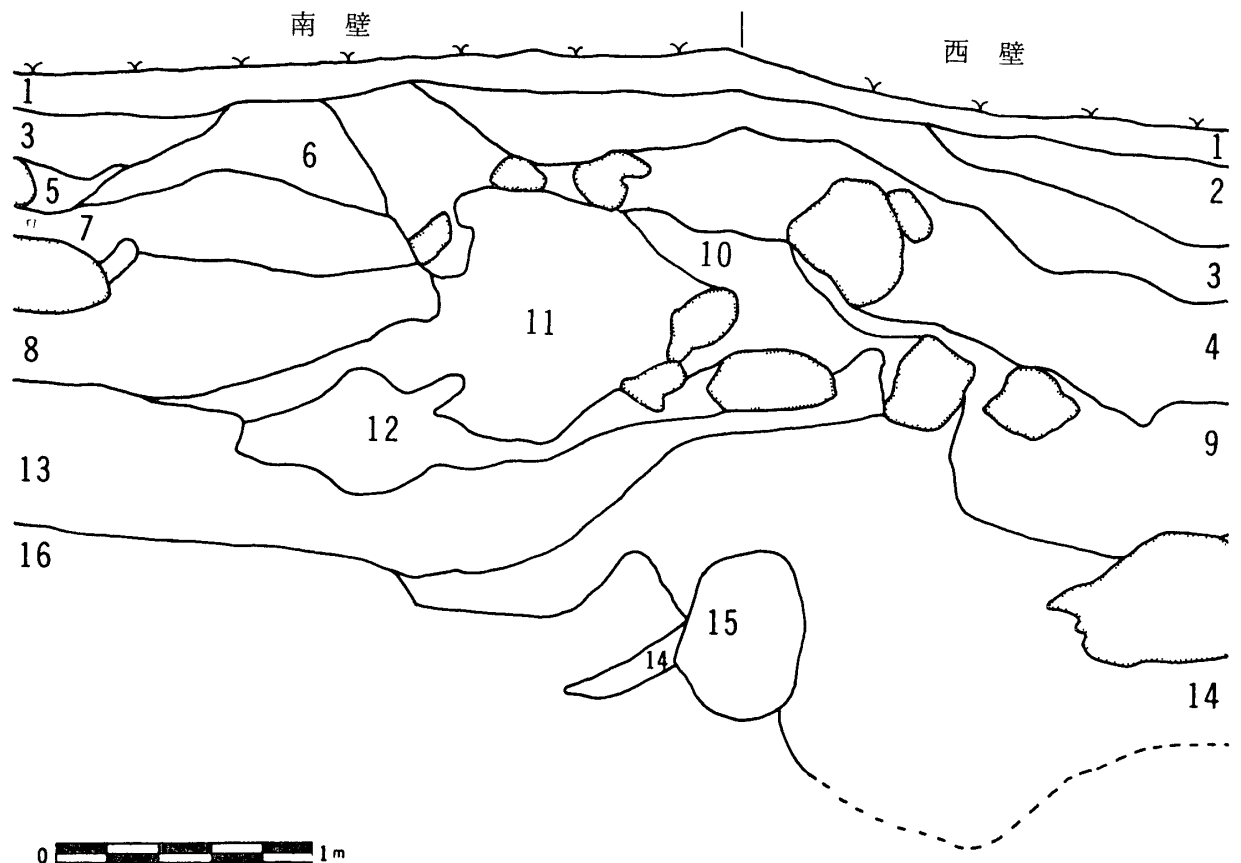
第15層は南西隅にみられた暗褐色土層で貝を少量含む。しかし、人工品は検出されなかった。

第16層は基盤のシルト質泥岩層で東半部では地表下約15mで現われたか、西半部では急激に落ち込み地表下3m以上の深さに達していた。第三紀層で人工品は含まれていない。

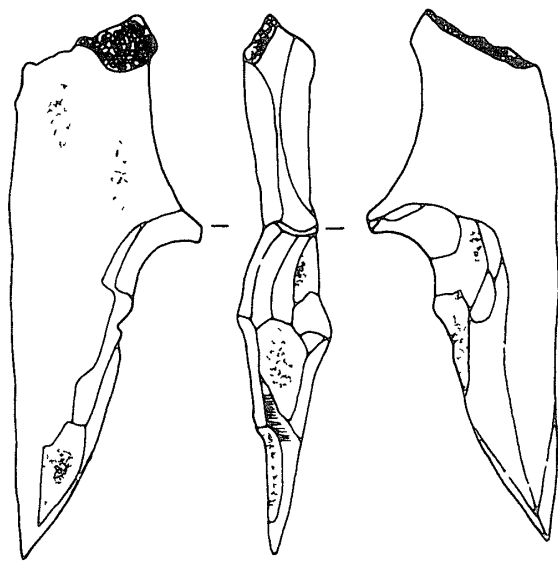
以上のように地表下わずか3m以内に基盤も含め16枚の層が認められたわけだが、大部分の層はピット全体に及んでいるというわけではなく、部分的な小規模のものであった。また、各層とも南壁側から北壁側へ傾斜しているところをみると、斜面上方（南側）から流れ込んだことが考えられる。このような堆積状況から人為的か否かを検討する必要が生じ、各層の形成過程について県立博物館の大城逸郎氏にご検討願ったところ、自然堆積であることが判明した。

C 出土遺物

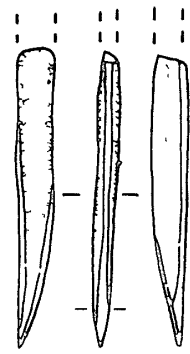
本ピットでは人工遺物のほか自然遺物も検出されたか、純貝層あるいは貝を多量に含む土層がなかったのだから、他の発掘区に比べ貝類は種類も量も僅少であった。自然遺物については未だ専門家の同定を得ていないか、貝類ではアラスジケマンカイやリュウキュウザルボウなどかみられ、獣骨では猪骨、魚類ではサメの歯やブダイの頭骨も見受けられたが、これらについては正式な鑑定を経たあと報告することにし、本文では人工品についてのみ報告する。



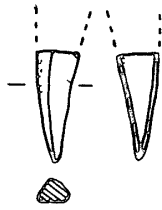
第16図 T.P. 区の層序 (破線以下は未発掘) ○ は石灰岩礫



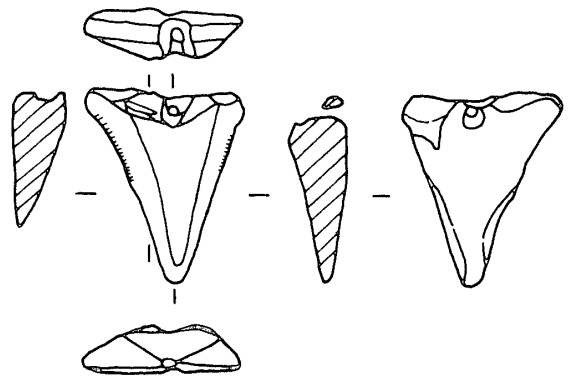
99



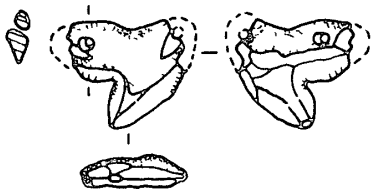
100



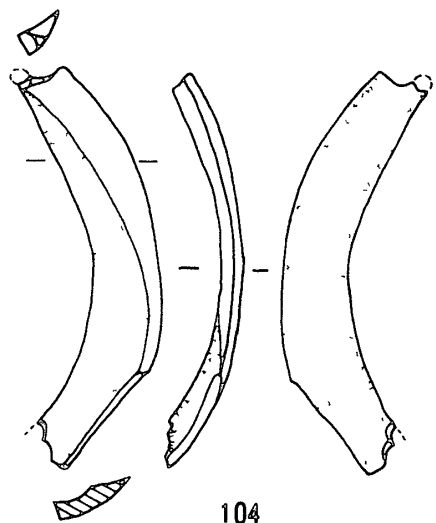
101



102



103



104



第 17 図 T. P. 区出土の骨牙製品

第11表 T. P. 区 の 出 土 遺 物

層 序	土 器			石 器	骨 器	自 然 遺 物					合 計
	口縁	胴部	底部			貝 類	獸 類	魚 類	不骨 明片	自然 礫	
表 採	3					2	4	4			13
I		82					2	5		8	97
II	9	218		4		2	31	16	6	13	299
III	14	656	1	8		4	61	45	32	45	866
IV	4	260	2	2	1	6	10	81	1	25	392
V											
VI	15	154	5		3	8	51	98		31	365
VII	20	109		6	1	195	14	31	1	36	413
VIII											
IX											
X											
XI	8	261	1	2	1	84	47	58	6	49	517
XII	1	17				46	11	13	3		91
XIII		20				4	3		1		28
XIV	1	17									18
XV											
合 計	75	1,794	9	22	6	351	234	351	50	207	3,099

人工遺物の出土状況は第11表の通りで、土器、石器のほか、骨牙製品も若干出土をみたが、貝製品は得られなかった。人工品の中では土器が最も多く、他は僅少であった。次に人工遺物について説明する。

イ) 骨 牙 製 品

骨製品は少なく6点の出土であった。第17図99は猪の尺骨を利用した骨錐で、完形品である。先端部のみ加工し、他の部分は自然面を残している。先端の研磨部に回転運動あるいは押圧運動を示すような使用痕は見受けられない。長さ約9cm、幅は基部中央で1.2cm

第6層の出土。

同図100は先端をポイント状に整形したもので、頭部を欠失するか、その形状から骨針と考えられるものである。先端は鋭利である長さ5cm。第4層の出土。同図101はポイントの部分だけを残す破損品で原形を推察し得ないが、先端は滑沢を有するほど摩耗しており、骨針のような用途に使用されたかと推察される。横断面は三角形を呈している。なお、先端部は黒色を呈しており、火熱を受けたかと思われる。第6層の出土。

同図102はサメの歯を加工したもので骨質部の大部分を欠いているか、製品としては

ほぼ完形に近いものである。本標品には前後に貫通する1孔か穿たれ、歯根上端には左右に走る溝が設けられている。孔は内面では骨質部から穿ち、外面では歯冠の下端中央部から歯根へ向けて穿っているため、全体的に外側へ傾斜している。径は歯根部で約5mm、歯冠部で3.5mm、中央部で2mmである。骨質部上端に設けられた溝は幅3.5mm、中央部では一部前記貫通孔によって切られている。この溝がもし緊縛用の紐などを通す目的のものであったとすれば、現状ではその機能を果し得ないから、もし緊縛を目的とするのであれば、溝ではなく両切縁に通す孔でなければならぬし、この溝を孔の破損したものとするか、当初から溝であったとみるべきか、歯根部が全体的に摩耗しているため判断は困難である。

本標品の歯冠の部分は使用によるとみられ

第12表 T.P.区出土の骨牙製品

種類 層序	骨 錐	骨 針	サメの 歯	牙 製品	合 計
表 採					
I					
II					
III					
IV		1			1
V					
VI	1	1		1	3
VII			1		1
VIII					
IX					
X					
XI			1		1
XII					
XIII					
XIV					
XV					
合 計	1	2	2	1	6

る光沢を有しており、尖端も鋭利さを失なって円くなり、サメの歯特有の切縁の鋸歯も消失して、わずかにその痕跡を止めている程度で、全体的に著しく摩耗している。現在のところ、何に使用されたのか、その用途を知り得ないが、先端が円味を帯びていることからすると、利器としてよりも装身具的な性格が強かったのではないかと考えられる。第7層の出土である。

同図103はイタチサメの歯を利用したもので、骨質部に2孔を穿っている。骨質部は一部破損しているか、孔の一部が見受けられることから、2孔穿ったことは間違いない。孔はいずれも両面から穿たれている。完全に残っている孔についてみると表面では外側に、裏面では外側と上方に紐すれ痕かみられる。歯冠部の鋸歯はかなり摩耗している。第11層の出土である。

同図104は猪の牙の1側面を切り取って加工したもので、完形に近い。使用された部分は牙の外側に当る部分である。左右両端の上部には浅い抉りか表面から裏面に向って設けられ、両端および上縁全面と下縁の一部には研磨が加えられ、角はとれて円味を帯びているか、下縁の残りの部分はカットされた箇所かそのまま切截具として刃に使いそうな鋭さをもっている。ナイフのような利器を想定すべきかどうか、今後の資料を待って検討したい。第6層の出土。

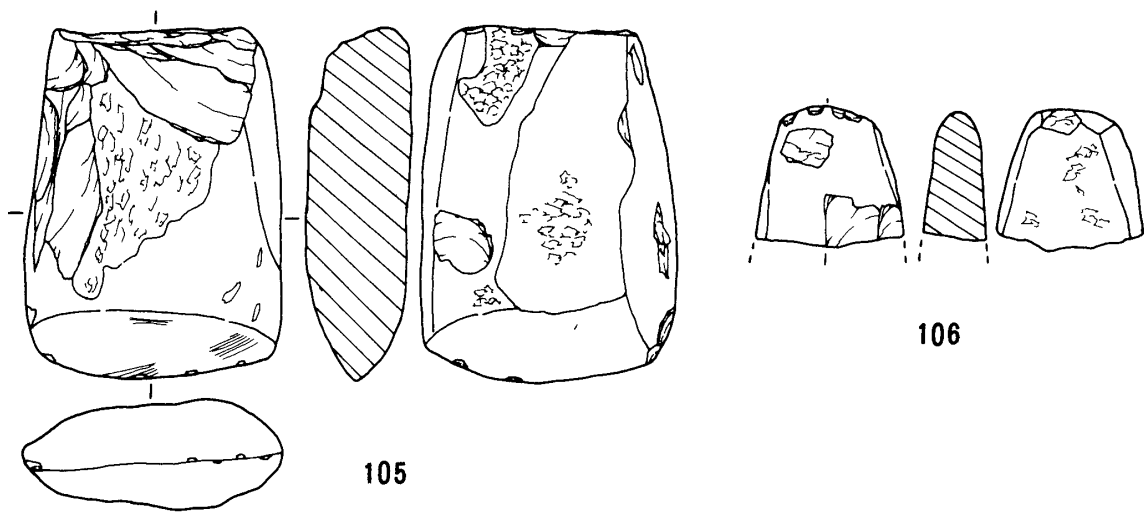
ロ) 石 器

石器は22点の出土をみたが、完形品は1個で他は破損品である。そのうち、用途を確定もしくは推定できるものは石斧と磨石、凹み石の3種である。

a) 石 斧

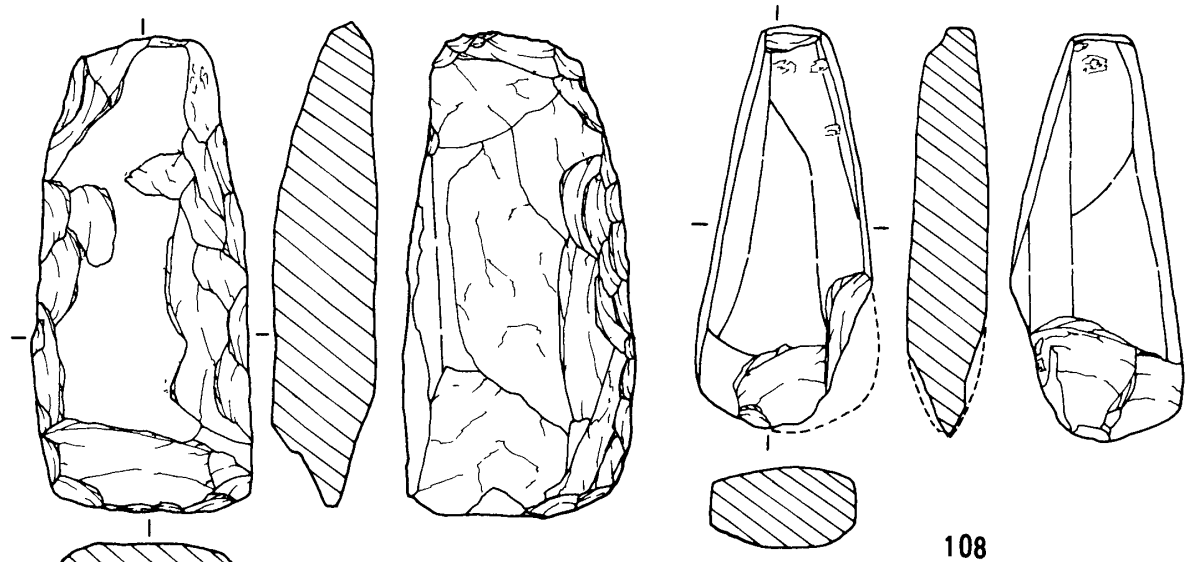
石斧は第18図105～110・第19図111に掲げた7点である。

第18図105は両刃の磨製石斧で頭部を欠損



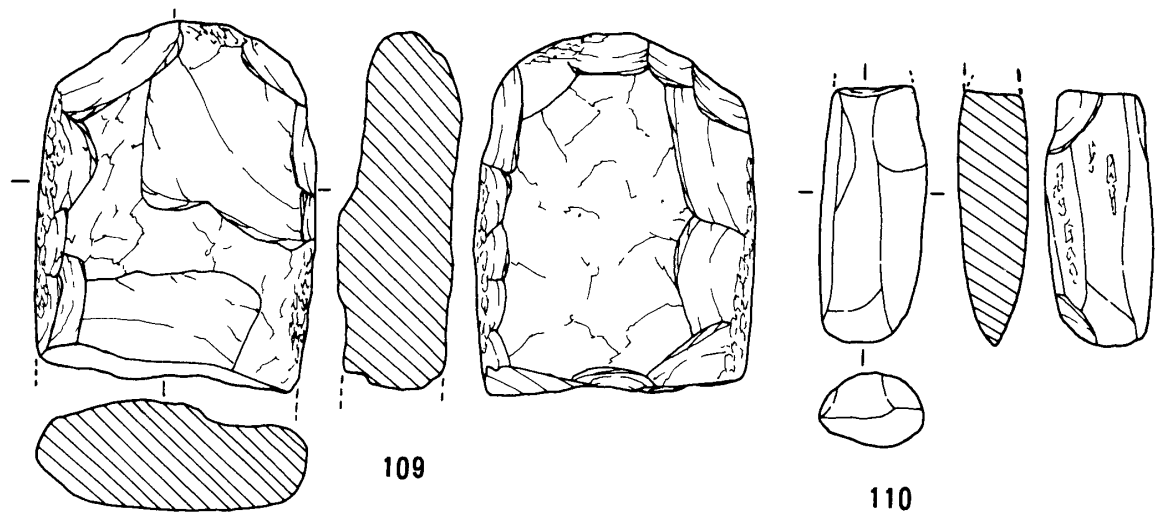
105

106



107

108

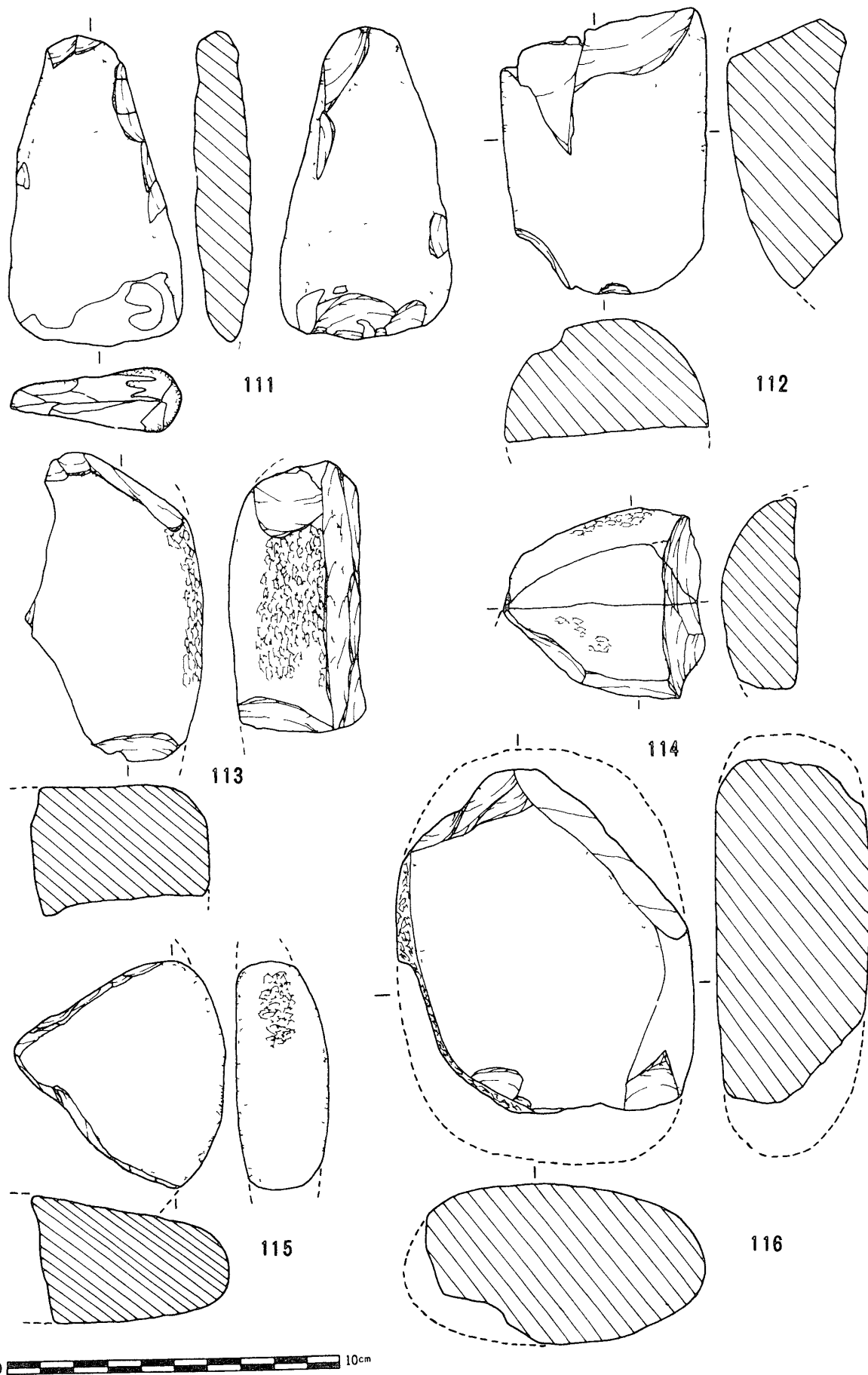


109

110



第18図 T. P 区出土の石斧



第19図 T. P. 区出土の石斧(111),すり石(115~116),用途不明の石器破片(112~114)

する。この石斧はまず周縁部に調整剥離を加え、身の中央部を表裏とも敲打法により整形したあと研磨を施しているが、身の中央部には敲打によって形成された浅い凹部があり、研磨はこの部分におよんでいない。また、側縁部では剥離痕の消え切らない箇所もある。刃は表裏両面から研ぎ出され、鋭い。この石斧は刃部の幅か胴部の幅より大きいもので、横断面は扁楕円形を呈する。粗粒角閃岩製。第3層の出土。

同図106は頭部の破片で、胴部から刃部にかけての形状は不明である。調整剥離を行なったあと研磨を加えているか、表裏両面では研磨が徹底してなく、剥離痕を大部分残している。しかし、両側面は定角に近いほど磨きがかかり、滑沢を有している。粗粒角閃岩製で、第2層の出土。

第13表 T. P. 区出土の石器

層序	種類	石斧			凹み石	磨石	石器片	合計
		打製	局部磨製	磨製				
表採								
I								
II			1			3	4	
III	1		1		1	5	8	
IV						2	2	
V								
VI								
VII	1	1	1	1		2	6	
VIII								
IX								
X								
XI			1		1		2	
XII								
XIII								
XIV								
XV								
XVI								
合計	2	1	4	1	2	12	22	

同図107は打製石斧かとみられるか、刃部欠損のため確言はできない。一部に自然面を残すものの、大部分は調整剥離か加えられ、また敲打仕上げの部分も認められる。敲打仕上げの部分は手なれ様の滑沢を有している。現破片の形体からすると、刃部の幅は胴部より小さかったように思われる。輝緑岩製で、第3層の出土。

同図108は磨製石斧で、刃部の大半を欠くか完形に近い資料である。全面に入念な研磨が施されている。刃部の幅か最も大きく、次第に頭部に細まる形体で、両側面は垂直状の平坦面を形成し、横断面の形状からすればいわゆる定角式の仲間に加えてよいだろう。刃部は破損しているか両刃だとみられ、破損面の一部にはわずかなから研磨痕も見受けられる。再利用によるものか。輝緑岩製で、第7層より出土。

同図109は打製石斧の頭部破片と考えられるものである。残存部より短冊形の器形が推定され、概して扁平で、横断面は長方形に近い。大部分は調整剥離によって整形されているか、両側面の一部には敲打痕も見受けられる。器面に手馴れ様の摩耗痕か認められる。角閃岩製で、第7層より出土。

同図110は特殊の小形両刃石斧である。身の中央で欠けているため全長は知り得ないか、破損部はかなり摩耗しており、破損後の使用によるものかと思われる。幅約2.5cm、横断面はレンズ状を呈している。刃部は一部破損し、そのため偏刃に近い形になっている。一部に自然面を残すが、他は研磨が施され、光沢を有するほど入念なところもある。刃部に明確な使用痕は認められない。この種の小形両刃石斧は本県では未だ報告がない。第11層の出土で、先述のイタチザメの歯と同じ層の出土である。輝緑岩製。

第 19 図 111 は 完形の石斧である。手ころな自然礫をわずかに加工したもので、平面形は三角形に近く、刃部に最大幅がある。この石斧も扁平で、横断面は三角形に近い。刃は片刃的両刃である。刃部は両面とも一部研磨が加えられているか、研磨部はごくわずかで、一見打製石斧に近いイメージを与える。全体的に手馴れ様の摩耗痕が認められる。ヒン岩製で、第 7 層の出土。

b) 磨 石

磨石と考えられるのは 2 点で、いずれも

破損品である。その一つは第 19 図 116 に示すもので原形は石鱗状を呈していたと思われる。表裏面とも光沢を有するほど研磨が加えられている。片面の中央にはわずかながら敲打痕が見受けられ、凹み石の用途にも使用されたかと考える。砂岩製で第 11 層の出土である。

同図 115 は破損の著しいものであるが、現存形から磨石の一種と考えられるものである。表面はかなり風化している。砂岩製で、第 3 層の出土。

第 14 表 T.P. 区出土の石器と用材の種類

挿図番号	P.L.番号	用途	出土層位	石 質	産出層	備 考
第 18 図 105	14-4	石 斧	3 層	粗粒角閃岩	名 護	慶良間諸島産
106	14-3	〃	2 層	〃	〃	〃
107	14-2	〃	3 層	輝 緑 岩	〃	〃
108	14-1	〃	11 層	〃	〃	〃
109	14-7	〃	7 層	角 閃 岩	〃	慶良間諸島産
110	14-6	〃	11 層	輝 緑 岩	〃	〃
第 19 図 111	14-5	〃	7 層	ヒ ン 岩	〃	〃
112	15-1	不 明	2 層	砂 岩	〃	〃
113	15-2	〃	3 層	〃	〃	〃
114	15-3	〃	〃	〃	嘉 陽	〃
115	15-4	すり石	〃	〃	〃	〃
116	15-6	すり石	11 層	〃	名 護	〃
第 20 図 117	16-1	不 明	2 層	〃	嘉 陽	慶良間諸島産
118	16-2	〃	3 層	〃	〃	〃
119	16-5	〃	〃	〃	名 護	〃
120	16-3	〃	〃	〃	〃	〃
121	16-6	〃	4 層	千枚岩質輝緑岩	〃	〃
122	16-4	〃	〃	砂 岩	〃	〃
123	15-5	凹み石	7 層	〃	〃	〃
		不 明	2 層	〃	〃	〃
		〃	7 層	〃	嘉 陽	〃
		〃	〃	〃	島 尻	〃

c) 凹石

第20図123は半欠品で、石鱗状磨石の破片かと考えられるものであるが、両平面の中央部には敲きによる凹みが認められるので、凹石として記述することにした。この標品も両面は光沢を有するほど丹念に研磨が施されている。砂岩製で、第7層の出土。

d) 用途不明の石器破片

研磨痕を有する小破片が12点あり、そのうちの9点を第19図112～114および第20図117～122に示した。破損が著しいため用途を推察し得ないが、残存の形態からみて大

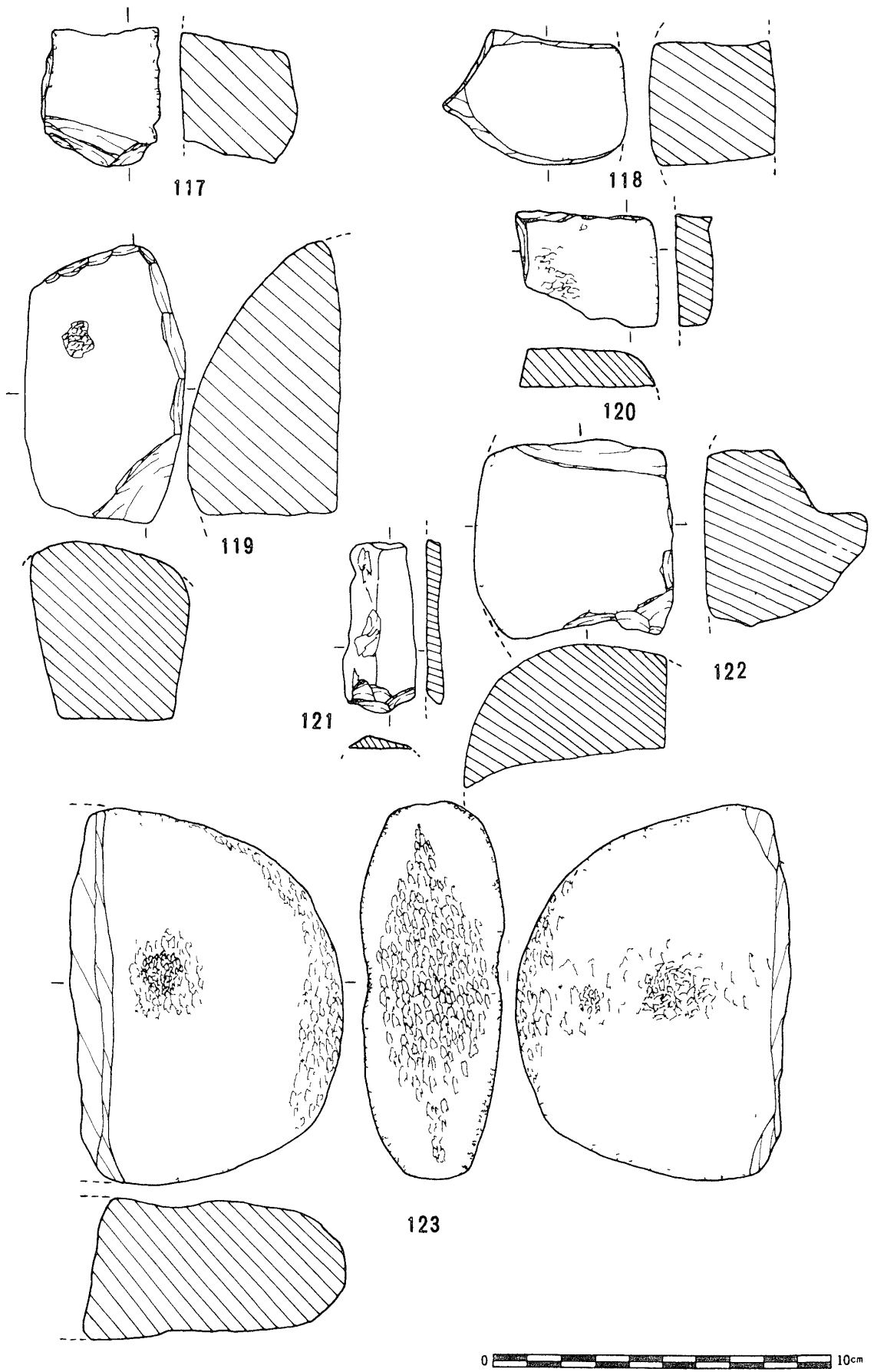
部分は磨石の破片かと考えられる。

第19図の3点はいずれも砂岩製で、112は第2層・他の2点は第3層の出土である。また、第20図についてみると121は千枚岩質輝緑岩を利用しているか、他はすべて砂岩製で、117は第2層、121と122の2点は第4層、他は第3層の出土となっており、用途不明のものは比較的上層で出土していることになる。

なお、本ピットでは多数の自然礫が採集された。石灰岩以外のものは石材として持ち込まれた可能性があり、その種類と出土量は第15表の通りである。

第15表 T.P.区出土の自然礫（除石灰岩）

石質	黒色千枚岩		砂質千枚岩		千質枚砂岩		千輝緑輝緑岩		千質輝緑岩		輝緑岩		凝灰岩		角閃岩		砂岩		砂(ニーヒ)岩		シルト質岩		合計		
	名護		名護		名護		名護		名護		名護		名護		名護		嘉陽		島尻		島尻				
	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量
I	90	2	20	2									35	2			100	2					245	8	
II	460	3	250	4					5	2							130	4					845	13	
III	4	1	1070	15	150	3	120	3	10	1			55	3			1510	13	1900	6			4819	45	
IV	110	1	80	5	260	4							180	1	20	1	150	4	480	8	7	1	1287	25	
V																									
VI														5	1	750	7	590	22	10	1	1355	31		
VII	3	1	470	6	100	3					70	2			280	1	720	3	2140	19	40	1	3823	36	
VIII																									
IX																									
X																									
XI					60	4					30	1					600	10	1280	32	30	2	2000	49	
XII																									
XIII																									
XIV																									
XV																									
XVI																									
合計	667	8	1890	32	570	14	120	3	15	3	100	3	270	6	305	3	3960	43	6390	87	87	5	14374	207	



第20図 T・P区出土の凹み石（123）と用途不明の石器破片（117～122）

ハ) 土 器

本ピットで出土した土器片は総数 1878 個で、うち口縁部は 75 個、底部は 9 個、他は胴部の破片である。採集品の大部分は小破片であるか、中に 3 点だけ復元して器形の示せるものがあった。

本ピットでは室川下層式土器は検出されていない。したがって、土器は伊波式以後のものに限られ、7 型式認められたが、各型式の出土頻度をみると室川上層式が 60%・室川式が 22%・伊波、荻堂両型式を合わせて 3%・宇佐兵式が 3%・大山式とカヤウチバンタ式を合わせて 1%、ほかに奄美の土器も 3 点検出されたか、上記の出土頻度から室川式および室川上層式の時期に生活の主体があったといえるであろう。各型式の層位的出土状況は第 16 表の通りである。

次に各型式について説明を行うか、前述のように室川式下層式土器（第Ⅰ類）は検出されていないので、伊波式（第Ⅱ類）土器から

はしめることにする。

a) 第Ⅱ類（伊波式）土器

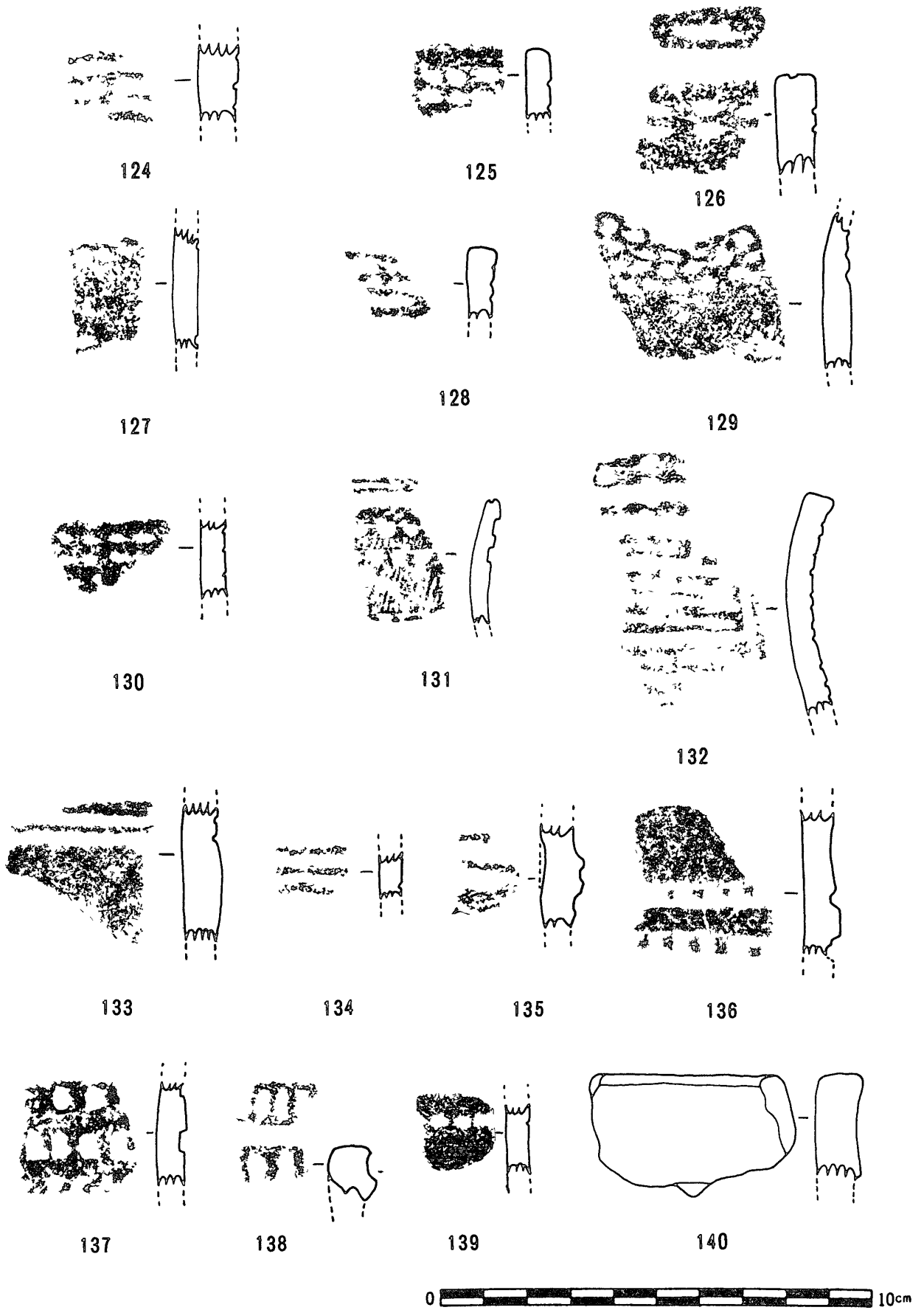
文様上明確なものは第 21 図 124～131 に示す 8 点だけである。うち、口縁破片は 3 点で、他は頸胴部の破片である。すべて小破片で、したがって器形を明示しうる資料は少ないが、同図 131 の口縁破片は朝顔形に開く口縁形態に属している。口径を推算しうるものはない。

文様要素はおおよそ 3 種に大別される。同図 124、128 は点刻文の 1 種のようにも見られるか、引きが長く熱田原の短枕線（註 8）に近いものである。比較的力強く施文され、文様は鮮明である。同図 131 は幅約 3mm の単線により押し引き文を施しているか、施文は浅く文様は不鮮明。他はすべて点刻文を施しているが、同図 129 と 130 の 2 点は器面がかなり摩耗していて、文様も消えかかっている。

第 16 表 土器の型式別出土状況

層序	型式	伊波式	荻堂式	伊・荻不明	大山式	カヤウチバンタ式	室川式	室川上層式	宇佐兵式	奄美系	合計
表採	I						2	1	1		4
	II	2	1	1				1	1		1
	III	1	1	1	1			4(1)	4(1)	1	11
	IV	1			1	(1)	2	3	3	1	24
	V										10
	VI	1		1(3)	(1)		11(1)	2(1)	2(1)		26
	VII	2			1	1	19	1	1		25
	VIII										
	IX										
	X										
	XI	1					6(1)	1	1	1	10
	XII						1				1
	XIII										
	XIV						1				1
	XV										
	XVI										
	計	8	2	4	4	2	44	28	18	3	113

※ () は底部、伊・荻不明は伊波式か荻堂式か不明のもの。



第21図 T. P. 区出土の伊波式・荻堂式，大山式，カヤウチパンタ式土器

伊波式土器は本誌前号（註2）では文様構成上3種に細分されている。本ピットの資料はすべて小破片で、そのため文様の展開状況が掴めず、前号にしたがった細分は困難だが、同図127と131の2点は頸部をはさんで上下に点刻文や押し引き文の一部を認めることができ、頸部（中段）無文のグループ（第1種）に属するものである。

3点の口縁破片についてみると、一点は口唇上無文だが、他の2点には文様が施されている。同図126は2cm近くの単線を斜めに施文し、131は横方向の長線と斜め方向の短線を組み合わせた文様を施文している。いずれも口唇上の文様と口縁部の文様は一致しないが、131は口唇および口縁部の施文に単篋を使用しており、あるいは同一工具によるものかと推察される。同図131の一点を除くと、他の7点の文様には先端の分岐した叉状工具が用いられている。

器厚は7～8mmのものが一般的のようだが、同図126は1cm近くあり、伊波式としては厚手の部類に属し、同図131は5mmで、これは例外的なものであろう。いずれも焼成は悪く、脆弱で、器面の摩耗したものが多い。したがって器面調整の方法についても各標品ごとに記述することはできないか、わずかに残る焼成時の器面から擦痕やナデ調整を行ったものがあることがわかる。器色は赤褐色や暗褐色のものなどがあり、後者がわずかに多い。混入物は石英が主体で、他にチャートの破片もわずかながら見受けられる。

前記標品の出土層位についてみると126が第11層、128と130が第7層、129が第6層、127が第4層、131が第3層、124、125の2点は第2層の出土である。

b) 第Ⅲ類（荻堂式）土器

荻堂式に含めたものは第21図132、133の2点だけで、そのうち1点は後述のように荻堂式の可能性の強いものである。1点は口縁破片、他の1点は頸部部の破片である。

さて、器形についてみると復元して全形を示しうるものはないか、同図132の標品は胴上部から口縁へすほまり、口径より胴径の大きい器形が想定され、典型的な荻堂式の器形に属するものである。口径は推算16cm。

文様要素は2種認められる。押し引き手法による連点文と長沈線の2種である。132は口頸部に横位の連点文を密に施すもので、現資料では横位文様は少なくとも5組（対）認められる。また、この資料には縦位の連点文も認められるか、何組（対）施文されていたかは不明である。口唇部にも同種の文様か施文されている。連点文は横位のものも縦位のものも力強く描かれており、施文部は凹線を形成している。同図133は長沈線を頸部に繞らしたと思われるもので、沈線は対になっている。この沈線は文様帯下端部の文様を示すものと思われる。器面はかなり摩耗し、沈線も浅くなっている。沈線を頸部に繞らす文様は荻堂式に多いから、本標品もとりあえず荻堂式に含めておく。

この2点についてみると器厚はそれぞれ6mmと9mm、後者は若干厚いようであるが、いずれも荻堂式の範疇にあるものと思われる。器色は132が暗灰色、133が茶褐色で両者とも器面は著しく摩耗しているか、132の裏面には一部擦痕が認められ、133の裏面にはナデ調整を施したところがあり、2種の調整法があったことが分る。焼成は普通。多量の石英、少量のチャートを混入する。132は第2層、133は第3層の出土である。

以上のほかに小破片のため伊波式か荻堂式か分類不可能のものが数点ある。例えば同図

134は長沈線の一部を残しており、135は凸帯に沈線を施したもので、伊波式か萩堂式のいずれかの破片と考えられるか、最終的な決定は困難である。前者は第3層、後者は第6層の出土である。

第17表

無文胴部による各型式の出土状況

タイプ 層序	A	B	C	D	E	不明	合計
表採							
I	6	1	2	58	15		82
II	21	3	6	156	21	11	218
III	29	1	27	521	41	37	656
IV	16	1	16	222	5		260
V							
VI	4		61	57	1	31	154
VII	2	2	88	1	2	14	109
VIII							
IX							
X							
XI	3	2	195	28		33	261
XII		1	10			6	17
XIII		2	18				20
XIV		5	12				17
XV							
XVI							
合計	81	18	435	1043	85	132	1794

- ※ A = 伊波式・萩堂式・大山式の一部
- B = 大山式やカヤウチバンタ式の一部
- C = 室川式
- D = 室川上層式
- E = 宇佐兵式

c) 第IV類 (大山式) 土器

第21図136～138に示した3点で、138は大山式土器というより大山期終末のものとみられるものである。136・137は胴部の破片であろうと思われる。

136 137の文様は特徴的で、いずれも5mm前後の単篋を用いて施文しているか、押し引き文は、比較的力強く描かれ、そのため押し引きの部分は凹線を形成し、上下の押し引き文にはさまれた帯状空白部が凸帯のような印象を与える。この種の施文手法はかつて多和田真厚氏か大山式の特徴(註9)としたものである。両破片とも比較的堅緻で、焼成はよく、器面はナテによって調整し、石英を多量混入する。136は茶褐色で第3層、137は暗褐色で第7層の出土である。

同図138は肥厚口縁の破片で、大山式ではないか、大山期に属する資料であり、ここで説明することにする。肥厚部の断面は正方形を呈していたと思われる。口唇および肥厚部外面に縦長の刻文を密に施文する。施文は深めである。小破片のため口径、器種ともに不明。器色は赤褐色、多量の石英を混入する。胎土は粗く、焼成不良で脆弱。肥厚口縁の形態、その他の特徴からみて大山期終末ころのものと考えられる。第4層の出土。

同図139は押し引き文を施す資料で、大山式かと考えられるものである。幅3mmほどの単篋を使用し、浅く押し引き文を施している。したかつて、文様は不鮮明。胎土、焼成、器色、その他の特徴も大山式と認めて良いものである。第3層の出土。

d) 第V類 (カヤウチバンタ式) 土器

第21図140に示した口縁破片1点だけである。口径は推算21.2cm、肥厚部下端で破損している。器種は深鉢形であろう。

茶褐色の焼成のよい土器で、肥厚部の厚さ約1cm。裏面には篋状工具によったとみられる擦痕も見受けられるか、最終的には表裏両面ともナテ調整を行っている。胎土は粗く、多量の石英、少量の磁鉄鉱を混入する。以上の

特徴から大山期終末ころのものかと推察している。第7層の出土。

● 第VI類（室川式）土器

室川貝塚の土器を標式とする新型式の土器で、本ピットでは総数470個の破片が得られ、うち33個の口縁破片と有文胴部破片を第22図141～第25図182に示した。

この土器の口縁形態、テンパー（胎土混入物）、器色等に大きな特徴がみられ、混和材によりA・Bの2種に大別され（註6）、また口縁の形体は本貝塚出土のものについてみると、前項（トレンチT-16・17）で説明したようにa～hに細分か可能である。

器種は深鉢形が主体で、稀に壺形が加わるか、本ピットでは確実な壺形は検出されておらず、口縁破片でみる限り、ほとんどが深鉢形である。底部では小型平底の底面を指頭で押しあげたような特殊の底部も見受けられた。

文様は押捺刻文や同種の押し引き文が最も多く、これに斜伏線を加えるもの、稀に凸帯で飾るものなどがある。施文は口唇部や口頸部に限られ、胴部以下に施文のおよぶものは本ピットでは検出されていない。施文具としては単篋工具か支配的であるけれども、叉状工具を使用したのも発見されている。しかし、後者は例外的なものであろう。

第18表 室川式土器A・Bに含まれるテンパーの種類

タイプ テンパー 層序	サブタイプ A				サブタイプ B				不 明	合 計
	A		B		C	D	E			
	石 英 石灰岩	石灰岩 石 英	石 英 磁鉄鉱 石灰岩	石灰岩 磁鉄鉱 石 英	石 灰 岩	石灰岩 貝	石 英 石灰岩 貝	石灰岩 石 英 貝		
表 採										
I		2								2
II					6					6
III		2			24	1				27
IV			1		14				1	16
V										
VI	1	7		1	39	13				61
VII				1	48	39				88
VIII										
IX										
X										
XI		15	2	9	92	63	1	11	2	195
XII					4	5		1		10
XIII				2	5	11				18
XIV					6	6				12
XV										
XVI										
合 計	1	26	3	13	238	138	1	12	3	435

※ 石灰岩としたものは石灰質砂粒のことで貝の破片を含むかもしれないか、分類に際しては特に肉眼やルーペで観察できるものを本表では貝と記した。>は多寡を示す。

テンパーは微砂粒と2mm以上の大きさの2種に大別することかでき、前者をA、後者をBとした。

混入物は石英、石灰岩（石灰質砂）、貝殻、磁鉄鉱の4種が認められ、それらがいろいろに組み合わさっているか、その組み合わせをみると大体下記の5種にまとめることかできる。

- A) 石英+石灰岩
- B) 石英+石灰岩+磁鉄鉱
- C) 石灰質砂粒のみ
- D) 石灰質砂粒+貝殻片
- E) 石灰質砂粒+貝殻片+石英

以上の5種であるか、粒の大きさをみると石英や磁鉄鉱は1mm以下のものか圧倒的に多く、微砂粒の部類に入る。石灰質砂粒（貝殻片を除く）は1mm前後のものと2mm以上のものに大別され、貝殻片は2mm以上のものか一般的である。そのことから、石灰質砂粒の大きさは室川式A・Bの分類基準の一つになるかと考えるか、これについては、さらに資料を得て検討したい。混入物に関する資料は第18表の通りで、いずれの場合も石灰質砂粒が主体となっているところに特徴がある。

本来なら上記5種のテンパーの組み合わせと口縁形態（a～f）との相関関係などについても精査の上、報告すべきだが、今回は、時間の都合で省略した。これについては後日、改めて報告したい。

本ピットにおけるAとBの出土量についてみると、Aかはるかに多く2倍弱であった（第19表）。次にAグループより説明する。

第19表 室川式土器の出土状況

層序	サブ・タイプA		サブ・タイプB		合計
	口縁	胴部	口縁	胴部	
表採	1		1		2
I		2			2
II		6			6
III		26		1	27
IV		15		1	16
V					
VI	4	48	4	13	69
VII	7	49	8	39	103
VIII					
IX					
X					
XI	3	119	3	76	201
XII	1			10	11
XIII		7		11	18
XIV		6	1	6	13
XV					
XVI					
合計	16	278	17	157	468

(1) 室川式A

294点の破片を得た。これは広義の室川式の61%にあたる。そのうち、口縁破片16点と胴部の有文破片3点を図示した。器形は先述のように深鉢形に属するとみられるものである。図示した資料はほとんどか小破片で復元は不可能だが、第25図182は安里嗣淳氏のご好意により、西長兵原遺跡出土の類例を参考に復元を試みたものである。本型式は遺物層の各層にわたってみられたか、第6・7・11の3層に比較的集中していた。次に図示した資料について説明を行うが、特に明記しないかきり、テンパーは石灰岩を含むと解していたたきたい。

第22図141は口縁の断面か三角形に近いもので、粘土帯を貼付することによって口縁

を肥厚させ、幅広い口唇（約15 cm）をつくる。口唇部はわずかに丸味を帯びているが、平担に近い。この種の肥厚はT-16・17区の室川式には認められない。口径約16 cm、胴上部のやや張る深鉢形の口縁破片と考えられる。器食は黄褐色、器面はナテによって調整され、焼成は良く堅緻。表採品。

同図142は口縁部の屈曲が規格性をもつもので、T-16・17区のタイプDに近いものである。内傾した口唇部と肥厚部外面に棒状工具による刺突文、その下方に斜沈線を施している。口径は不明。深鉢形の口縁破片と思われる。器色は黄褐色、焼成は良く堅緻で、石灰質砂粒のほか石英や磁鉄鉱を少量混入する。裏面に擦痕がみられるが、口唇と外面はナテ調整である。第6層の出土。

同図143は口縁の肥厚しないタイプに属するが、幅広い口唇をつくる。口径は不明。器面はナテによって調整されている。器色は暗褐色で、大山期の器色に類似し、古式の部類に属するものであろう。第6層の出土。

同図144は口縁の断面が円形に近い肥厚を示すもので、口唇部は丸味を帯びている。T-16・17区の室川式に見られないタイプである。肥厚部は無文だが、頸部には方向を異にする斜沈線の一部が残っている。裏面では擦痕も見受けられるが、表面はナテによったものと思われる。器色は暗褐色で大山期のものに類似する。焼成はきわめてよい。第6層の出土。

同図145は口径約15 cmの深鉢形の口縁破片で、粘土帯を貼付することにより断面隅丸形状の肥厚をつくる。文様は肥厚部直下に一条押し引き文を施しているか、施文は浅い。表面は室川式B類似の明るい褐色で、内面は暗褐色。焼成は悪く、脆弱である。第6層の出土。

同図146は頸部の破片で、したかって口縁の形態は不明である。文様は叉状工具によって施文され、縦位のものには連点、横位のものには点刻とそれぞれ異なった文様要素を施文している。器面は両面ともナテられ、器色は暗褐色。第7層の出土で、施文に叉状工具を用いているものの、工具が小型化していることや石灰質砂粒を混入していることなどから、あまり古さは感じられない。室川最盛期ごろのものであろう。

同図147も頸胴部の破片とみられるものである。破片の上端は若干肥厚しているが、それが凸帯であるのか、あるいはカヤウチバンタ式口縁の下端部にあたるのか不明である。

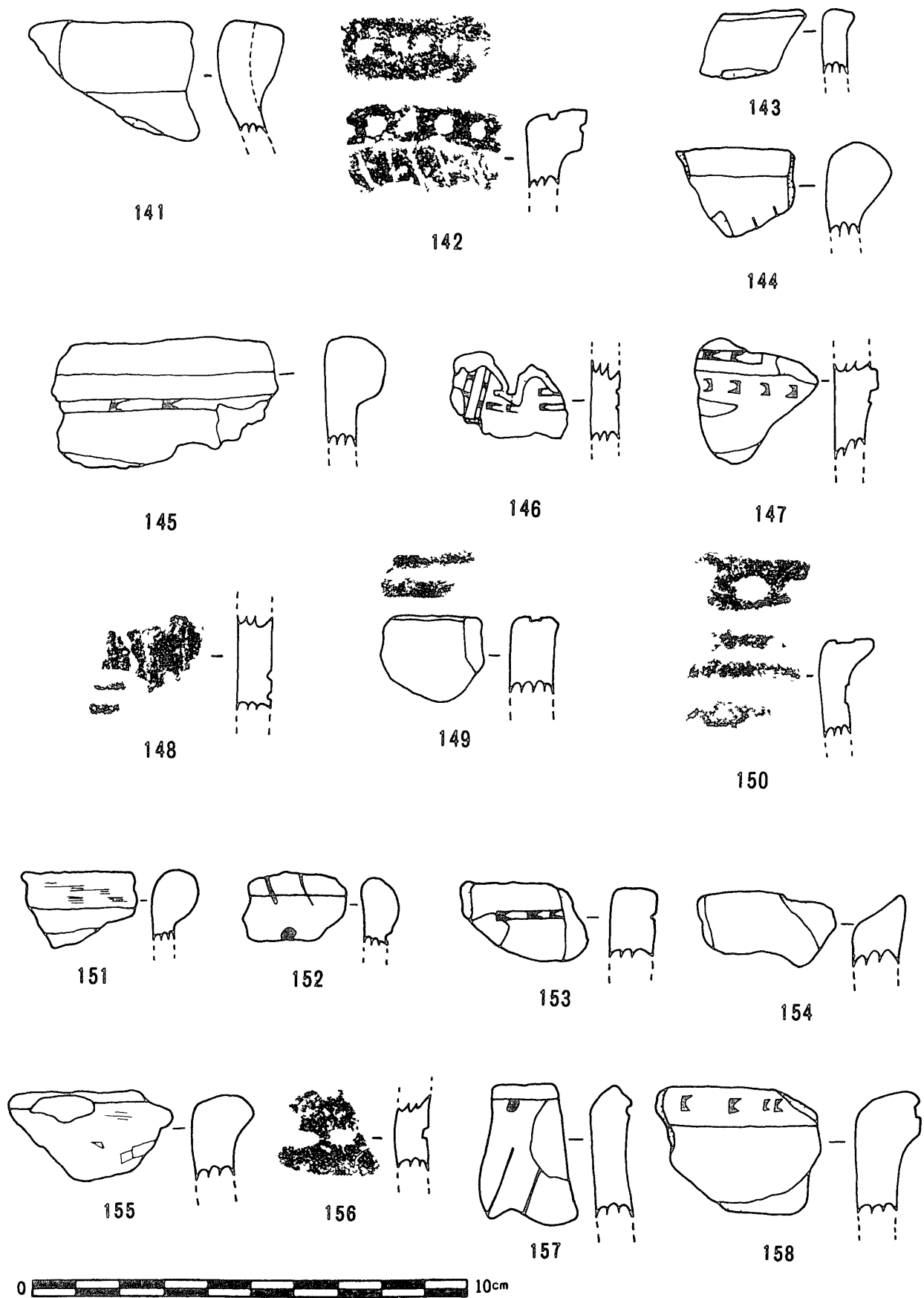
肥厚部直下では横捺刻文が一条認められる。器面は表裏ともかなり破損しているか、焼成時の器面を残す部分ではナテ調整が観察される。焼成は悪く、脆弱。第7層の出土。

同図148は暗褐色の胴部破片で、叉状工具様の施文具による文様が施されている。伊波、荻堂期の施文具より先端の幅は若干広く、施文は浅めである。器面はナテ調整を行っており、胎土は泥胎に近いが、石灰質砂粒を混入する点を除けば、大山期の特徴を備えた土器片である。第7層の出土。

同図149は口縁の破片で、比較的厚手である。口縁の肥厚しない土器で、これだけの厚さを有するものはまず考えられないので、カヤウチバンタ式土器の肥厚部の可能性が強い。口唇上には斜沈線文が施されている。器色は暗褐色、器面はナテられ、焼成はよく堅緻。もしこれがカヤウチバンタ式であれば、後項に移すべきであらう。第7層の出土。

同図150は深鉢形の口縁破片で、口唇部に押捺刻文、頸部に押し引き文を施している。

前者は深く、文様ははっきりしているか、後者は不鮮明である。裏面ではわずかに擦痕



第22図 T. P. 区出土の室川式A (141~155)室川式B (156~158)

もみられるが、表面はナテによって調整されている。器色は大山期類似の暗褐色、焼成は普通。第7層の出土。

同図151は断面が隅丸方形のような肥厚を示す口縁破片で、肥厚は小型化している。口径約14cm、器色、胎土、焼成等前記150に類似し、大山末期に位置付けられるものであろう。石英を主体に磁鉄鉱、少量の石灰質砂粒を含む。第7層の出土。

同図152は口縁の破片で、口唇部の断面は円形に近い肥厚を示す。しかし、肥厚は微弱。この種の肥厚もT-16・17区ではみられなかった。口唇部では外面に向かって斜伏線、その下方に横捺刻文の一部が認められる。焼成は悪く脆弱で、器色は大山期のものに近い暗褐色。胎土には石灰質砂粒のほか少量の石英、磁鉄鉱が含まれている。古いタイプかと思われる。第7層の出土。

同図153は口縁の破片で、口唇部の断面は方形を呈する。口縁部には幅の狭い単窠による押し引き文が1条認められる。施文は浅く文様は不鮮明。器色は暗褐色で、大山期のものに類似。胎土の混入物は石英を主体とするが、石灰質砂粒も多く、そのほか磁鉄鉱も見受けられる。この土器は特に口縁部の肥厚は認められないが、器壁が厚いことから、あるいはカヤウチハンタ式の口縁破片かとも考えられる。第11層の出土。

同図154は口唇の内傾したもので、肥厚の形態は不明。口径は推算10cm。器色は茶褐色。器面はナテられ擦痕は見受けられない。焼成は普通。第11層の出土。

同図155は深鉢形の口縁破片で、幅広い口唇は若干丸味を帯びている。タイプaの変形とみられる。器色は明るい褐色、器面はナテによって調整されている。焼成は比較的よい。室川式Aの口縁破片では最下層の出土で、第

12層で検出されたものである。

第25図182は口頸部の破片で推定復元が可能である。口径は10cm、頸部がしまり、口縁部で若干外反するが、口径は胴の最大径より小さい。この土器は西長兵原遺跡出土の類例を参考に復元したもので、胴の最大径はやや中位にある。底部は底径の小さい平底である。この土器は2個の口縁破片を接合して復元したものだが、2個とも外面上端が剥落し、そのため口縁の原形を知り得ないが、あるいは肥厚口縁の一種ではなかったかと想像している。つまり、粘土帯を貼付して口縁を肥厚させていたのではないかとみられるのである。剥落部の幅は1cm前後であることから、仮りに肥厚口縁であったとしても、肥厚部は小型のものであったと推測される。

この土器は頸胴部の境に断面半月状の凸帯を一条繞らし、凸帯状に小型単窠による押し引き文を施している。押し引き文は力強く描かれているため、押し引き部分は凹線となっている。凸帯文以下(胴部)は無文であるか、上部(頸部)には1cm間隔の3列の縦位押し引き文が施されている。この3列か1組になり、全体としては4組施されていたかと想像している。口縁の器面剥離部にも刻文かわずかで見受けられるから、水平方向の横捺刻文か施されていたかと思う。

この土器は焼成はよく比較的堅牢で、口縁上端の剥落部を除けば、元の器面を残している。裏面は終始ナテによって仕上げられ、表面は擦痕を施した後、それをナテ消しているが徹底せず、擦痕の観察される箇所が多い。胎土は粗く、多量の石灰質砂粒を混入する。内面は茶褐色、外面は煤けて暗褐色を呈し、石灰質砂粒を混入するという点を除けば、他の特徴は大山期の土器と一致する。第11層の出土。

以上、室川式Aのうち特徴ある標品について記述を行った。290点余の破片の中からわずかに10数点のものについて観察を行ったに過ぎないか、T-16・17区発見の室川式土器との間に若干差異のあることも分った。

本ピットの室川式土器は先述のように石灰質の微砂粒をテンパーの主体とするもので、他に石英や磁鉄鉱をわずかに含むものもみられたか、器色は茶褐色のものから栗色の暗褐色に近いものが一般的で、器面調整の方法や胎土、焼成の特徴なども一見、大山式と見紛うものか多く、外観は後述の室川式Bと大きく異なっており、後者より1時期古いものかと考えられるのである。このグループは将来、室川式から分離せねばならないかも知れないが、当面、室川式に含めておく。

図示した土器の器形上の特徴は口縁か肥厚して室川式特有の幅広い口唇を形成することであるが、肥厚口縁の形態を口縁の断面でみると、T-16・17区にみられたような形態を示すものは第22図142 145 150 155の4点で、他に円形に近いルーズな肥厚を示すものが3点（同図144 151 152）あり、これらはT-16・17区にみられなかったものである。後者の肥厚形態と前記した大山期的な特徴かどう結びつくか、つまり、大山終末ごろの肥厚形態ととらえることが可能かどうか、この点について今後も注意していきたい。

(2) 室川式B

これに属する破片は174点得られ、前項室川式Aとの比率は2分の1強となっている。第3層以下多くの層で出土をみたが、室川式Aと同しく第6 7 11の3層に最も多かった。

口縁破片は17点得られた。明確な壺形を示すものはなく、ほとんどが深鉢形のものであろうと考えられた。第23図1は

比較的大形の破片で口径を知りうる資料であり、推算18cmの口径を有することから大形の部類に属する資料かとみられる。口縁部は肥厚を示すもの、疑似肥厚を示すものなどがあり、前者が多かった。

文様を施文するものは胴部破片も含め16点ある。文様の種類についてみると横捺刻文を施したものが最も多く、横捺刻文と斜沈線を組み合わせたものか、これに次ぐ。叉状工具を用いたものは見受けられなかった。施文部位は口縁肥厚部と直下の頸部あたりまでと考えられる。

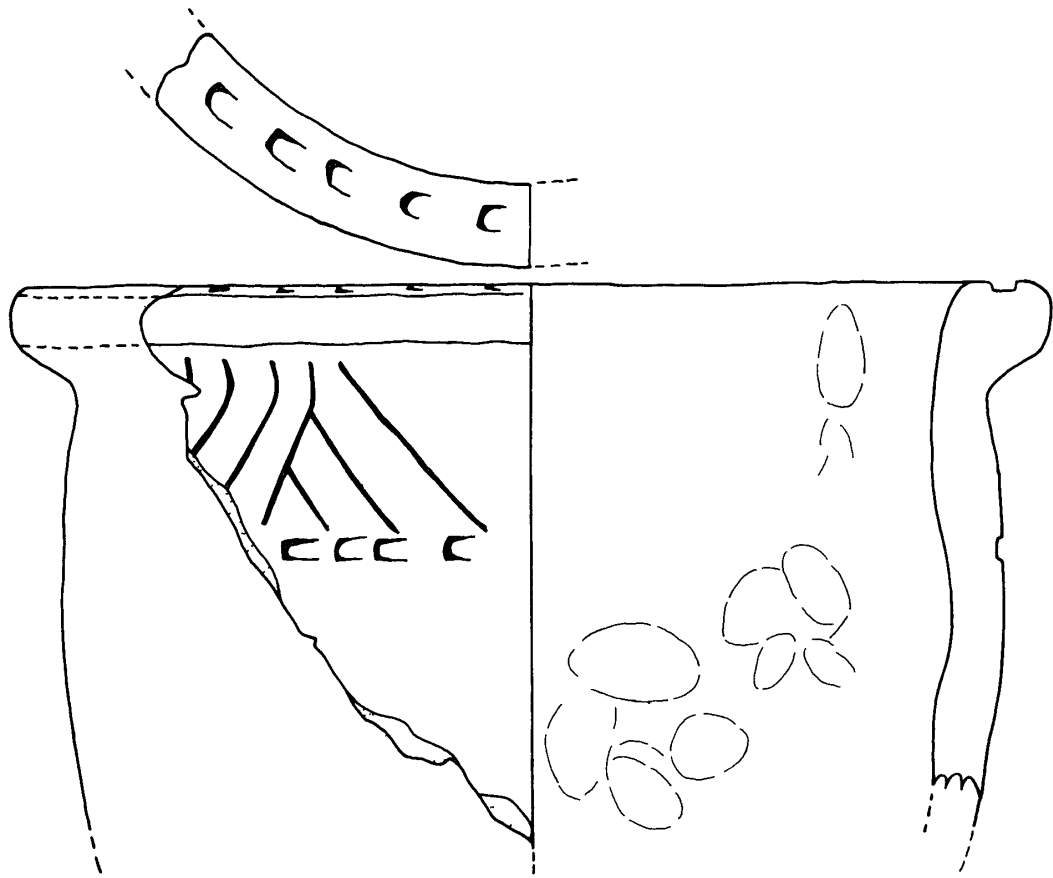
器色は明るい褐色のものか多く、2mm前後以上の石灰質砂粒を含むのか一般的で、この2点は口唇を強調することと共に室川式Bの大きな特徴に数えられる。以下、図示した14点について簡単な説明を加える。

第22図156は胴部の破片で、横捺刻文か一条認められる。横捺刻文は右から左へと描いている。文様は鮮明。混入物は石英が多く、それに磁鉄鉱のほか少量の石灰質砂粒を混している。赤褐色の薄手の破片で、焼成は不良。器面摩耗のため器面調整の方法はうかがえない。第4層の出土。

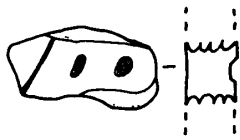
同図157は深鉢形の口縁破片で、口縁の屈曲の形態はタイプdに属する。外面では屈曲部に横捺刻文、その下に斜沈線を施している。表裏面に擦痕が見受けられるがいずれもその上をナテている。赤褐色の土器で焼成は普通。口径は不明。第6層の出土。

同図158も深鉢形の破片で、口縁の形態はタイプdの一種と考えられ、幅広い口唇は内傾している。文様は肥厚部外面に横捺刻文を施しているか、施文は雑である。口径は約21cm。赤褐色の土器で、第6層の出土。

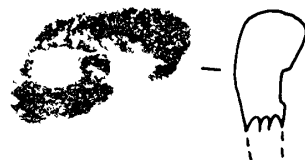
第23図159は比較的大形の破片で、口径は推算18cmである。口縁の形態はタイプa



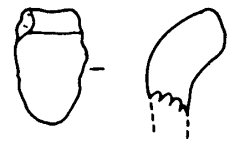
159



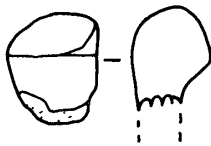
160



161



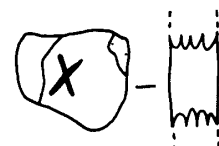
162



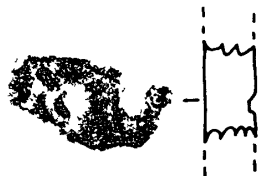
163



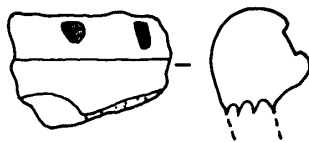
164



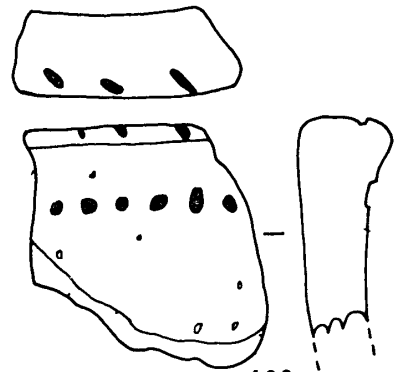
165



166



167



168



第 23 図 T. P. 区出土の室川式B

に属し、口唇上には横捺刻文を1条左から右に描いている。肥厚部外面に文様はなく、その下方から頸部にかけて数本を単位とする斜沈線を方向を変えながら施文している。斜沈線の下端を横捺刻文で締めくくっている。

器面はナテられ擦痕は見受けられないか、裏面では指頭圧痕が観察できる。器色は赤褐色、胎土は粗く、石灰質の粗砂粒を多量含む。器壁は1cm前後と厚い。焼成は悪く脆弱。第7層の出土。

同図160は刺突文を横位に施す胴部破片で、器色は赤褐色。胎土は粗く焼成は悪い。器面摩耗のため調整の方法はうかかえない。第6層の出土。

同図161は口縁の破片で、肥厚の形態はタイプaに近い。口唇上は無文。頸部に横捺刻文が認められる。器色は明るい褐色。胎土は粗く焼成は悪い。器面はナテ調整を行っている。第6層の出土。

同図162はタイプdに属する口縁破片で文様は認められない。器色は赤褐色に近い。器面は両面ともナテを行っている。焼成は普通。第7層の出土。

同図163は方形に近い肥厚を示す口縁破片で、幅広い口唇は若干丸味を帯びている。文様は認められない。明るい褐色の土器で、器面はナテによって調整されている。焼成不良。第7層の出土。

同図164は胴部の破片で、押し引き文の一部が認められる。器面には擦痕もみられるか、最終的には両面ともナテを行っている。赤褐色の土器で、焼成は普通第7層の出土。

同図165は斜沈線の交わる部分を残す胴部破片。沈線は細い。明るい褐色の土器で、焼成は悪く脆弱。器面はナテ調整を行っている。第7層の出土。

同図166は横捺刻文を施す胴部の小破片で、

器色は暗褐色を呈し、前項室川式Aに近い。たまた混入の石灰質砂粒は粗砂粒に属し、そのためにここに含めたか、あるいは室川式Aに属する資料かも知れない。器面はナテによって調整されている。第7層の出土。

同図167は断面円形に近い肥厚を示す口縁破片で、肥厚部外面に横捺刻文を1条施している。器色は明るい褐色に属し、石灰質粗砂粒のほかにもわずかに石英を含む。焼成は比較的よい。第11層の出土。

第24図169は横捺刻文の2条認められる口縁破片で、口唇上にも同種の文様を施している。口唇上の文様は浅く、口縁部の文様は深い。色調は黄味の強い赤褐色で、石灰質砂粒のほかにも石英を少量含む。裏面はナテられているか、表面は不明。第11層の出土。

同図170はタイプaの肥厚を示す口縁破片で、口唇は若干内傾している。肥厚部外面と同直下に幅の狭い単発工具によって押し引き文を施している。施文は浅く、文様は不鮮明。器色は明るい褐色で、胎土は粗く、多量の石灰質粗砂粒のほかにも石英をわずかに含む。器面はナテによって調整されている。焼成は悪く脆弱。第14層の出土。

室川式Bに属する底部破片が1点(第28図225)、第11層から出土している。底径の小さい平底で、外面を押しあげ凹面をつくっているか、押しあげの効果は内面におよんでいない。焼成はよく堅緻で、外面は茶褐色、内面は暗褐色を呈し、石灰質の粗砂粒を多量混入するか、磁鉄鉱も見受けられる。底面の押しあげが室川式まで遡上することを示す貴重な資料である。内面には若干擦痕も見受けられるか、外面はナテ調整を行っている。

第28図226は特殊器形の破片で、一端は破損面を示しているか、他端は接合部で割れたもので、接合面は1~15cmの幅をもって

いる。幅広の接合面から脚台の可能性を考えているが、確かなことは今後の類例を待つ以外にない。第6層の出土で、石灰質の粗砂粒を多量含み、明るい褐色の器色を有することから、室川期の所産であることは間違いない。

以上、図示したものについて説明を行ったが、室川式Bは口唇部の誇張とともに、器色は黄褐色や赤褐色など明るい褐色のものが一般的で、石灰質の混入物も粗砂粒が多く、器面に露出して肉眼観察が容易であり、したがって胴部破片であっても色調や混入物等の種類から同定はさして困難ではない。

(3) 室川期のカヤウチバンタ式土器

カヤウチバンタ式土器のうち室川期に比定できるもので、室川式土器の影響を強く受けている。第24図171～181に示した11点がこれにあたる。これらの土器は石灰質の砂粒を含み、強弱の差こそあれ室川式同様、口唇を強調する傾向をみせる。

カヤウチバンタ式土器は肥厚部を断面で見ると上端（口唇）と下端の厚さがほぼ等しく、中間が若干凹んで歯ブラシ状の凹部を形成する。しかし、室川期のカヤウチバンタ式土器は上端（口唇）を強調する傾向をもち、下端の厚さが口唇に比べて減少するのが一般的である。典型的なものは同図175 181などであるか、他の標品も同様の傾向を示している。

本ピット出土のものについてみると、肥厚の形態は概ね下記の3種に分つことができる。

- 1 正方形に近いもの。第24図171,173
178,180の4点
- 2 中等の長方形 同図174,176
177,179の4点
- 3 長大形 同図175,181の
2点

4 不明

同図172

断面が正方形に近いもののうち1点は口唇がやや内傾し、他の1点は水平方向、残りの2点は外傾している。中等の長方形に属するものの口唇は水平方向のものが多いようである。肥厚部が長大化した2点も口唇は水平方向をとっているが、同図181の標品は口唇がやや円味を帯びている。

器形は口縁部でみるかきり深鉢形に属し、口径の推算できるものについてみると171は約24cm、175は約22cm、181は約25cmである。

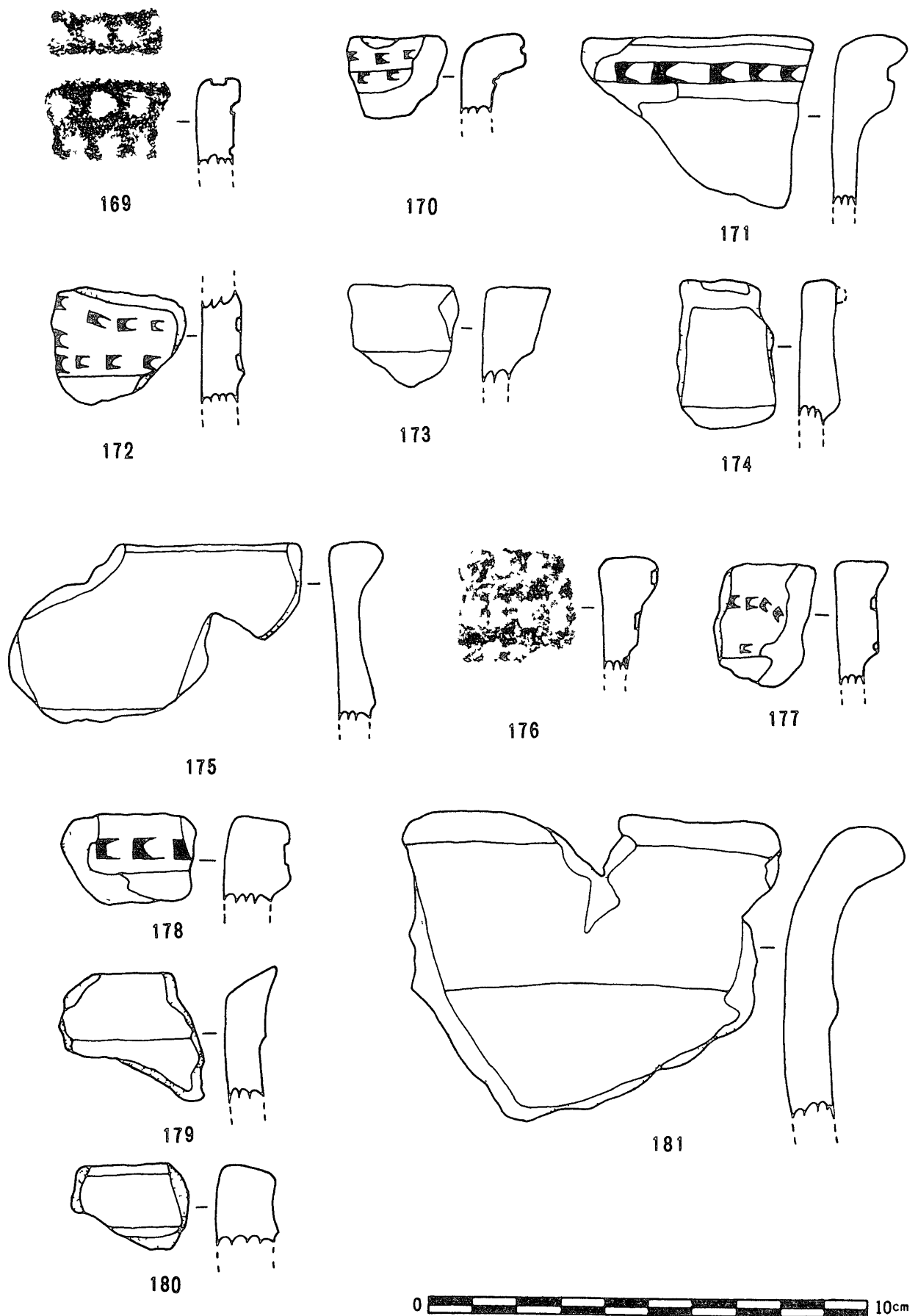
文様を施すものが5点ある。いずれも肥厚部外面に横捺刻文を施し、口唇に施文したものは今回は検出されていない。肥厚部の文様は一条ないし2条で、176の標品は肥厚部直下に施文する例である。

器色は174 176 177の3点は明るい褐色、他は暗褐色を呈し、混入物についてみると、171 174 176 177の4点は石灰質の粗砂粒、他は微砂粒を混入するが、172 173 174の3点には磁鉄鉱もみられる。171の標品は器色や焼成等からすると室川式Aの特徴を有するが、石灰質の混入物が粗砂粒であることは室川式Bの特徴であり、いずれに分類すべきか迷うところである。この資料は表採品である。174 176 175の3点は室川式B、他は室川式Aの時期に比定してよいかと考える。

出土層位についてみると172は第4層、173は第6層、174 175の2点は第6層、176～181の6点は第7層の出土で、同層以下での発見はなかった。

f) 第VII類（室川上層式）土器

室川貝塚の上層を代表する土器の1つで、ポーラスな器面はこの土器の最も大きな特



第24図 T. P. 区出土の室川式B (169 170) と室川期のカヤウチパンタ式土器 (171~181)

徴である。本ピットでは最も出土量が多く、全体の約52%を占めるが、その割に口縁部（23点）や底部（1点）の出土は少なかった。

口縁破片でみると器種は深鉢形が圧倒的で、他に壺形や内彎形の口縁をもつ土器も若干見受けられた。ほとんどが小破片であるが、2点だけは推定復元が可能である。深鉢形についてみると口縁を肥厚させるものや口唇を強調するものなどがある。また、外耳の破片が3点検出されており、現時点における外耳土器の上限を示す資料として注目される。底部は尖底か底径の小さい平底（25cm前後）で、後者の中には底面を内彎させたものもある。

施文には単篋工具が使用され、叉状工具によるものは本ピットでは未発見であった。文様は横捺刻文や押し引き文が主体で、これに沈線を加えたものも若干検出されている。施文の範囲を示す資料は少ないが、他の土器同様、施文部位は口唇部および口頸部に限られているのではないかと考えている。

混和材は石灰質砂粒を主体とし、これに石英や磁鉄鉱を混えるものがわずかながら発見されている。しかし、この土器のもう一つの特徴は混和材の観察が困難だということである。器面は普通ポーラスになっていて混和材の露出は認められない。そのことから混和材を含まない土器かという疑いも出てくるが、新しい破損面では石灰質砂粒の観察されることが多いことから、これが主体をなすものであろうと考えている。もっとも例外的に器面で観察されるものもあるが、その時も石灰質砂粒であることが多い。

胎土は泥胎に近いものが多く、焼成は良好なものと不良のものが認められ、前者をA、後者をBとすると出土量はBの方が圧倒的に多かった。両者を同一型式のサブ・タイプとみるか、あるいは分離して二型式とするかは今後の問題である。次にこのA・Bについて簡単に説明する。

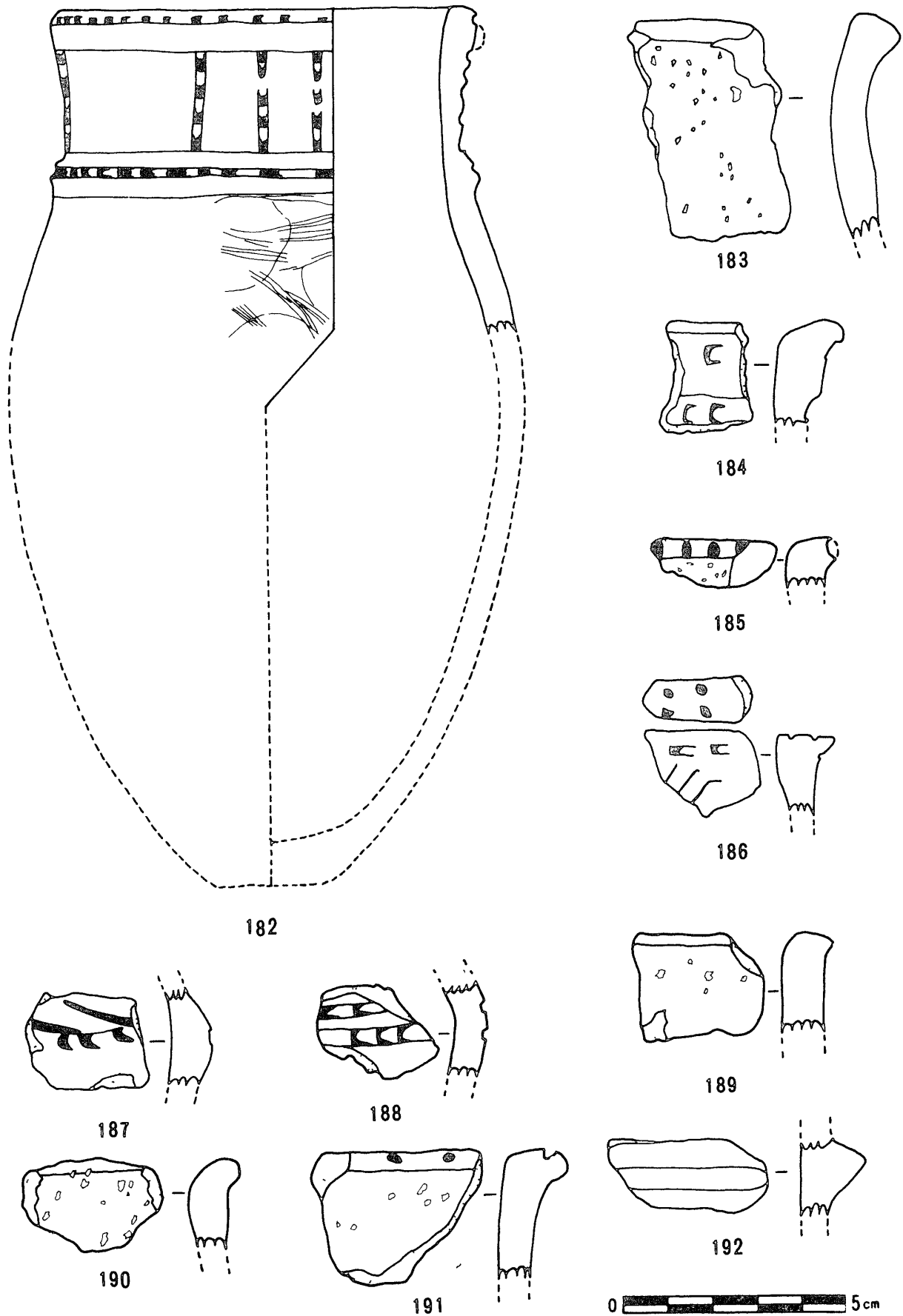
(1) 室川上層式A

出土量はきわめて少なく、全体の約5%であった。そのうち口縁部やその他特徴のあるものを第25図183～192、第26図193194第27図207に示した。口縁破片は復元を試みたものを含めると11点の出土であった。その中に明らかに壺形器形を示すものは見受けられないので、ほとんどは深鉢形に属するものであろうと考えられた。

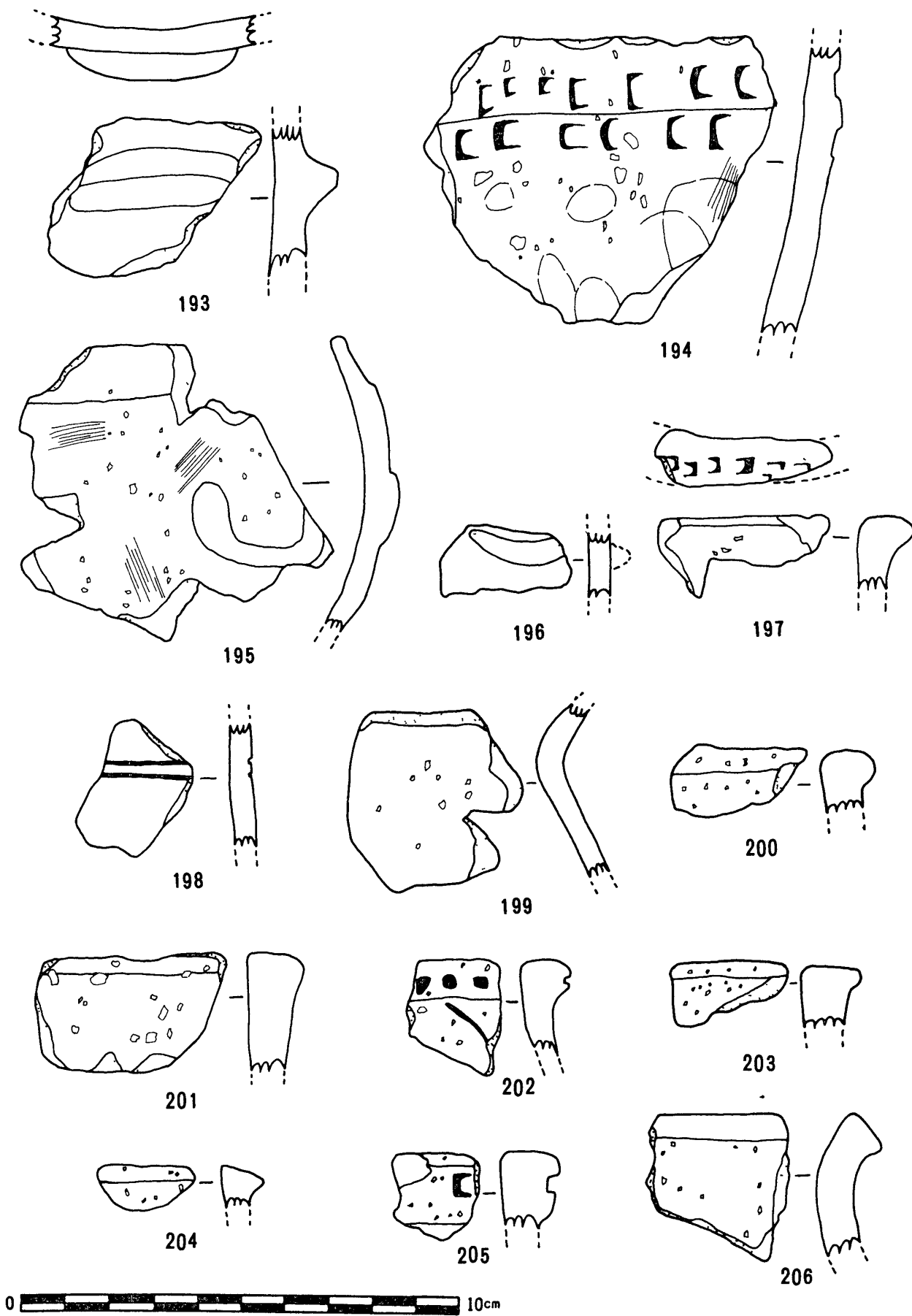
第25図183は頸部でしまり、口縁上端で

第20表 室川上層式土器の出土状況

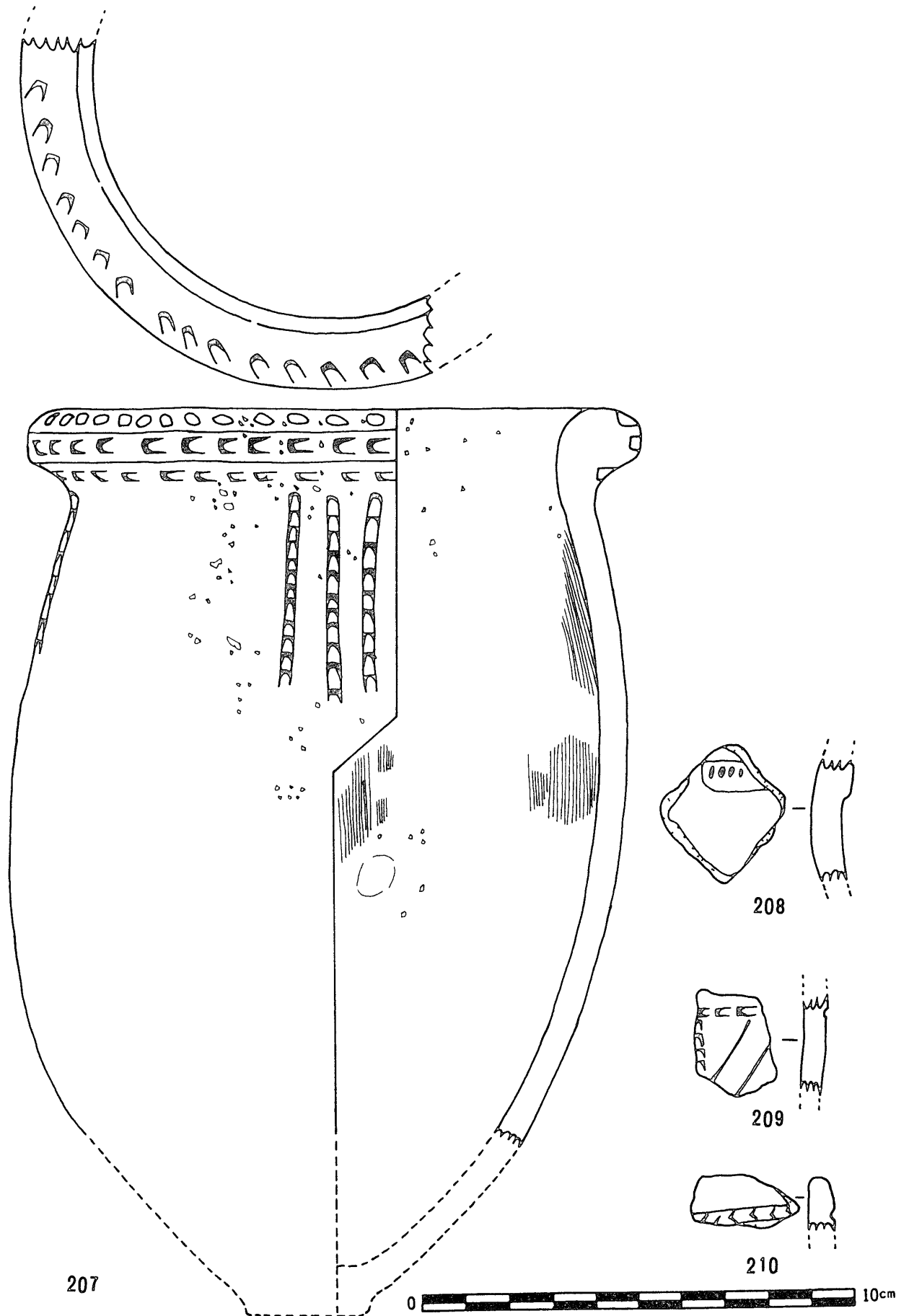
タイプ 層序	サブタイプA		サブタイプB		合計
	口縁	胴部	口縁	胴部	
表採			1		1
I		6		52	58
II	2	6	1	150	159
III	8	21	4	500	533
IV		6		216	222
V					
VI	1	10	4	47	62
VII			1	1	2
VIII					
IX					
X					
XI			1	28	29
XII					
XIII					
XIV					
XV					
XVI					
計	11	46	12	997	1066



第 25 図 T.P.区出土の室川式 A (182) と室川上層式 A (183~192)



第 26 図 T. P. 区出土の室川上層式 A (193. 194) と室川上層式 B (195~206)



第27図 T. P. 区出土の室川上層式A (207)と奄美系土器 (208~210)

外反する深鉢形で、この土器と同図 206 の 2 点は口縁の肥厚しないもので、その他は口縁を肥厚させたり、幅広い口唇をつくるなど、室川式と共通した点がみられる。第 27 図 207 (図版 36 の B) の復元土器は室川上層式 A の典型的なもので、焼成のきわめて良い、薄手の土器である。口径約 15 cm、中等の大きさに属し、口縁を肥厚させる。底部は未発見だが、底径の小さい平底か想定される。また、同図 187 188 の 2 点は内彎の比較的強い土器で、椀形の器形に属するものかと考えられる。

文様は 6 点に認められる。いずれも単篋工具によって施文している。第 25 図 185 は肥厚部外面に刺突文、同図 186 は口唇上と口縁部に施文しているが、口唇部は破損し、文様は不鮮明。また、口縁部の文様は横捺刻文と斜伏線文を組み合わせたもので、いずれも施文は浅く文様は不鮮明。同図 187 も横捺刻文と斜伏線文を組み合わせているが、器面がポーラスなため文様は不鮮明。同図 188 は押し引き文が 2 条認められる。しかし、施文は浅く文様は不鮮明。同図 191 は口唇の外縁側に刺突文を施しているが、施文は浅い。第 27 図 207 の復元土器に施された文様は特異である。口縁の肥厚部には横捺刻文が 3 列施されている。この種の文様は比較的類例は多いけれども、頸部の文様が他と異っている。つまり、頸部の文様は 3 本の縦位文様 (押し引き文) だけで構成されているのである。

縦位文様は伊波式や荻堂式にもみられる。しかし、両型式の場合、縦位文様は中段に施され、その上下を横位文様で締めくくっている。室川上層式に施された前記の文様は文様帯の下端を締めくくる横位文様が欠け、そのため伊波式や荻堂式の文様に比べるとしまりのないような印象を受ける。しかし、室川貝塚ではこの種の文様が他に数例知られており、

ある時期に現われる文様のものである。

以上のように施文例は少ないが、文様として最も多いのは横捺刻文あるいは押し引き文で、伏線と組み合わせる例は 2 例に過ぎなかった。

この土器についてあと一つ付言したいことは外耳把手が認められることである。第 25 図 192 と第 26 図 193 の 2 点で、前者は一部破損しているが、2 点とも平面観は三ヶ月形であったかと思われる。両者とも第 3 層の出土。以上に説明した土器は第 25 図 183 が第 2 層で、他 (185～192) はすべて第 3 層の出土であった。

(2) 室川上層式 B

室川上層式を特徴づける土器で、本ピット出土の室川上層式の 95 % はこの土器である。先述のように黄褐色の器色を有し、胎土は泥胎に近く、吸水性の強い土器である。口縁部やその他特徴のある破片を第 26 図 195～206 にかかげた。

器種は 3 種認められる。深鉢形、壺形、椀形の 3 種である。深鉢形は大きな破片に恵まれずしたがって、良好な資料に欠けるが、第 26 図 206 についてみると、頸部がしまり、胴部が若干張る深鉢形の口縁のようである。同図 199 は壺形に属するが、口径を推算し得ない。同図 202 も肩の張る器形が想定されるが、壺形か深鉢形かは不明。同図 195 は口縁の内彎する器形で、胴径は約 10 cm、椀状の器形に属するものであろうと考えられる。この器形の底部は不明であるが、第 28 図 224 の尖底は室川式 B の特徴を有している。この尖底は第 4 層で検出された。

深鉢形に属するとみられる口縁破片についてみると、同図 197 200～204 206 のように口縁を肥厚させるか、あるいは幅広い口唇をつくるなど室川式に通ずる特徴がみられる。

同図 201 は厚手に属し、あるいはカヤウチパンタ式の肥厚部かとも考えられる。

文様を施す例は少ない、同図 195 は U 字形の貼付文を施すもので、唯一の浮文である。粘土帯が小さいことから把手の機能は考えられない。この 1 例を除けば他は鋭状工具による文様を施文する。施文は単鋭工具を使用している。同図 197 は口唇部に横捺刻文、198 は胴部に 2 本の細枕線を横走させているか、単鋭工具を使用しているために必ずしもきちんとした平行線にはなっていない。同図 202 は横捺刻文と斜枕線を組み合わせた例で、文様を有するのは以上の 4 点だけである。

この土器にも外耳把手を施すものがある。同図 196 は採集後の破損により把手を失ってしまったか、小型の把手が貼付されていた。

出土層位は 198 が表採資料で、199 は第 2 層、195 196 200～202 は第 3 層、197 203 204 は第 6 層、205 は第 7 層、206 は第 11 層の出土である。

(3) 室川上層期のカヤウチパンタ式土器

カヤウチパンタ式土器のうち室川上層期に比定できるもので、口縁の肥厚を除く他の特徴は室川上層式とはほぼ一致する。本ピットでは 4 点の出土があった。

第 25 図は 184 は口縁肥厚部とその直下に横捺刻文を施すもので、肥厚部の断面形態は室川式と一致する。茶褐色の土器で器面のポーラス性は他の土器に比べると劣っている。この土器は硬質で室川上層式でいえば A に属し、器面ではわずかながら石灰質砂粒や石英などを観察することかてきる。第 2 層の出土。

第 26 図 194 は口唇部を欠くが、器面に残る肥厚の形態からカヤウチパンタ式の資料と考えられるものである。胴径約 19 cm。茶褐色のきわめて硬質の土器で、肥厚部と考えら

れる部分とその直下に横捺刻文を施している。しかし、施文は浅く文様は不鮮明。裏面では篋による過擦痕が見受けられ、表面はナテ調整を行なったものと見られる。テンパーの混入量は少なく、その中では比較的石英が目立つ。この土器も室川上層式でいえば A の部類の資料である。第 6 層の出土。

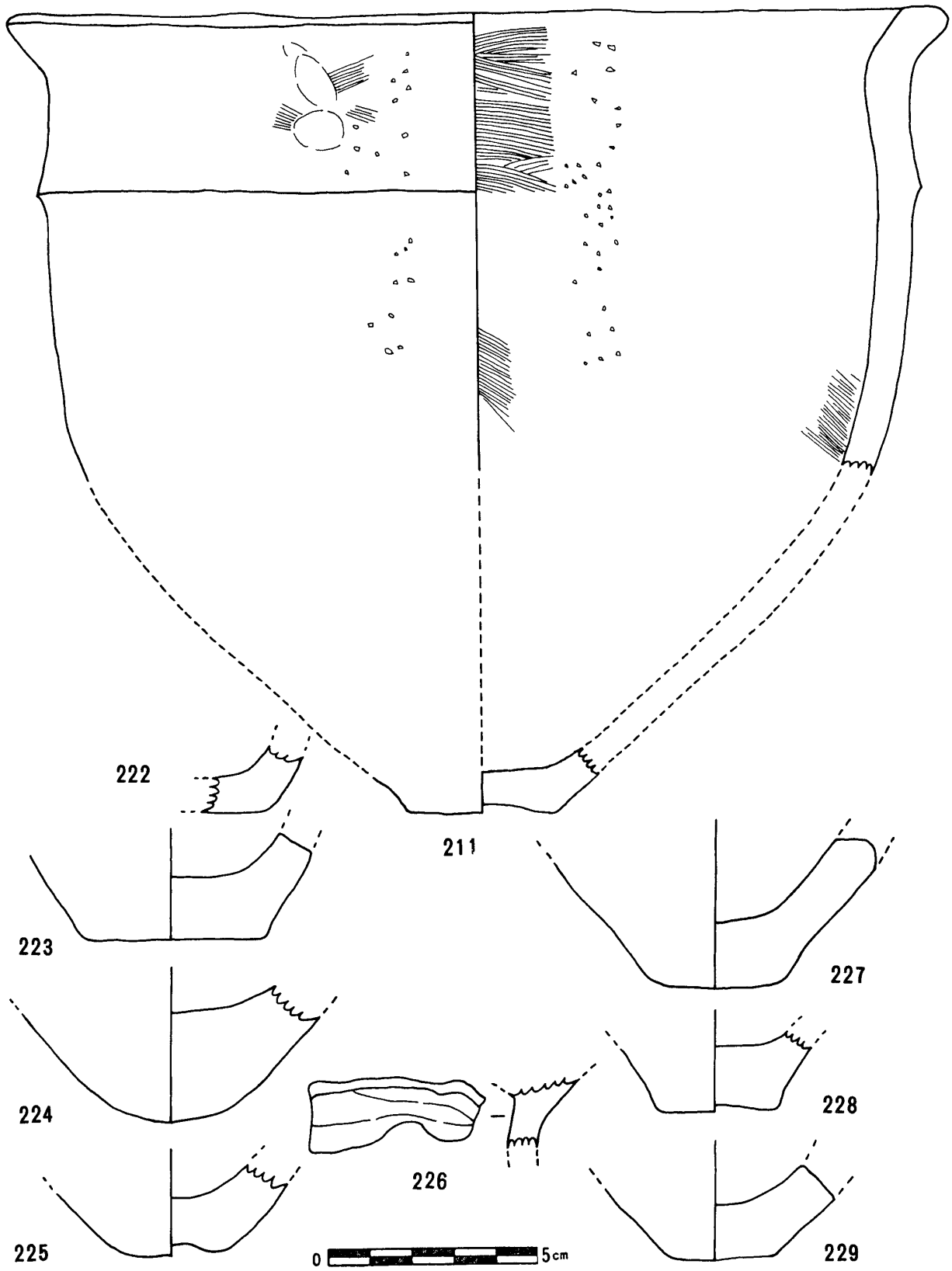
同図 205 は破損の著しい口縁破片で、肥厚部の断面形態は正方形に近い。器色は黄褐色。焼成は悪く、吸水性の強い脆い土器で、室川上層式 B の時期に比定できよう。肥厚部外面には横捺刻文を施し、胎土には石灰質の微砂粒をわずかに混入している。第 7 層の出土。

第 28 図 211 (図版 36 の A) は推定復元を試みたもので、口径か高さより大きい鉢形の器形である。肥厚部は多少長大化し、口縁上端で外反する。器壁は 8 mm 以上の厚さを有し、厚手の部類に属する。ポーラスな器面では石灰質の微砂粒が観察できる。器色は桃色に近い褐色で、吸水性の強い土器である。表面はナテ調整、裏面では擦痕が見受けられる。底部は底径の小さい平底 (約 3 cm) で、底面は凹んで凹面を作る。室川上層式 B 期の所産と考えられる。この土器は第 7 層の出土で、第 27 図 207 の土器に伴って発見された。

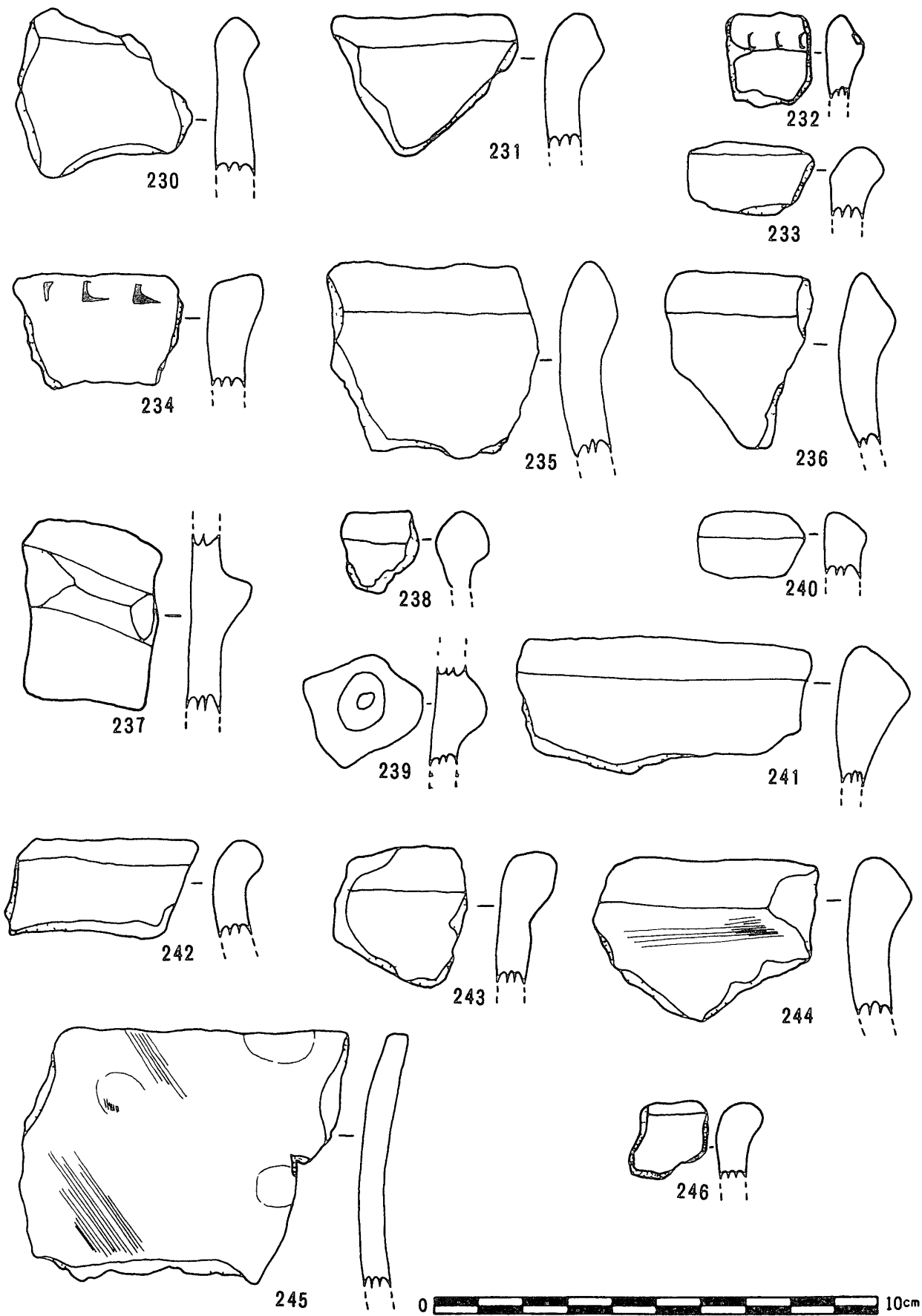
g) 第Ⅷ類 (宇佐浜式) 土器

本ピットの上層を代表する型式の一つで多量の出土があった。しかし、すべて小破片で復元可能なものはなかった。この土器は本ピットの下限を知る目安になりうるものである。この土器の口縁や特徴のある資料を第 29 図と第 28 図 227～229 にかかげた。

破片が小さいため器種の決定は困難だが、やや大きな口縁破片についてみると口径が胴の最大径よりやや小さい深鉢形のものが多い



第28図 T. P. 区出土の室川上層期のカヤウチバンタ式土器 (211), 伊波~大山期の底部 (222-223), 室川式土器の底部 (225), 室川上層式の底部 (224) 宇佐浜式の底部 (227~229), 226 は脚台の破片か?



第 29 図 T. P. 区出土の宇佐浜式土器

ように見受けられる。口径を推算しうるものは5点あり、第29図231は約16cm、235は約22cm、241は約21cm、242は約15cm、244は約18cmでいずれも中等以上の大きさを示している。

口縁の断面は三角形を呈するものが多いが、円形の肥厚を示すものも若干検出されている。また、同図245のように全然把厚しないものもある。この土器は口径推算22cm、頸部がしまり、口縁部の外反する大形の土器である。このように宇佐兵式土器は口縁部の把厚するものが一般的といえる。

底部は3個得られた。第28図228、227に示す2点は底径の小さい平底で、228は底径約3cm、底面は押しあげられ凹面を形成する。茶褐色の焼成のきわめてよい土器で堅緻。表面はナテられ骨らかだか、内面は宇佐兵特有のザラザラである。多量の石英のほか磁鉄鉱を含む。第4層の出土。同図227も底径約3cmの小形の平底で、焼成はよく堅緻である。器色は茶褐色、多量の石英を含む、第5層の出土。同図229も底径の小さい平底で、外面にナテられているが、ザラザラした面も見受けられる。器色は茶褐色。焼成は良好で多量の石英を含む。第3層の出土。以上のように今回採集した底部はいずれも底径の小さい平底であり、尖底は検出されなかった。

第29図237は外耳把手状のもので、一部破損しているが、平面形はM字状を呈していたものと思われる。同図239は瘤状の突起をつけたもので、両標品とも第3層の出土。この2点が把手の機能を有していたか、あるいは単なる装飾的なものであったか、今後類例の増加をまって検討したい。

文様を施す例は少ない、同図232は唯一の施文例で、肥厚部外面に横捺刻文を1条施している。しかし、施文は浅く不鮮明。同図

234については後で述べるが、宇佐兵式土器で施文するものはこの1例だけであった。

宇佐兵式土器の器面は手触りのザラザラしたものが一般的である。しかし、第29図231、235、244、245の4点はナテ調整を行っており、器面は骨らかである。他は手触りのザラザラしたものである。また、胎土の混入物は石英か主体だが、同図240の1点には磁鉄鉱のような光沢のある黒色の砂粒が若干見受けられる。器色は茶褐色のものが一般的で、稀に暗褐色のものもみられる。この土器は伊波式や荻堂式に比べると硬いものが多い。

第29図234は宇佐兵式というより、口縁の形態からすれば室川式である。しかし、この土器は茶褐色の器色を有し、多量の石英を混入する。器面は一部ナテられた部分もあるが、他は宇佐兵式特有のザラザラした器肌で、口唇の形態を除けば、他の特徴は宇佐兵式と一致する。そのことから宇佐兵期の室川式かと考えられる。知花遺跡発見の室川式土器（註7）はすべて石英を含んでいた。その点、本貝塚の室川式と異っているが、この234の本標品も、知花遺跡の室川式土器との関係で考えるべきかもしれない。今後の課題としたい。

h) 奄美の土器

奄美的文様を施す土器は3点得られ、第27図208～210に図示した。いずれも口頸部の破片である。

第27図210は口縁部の破片で、三角形刺突が1列認められる。刺突文はある程度力を入れて描かれているため、施文部は凹線をつくる。胎土は粗く、焼成は悪い。器色は赤褐色で、多量の石英を混入する。この土器は薄手であること、三角形刺突文を施文することなど奄美の土器と一致し、移入品であろうと考え

られる。小破片のため、面縄東洞式とすべきかどうかは不明。第7層の出土。

同図209は頸部の破片で、斜沈線を押し引き文や凹線で囲んでいる。斜沈線と縦位の押し引き文は力強く描かれている。横線は浅い。嘉徳Ⅰ式のグループであろう。暗褐色の土器で、焼成はよく、多量の石英と金雲母を少量含む。この土器も薄手であり、しかも金雲母を含むことから、前記文様要素とともに移入品と考えられるものである。第2層の出土

同図208は頸部の破片で扁平な凸帯を貼付し、その上に刺突文を施している。器壁は前記2点に比べると厚く、焼成もよい。器種は確言はできないが、頸部のカーブの状況から壺形の破片かとみられる。石英を多量含み、器面はザラザラしている。器色は茶褐色で、面縄前庭式のグループであろうと考えられる。第4層の出土。

D 小 結

本テストピットは遺跡東南部における遺物包含層の有無を確認するため、段々畑の最上段の一角に設定した試掘坑である。先述のように地表下16枚の層序が確認され、複雑な堆積状況を示していた。文化遺物は第14層まで認められた。本ピットで検出された人工遺物は土器が最も多く、そのほか石器、骨製品などもわずかながら見受けられた。本項では土器について若干の所見を述べ、結びとしたい。

土器は7型式認められた。本遺跡の最古型式である室川下層式土器は検出されておらず、すべて伊波式以後の型式に属し、下限は宇佐兵式で代表される。

伊波式土器や荻堂式土器の明確なものは10点で、他にそのいずれかに属するとみられるものが3点ある。これらの土器は第2～11層

間に出土し、上層に多かった。そのことから本ピットの上限を示す資料と見做すことは危険であり、上層堆積期に混入したものと考えた方が妥当性をもつように思われる。大山式土器の明確なものは3点であったが、この土器も第3～4層で出土しており、伊波式や荻堂式と類似の埋存状況か考えられるが、胎土に石英のほか少量の磁鉄鉱を含む胴部破片（この種の混入物は大山式やカヤウチバンタ式の一部に認められる）は本ピットの下層でも発見されており、あるいは本地区の上限を示す資料になりうるかとも考えられる。

室川式土器は470点の出土があり、第2～14層のほとんどの遺物層で見受けられたが、特に第11層以下の下部に多く、次いで6・7の中層にやや集中し、第1～4層の上層で最も少なかった。室川式土器はA・Bの2種に細分され、それぞれの特徴から前者が時期的に若干先行するものと考えられる。本ピットではAが294点、Bが176点出土し、前者が圧倒的に多かった。しかし、両者の出土層位はほぼ一致しており、層位的に先後関係をとらえることはできなかった。

室川上層式土器は出土量が最も多く、1000点余採集され、量的には他の型式をはるかに凌駕していた。この土器も焼成の良い硬質のもの（A）と軟質泥胎のもの（B）に細分され、前者が若干後者に先行するものとみられる。しかし、両者の先後関係を層位的に確認することはできなかった。本ピットにおける出土量は前者が57点、軟質泥胎のものか1009点で、後者が圧倒的に多かった。室川上層式土器は第1～11層間に出土をみたが、第1～4層に最も多く91%を占め、中層で64点（6%）、下層上部で29点（3%）の出土となり、上方へ急増の傾向がみられた。

室川上層式土器では3点の外耳破片が認め

られた。長さ5cm前後の半月状の平面形をもつもので、宇佐兵期に若干みられることは以前から知られていたが、今回の調査で室川上層式に遡ることか確かめられたので、この3点は現在のところ半月状把手の最古の資料ということになる。

宇佐兵式土器も第1～4層の上層に集中してみられた。この土器は第4次発掘調査までは第4層以上に限定され、それ以下の層にみられず、上層に限定された土器と考えられた。しかし、第5次調査では中層(6～7層)で3点、第11層で1点の出土があり、中層以下の層で4点検出されたことになる。中層以下の出土については、第5次調査が雨天の中で続行され、側壁が崩れやすい状態にあり、崩れ落ちた側壁と発掘中の層相が類似している時、特に両者を接点において明確に区別することは困難なことが多かった。これは特に雨で土層が漏れていることに起因し、そのため乾燥時におけるより層の識別を困難にしたのである。第11層出土の宇佐兵式土器は上記のような状況下で検出され、そのため層位的

位置づけという点では問題を残しているが、いずれにせよ全体的には上層に集中しており、上層の主体をなす土器であることは間違いないように思われる。

本ピットにおける各型式の出土状況は上述の通りであるが、室川式土器、室川上層式土器、宇佐兵式土器の3型式はそれぞれの層位的出土状態から、三者間の時間的關係か把握できるのではないかと考えている。

今仮りに本ピットの15枚の層を上(第1～5層)、中(第6～10層)、下(第11～15層)に分けてみると、室川式土器は下層に多く、中→上と減少する。室川上層式は逆に上→中→下の減少率を示し、宇佐兵式土器にも同様の傾向がみられる。しかし、中・下層における室川上層式と宇佐兵式の関係は室川上層式が先行する可能性を暗示している。

以上のことからこの三型式の編年については、室川式→室川上層式→宇佐兵式の序列が想定される。しかし、後者の2型式については層位関係の明確な遺跡においてその序列を確認する必要があるだろう。

沖 国 大 考 古

創 刊 号 目 次

1 具志川市隅原遺跡発掘調査概報

高宮廣衛・比嘉春美・岸本義彦・宮城利旭
中村 愿・山田正・吉本直子・上原静

2 沖縄市室川貝塚発掘調査速報

高宮廣衛・比嘉賀盛

第 2 号 目 次

1 室川貝塚第1～3次発掘調査概報

高宮廣衛・玉城朝健・平安秀子・東江千栄子

IV Q · R - 7 区

A 本地点の調査目的および層序

本地点はSトレンチでみられた焼土面の広がりを確認する意味で選定した。Sトレンチの焼土層は本トレンチでも認められ、ほぼ水平方向に全面に広がっており、遺構の可能性が考えられた。しかし、それを確認するにはトレンチを拡張せねはならず、時間的余裕もなかったため第3次調査では第IV層（赤褐色土層）面で試掘を中止した。

第I層はシルト質泥岩の崩壊土でトレンチの全面にみられ、厚いところでは94cm、最も薄いところでは約20cm、南壁側から北壁側へかけて若干厚さを減する。シルト質泥岩(島尻層)は第3紀層であり、本層が第II層の新石器時代文化層の上にあるということは後世の移動によるものである。先史土器のほか現代の陶磁片、鉄片などが少量出土した。

第II層は10cm前後の黄褐色土層で最も薄いところは4cmであった。ほぼ水平方向の広がりをみせ、トレンチ全面に認められた。伊波式から宇佐兵式までの数型式の土器片が検出された。

第III層は黒褐色土層で東壁側で厚く(42cm)西壁側で薄い(9cm)。後世の攪乱は見受けられなかった。土器は伊波式、荻堂式、大山式などが比較的多かった。

第IV層は赤褐色土層(焼土)で、今回はこの層で調査を中止したが、先述のように比較的水平的な広がりを示していた。

B 出土遺物

本トレンチの出土遺物は自然遺物と人工遺物に分けられる。自然遺物の出土は僅少で、自然礫、獣魚骨などが得られたが、これらに

ついては後日専門家の同定を得て正式に報告したい。人工遺物は土器、石器のほか骨器が1点得られた。本文では人工遺物について報告する。

イ 骨 器

本トレンチの骨器は第32図 260に示す1点で猪の尺骨を利用した骨錐である。尺骨の一端に加工を加えたもので、加工部には横方向の加工痕が残っている。先端は鋭利である。長さは85cm、最大幅23cm、重量10gで、本遺跡出土の骨錐の中では小型に属する。

ロ 石 器

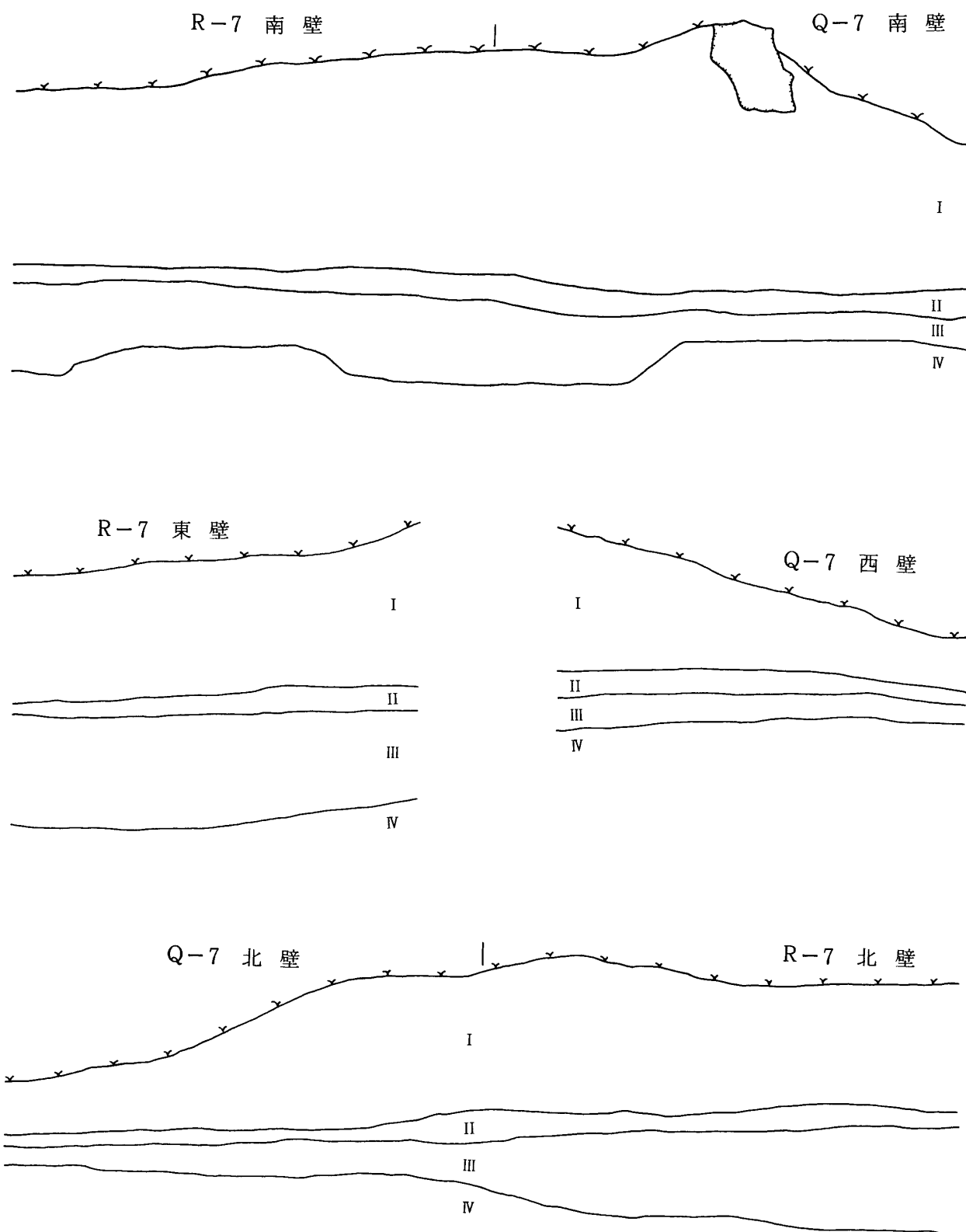
石器は14点の出土があった。そのうち8点は石斧に属し、残りの6点は人為的研磨面を残しているものの、破損が著しいため原形や用途を推察し得ないものである。

a 石 斧

石斧は前述のように8点得られた。そのうち4点は完形に近いもので、他の4点は破損の著しいものである。製法の上でみると磨製や局部磨製のもののみられ、横断面でみると扁平のものや楕円形のものがあり、また、刃形では両刃・片刃などが認められる。第2層で1点、他はすべて第3層の出土である。次に製法を中心に記述する。

磨製石斧

研磨がほぼ全面にわたって施されているものは2点である。第31図 249と254に示す2点で、いずれも横断面は扁平で、刃部で最も幅が広く、頭部へ向けて幅が小さくなるタイ



第30図 Q・R-7区の側壁図〔第I層=シルト質泥岩(島尻層), 第II層黄褐色土層, 第III層赤褐色土層(焼土)], ○は石灰岩

プである。

第 21 表 Q・R-7 出土の人工遺物

層 序	種 類	土 器			石 器	骨 器	計
		口 縁	胴 部	底 部			
I		1	45	1	0	0	47
II	0 - 10	11	142	3	2	0	158
III	0 - 10	11	45	8	8	1	73
	10 - 20	18	230	2	6	0	256
	20 - 30	11	99	2	0	0	112
	30 - 40	5	54	2	1	0	62
計		57	615	18	17	1	708

※ 発掘レベルの単位はcm。

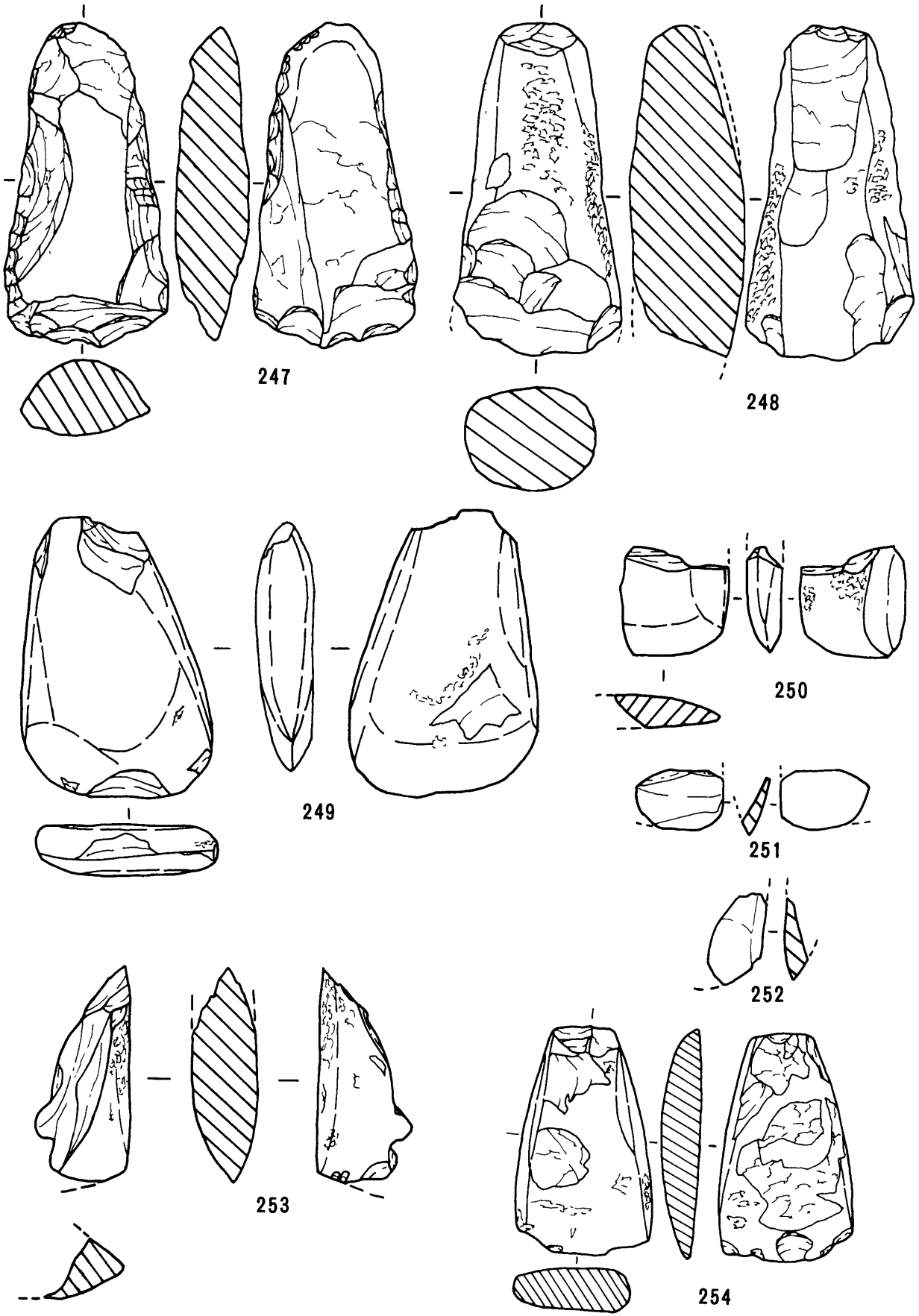
第 22 表 Q・R-7 出土の自然礫（除石灰岩）

自 然 礫 レ ベ ル 層 序	砂 岩	石 英	軽 石	凝 灰 石	千 枚 岩 質 輝 緑 岩	ヒ ソ 岩	黒 色 千 枚 岩	砂 質 千 枚 岩	砂 岩 (島尻層)	計	
I	$\frac{11}{230}$	$\frac{2}{324}$	$\frac{1}{357}$		$\frac{1}{416}$	$\frac{1}{5}$	$\frac{2}{15}$	$\frac{7}{45}$		$\frac{25}{30597}$	
II 0-10	$\frac{7}{155}$				$\frac{1}{1}$		$\frac{1}{35}$	$\frac{4}{140}$	$\frac{2}{20}$	$\frac{15}{351}$	
III	0-10	$\frac{8}{335}$	$\frac{1}{218}$		$\frac{1}{105}$	$\frac{2}{80}$	$\frac{5}{35}$	$\frac{5}{65}$		$\frac{22}{52768}$	
	10-20	$\frac{12}{285}$				$\frac{7}{210}$	$\frac{1}{25}$	$\frac{3}{154}$	$\frac{27}{150}$	$\frac{4}{140}$	$\frac{54}{964}$
	20-30	$\frac{10}{310}$				$\frac{2}{15}$		$\frac{1}{33}$	$\frac{5}{260}$	$\frac{2}{210}$	$\frac{20}{798}$
	30-40	$\frac{1}{40}$				$\frac{1}{5}$		$\frac{2}{88}$			$\frac{4}{133}$
計	$\frac{49}{1355}$	$\frac{3}{542}$	$\frac{1}{357}$	$\frac{1}{105}$	$\frac{14}{31516}$	$\frac{2}{30}$	$\frac{14}{330}$	$\frac{48}{660}$	$\frac{8}{370}$	$\frac{140}{307965}$	

※ 分子は個数、分母は重量(g)、レベルの単位はcm。

同図 254 は刃部の幅 3.7 cm、頭部の幅 1.7 cm、長さ 6.3 cm の完形に近い石斧で、上面と両側面では調整剥離痕が若干認められるものの、他は滑尺を有するほど研磨は徹底してい

る。背面も一応研磨が加えられているか、上面ほど徹底しておらず全面に剥離痕が見受けられる。本標品は刃部を欠いているため、刃縁は直刃だったかあるいは弧状を呈して



第31図 Q・R - 7区出土の石器

いたか不明だが、刃部の幅が頭部の幅より大きいことおよび縦断面でみると一面は平坦で他面は弧状を呈し、中央部で最も厚く両端へ厚さを減していることなど、この石斧の特徴といえる。重さ約40g、粗粒角閃岩製で、R-7第3層0~10cmレベルの出土。

同図249も完形に近い資料で、頭部の一部と背面の刃部側のごく一部を除けば研磨は微

底し、両平面だけでなく両側面も光沢を有するほど磨かれている。この石斧も扁平の両刃石斧で、刃部の幅が頭部より大きく、前記254の石斧と類似の形態を有するが、刃縁が長軸に対してやや斜め方向に付されているのは特徴的で一部破損しているが、鋭い刃が研き出されている。重さ111g、輝緑岩製で、R-7第3層10-20cmレベルの出土。

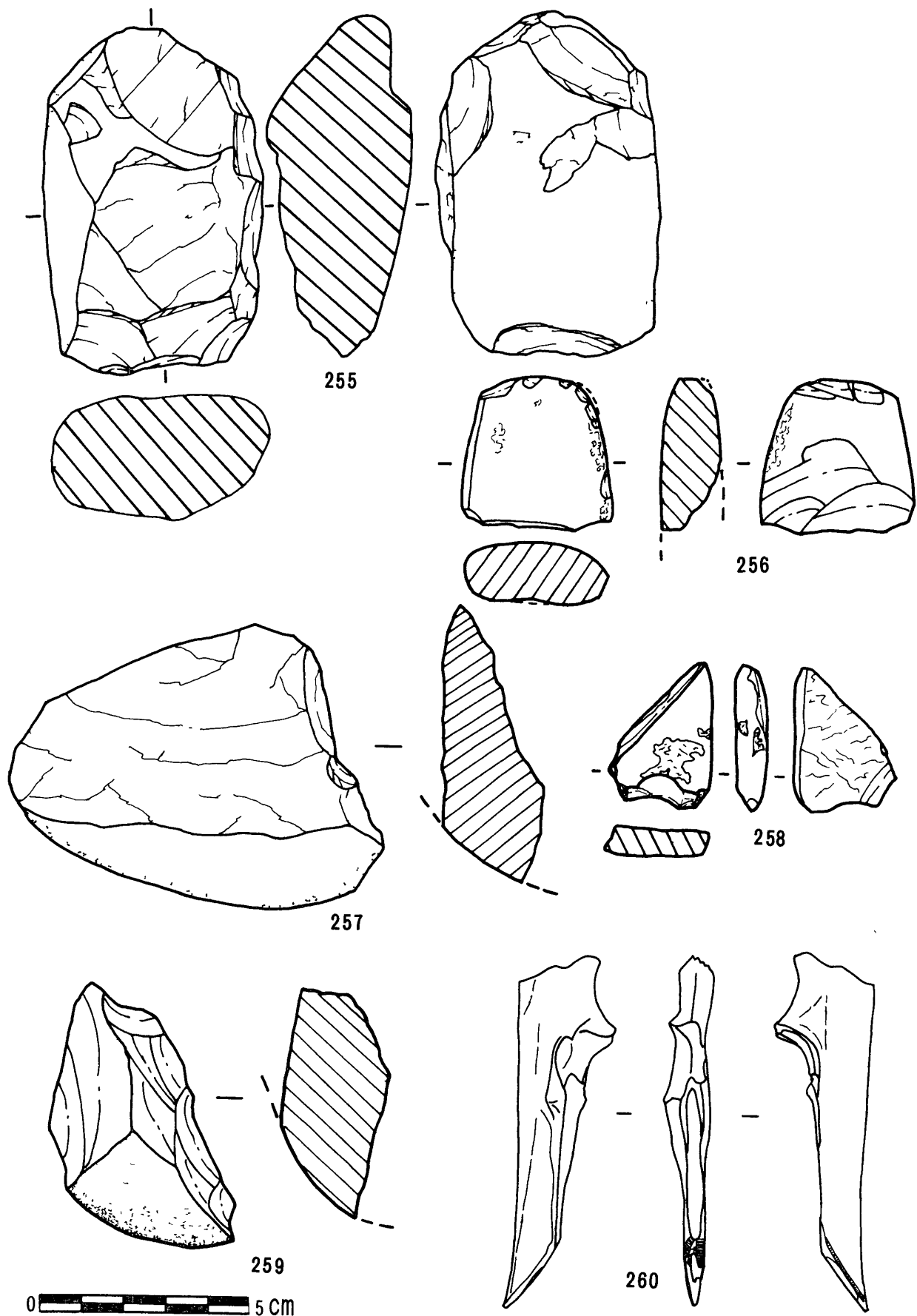
第23表 Q・R-7出土の石器

図番	種類	石質	出土層位	産出層	備考
248	石斧	粗粒角閃岩	Ⅲ層	名護	ケラマ産
247	石斧	黒色千枚岩	Ⅲ層	名護	
249	石斧	輝緑岩	Ⅲ層	名護	
254	石斧	粗粒角閃岩	Ⅲ層	名護	ケラマ産
256	石斧	輝緑岩	Ⅲ層	名護	
250	石斧	細粒角閃岩	Ⅱ層	名護	
252	石斧	千枚岩質緑色岩	Ⅲ層	名護	
251	石斧	粗粒角閃岩	Ⅲ層	名護	ケラマ産
253	石斧	輝緑岩	Ⅲ層	名護	
255	石斧	緑色岩	Ⅲ層	名護	
257	不明	砂岩	Ⅲ層	嘉陽	
—	不明	〃	Ⅲ層	名護	
259	不明	〃	Ⅲ層	嘉陽	
—	不明	〃	Ⅲ層	〃	
—	不明	〃	Ⅱ層	〃	
—	不明	〃	Ⅲ層	〃	
—	不明	輝緑岩	Ⅲ層	名護	

局部磨製石斧

同図247をここでとり揚げることにするが、本来この石斧が局部磨製であったかどうかは不明である。たゞ、刃部に近い片面のごく一部に研磨が認められるので局部磨製石斧を想定したが石質が軟らかく、土中から取り出す

ときに器面が土にくっつき剥落したため、現表面は原形を保持しておらず、したがって半磨製とすへきか、局部磨製とすへきか、判断が困難である。この石斧も刃部の幅が頭部より大きい形態に属しているようである。両側縁には浅い抉りが設けられているが、これは



第32図 Q・R - 7区出土の石器と骨器

一面のみ認められ、他面に及んでいない。重さ約100g。黒色千枚岩製で、Q-7第3層0~10cmレベルの出土。

乳棒状石斧

同図248の1点は刃部を欠くが、乳棒状石斧に属するものと思われる。横断面は楕円形で、頭部より刃部へ次第に幅を増す。器面の大部分は敲打痕で被われているか、平面と側面の一部には光沢を有するほど磨かれた部分もある。重さ約175g。粗粒角閃岩製で、R-7第3層30~40cmレベルの出土。

その他の石斧

上記の4点はほぼ完形に近いものだが、残りの5点は破損の著しいものである。

同図250は刃部の破片で、扁平石斧に属するものとみられる。刃は片刃に近い両刃で、両面から鋭く研ぎ出されている。滑沢を有するほど研磨は徹底し、わずかに残る側面は定角に近い形状を示している。平面の一つには剝離痕の消え切っていない箇所もわずかに認められるか、本来全面磨製の石斧であったかと思われる。細粒角閃岩製で、R-7第3層0~10cmレベルの出土。

同図252も磨製石斧の刃部破片であるか、破損が著しいため原形を推察し得ない。研磨は徹底し光沢を有する。千枚岩質緑色岩製でR-7第2層の出土。同図253も磨製石斧の刃部破片で、両刃石斧に属する。横断面は楕円形を呈していたかと思われる。輝緑岩製で、R-7第3層20~30cmレベルの出土。同図251に示すものも刃部の小破片で、片刃か両刃かは不明。研磨は比較的丁寧で滑沢を有している。石質は粗粒角閃岩で、Q-7第3層0~10cmより出土している。

第32図256は磨製石斧の頭部破片で、頭部の一部と側面の一部に打欠痕の消え切ったな

い部分があるが、研磨は比較的行き届いている。横断面は扁楕円形。輝緑岩製で、Q-7第3層0~10cmレベルの出土。第32図255は半欠品で一部調整剝離を加えているが、自然面を残す部分もある。未成品とすべきか、打製石斧の破片とすべきかは不明。現存部の断面は楕円形を呈し、長さは7.5cm、幅4.9cm厚さの最大は3.6cmである。緑色岩製で、R-7第3層10~20cmより出土した。200gである。

b その他の石器

以上のほかに研磨痕を有する破片が7点検出されている。そのうち3点を図示した。同図258は破損品であるか、一つの平面と一つの側面にかなり徹底した研磨面を残している。そして破損によって生じた他の側面に研磨を加えた形跡があり、破損後に再使用を試みたものであろう。しかし如何なる用途に使用しようとしたかは不明である。輝緑岩製でQ-7第3層10~20cmの出土。同図257、259に示す2点も一部に研磨痕を残しているが、破損が著しいため原形を推察し得ない。しかし、中には石斧あるいは磨石の破片かと思われるものもある。これらの用途不明品は第2層で1点、残りの6点は第3層で出土した。

ハ 土 器

本ピット出土の土器は690点（第24表では型式の明確なものを記し、胴部の破片を除いた。）で、すべて破片である。そのうち2点は図上復元の可能なものである。

これらの土器を前回の報告（註2）に従って分類した。第24表に示すように本ピットでは6型式の土器が得られ、奄美の土器も若干出土した。しかし、試掘を第IV層面で中止したため、本遺跡最古の室川下層式土器は本地区では検出されていない。次に各型式について略述する。

第24表 Q・R-7 出土の土器

型式	層序	I	II		III			計
			0 - 10	0 - 10	10 - 20	20 - 30	30 - 40	
伊波式		0	1	3	1	0	2	7
荻堂式		1	3	6	5	3	0	18
伊波・荻堂不明		3	4	5	10	6	3	31
大山式		0	4	6	7	4	2	23
荻堂・大山不明		0	3	5	1	3	0	12
室川式 (A)		0 (2)	0 (2)	0 (5)	0 (8)	1 (7)	1 (4)	2 (28)
室川式 (B)		0	0	0	0	0	0	0
室川上層式 (A)		0 (1)	2	1	2 (2)	1 (1)	0 (2)	6 (6)
室川上層式 (B)		0	1 (22)	1 (13)	4 (13)	1 (7)	0 (2)	7 (57)
宇佐兵式		(3)	1 (2)	(1)	0	0	0	1 (6)
奄美系土器		0	1	0	3	0	0	4
後期系土器		1	0	0	0	0	0	1
計		5 (6)	19 (26)	27 (19)	33 (23)	19 (15)	8 (8)	113 (97)

※ () は胴部及び底部、他は口縁あるいは有文資料

a 伊波式土器

本ピット出土の土器のうち伊波式として確実なものは第33図 261～267に示す7点で、そのうち5点は口縁部の破片、残りの2点は頸部の破片である。いずれも小破片で、復元可能なものは含まれておらず、したがって器形を明確に示しうるものはないが、同図 263は朝顔形に開く口縁形態が想定され、261と267は直口の形態かと考えられる。

口径の確実な資料に恵まれないが、266は口径推算20cm、267は約10cmで、口径でみるとそれぞれ大と小のタイプに属している。しかし、前回までの資料からすると中等大のものが一般的であったと思われる。伊波式土器は前回の報告では文様を基準に下記の3種に細分されている。

第1種

口縁部（上段）および胴上部（下段）に1条ないし2条の点刻文、連点文、短沈線文、長沈線文などを水平方向に施し、両文様にはさまれた部分、つまり中段（頸部）を無文のまま放置するグループ。

第2種

中段を数種の篋描き文で埋めるグループで次の4種に細分される。

(イ) 第2種Ⅰ 第1種の空白の部分を斜沈線、縦位沈線文などで埋めるグループ。

(ロ) 第2種Ⅱ 中段を羽状文・綾杉文などで埋めるグループ。

(ハ) 第2種Ⅲ 上段の横位の文様を省略し、口縁部直下にすぐ綾杉状文や斜沈線文などを施文するグループで、下段には横位の文様を施す。

(ニ) 第2種Ⅳ 中段に鋸歯状文を配するもの。

第3種

器形は伊波式に属するが、文様の全くみられないもの。

以下、上記分類に従って記述する。

第1種

本ピットでは第33図 261・262の2点がこれに属すると思われる。

同図 262は頸部の破片で、ピットQ-7第2層より出土したものである。叉状工具により上段と下段に点刻文を水平方向に施しているが、施文された点刻文が、それぞれ1組であったか、あるいは2組であったかは不明である。上段の点刻文は対の部分で破損しているから叉状工具を用いたことは確実である。点刻文は比較的深く刻まれている。上段と下段の文様間に形成される空白部分の幅は約2cmで、典型的な伊波式に比べると空間の幅が狭くなっている。その点、伊波式としては時期の下るものかもしれない。器面は両面ともナデによって調整され、擦痕は見受けられない。

同図 261は口縁部の破片で、口唇部の断面は舌状を呈する。ピットQ-7第3層の出土である。口縁部には単篋による列点文が2列認められる。列点文は押し引き手法によってなされているが、単篋工具を用いたために上下の列点文は対をなしていない。口縁もわずかに内彎しており、典型的なものからの、つれの感しられる資料である。表面では斜行の擦痕が観察されるが、裏面はナデによって調整されている。

第2種Ⅱ

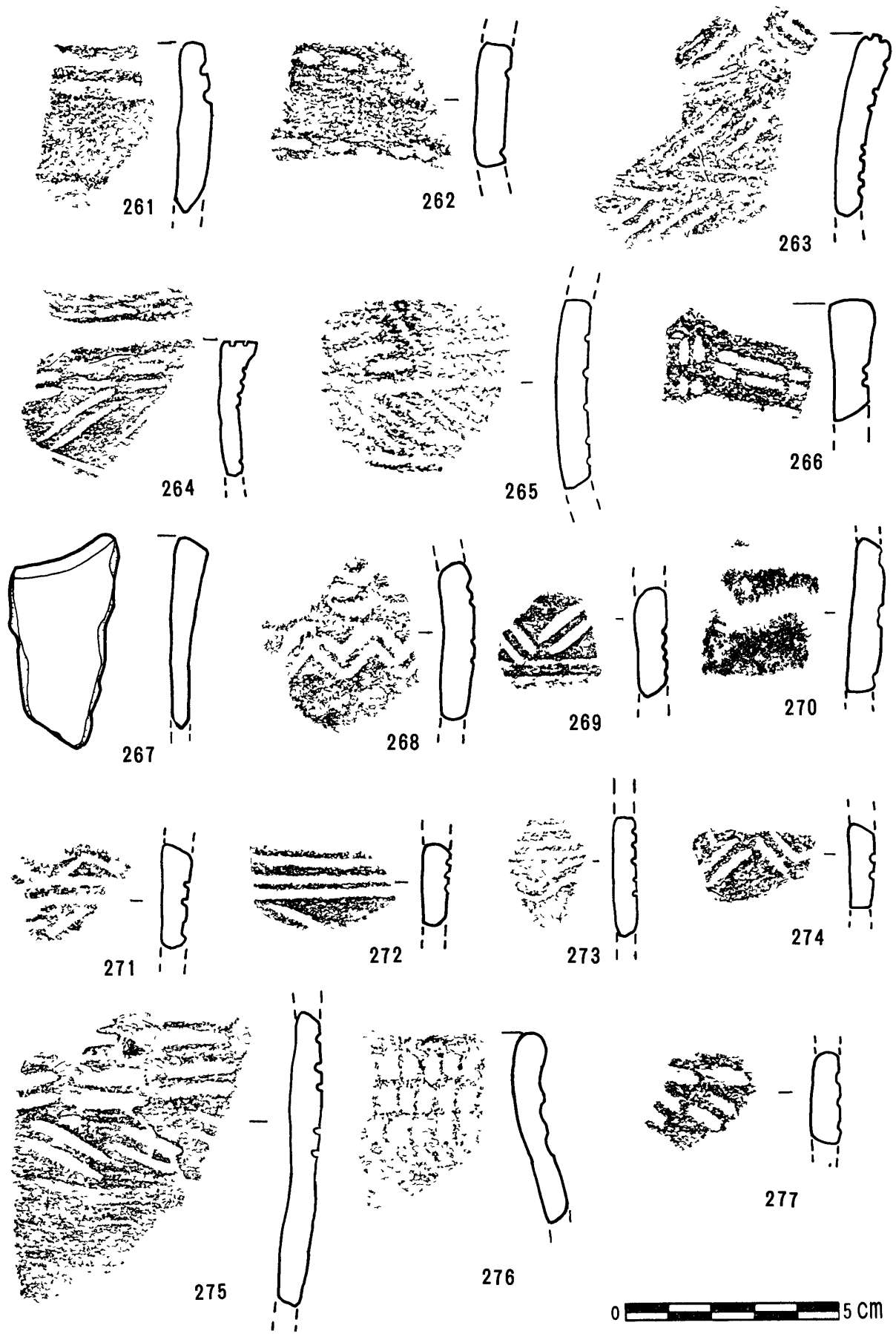
中段を羽状文・綾杉状文で埋めるグループで、第33図 263～265の3点がこれに属する。2点は口縁部の破片、他の1点は頸部の破片

である。

同図 263は山形口縁の破片で、先述のように頸部から大きく外反する器形が想定される。施文には叉状工具を使用している。文様は口唇部および口頸部に認められる。口唇部の文様は短枕線文で山形頂部の両側に見られるが、破損が著しいため口唇全体に施文したかどうかは不明である。

口頸部の文様は横位枕線と斜枕線との組み合わせになっている。上段の文様(第1文様帯)は口縁にそう短枕線である。上段の文様は普通二組であるが、本標品では一組となっている。中段の文様は斜枕線と横位枕線との組み合わせで本標品では2段の斜枕線の間に一組の横位枕線を施している。枕線の長さは2cmを単位としているようであるから、熱田原の基準(註8)でいけば長枕線の部類に入る。斜枕線を何段繰返したかは不明である。しかし頸部のカーフの状況からすると、文様帯下端あたりで破損しているようであるから、斜枕線は2段施されていたとみて差支えないであろう。おそらく文様帯下端は短枕線で締めくくっていたものと思われる。比較的文様帯の広い資料で、古式の部類に属するものかもしれない。枕線は比較的深く刻まれているが、器面の摩耗した部分では浅くなっている。擦痕は見受けられない。ピットQ-7第3層の出土である。

同図 264も口縁の破片で山形口縁の左半部の資料かと考えられる。この破片から考えられる山形はチェウロン状のものである。文様は口唇部と口頸部に認められ、叉状工具により施文している。口唇部の文様は短枕線で比較的密である。口頸部の文様は、まず口縁にそって1組みの短枕線文を施し、その下方(中段)に綾杉文を施文している。綾杉文は2cm前後の平行線を組み合わせたものよう



第33図 Q・R-7区出土の土器

て、1 cm間隔で施されていたかと思う。沈線は比較的深く文様は明瞭である。頸部のカーブの状況から文様帯下半部を欠く破片とみられ、綾杉文は1組で終わっている可能性が高い。下段（第3文様帯）の文様は普通上段のものと一致することから、本標品においても下段は1組の横位短沈線を施したものと推察される。ピットQ-7第3層の出土である。

同図265は頸部の破片で、口唇部を欠く。器面は両面ともかなり摩耗していて、器面調整の方法など明らかにし得ないが、裏面の一部にはナデ手法を採用した部分も見受けられる。頸部に施された文様は複雑で、斜め、横方向の沈線を組み合わせているが、綾杉文の乱れたものと解することも可能であろう。施文には単篋を使用しているようである。ピットR-7第3層の出土。

第3種

器形は伊波式に属するが、文様が全くみられないもので、同図267に示すものである。この資料は山形頂部の左半部の資料で、この破片からすると直口状の器形が想定される。山形突起は比較的大型のチェウロン形に属していたかと思われる。口径約10cm。ピットR-7第3層より出土した。

種不明

同図266は口径推算20cmの深鉢形の口縁破片で、縦位と横位の点刻文の一部が認められる。口唇上は無文である。伊波式に属する資料だが、文様構成上どの種に細分すべきかは不明。器面は両面ともナデ調整を行っている。胎土は粗く、多量の石英を混入する。器色は暗褐色、ピットR-7第3層の出土

以上にあけた資料は伊波式に属するもので器厚は7～8mmを普通とするが、中には5～

6mmの薄いものもある。しかし、本ピットでは1cm以上の厚さを有するものはなかった。胎土は粗く、多量の石英や少量のチャートを混入する。焼成は特に良いというものはなく、一般に脆弱である。器色は暗褐色のものが多く、稀に赤褐色のものや茶褐色のものが見受けられる。以上の特徴は類例遺跡出土の伊波式土器と一致する。

Ⅱ 荻堂式土器

本ピット出土の荻堂式土器は第33図268～第34図284に示す17点であるが、すべて小破片で、復元して全形を示しうるようなものはなかった。本項にまとめた資料は口縁が6点、他は頸胴部の破片である。荻堂式土器は前回の報告（註2）では5種に細分されており、本項でもそれに従って記述することにする。

第1種

この項にまとめられる土器は横位の沈線文や連点文などと鋸歯文を組合わせるもので、鋸歯文の施文部位により下記の3種に細分される（註2）。

(イ)文様帯の中間にだけ鋸歯文を施すもの
(ロ)文様帯の中央部および最下段に鋸歯文を施すもの

(ハ)文様帯の最下段にのみ鋸歯文を施すもの
本ピットでは第1種に属するものが7点検出されており、上記の分類に従えば(ロ)に属するものが1点確認されたが、他は小破片のため細分上の位置は不明である。

(ロ)に属するものは同図268に示す頸胴部片の1点で、横位の点刻文の上下に鋸歯文の一部を認めることかてきる。文様は叉状工具によって描かれているので、点も線もペアになっている。鋸歯文は部分的に曲線化したところも見受けられる。両面ともかなり摩耗して

いて器面調整の方法など明らかにし得ないが、部分的にナデ調整を行った箇所も見受けられる。胎土は粗く、器色は表裏共に黄褐色を呈し、石英やチャートなどを含む。焼成は悪く脆弱である。器厚は約6mm。ピットQ-7第3層の出土。

第1種の不明

鋸歯文を施文するが破片が小さいため前記(イ)~(ハ)のいずれに分類すべきか不明のもので、本ピットでは第33図269~274に示す6点のほか、小破片のため図示しなかったものが3点ある。したがって第1種の不明品は9点ということになる。次にこのような不明品について簡単に説明する。

同図269に示すものはピットQ-7第2層より出土した。中段に叉状工具による鋸歯文を施し、その直下に横位の連点文が認められる。鋸歯文は連点文の次に描かれている。鋸歯文の上方には点が認められるが、連点文か点刻文かは不明。器面はますナデ調整を行い、その次に施文している。器色は暗褐色を呈し、焼成は良好。器厚は約6mmで、テンパーは石英とチャートの碎片を用い、量的には前者がはるかに多い。

同図270はQ-7第3層より出土した。文様は幅広の単篋により中段に鋸歯文を施し、上段と下段には同種工具によるとみられる沈線文が横位に施されている。沈線も鋸歯文も浅く描かれ、文様は不鮮明。器面はナデた形跡がうかがえるが、両面とも摩耗が著しい。焼成は悪い。胎土には多量の石英を混入、チャートの破片もわずかながら見受けられる。器厚は約7mm。器色は表面が黒褐色、裏面は赤褐色を呈している。

同図271はR-7第3層より出土した。文様は横位に2条1組みの鋸歯文を施し、その下に同しく2条1組みの沈線文を施している。

横線下方の斜沈線も鋸歯文の一部かもしれない。胎土は粗く、焼成は不良で多量の石英を混入する。器面は両面とも著しく摩耗している。器色は表面は暗茶褐色で、裏面は茶褐色である。器厚は約6mm。

同図272はR-7第3層の出土。文様は叉状工具による2条1組の横位沈線文が2組(上端は沈線の部分で欠損)認められ、その下方に1本の斜沈線が見受けられるが、これも叉状工具によって描かれており、沈線の部分で破損している。下方の斜沈線は鋸歯文の1部かとみられる。器色は表裏面共に赤褐色を呈し、器厚は約5mmである。焼成は悪く脆弱。器面は両面とも著しく摩耗し、多量の石英を混入する。

同図273はR-7第3層よりの出土で、文様は叉状工具による横位沈線文と鋸歯文を組み合わせたもので、施文は浅いが、文様は鮮明である。表面はナデ調整を行っている。器色は暗褐色を呈し、焼成は不良。胎土には石英の微砂粒を混入している。器厚は約4mmで薄手である。

同図274はR-7第3層より出土した。文様は鋸歯文だけが残っており、叉状工具によって施文されている。施文は浅い。焼成は悪く脆弱で、器面は摩耗が著しい。器色は赤褐色。胎土は粗く、多量の石英を混入する。器厚は約3mmで、薄手である。

第二種

横走する文様の最下段に斜沈線または刺突文を斜行させるもので、本ピットでは3点の発見があり、275~277に示した。

第33図275はQ-7第3層より出土。胴部の破片で本ピット出土の荻堂式の中では最大の破片である。文様は2条1組の短沈線を横位に施文し、その下方に同種工具による斜沈

線文を施している。横位文様は2組認められる。文様は力強く描かれ、鮮明である。器面は表裏ともに擦痕かみられる。器厚は約6mm。焼成はややよい。器色は表裏ともに赤褐色で、胎土には石英やチャートの碎片が認められる。混入量は前者がはるかに多い。

同図276はQ-7第3層より出土した口縁部破片である。口径は推算8.4cm、頸部がしまり胴上部がわずかにはる、深鉢型の口縁破片である。文様は幅広の単篋により爪形状の刺突文を3列水平方向に施し、その直下に同じく単篋工具による斜沈線を施している。胎土は粗く、焼成は不良で脆弱。器面は両面とも摩耗している。テンパーとして石英やチャートの碎片が見受けられ、混入量は前者が多い。表裏面ともに茶褐色を呈する。器厚は約5mmである。

同図277はQ-7第3層より出土した胴部の破片である。文様は点刻文により構成され、上方のものは横位に、下方は斜位に施文している。文様は叉状工具によって施文されたものと思われる。表面ではナデ調整が観察されるが、裏面は摩耗して不明。器色は表面が茶褐色、裏面は赤褐色を呈する。器厚は約5mmで薄く、多量の石英を含む。胎土は粗い。焼成は普通。

その他の荻堂式土器

荻堂式に属するが、小破片のため文様構成上の位置付けが不明なものをここをまとめた。

第34図278～284の7点である。278・279・281の3点は口縁部の破片で、278は山形頂部を残すが、荻堂式特有の瘤状の肥厚はみられない。頸部でしまり、山形突起部でわずかに外反する器形に属し、口頸部には連点文による横位縦位の文様が認められる。口唇部は無文である。器色は茶褐色、器面調整の方法

は不明。山形突起部における上面観はわずかにコーナーを形成する。口径は不明。第2層の出土。

同図279は口径約11cmの深鉢形の口縁破片で、焼成はよい。口縁部では叉状工具による横位の連点文が2組認められる。施文は深く文様は鮮明である。口唇部は無文。裏面はナデ調整を行っているが、表面では斜め方向の擦痕が見受けられる。第3層の出土。

同図280はQ-7第3層より出土した。文様は連点文とその下に斜沈線文の一部が認められる。斜沈線は鋸歯文の一部なのか、あるいは斜沈線文に終始したかは不明。連点文も斜沈線も叉状工具によって施文されたものと思われる。器面は著しく摩耗し、したかって文様は不鮮明。胎土は粗く、多量の石英を混入する。焼成は不良で脆弱。器色は赤褐色、器厚は約5mmである。

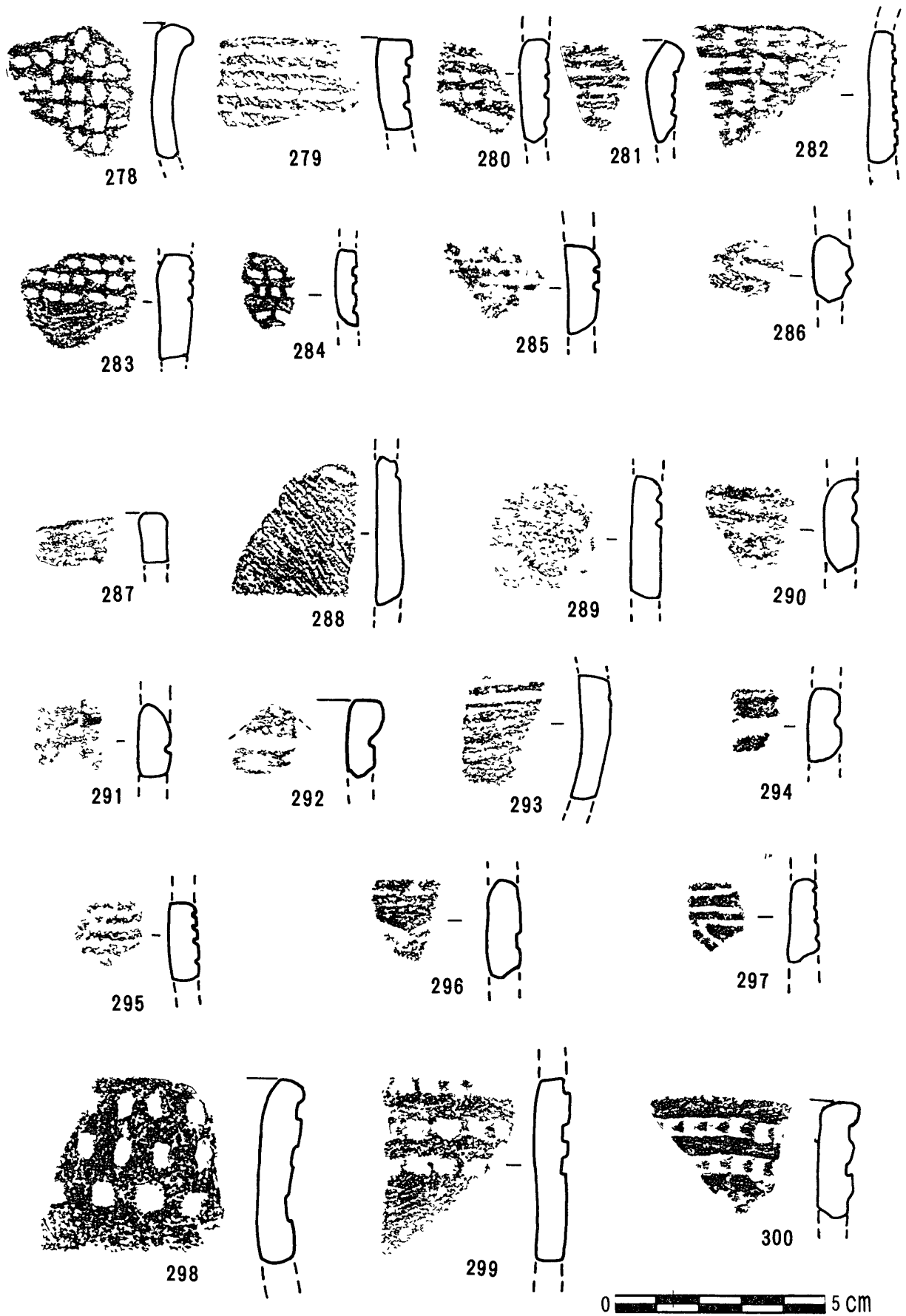
同図282は半裁竹管工具による押し引き文で、文様を横位に密に施す点で大山式と異っている。施文は浅い。283は叉状工具による連点文であるが、器面摩耗のため不鮮明。

284は連点文を深く刻んでいる。以上7点は細分上の位置付けが不明なものである。

伊波式か荻堂式か不明の資料

同図285～297に示す13点は文様の一部を残す小破片で、器色、胎土、焼成、胎土混入物および文様要素などからみて伊波式か荻堂式のいずれかに属するものとみられるか、その決定が困難なものである。

285・286の2点は2cm前後の横位沈線、287～291の5点は点刻文とみられる文様を施文していることから、以上の7点は伊波式の可能性が強い。292は山形口縁の破片で、横位沈線の一部が認められる。この沈線が長沈線であれば荻堂式に属するであろう。293



第34図 Q・R-7区出土の土器

は枕線を水平方向に施し、294も幅は若干広いか枕線文かと思われる文様を施し、荻堂式の可能性の強いものである。295は連点手法による文様を施文しているか、文様構図が伊波式や荻堂式と異っている。あるいは奄美の土器かもしれない。296と297には鋸歯文が認められる。しかし、文様は繊細で熱田原出土のもの（註8）に類似したところもあり、そのため本文では一先ず荻堂式から外した。

④ 大山式（第Ⅳ類）土器

本地点出土の大山式土器は第34図298～300、第35図301、302、第36図303～第37図326に示す25点で、完形の出土はなく、すべて破片であった。破片はせんぶで25点検出されたが、そのうち2点は推定復元が可能である。

器 形

推定復元をこころみた第35図301、302（図版33の1・2）の2点および他の口縁破片で見ると、本ピットの資料には壺形は見当らず、ほとんどが深鉢型と考えられるものである。口縁は平口縁が一般的だが、第36図309の1点は山形口縁に属する可能性が強い。

口径と胴径の大きさについてみると推定復元を試みた2点はいずれも胴径より口径がわずかに大きい。しかし、他の口縁破片には逆に胴径が口径より大きいもの（第34図298、第36図304）が2点含まれ、二つのタイプのあることは確かである。ただ、後者についていえるのは、破片が小さいために、最大径の位置が胴の上部にあるのか、あるいは下部にあるのか言及できないのは残念である。

口縁の形状についてみると、口縁が外反するものは4点、直口状のものは9点あり、後者が若干多い。

底部は完形品が得られなかったので明言できないが、類例遺跡の資料を参考にすると立ち上りの部分が外彎状のカーブを示す平底であろう。

サ イ ズ

サイズは推定復元をこころみた2点とほかの2点だけ口径を知ることができた。

第35図301（図版33の1）は口径推算21cm、高さ約22cm、同図302（図版33の2）は口径推算20cm、高さ約22cm、いずれも口径を基準にすると大型の部類に属する。

第36図306は口径約22cm、同図307は推算132cmでそれぞれ大型、中型に属している。

器 面 調 整

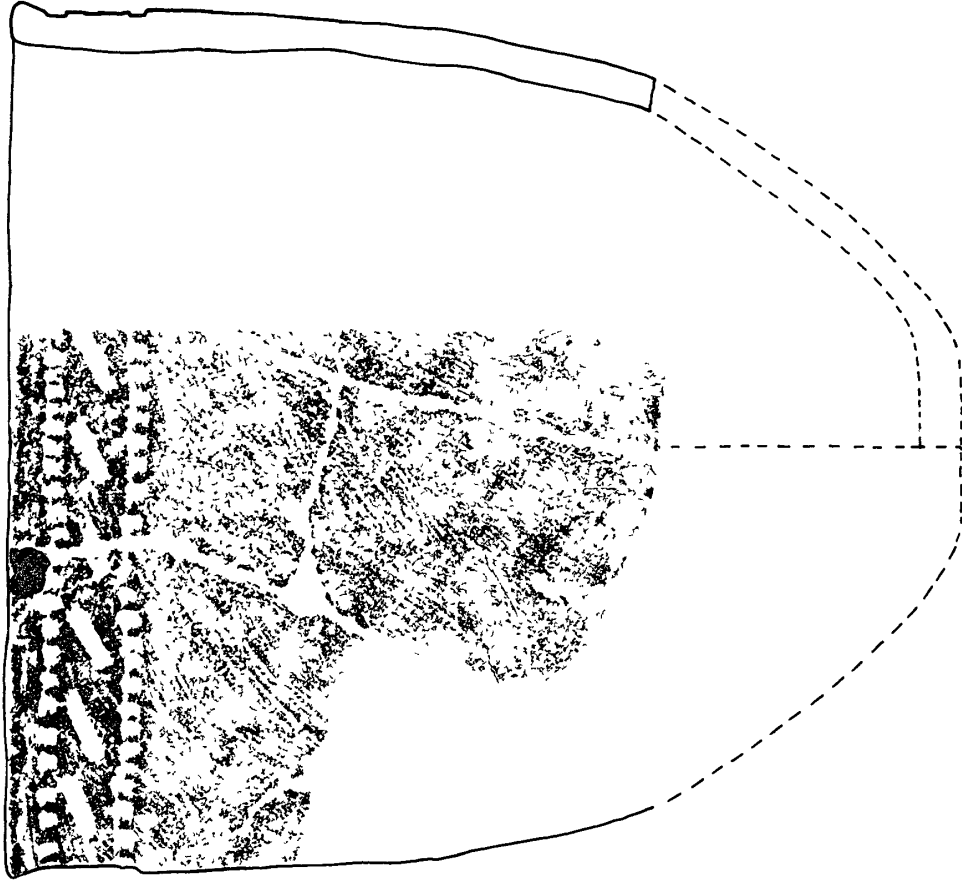
口縁部および有文破片32点について調べた結果、表裏ともに擦痕のみで調整された資料はなく、最も多かったのはナデ調整を行ったもの（表面＝22点、裏面＝18点）で、擦痕とナデの両方観察されるもの（表面＝4点、裏面＝8点）がこれに次ぎ、器面摩耗のため調整方法を知り得なかったものが、表面で5点、裏面で6点あった。

推定復元を試みた2点についてみると表面では文様帯の部分はナデ調整を行い、文様帯以下で擦痕が観察される。裏面でも口縁内面以下の部分に施されている。

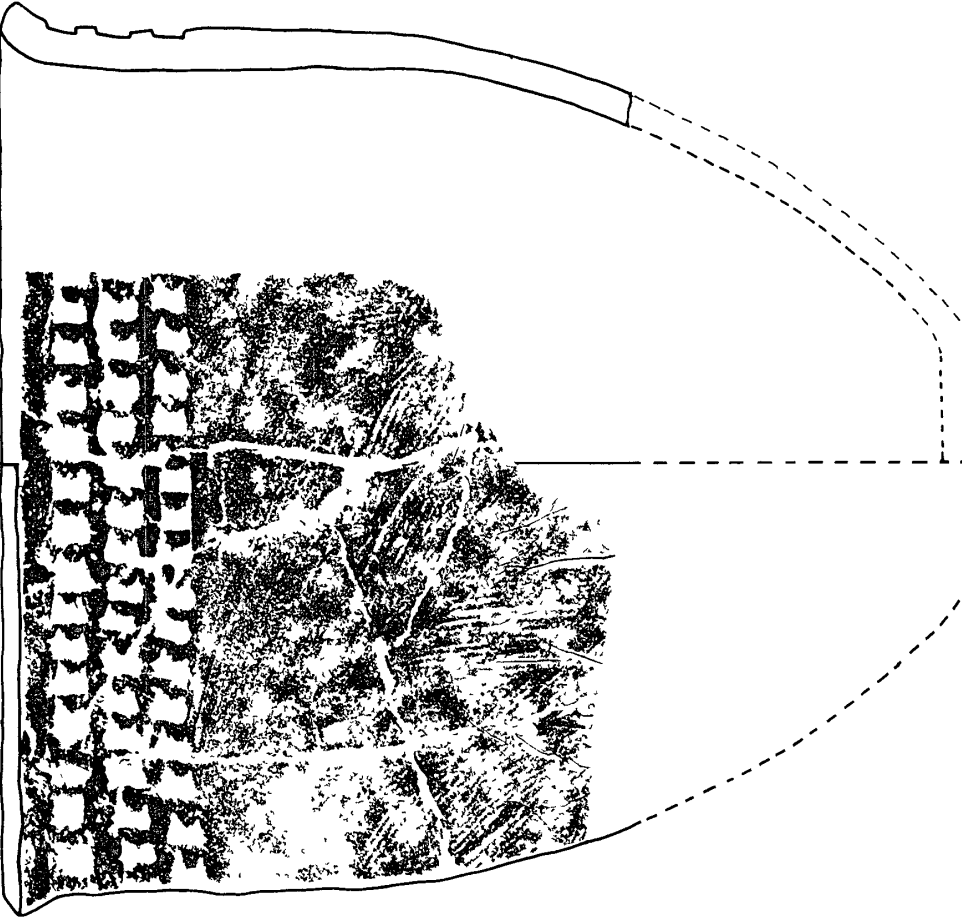
以上のことから、大山式土器の一般的器面調整法は、はじめに擦痕を施し、次に文様帯の部分をナデ削し、その後に施文したもののよう、前記破片にナデ調整が多いというのは、文様帯の部分の破片だからであろう。

文 様

大山式の文様は口頸部のみに施文される。施文具には幅広の単篋や半截竹管などがあり、主に前者が使用されている。施文の方向は1



302



301

0 10 CM

第 35 図 Q・R 区出土の土器

例（第35図 302）を除き、すべて左から右の方向である。同図 302の上下2段の横捺文は右から左の方向で描かれている。

文様には横捺文、押し引き文、斜行枕線文、横位枕線文、凸帯文などがある。横捺文や押し引き文を横位に2条ないし3条めぐらすのが一般的であるか、ほかに横捺文や押し引き文をベースに斜枕線、横位枕線、凸帯文などと組合わせた文様も何種類かみられた。

文様は下記の5種に細分される。

- 第1種 横捺刻文か押し引き文に終始するもの。
- 第2種 第1種に横位枕線文を加えたもの。
- 第3種 第1種に斜行文を加えたもの。
- 第4種 第1種に羽状文又は綾杉文を加えたもの。
- 第5種 第1種に凸帯文を加えたもの。

第25表 大山式土器に見られる文様とその出土状況

層位	第1種	第2種	第3種	第4種	第5種	不明	計
I	0					1	1
II	0 - 10	0			1	4	5
III	0 - 10		1	2	1	2	6
	10 - 20	1		1		5	7
	20 - 30	1		1		2	4
	30 - 40	0				2	2
計	2	1	2	2	2	16	25

第1種

横捺刻文かあるいは押し引き文に終始すると考えられるもののうち、確実なものは第34図 298と第35図 301の2点だけである。横捺刻文を施文するものは前記第34図 298と第35図 301の2点で、第34図 299、第36図 317、同図 318、同図 321の胴部破片は横捺刻文の下方が無文となっていることから、第1種の可能性が強いと考えられるものである。第36図 317、同図 318の2点は爪形に近い文様となっている。横捺刻文はいずれも深く刻まれている。横位の押し引きだけに終始するという資料は得られていない。しかし第36図 303の口縁破片は三番目の押し引き文の下方の空白部が若干広く、第37図 323の胴部破片も下方が無文となっていることから、この2点はあ

るいは第1種に属する資料かもしれない。

第2種

本地点の第2種は第36図 305に示す1点だけである。口縁にそって2条の押し引き文、その下方に細枕線を1本横走させ、その下に横捺刻文を施している。押し引き文は力強く描かれているため凹線となり、その中間の無文部は微隆線のような印象を与える。横捺刻文は浅く描かれ、以下は破損のため不明である。

第3種

第3種は第35図 302、第36図 308に示す2点である。

第35図 302は推定復元を試みたもので、口

頸部に2条の押し引き文を右から左の方向で描き、両者の間を左傾の短沈線で飾っている。押し引き文も短沈線もともに浅い。この標品は押し引き文と沈線を組み合わせた例である。第36図308は頸部の破片で文様はすべて押し引き文で構成されている。現標品は小破片であるが、横位と右傾の押し引き文を認めることができる。この斜行文が前記第35図302の標品と同じように上下とも押し引き文で囲まれていたかどうかは不明。本標品の押し引き文は比較的力強く描かれている。

第4種

第4種は第36図309、310の2点である。

309は口縁の破片で、山形口縁の左半部の資料とみられるものである。口縁はわずかに外反している。文様は口縁にそって1条の押し引き文を施し、下方にハの字状の小型の羽状文を施文している。文様はいずれも力強く描かれている。羽状文の下方に施文した形跡があるが、文様の種類は不明。石英のほか磁鉄鉱を含んでいる。

310も口縁の破片で、口縁上端が折り曲げられたように著しく外反している。文様は口縁直下に小型の不規則な羽状文を配し、その下に押し引き状の文様を深く刻んでいる。さらに下方にも施文した形跡があるが、文様の種類は不明。

第5種

第5種は第36図306、307に示す2点である。306は口径22cm、幅広の単篋により、まつ口縁にそって横捺刻文を1条施し、次に断面方形の凸帯を1本めぐらし、凸帯上に横捺刻文を配し、その下方にも横捺刻文が2段認められる。刻文はいずれも力強く描かれている。下端破損のため以下の文様については知

り得ない。

307は口縁部のやや外反する資料で、口径は推算12cm。頸胴部の境に断面方形の凸帯を1条めぐらす。凸帯上方の口頸部には3条の押し引き文を描き、凸帯上および下方にも同種文様を施文している。押し引き文はいずれも浅い。凸帯に接する上下の押し引き文は凸帯に密着して描かれており、文様効果とともに凸帯を固定させるための機能も有していたのではないかと考えられる。

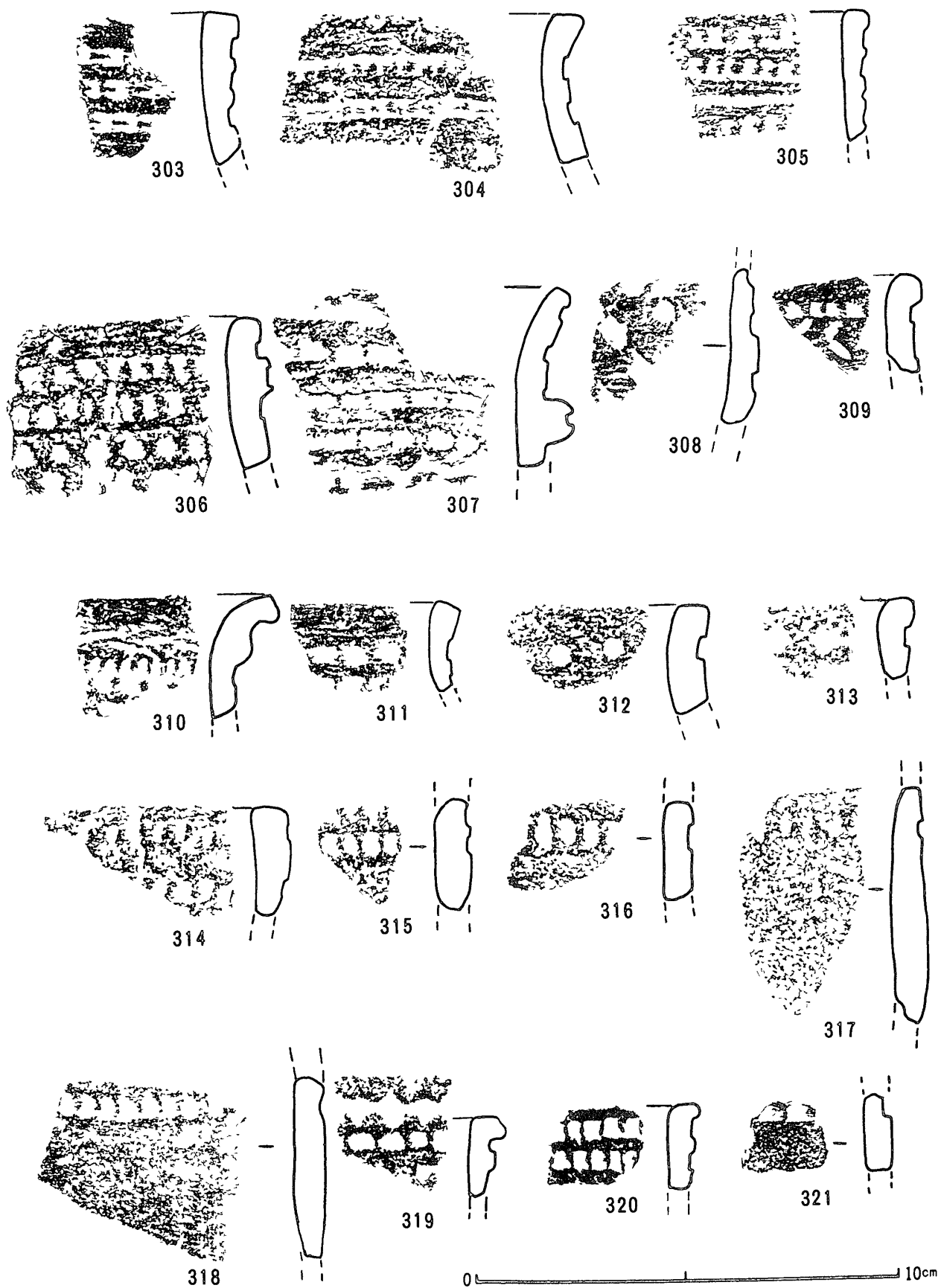
種不明

第36図311～第37図326に示すものは横捺刻文または押し引き文が1条ないし2条残存する破片である。大山式における横捺刻文あるいは押し引き文は普通2～3条である。しかし、本ピット採集のものは小破片が多く何条施されていたか不明のものが多い。横捺刻文や押し引き文は一般に深く刻まれ、文様は鮮明であるが、少数の資料には浅めの文様が施されている。施文具は先端の幅5mm前後の単篋工具が多く用いられている。

上記に示すもののうち横捺刻文によるものは同図311～318の8点で、押し引き文を施文するものは残りの7点であった。

テンパー

本地点出土の大山式土器のテンパーは石英が主体をなし、86パーセントである。次いで石英に磁鉄鉱を混じえたものが14パーセントとなっている。石灰岩を含むのは見当らなかった。層序との関係を第27表に示したが層位的な変化をとらえることはできなかった。



第 36 図 Q · R - 7 区出土の土器

第26表 大山式土器の種類とそれに含まれるテンパー

混入物	種類	第1種	第2種	第3種	第4種	第5種	不明	計
石	英	1	1	1	1	2	15	21
石英	+磁鉄鉱	1		1	1		1	4
計		2	1	2	2	2	16	25

第27表 テンパーの層位的出土状況

混入物	層序	Ⅲ					計	
		I	Ⅱ		Ⅲ			
			0 - 10	0 - 10	10 - 20	20 - 30	30 - 40	
石	英	0	4	5	7	3	2	21
石英	+磁鉄鉱	1	1	1	0	1	0	4
計		1	5	6	7	4	2	25

焼成

大山式として確実なもの29点についてみると、焼成が良く堅緻なものは10点、他は普通か不良のものに属する。つまり、普通以下の脆弱なものが多いということである。

器色

器色は赤褐色のものと暗褐色のものがみられるが、量的には後者が多い。

荻堂式か大山式か不明のもの

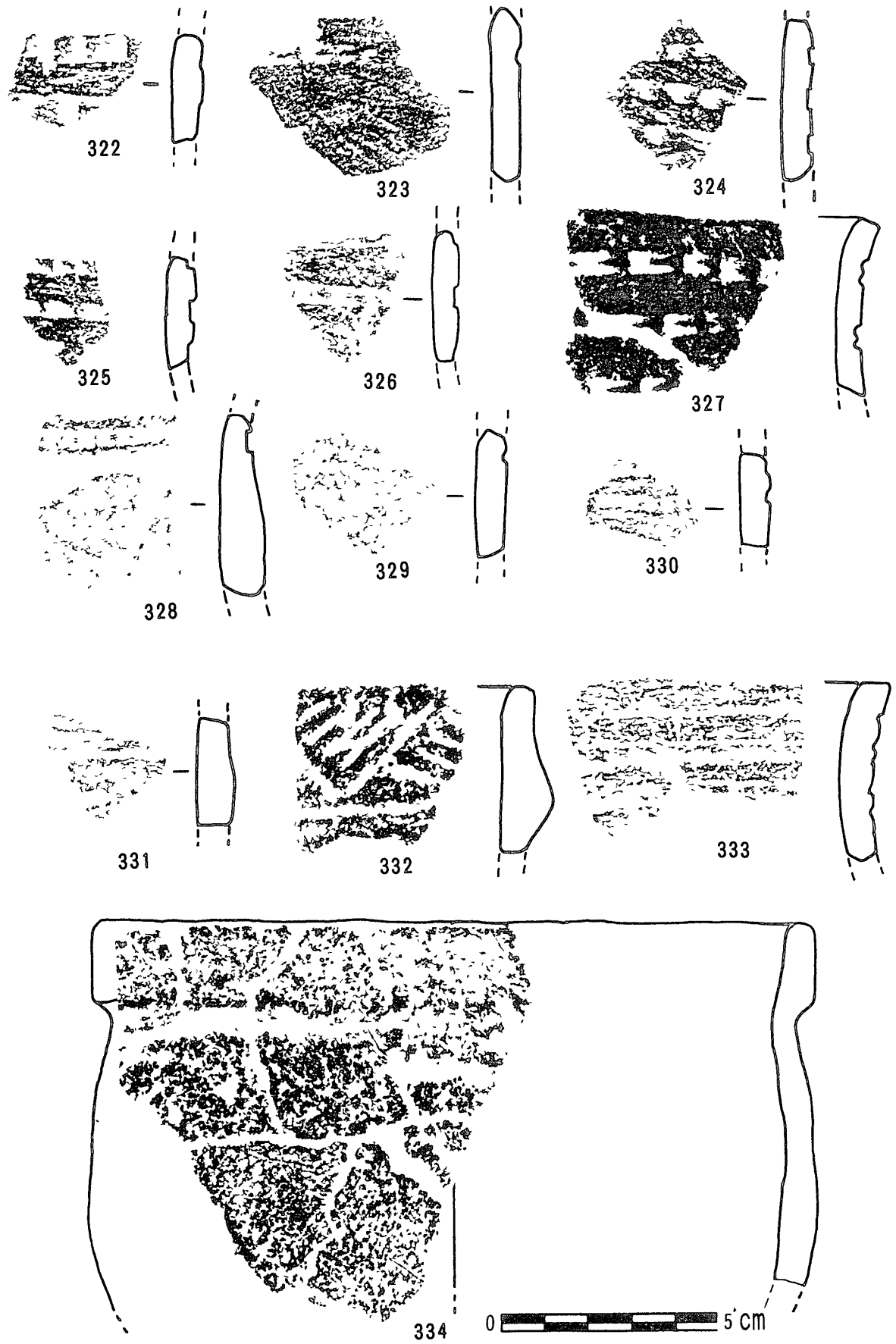
荻堂式か大山式かは主として器形および文様の特徴によって決定される。横捺刻文あるいは押し引き文のみを施文する破片は器形を見た上でないと荻堂式か大山式かを決定するのは困難である。文様だけについていえるは大山式の横捺刻文は深く刻まれる傾向があり、他方、荻堂式の押し引き文は浅く施文されることが多いように思われる。以上の特徴から荻堂式か大山式かある程度分類は可能であるが、文様だけに頼る場合、矢張りそれぞれの特徴をもっと細かにおさえておく必要がある

う。

分類を保留した土器のうち第37図 327の標品は半截竹管による横位の押し引きが3条認められる。押し引き文は等間隔に施されており、しかも施文は浅く荻堂式の特徴をそなえている。第36図 303も施文の浅い押し引きであり、第37図 330とともに荻堂式の可能性を考えてよいと思われる。第37図 328はいすれにすべきか不明。その他の小破片は、施文手法からみて大体は大山式に属するかと思われる。

肥厚口縁

第38図 348に示す1点は肥厚口縁の小破片で、平坦な口唇はわずかに外傾している。器色は赤味の強い褐色で胎土は粗く、多量の石英のほか磁鉄鉱も目立つ。焼成は不良で脆弱である。以上の特徴から大山期の所産とみられるが、口縁の肥厚は室川式に似たところもあり、今後室川式との関係も検討してみる必要がある。第3層の出土である。



第37図 Q・R-7区出土の土器

無文土器

10点の口縁破片が検出されたが無文土器として確実なものは第38図 349、350、351に示す3点である。他は小破片であり、有文口縁の無文部の可能性もありそれについては記述を省略する。

同図 349は赤褐色の土器で、口径は推算12cm、口唇は平坦で、直口型の口縁が想定される。表面では斜行の擦痕が観察され、内面はナデ調整を行っている。胎土は粗く、多量の石英を含み、チャートの碎片も散見される。焼成はきわめてよく堅緻である。第3層の出土。

同図 350は暗褐色の土器で石英を多量含むが、磁鉄鉱も比較的多い。口唇は平坦で、口縁部の屈曲はみとめられず、直口状を呈しているが、これは小破片のためであろう。器面はナデられ骨らかである。焼成は比較的よい。

同図 351は外反のやや強い口縁破片で、口唇は平坦である。器面はナデ調整を行っている。器厚は8mmあり、伊波、荻堂期のものに近い。器色は茶褐色。胎土は粗く、多量の石英を含む。焼成は普通。第3層の出土である。

以上3点の無文口縁破片は深鉢型のものと考えられ、編年上の明確な位置付けは困難だが、上記の諸特徴から伊波～大山期の所産と考えられる。

伊波～大山期の底部資料

この期の所産とみられる底部資料は14点ですべて平底である。そのうち底径を知りうるもの9点（第39図 356～364）を図示した。底面からの立ち上りは外彎状のカーブを示すものがほとんどで、361の1点は直線的に開く器形に属するかとみられる。底径の最大は358の8cmで最小は364の3cmである。

器色は暗褐色のものが多く、まれに赤褐色

のものもみられる。内面はすべて摩耗してザラザラしており、器面調整の方法を知り得ない。胎土は粗く、一般に石英を含むがチャートの碎片も散見される。また、364は石英のほか磁鉄鉱を少量混入している。出土層位は364が第2層で、他はすべて第3層の出土である。

d 室川式土器

室川式土器は30点得られた。すべて破片で復元可能なものはない。室川式土器は主として胎土混入物によりA・Bの2種に細分され、その有する諸特徴からAはBに先行するものと考えられている。本ピット出土の室川式土器はすべてAに属し、Bに該当するものは見当らなかった。30点の破片についてみると口縁部と底部がそれぞれ1点、他は胴部の破片である。

口縁破片は第37図 333に示す1点で、口縁の外反した深鉢器形に属し、口径は推算15cmである。黄味の強い赤褐色の土器で、焼成は悪く器面は摩耗し、特に内面はポーラスに近い器肌を呈し、一見室川上層式と見紛うような土器である。胎土には石灰質の微細粒を多量混入する。器厚は7mm前後。外面には半截竹管による押し引き文が3条認められる。いずれも施文は浅く、文様は不鮮明。表面では一部ナデの観察される部分もある。第3層の出土。

底部は著しく破損し、形状をおさえることができなかつたので実測図を省略した。この資料はきわめて脆く、土中から取り出す時に十分注意したにもかかわらず、器面が土にくっついて分離してしまい、かつ数片に砕けてしまった。あまり脆く接合も不可能である。以上のような出土状態から、この底部の形態を明示し得ないが底径の小さい平底に属し、石灰質の微砂粒を混入することおよび黄褐色

の器色を有することなどから室川式Aの底部と考えられる。第3層の出土である。

室川期のカヤウチハンタ式土器

第37図332に示す1点で、口径約15cm、深鉢形の口縁破片である。器色は黄褐色、焼成は良く堅牢である。胎土には石灰質の砂粒を混入する。室川期のカヤウチハンタ式土器は口唇を強調する傾向をみせるが、本標品にはそれがみられない。しかし、胎土混入物および器色は室川式と一致するから、この土器も室川期の所産と考えてよいと思われる。

肥厚部外面は文様帯となっている。文様は数本を単位とする斜枕線を方向を変えながら施文している。施文に際しては、まず器面のナテ調整を行い、その後に施文している。斜枕線はそれほどシャープではないが、文様ははっきりしている。第3層の出土。

e 室川上層式土器

室川上層式土器は76点の発見があった。この土器もすべて小破片で、復元可能のものはなかった。この土器は硬度や器色などを基準に2種に細分されている。暗褐色で硬質のものをA、軟質で泥胎のものをBとし、本ピットでは前者が12点、後者が64点検出された。

室川上層式Aの本ピットにおける出土状況は第24表の通りで、第3層での発見が多かった。暗褐色の器肌を有し、石灰質の砂粒を含むものもある。焼成はT P. 区のものに比べると若干悪いようである。その中に口縁破片と底部破片がそれぞれ1点含まれている。第38図345に示すもので平坦な口唇はやや内傾し、外面には縦長の刺突文を施文している。深鉢形の口縁破片かと思われる。器色は黒味がかかった褐色で大山期の器色に類似。胎土は泥胎に近く、石灰質砂粒や磁鉄鉱などがわず

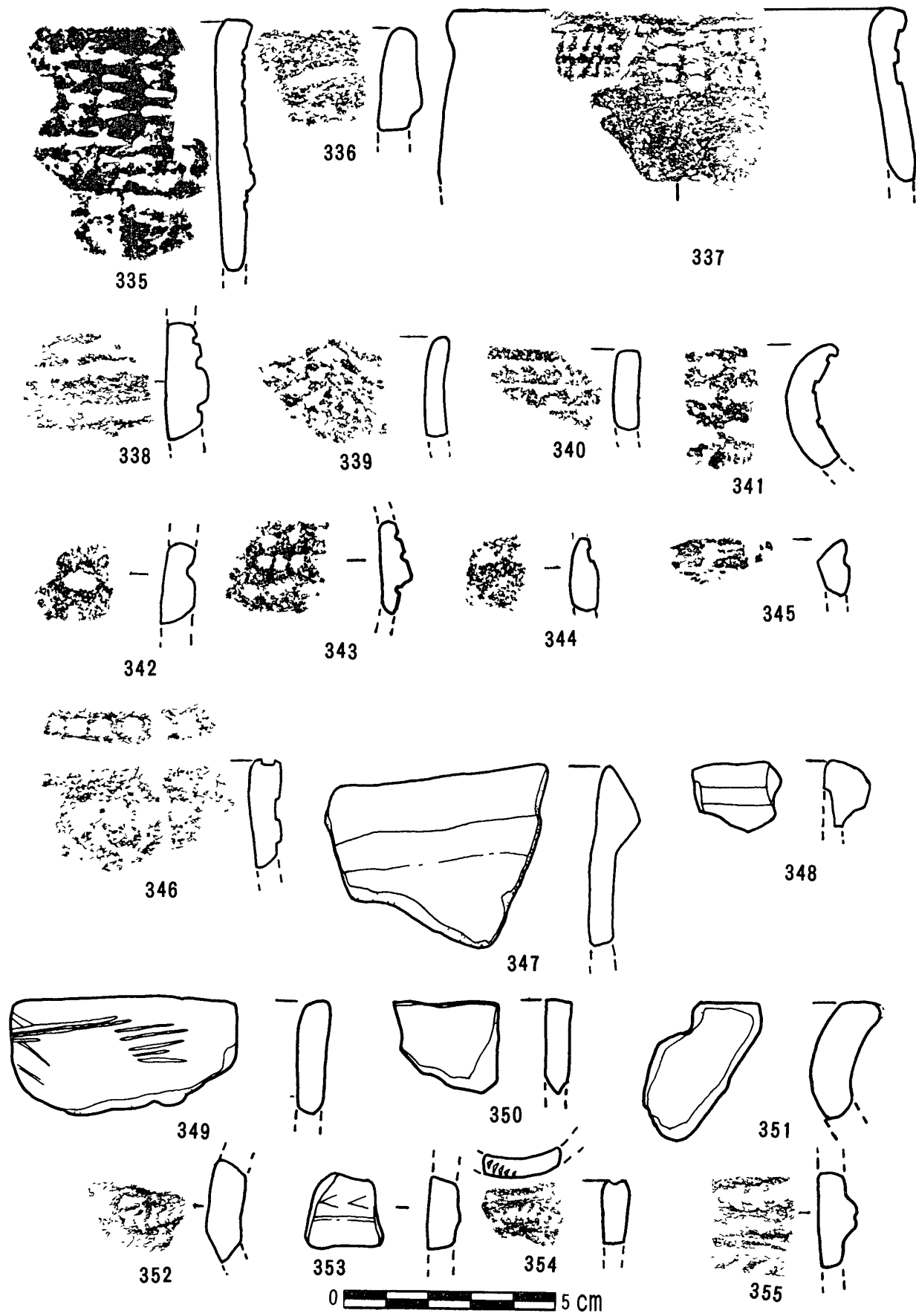
かに見受けられる。第2層の出土。

底部の1点は平底である。第39図365に示すもので、立ち上りの部分は伊波式や萩堂式のそれに比べると若干円味を帯び、焼成はよく堅緻である。第2層の出土。

室川上層式Bは比較的多かった。口縁部や有文の胴部破片が9点あり、第38図337～344、346に図示した。口縁破片でみると器種は深鉢型と壺形の2種を認めることができる。壺形は同図341の1点で口径は推算し得ないが、頸部のカーウの状況からかなり胴の張る器形が推測される。第3層の出土である。

他は深鉢形の口縁破片と考えられるものである。同図337は口径約11cmの小型の深鉢形で、頸部でしまり口縁部のわずかに外反する、胴のやや張る器形で胴径がこの土器の最大径を示す。この種の器形は大山式に由来するものと考えられる。第3層の出土。339は深鉢形に属する山形口縁の破片である。山形頂部でやや大きく外反する器形に属し、上面でみると山形頂部で少し角張っているから、口縁の上面観は方形に近い円形であったろうと思われる。器壁は薄い、焼成は良く、しっかりした土器である。第3層の出土。340も深鉢形の口縁の破片で、口径は推算53cm、小型の土器で、薄手であるか、焼成は良く堅緻である。第3層の出土。346も深鉢形の口縁破片で、口径は推算129cm。破片が小さく器形を明示し得ないが、直口に近いものかと考えられる。焼成は悪く脆弱。第3層の出土。

文様は図示した9点に認められる。この土器はきわめて脆弱で焼成時の器面を保持するものは少ないが、後者のわずかな資料からすると、まず器面のナテ調整を行い、その後に施文したようである。施文には単篋を使用し、叉状工具を使用するものは見当たらない。単篋は5mm前後の幅をもつものと、2～3mmの小



第38図 Q・R - 7区出土の土器

型の2種が認められ、後者を多く使用している。前者は同図337、346の2点だけである。

文様は施文手法の確かな6点についてみると押し引き文である。他の3点は器面がかなり摩耗しているか、押し引き文を施文したとみられる。押し引き文は同図338のように比較的間隔をとるものと同図337のように小刻みに連続的に施文したものがあるか、前者が若干多い。また施文に際しては深く刻むものと、浅く押し引きしたものがあり、後者がわずかに多い。押し引きは横位か一般的であるが、同図337のように縦位の文様を組み合わせたものもある。この縦位文は山形突起下ではなく、また、下方を横位文様で締めくくっておらず、その点T・P・区の復元土器（第27図207）の文様に通するものがある。この種の文様は新出のものと考えられ留意の必要があろう。

本ピット出土のBグループの土器は焼成不良で脆弱なものが多く、焼成良好なものは同図337、340の2点くらいのものである。器色は黄褐色、器面はポーラスになっており、石灰質の砂粒を含有するものも若干ある。器厚の薄いものもあるが、6～8mmが一般的のようである。出土層は第3層で最も多かった。

室川上層期のカヤウチバンタ式土器

口縁破片が3点検出された。第37図334～第38図336に示す3点で、うち1点は口径の大きさを知りうるものである。

第37図334は比較的大きな口縁破片で、口径約17cm、中等の大きさである。頸部がしまり、胴がゆるやかに張る深鉢型で、焼成は悪く器面は摩耗し、したがって器面調整の方法などうかがえない。器色は黄褐色、石灰質の微砂粒を多量含有する。第2層の出土。

第38図335は扁平状の口縁破片で、口径を

推算し得ない。肥厚部は長大化し、その幅は48cmある。しかし肥厚部は発達せず、扁平である。この土器は肥厚部が文様帯となっており、叉状工具を使用したとみられる文様が施文されているが、器面摩耗のため文様は不鮮明。肥厚部直下では単篋による押し引き様の文様が1条認められる。この土器は焼成悪く脆弱で、先述のように器面はかなり摩耗している。器色は黄褐色、石灰質の微砂粒を少量含む。第3層の出土。

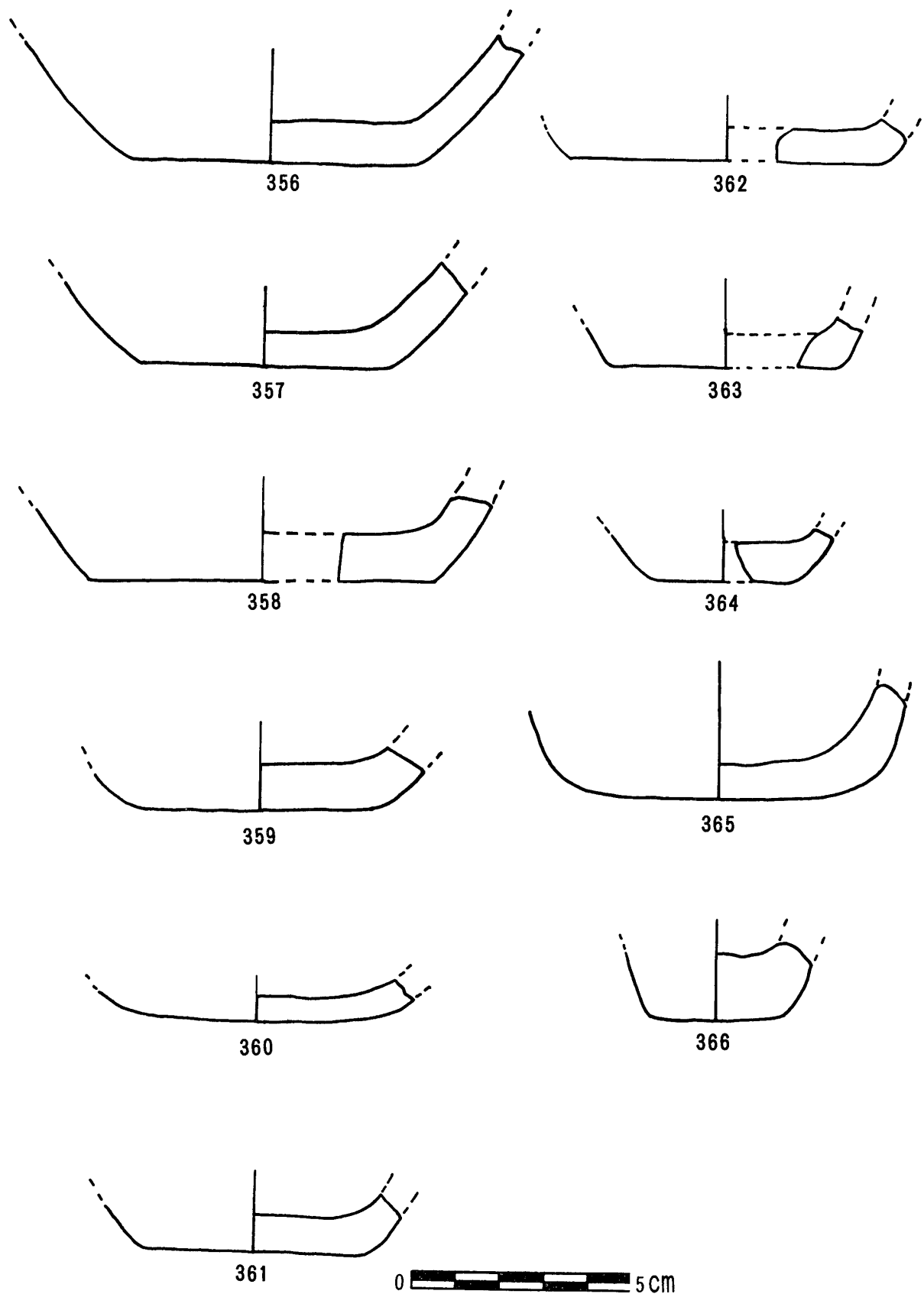
同図336も口縁の破片で、肥厚部の厚さは上方の口唇部で薄く、下端で最も厚い。肥厚部には斜沈線を施したと思われる、その一部を認めることができる。斜沈線はそれほどシャープではない。器色は暗褐色、焼成は悪く脆弱で、微量の石英粒が認められる。第3層の出土。

この3点は上記の特徴から室川上層式Bグループの時期に比定される。

f 宇佐兵式土器

宇佐兵式土器の出土量はきわめて少く、7点の発見があったが、すべて破片で復元可能なものはなかった。この7点についてみると口縁破片が1点で、他は胴部の破片である。層位的にみると宇佐兵式土器は第3層上位（0～10cmレベル）で止まり、それ以下では発見されていない。このことは室川上層式に後続する可能性を暗示しているように思われる。

口縁破片は第38図347に示す一点で、山形口縁になる可能性があり、口径は推算25cmである。焼成は良く堅緻で、器色は茶褐色、多量の石英のほか、磁鉄鉱を少量含む。器面はナテ調整を行っているか、部分的に宇佐兵式特有のサラサラの器肌もみられる。器形は口径が胴径より若干小さい深鉢型であろう。ピ



第39図 Q・R - 7 出土の底部(1)伊波~大山期 = 350 - 364, (2)室川上層式 = 365
(3)後期系 = 366

ットR-7第2層の出土。

g 奄美系の土器

奄美の土器としたものは第38図 352～355に示す4点で、いずれも小破片であり、復元して全形の窺えるものはない。

同図 354は口縁の破片で、口径約7cm、小型の土器である。三角形刺突文を弧状に口唇と口縁に施している。器色は赤褐色、胎土は粗く石英を少量含む。焼成は普通。表面はかなり摩耗しているが、裏面ではナデ調整を行った部分もみられる。薄手の土器である。第3層の出土。

同図 355は凸帯を有する口縁破片で、凸帯の断面形状は方形に近い。凸帯およびその上方に方向の異なる三角形刺突文を施し、凸帯下方では斜虎線文かと思われる文様の一部が見受けられる。文様はいずれも力強く描かれている。内面は赤褐色、外面は暗褐色。胎土は粗く、多量の石英を含む。焼成は悪い。文様の点を除くと他の特徴は伊波～大山期のものと一致し、仲縄産とも考えられる。第3層の出土。

同図 352は三角形刺突文を施す頸部破片で、器色は黄褐色、胎土は粗く少量の石英を含む。焼成は悪く器面は摩耗している。第3層の出土。

同図 353も三角形刺突文を施す口縁破片で口唇部を欠失する。焼成は悪く器面は摩耗し、したがって文様は不鮮明。器色、胎土、混入物、その他の特徴は355に類似。第3層の出土。

以上4点の資料について記述したが、同図 355、353の2点は文様の点を除けば他の特徴は伊波式～大山式のものと同じし、仲縄で製作した可能性が強い。同図 354、352の2点は移入品かもしれない。

C 小 結

本ピットでは上位3枚の層について発掘を実施し、焼土面が現われた段階で調査を中止した。時間的余裕があれば調査区を拡大し、焼土面の広がりを追求するはずであったが、今回はなし得なかった。

第1層はシルト質泥岩（島尻層）の崩壊土で、本来第三紀層であり、石灰岩の下位にくる層であるが、本地区で最上位にあるということは後世の攪乱を意味する。この層からも若干の人工遺物が検出された。第Ⅱ、Ⅲ層は未攪乱であった。

人工遺物は土器、石器、骨器の3種が得られたが、石器と骨器は少なく、土器が最も多かった。骨器は猪の尺骨を利用した錐が1点第3層から出土しただけである。石器は用途の分るのは石斧だけで他は研磨痕を有する小破片である。石斧は形状の把握できるものについてみると、平面における最大幅が刃部にあるものが多かった。このことは今後の石斧研究に留意すべき点かと考える。

土器は奄美タイプを除くと6型式検出された。型式の確実なものでは大山式が最も多かったが、伊波式や荻堂式も、両者の不明品を加えると大山式に匹敵するような出土量であった。いずれも第Ⅲ層で多かったが、周辺の発掘区を参考にすると第Ⅲ層は大山式か室川式の時期に比定されるようである。

V お わ り に

以上、3地区の調査成果についてその概要を記した。T-16・17区およびT.P.区は斜面下方の畑地内における遺物包含層の有無を確認するために設定し、Q・R-7区は造成工事から免かれた中央区東北端部の状況を知るためのテスト・ピットであった。Q・R-7区では、先述のように水平方向に広がる焼土層が確認され、拡張調査が痛感されたが、時間的余裕がなく、今回は焼土面で調査を中止した。

T-16・17区の下部には2枚の未攪乱混貝土層があり、両層から新形式の土器が発見され、これを室川式土器と呼ぶことにした(註6)。器種は深鉢型と壺型の2種が認められるが、後者は稀少であった。この土器の主要な特徴は概ね次の3点にまとめることができるかと思う。

まず、器形の上では幅広い口唇を形成し、口唇を誇張することである。この特徴は今のところ深鉢型だけにみられ、壺型では確認されていないが、このことは壺型の出土例が僅少なためかもしれない。深鉢型には胴長のものや球形に近いものが含まれている。しかし、復元例が少なく、現在のところ一般的な器形を提示し得ないが、底部についてみると伊波～大山期の平底に類似するもののほか、底径の小さい平底、そのような平底の底面を指頭で押し上げたようなもの、底部からの立ち上りの部分が若干内彎状のカーブを示すものなど変化が生じている。しかし、尖底は未だ出現していないようである。

口縁の形状についてみると、いろいろの形体が認められるものの、概ね3つのグループに分つことができるようである。(1)その一つは口縁を肥厚させることにより、幅広い口唇

を作り出すもの、(2)次は全く肥厚しない口縁を若干折り曲げることによって恰も肥厚しているような印象を与えるもので、いわゆる疑似肥厚と称されるもの、(3)肥厚しない口縁のうち(2)のタイプを除いたものの3種で、(1)と(2)に室川式土器の特徴が最もよく現われている。これらの口縁形態を細分すれば、第9図のような8つのサブ・タイプが得られるが、これはT-16・17区出土の標品に限ったものであり、今後、類例が増加すれば、口縁形態も増加するものと思われる。

特徴の第2点目は石灰質砂粒を混入することである。砂粒の内容は有孔虫、貝殻、サンゴなどで、砂粒には精粗の差があり、粗粒のものに貝殻を含む傾向が見られる。砂粒の細かいものは、後述のように古い時期のものに多いような印象を受ける。

第3点目は器色である。赤褐色に近い明るい褐色のものが一般的である。焼成は悪く脆弱で、吸水性の強い土器である。焼成時の器面を保持するものは少なく、器面は摩耗し、器肌に石灰質砂粒の露出が目立つ。

以上はT-16・17区出土の室川式土器の特徴であるが、その後、他の発掘区から石灰質砂粒を混入するものの、器色や焼成度の異なるものが発見され、両者を区別する必要に迫られた。両者はそれぞれ型式を異にする土器かもしれないが、これを独立の型式と認知するには資料が少な過ぎ、問題は今後に残されている。そこで、これを当面室川式に含め、その中で後者をA、前者をBとして取り扱うことにした。

Aは暗褐色の器色を有し、器面はナデられ、一見、伊波～大山期の土器を想起せしめ、古式の雰囲気漂わせている。また、混入物と

しては石灰質の微砂粒を含む傾向があり、その点でもBと異っている。今後、両者の特徴には十分留意せねはならないが、今回の発掘区についてみると、Tトレンチ（T-16・17区）ではBが圧倒的に多く、T.P.区ではAが優勢であった。

施文に際しては叉状工具と単篋工具が使用されているが、後者が一般的で、前者は1例に過ぎなかった。文様は押捺刻文や押し引き文が支配的で、ほかに斜沈線文なども見受けられるが、伊波～大山期の文様要素の範囲内にあり、構図の上でも今のところ特に、室川式特有の文様というものはみられないようである（ただ、第12図64のような斜行文は注意の必要があろう）。したがって、当面室川式概念は上記3点の特徴を中心にまとめることが可能かと考えている。他方、有文・無文の比率についてみると後者が多いように見受けられ、無文化の進行していることを指摘できるかと考えるが、これについても文様構図とともに今後の研究課題としたい。

T.P.区では室川上層式も比較的多量得られた。室川上層式土器とは本貝塚の上層を代表する土器の一つで、アバタ土器の異名をもつ。この土器は天久遺跡（註10）で初めて注意に上ったが、長年、この土器の性格や年代は不明であった。本貝塚の調査により、その年代的位置付けがほぼ可能になったと考えている。

室川上層式土器には深鉢形と壺形の2つの器種が認められ、量的には前者が圧倒的に多く、後者は極めて少なかった。壺形土器は口縁破片が数点得られたが、小破片のため器形を示し得ないのは残念である。また、T.P.区では椀状の、口唇の内彎するものも1点検出されている。しかし、胴部以下の形状は明らかでない。

深鉢形土器も完形品はなく、図上復元を試

みたものが1点あるだけで、また器形の特徴を一般化して提示できる段階にない。しかし、各部の破片から最小限のイメージは得られる。

深鉢型の土器には口唇を強調する傾向がみられ、室川式に通するものがある。底部には5cm前後の平底もあるが、尖底か底径の小さい平底が一般化する傾向にあり、後者の底面はゆるやかな凹面を形成したり、指頭で突き上げたような凹部をつくるものなどがある。尖底は丸底に近い形状のものがT.P.区で1点検出され、後述のように宇佐浜式に先行すると考えられることから注目すべき資料であろう。

ふつう胎土混入物は器面に露出し、肉眼観察が可能である。しかし、室川上層式では混入物がほとんど見受けられず、そのことも外見上の特徴の一つになっている。しかし、混入物が皆無というわけではなく、稀に観察される場合がある。これまでの観察結果からすると、混入物は主として石灰質砂粒に限られ、稀に石英もみられるが、後者は意識的に混入したというよりは、むしろ当初より土に含まれていた可能性が強い。

この土器には硬軟両タイプが認められる。硬質のものは一般に器壁は薄く、暗褐色の器色を有し、焼成は良好である。軟質のものは泥胎で、吸水性が強く、脆弱で器色は黄褐色を呈している。本文では前者をA、後者をBとして取扱ったが、それぞれの特徴からAがBに先行するものと考えられる。しかし、層的におさえられているわけではない。

なお、Bグループの土器には三ヶ月状の把手、すなわち外耳を水平方向に付けるものが数点検出されており、この種把手の上限を示す資料として注目される。

さて、T.P.区においては16枚の層が認められ、7型式の土器が検出された。そのうち特

に関心の向けられたのは室川式、室川上層式、宇佐兵式の層位関係である。この15枚の層を仮りに上（I～V層）、中（VI～X層）、下（XI～XV層）に分けてみると室川式は下層から上層へ漸減の傾向をみせ、室川上層式は下層上部（第XI層）で出現し、中層、上層へと増加し、宇佐兵式も層の上では同様の出土状

況を示したが、出土量においては若干差異がみられ、室川上層式が宇佐兵式に先行するのではないかと考えられた。前にも記したように第XI層出土の宇佐兵式土器は上層からの陥入も考えられ、その点上記の想定に有利であるが、両者の関係については、今後、良好な遺跡において確める必要がある。

註

- 1 高宮廣衛・比嘉賀盛「沖縄市室川貝塚発掘調査速報」 中国大考古 創刊号 沖縄国際大学文学部考古学研究室 1976
- 2 高宮廣衛・玉城朝健・平安秀子・東江千栄子「室川貝塚第1～3次発掘調査概報」 中国大考古 第2号 沖縄国際大学文学部考古学研究室 1978
- 3 松村瞭「琉球荻堂貝塚」 東京帝国大学理学部人類学教室研究報告第三篇 東京帝国大学 1920
- 4 高宮廣衛「具志川村アカジャンガー遺跡調査概報」 文化財要覧 琉球政府文化財保護委員会 1960
- 5 渡喜仁兵原貝塚調査団「渡喜仁兵貝塚調査報告書」 今帰仁村教育委員会 1977
- 6 高宮廣衛「沖縄諸島における新石器時代の編年（試案）」 南島考古 第6号 沖縄考古学会 1978
- 7 多和田真淳・高宮廣衛・新田重清・嵩元政秀「知花遺跡発掘調査概報」 知花遺跡群 沖縄県文化財調査報告書 第16集 沖縄県教育委員会 1978
- 8 高宮廣衛「熱田原貝塚の土器」 沖縄国際大学文学部紀要 第1巻第1号 沖縄国際大学 昭和48年3月
- 9 多和田真淳「琉球列島における貝塚の分布と編年の概念」文化財要覧 琉球政府文化財保護委員会 1954
- 10 高宮廣衛「天久遺跡」 那覇市の考古資料 那覇市史資料篇 第1巻第1号 1968

室川貝塚発掘調査参加者

第一次調査 1974年12月26日～1975年1月5日

比嘉賀盛	上原 静	岸本義彦	玉城初子	中村 愿
比嘉春美	宮城利旭	山田 正	吉本直子	

第二次調査 1975年7月8日～7月18日

玉城朝健	平安秀子	上条とき子	末吉利恵子	津嘉山 健
比嘉賀盛	岸本義彦	中村 愿	宮城利旭	山田 正

(以上冲国大)

嘉手川重紀	島袋友道	謝花 寿	桃原用保	徳永盛勇
平識善正	(以上冲大)			

第三次調査 1976年8月1日～8月25日

東江千栄子	翁長和成	儀保盛行	謝敷宗勝	島袋優子
比嘉安雄	山内勝美	与那嶺 克	阿利直治	玉城朝健
平安秀子	比嘉賀盛	比嘉春美	宮城利旭	山田 正
比嘉栄哲	宮城隆一			

第四次調査 1977年8月1日～8月23日

後仲筋正徳	奥間 尚	大城以智子	嘉数 卓	我謝礼子
嘉手納 昇	金城亀信	古謝みどり	胡城 清	小橋川 あけみ
佐久田 勇	作田早苗	志賀 紀	島袋 洋	島袋尚子
下地安広	比嘉栄哲	松田有功	東江千栄子	阿利直治
翁長和成	島袋優子	山内勝美	玉城朝健	

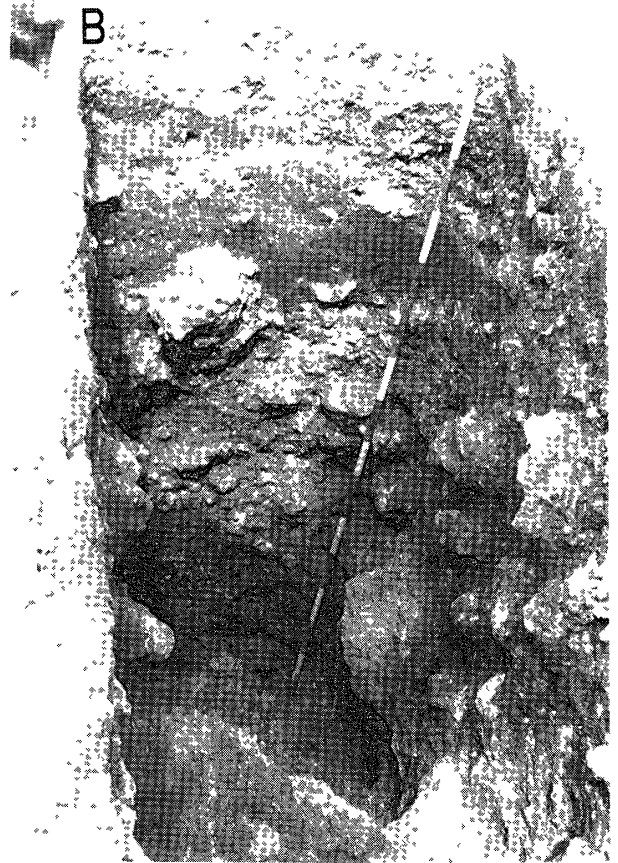
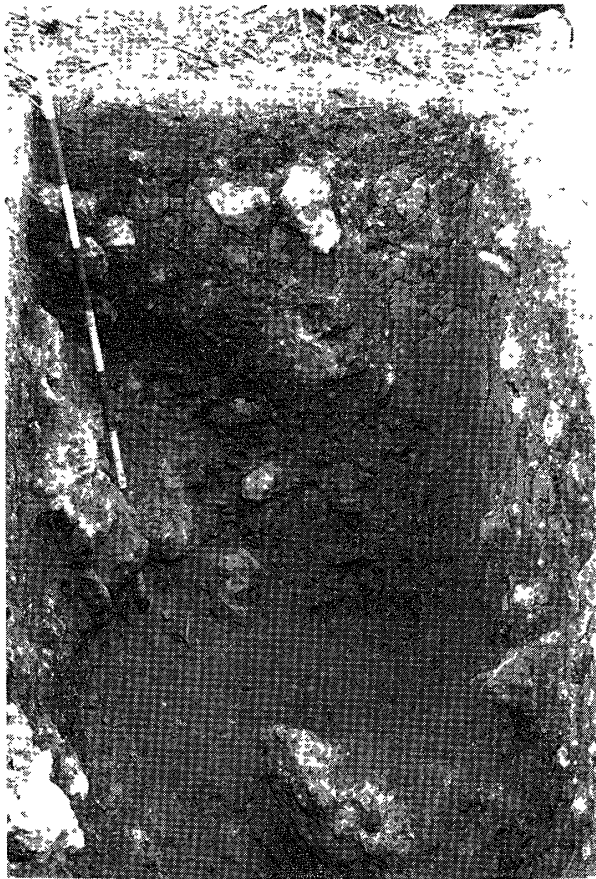
A



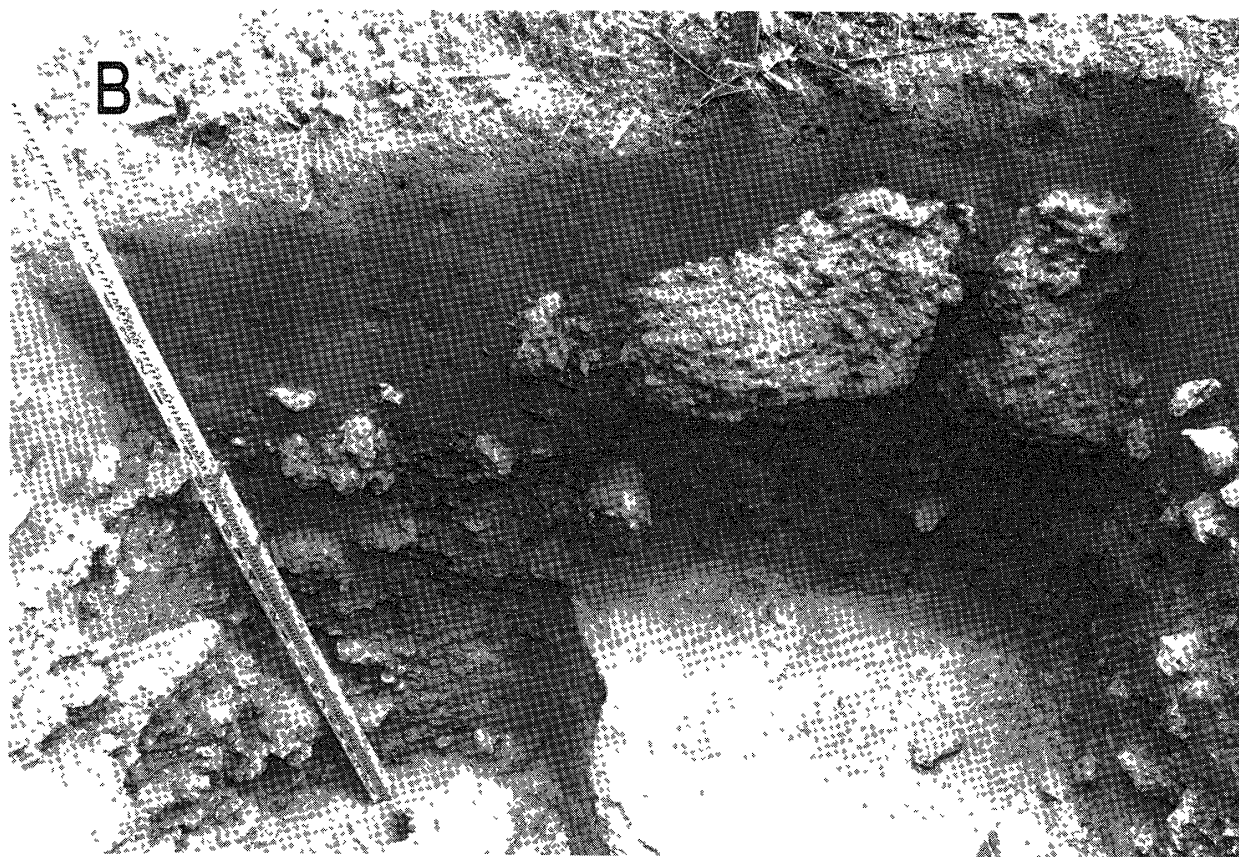
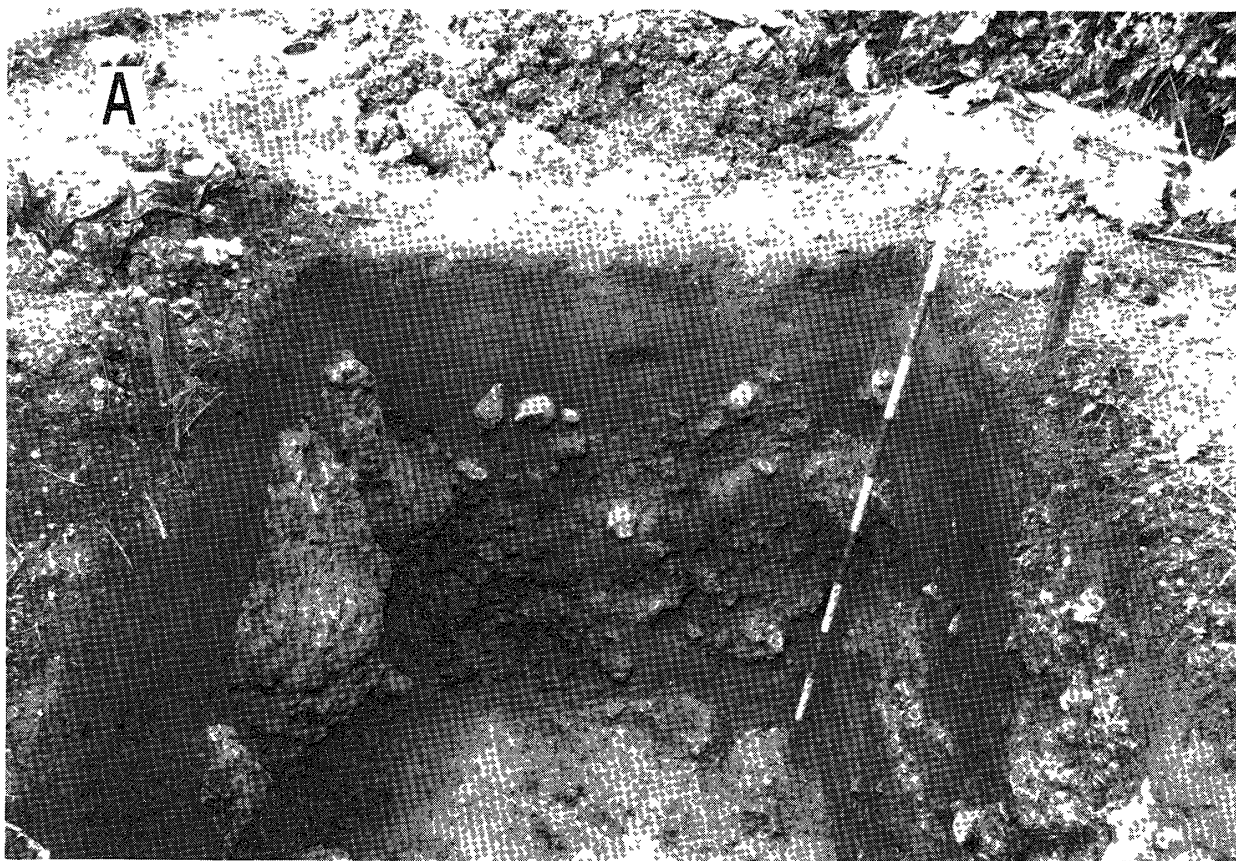
B



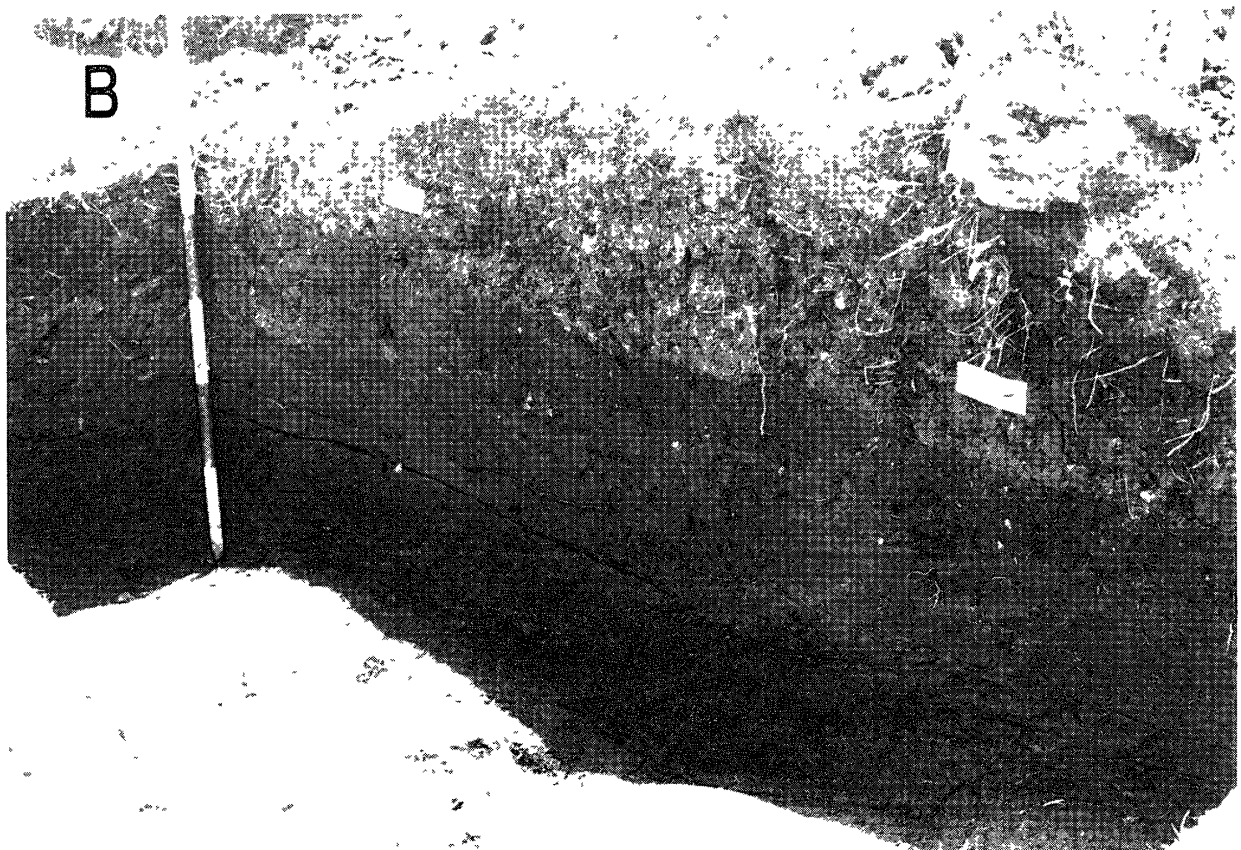
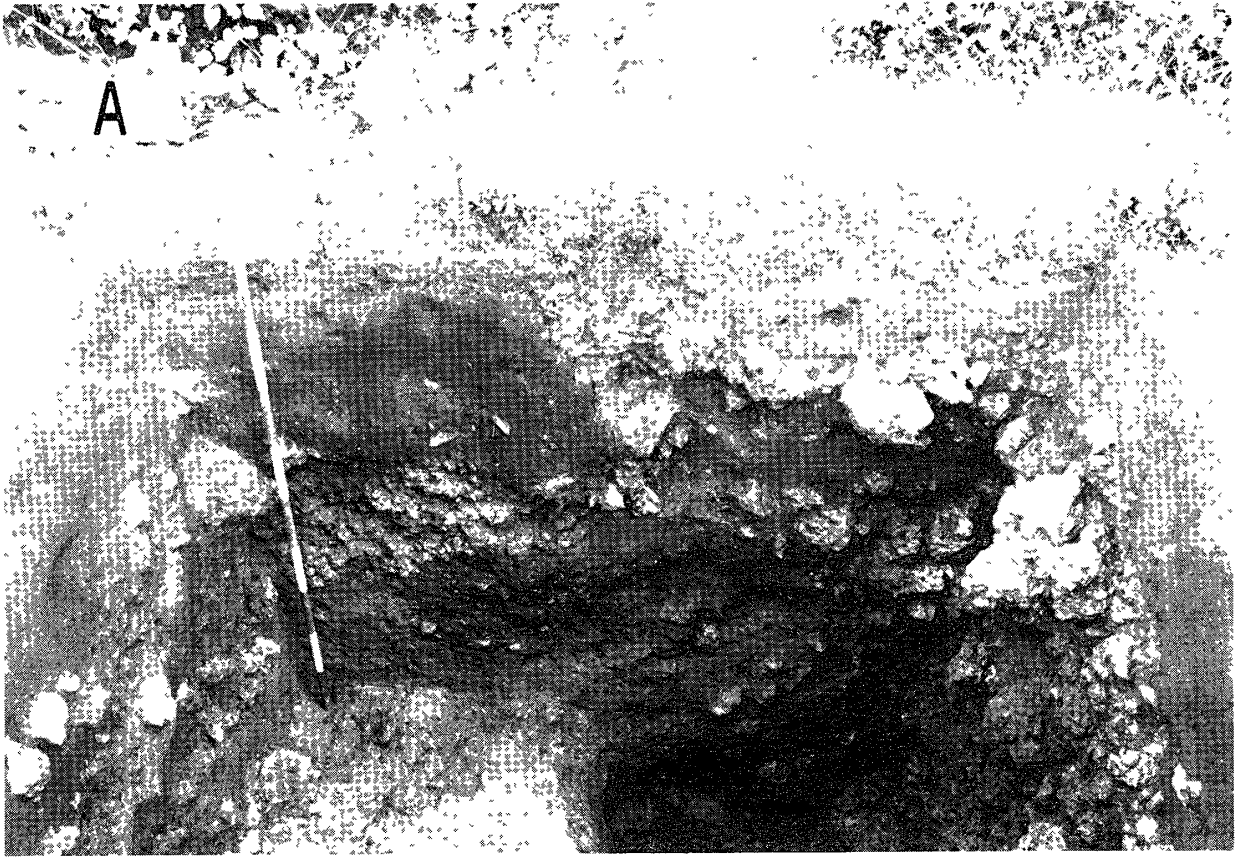
PL. 1 室川貝塚 A. 遠景 B. 近景



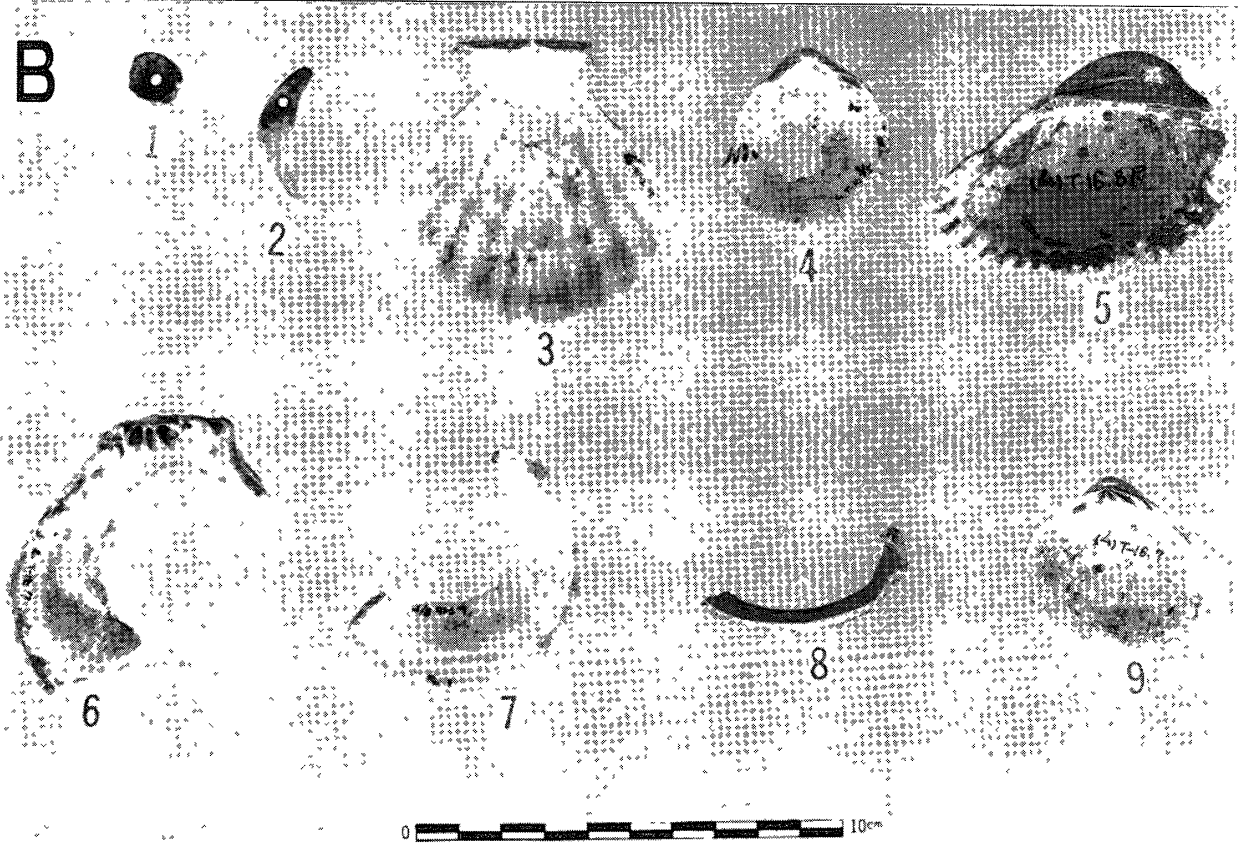
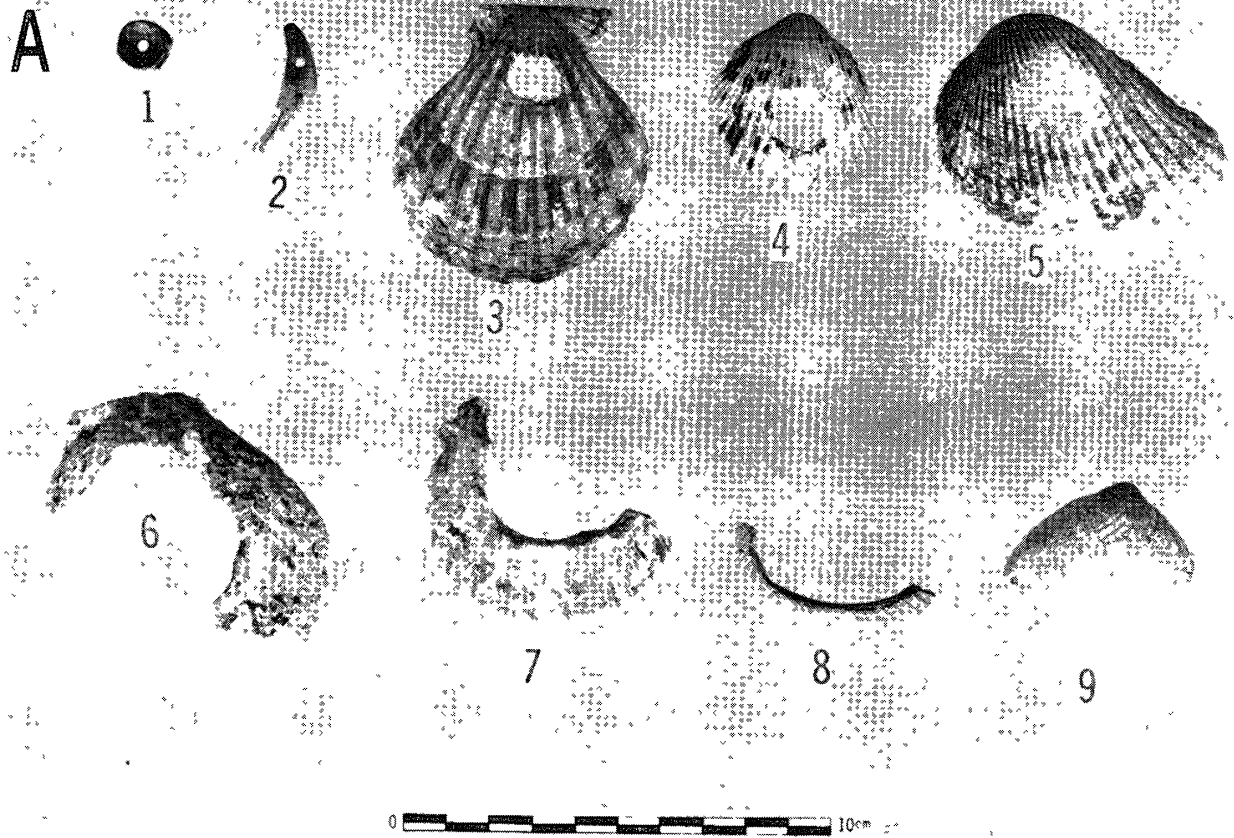
PL. 2 A=T-17 南壁, B=T-16 北壁, C=T-16·17 区西壁, D=T. P. 区西壁



PL. 3 T. P. 区側壁 A. 東壁 B. 北壁



PL. 4 A = T. P. 区南壁 B = Q. R - 7 区の東壁 (左) と南壁

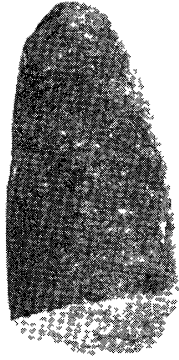


PL. 5 T-16・17区出土の骨製および貝製品

A



1



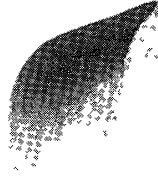
2



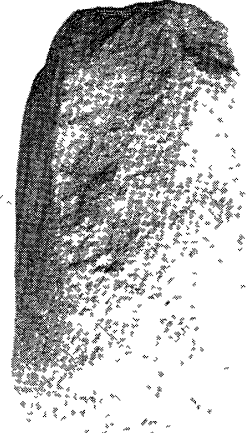
3



4



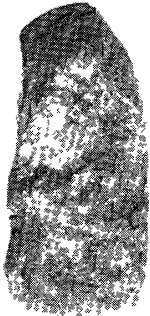
5



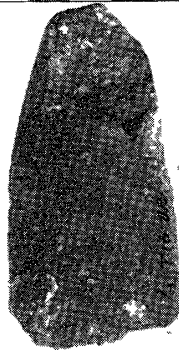
6



B



1



2



3



4



5

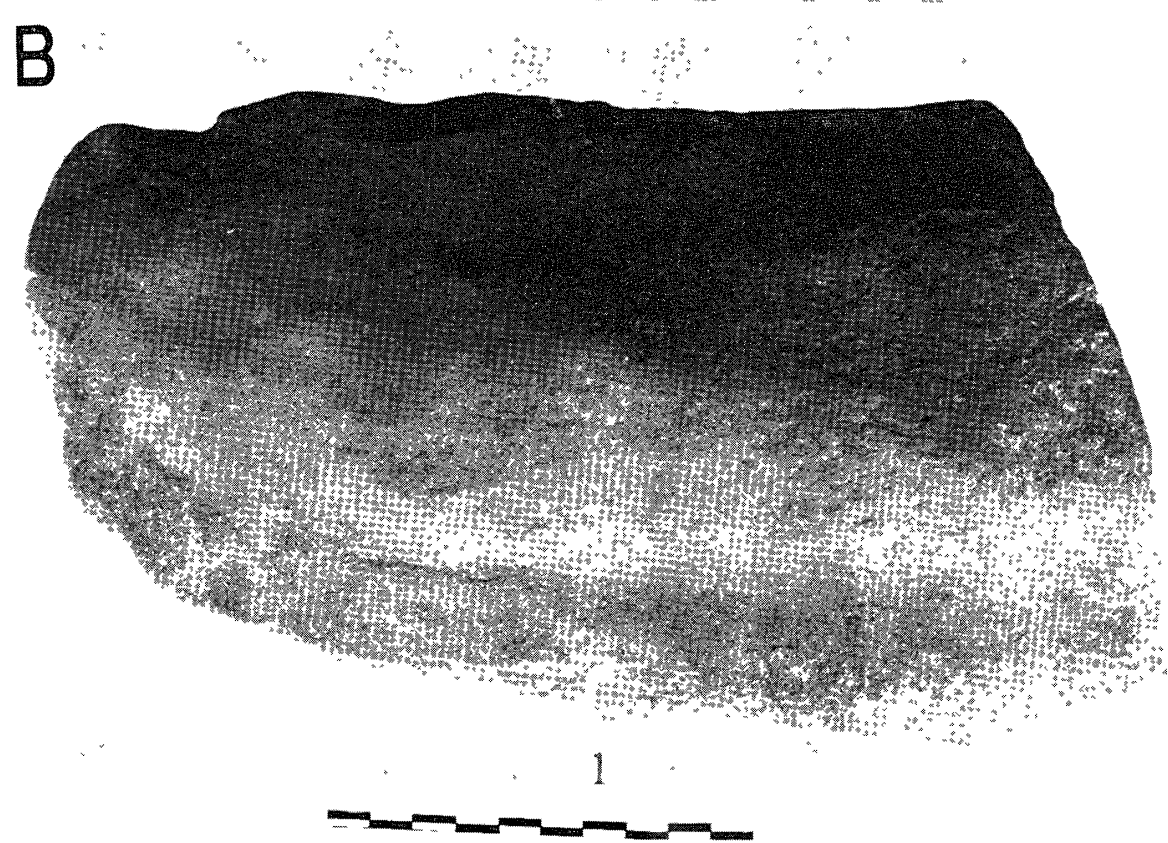
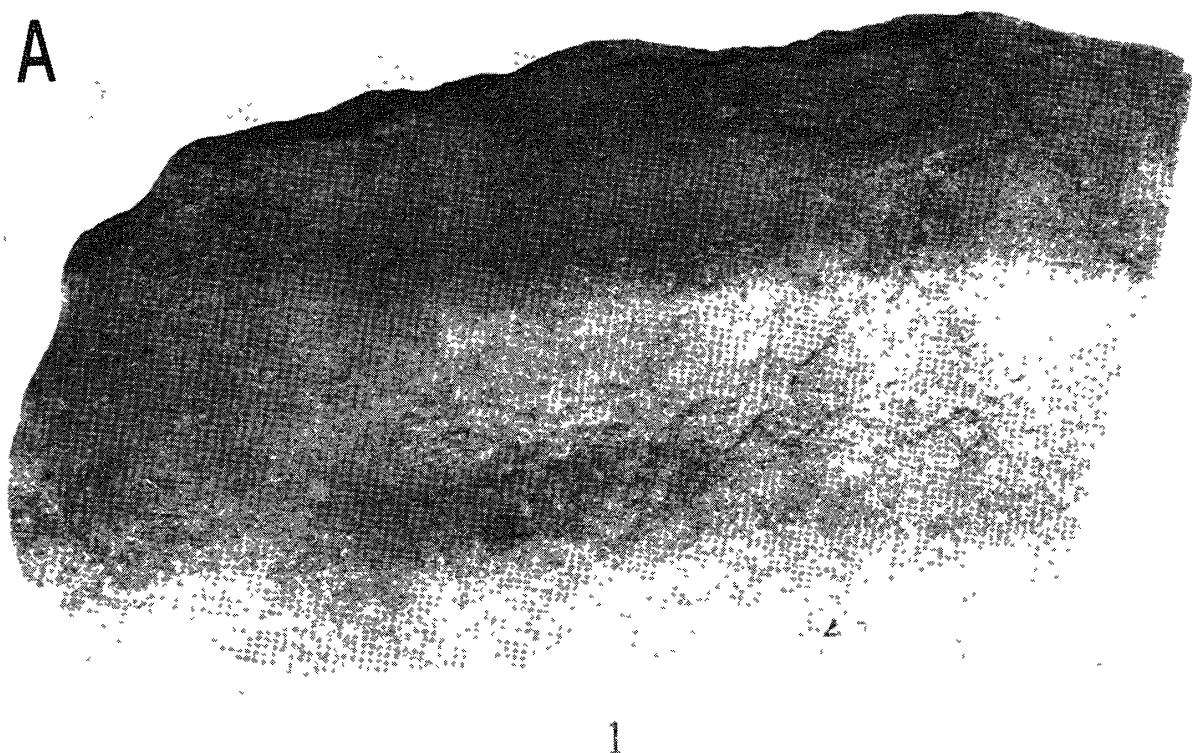


6

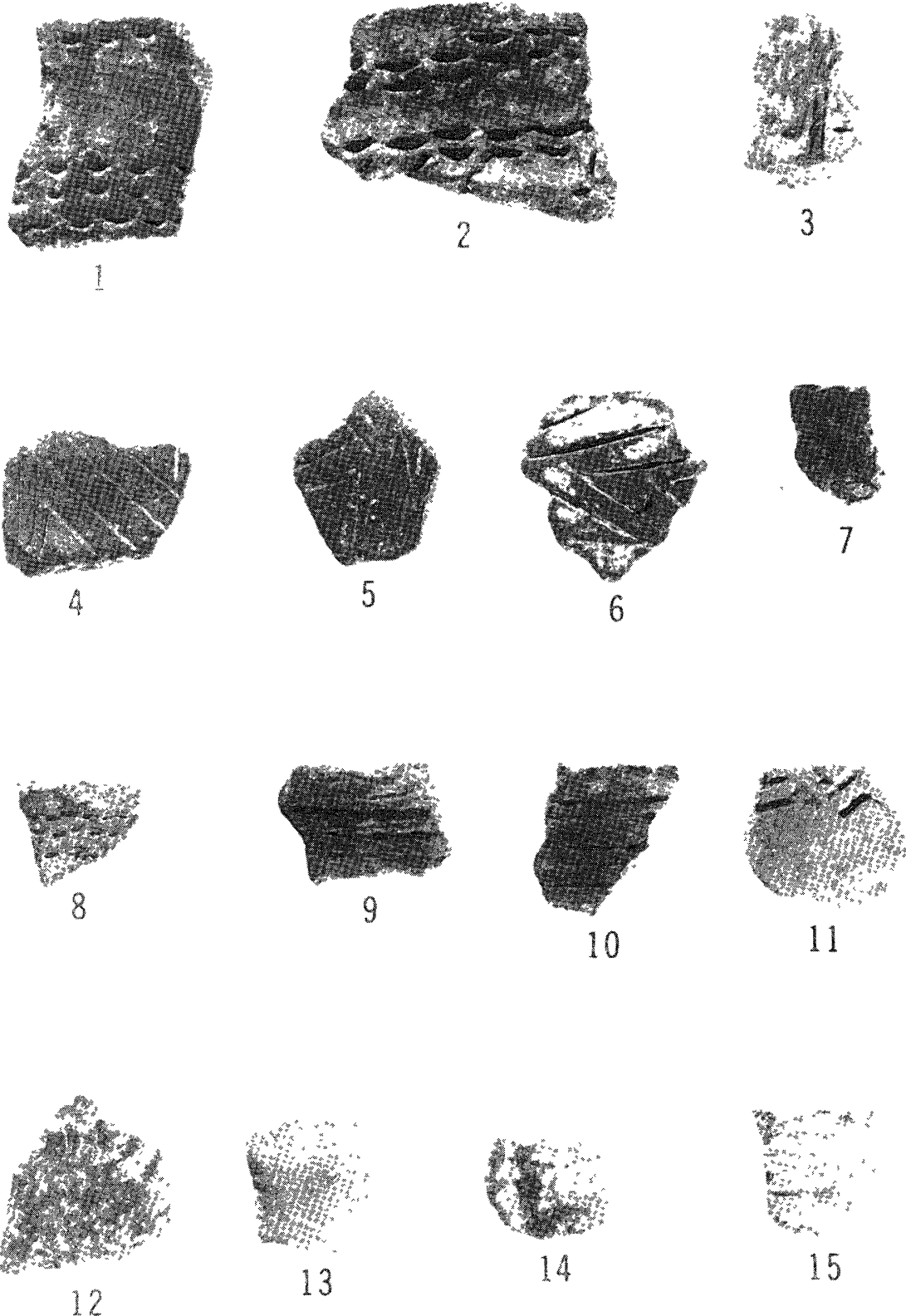


PL. 6

T-16・17区出土の石器

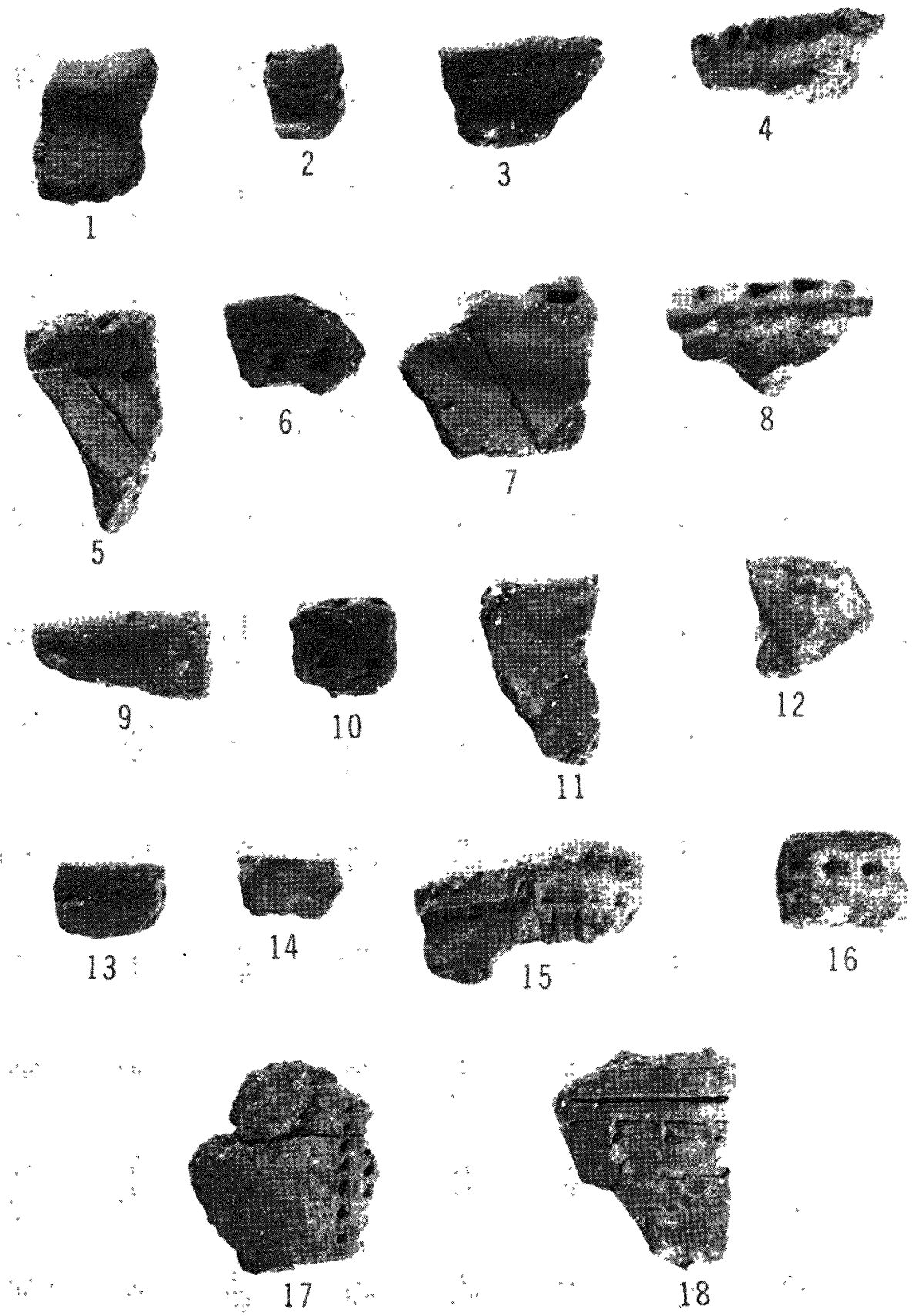


PL. 7 T-16・17区出土の砥石 A. 磨面 B. 底面

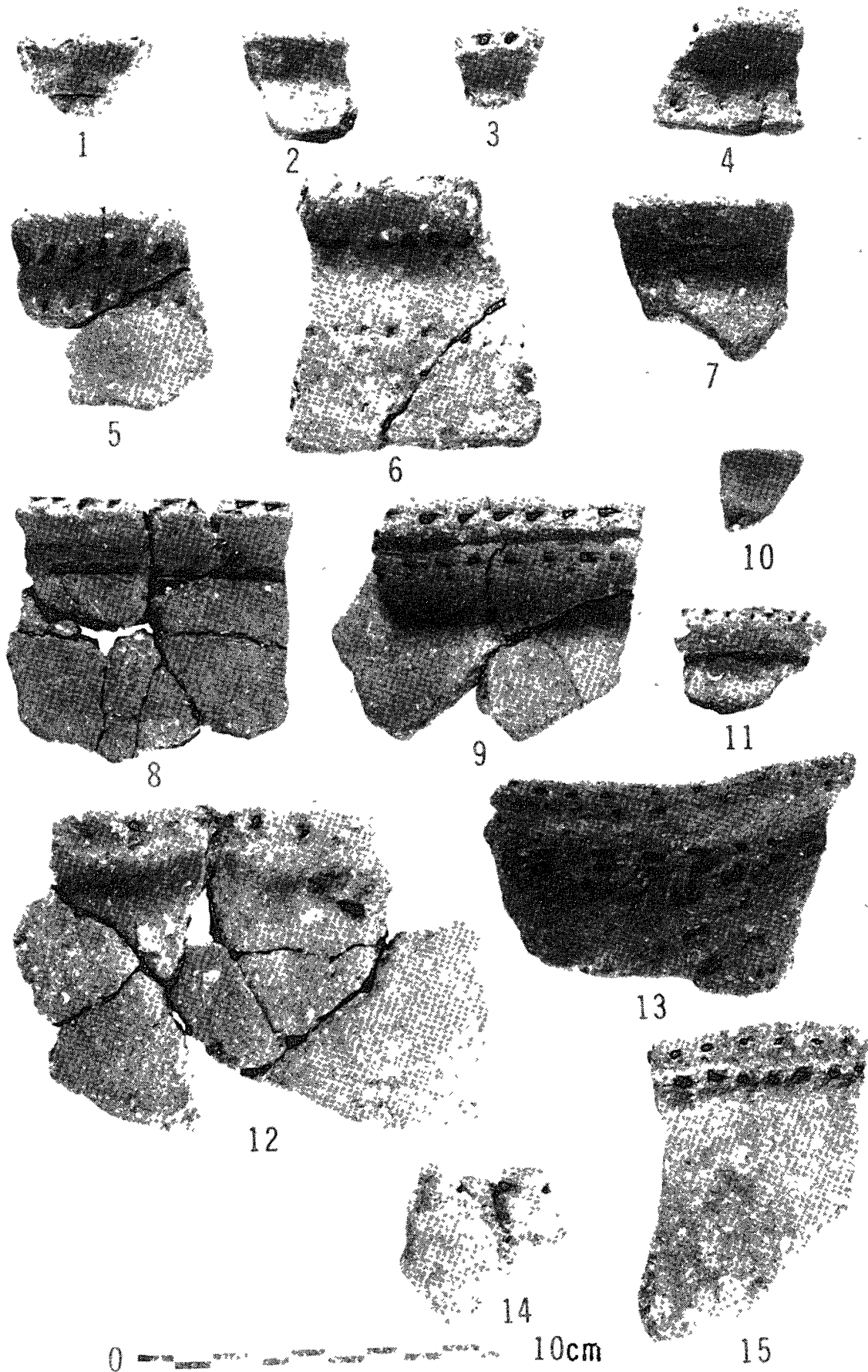


0 10cm

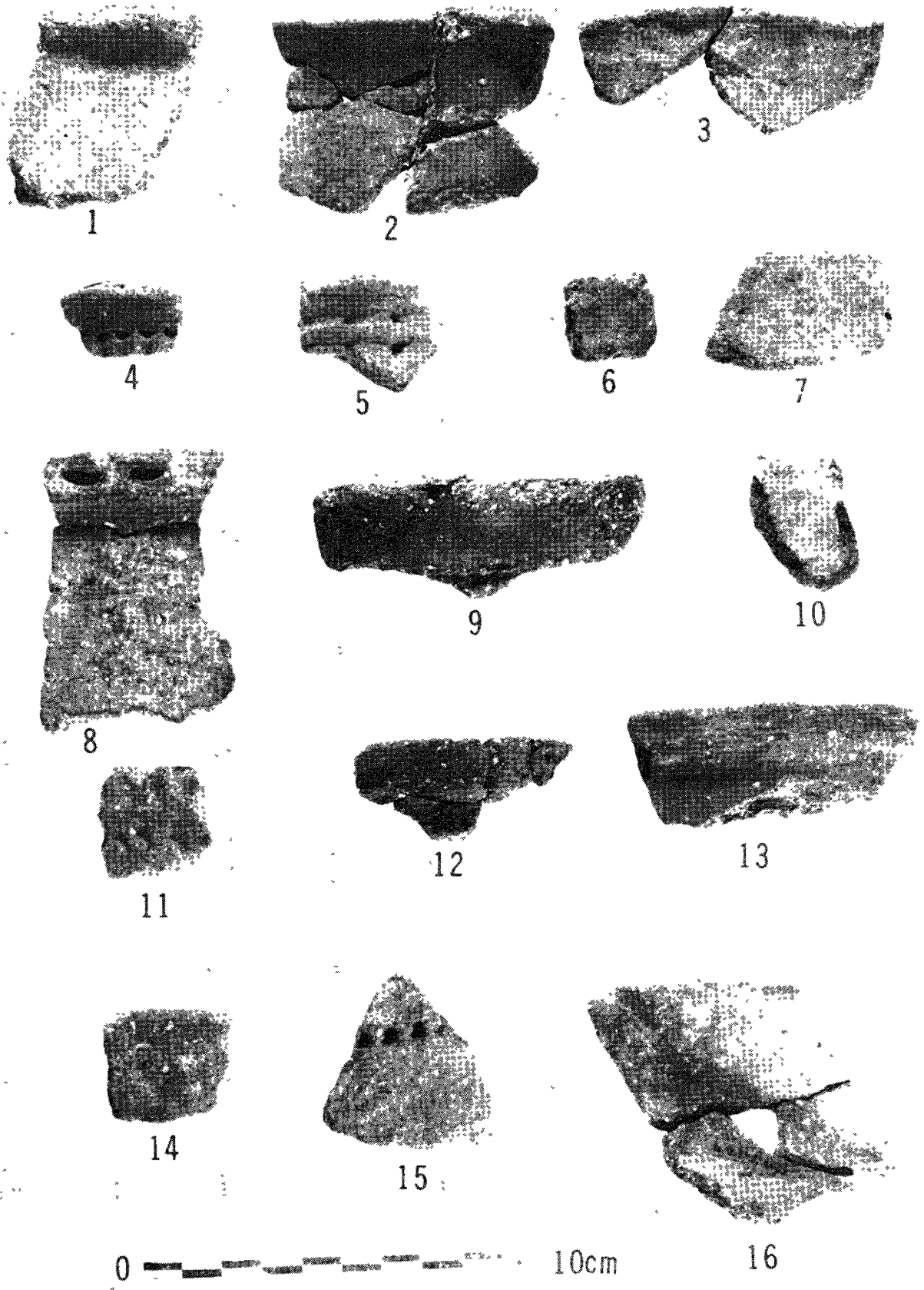
PL. 8 T-16・17区出土の土器



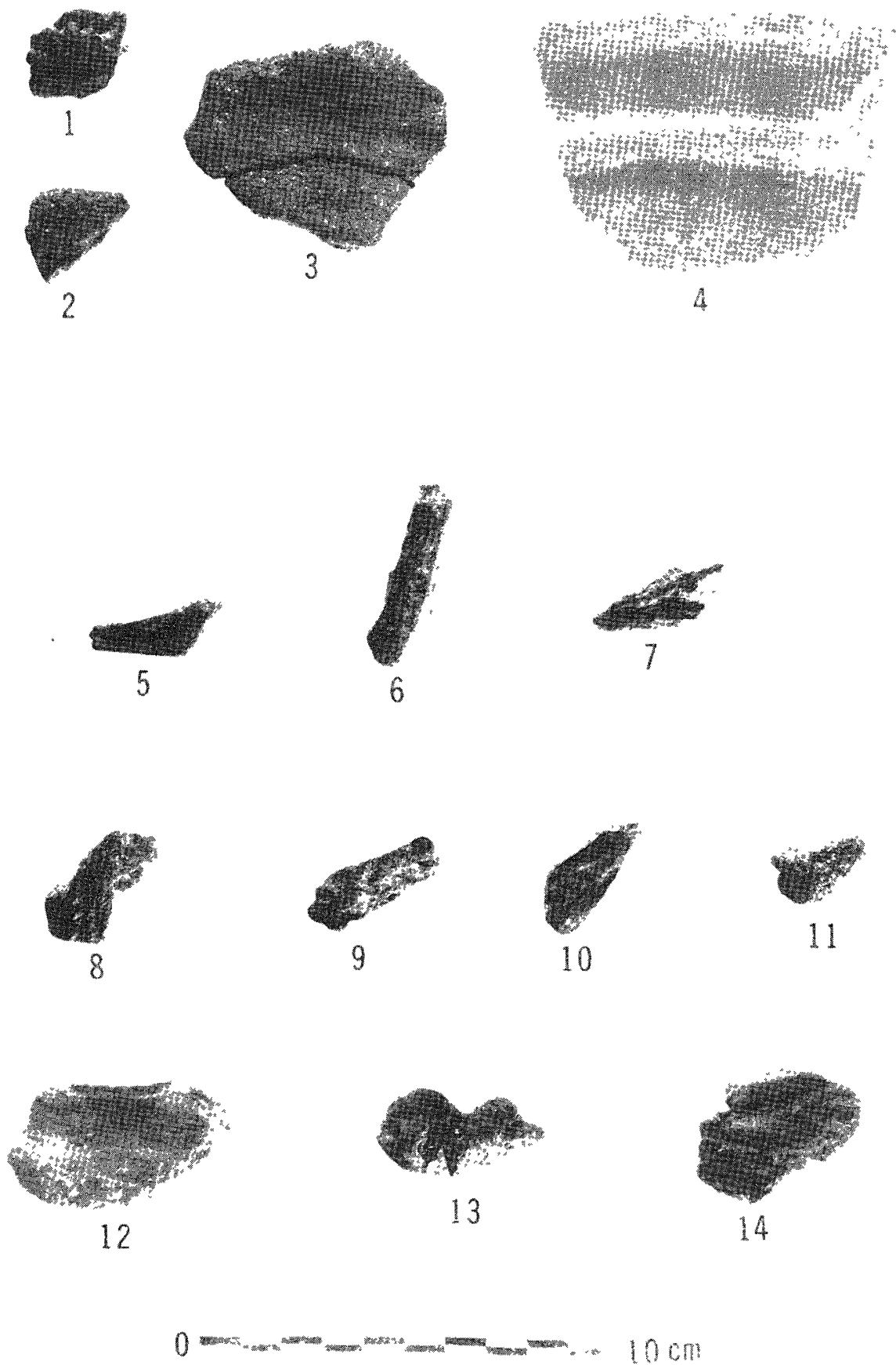
PL. 9 T-16・17 区出土の土器



PL. 10 T-16・17区出土の土器



PL. 11 T-16・17区出土の土器



PL. 12 T-16・17区出土の土器

A



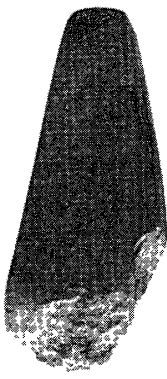
B



PL. 13

T. P. 区出土の骨牙製品

A



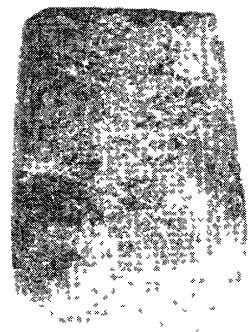
1



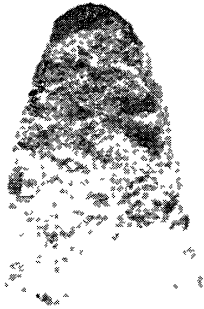
2



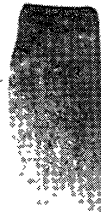
3



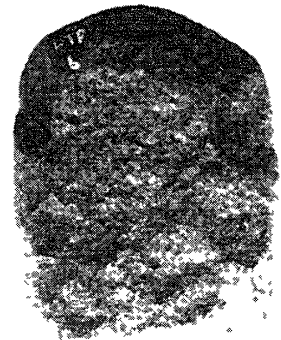
4



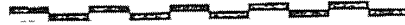
5



6



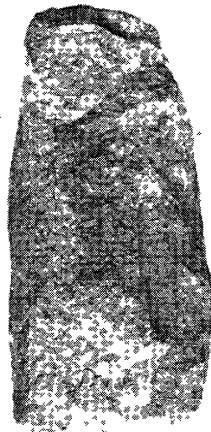
7



B



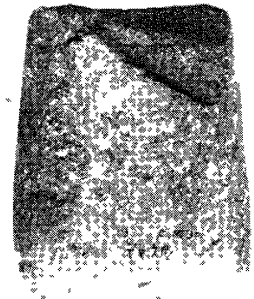
1



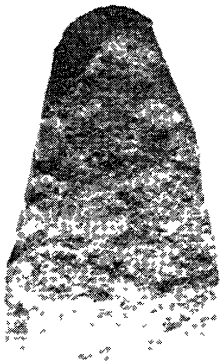
2



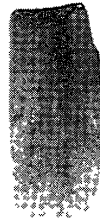
3



4



5



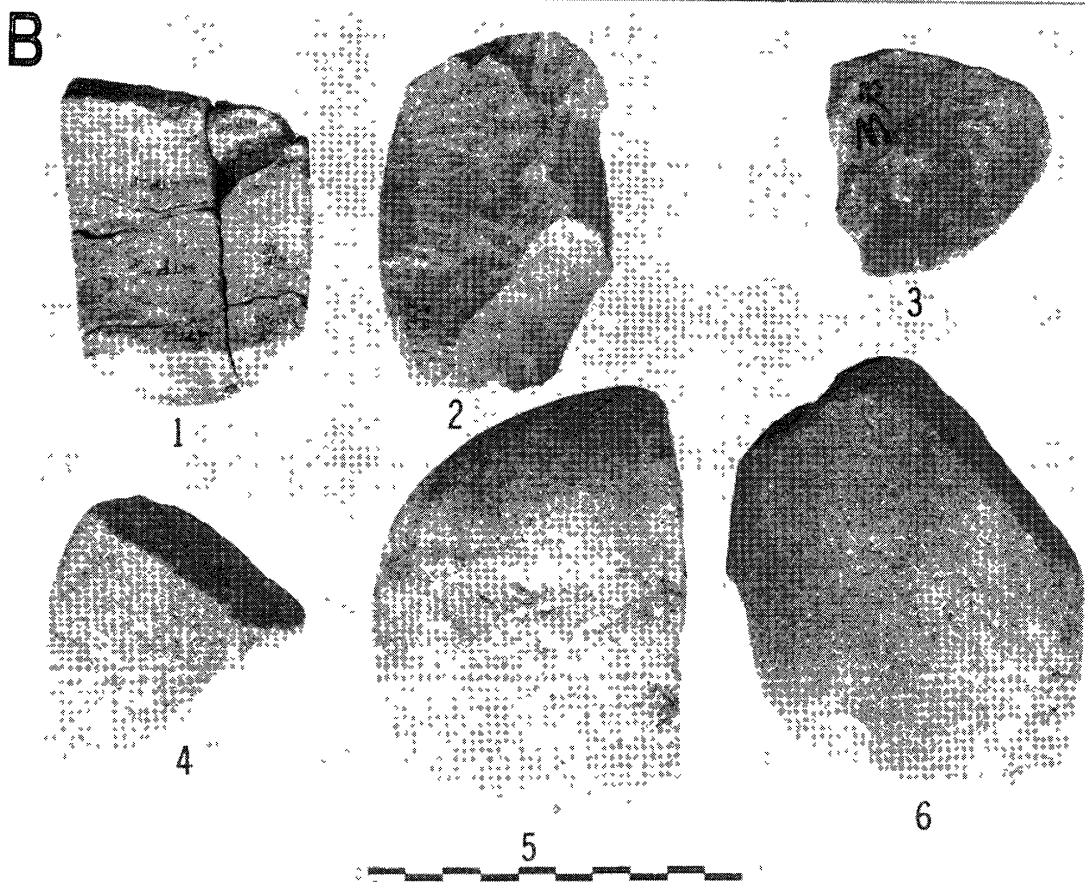
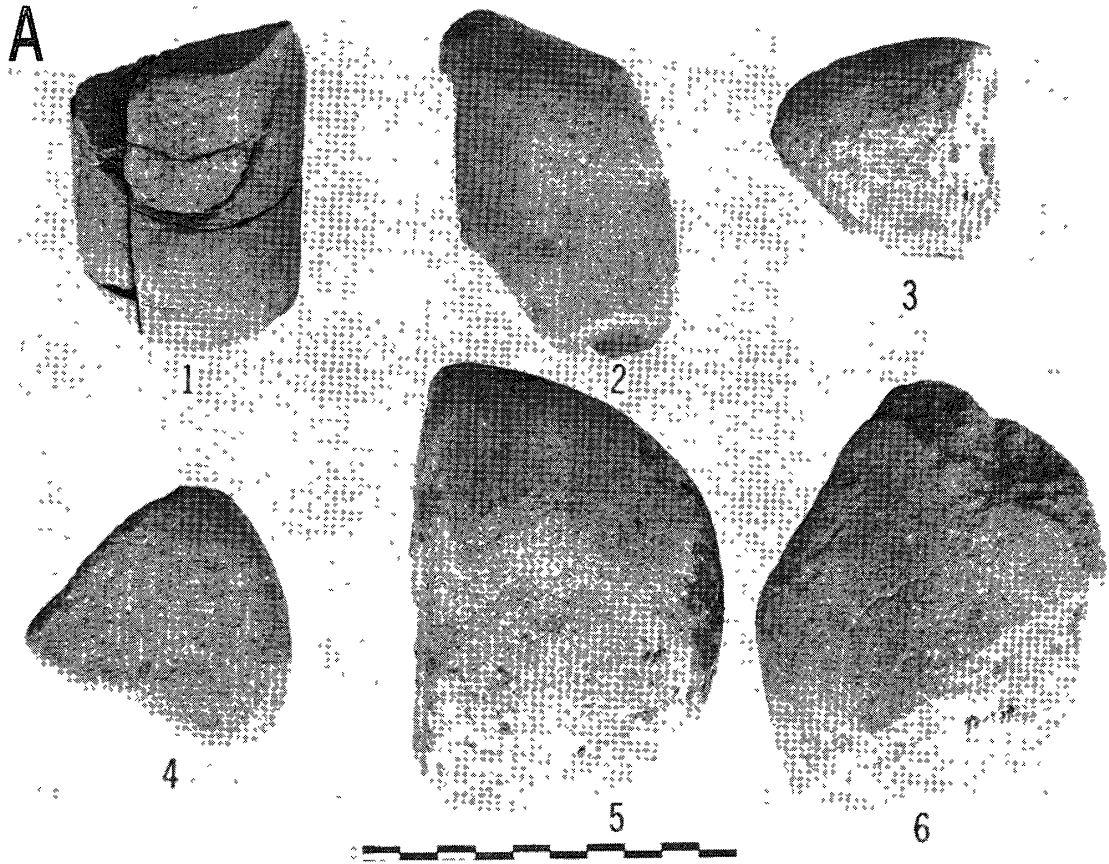
6



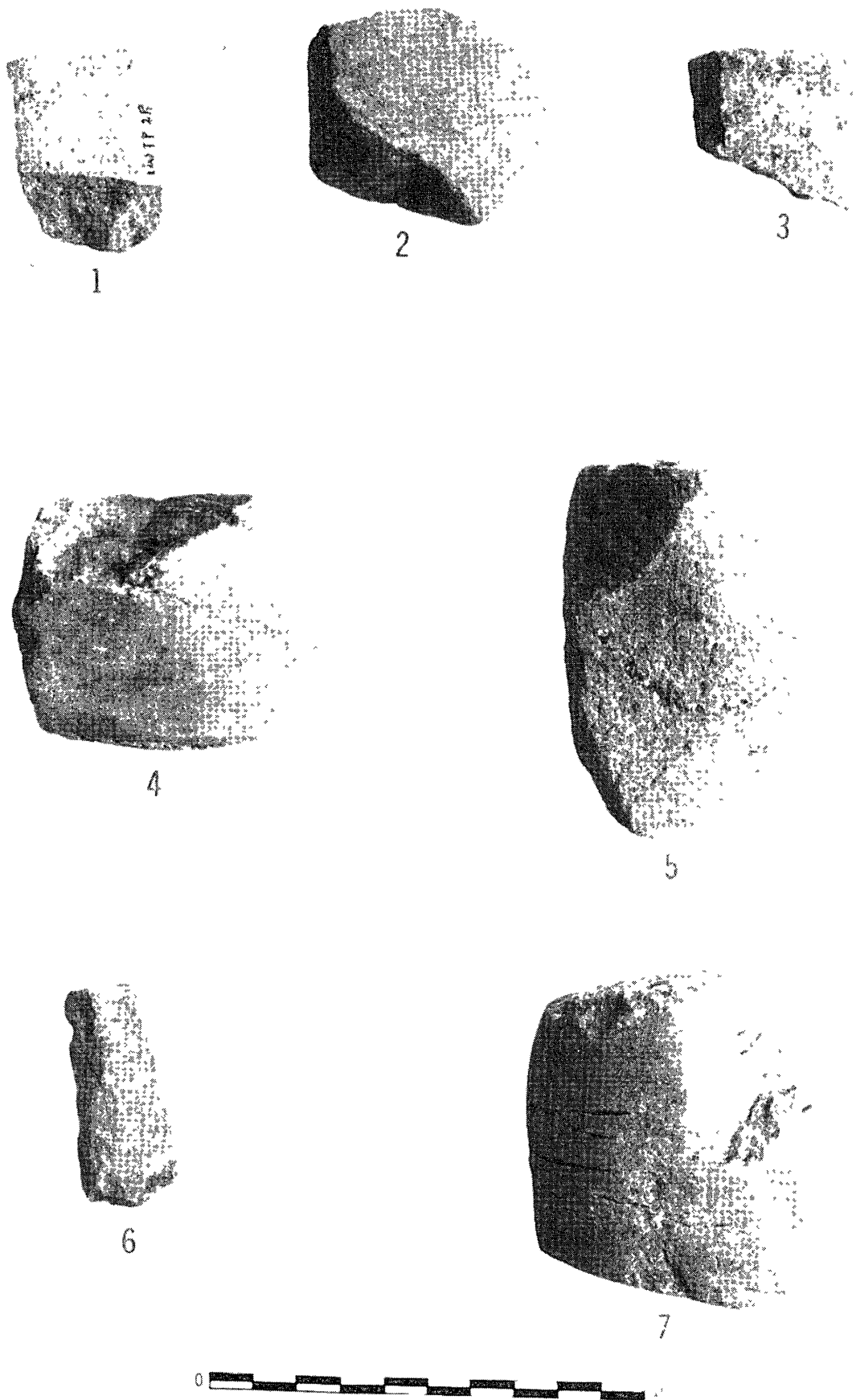
7



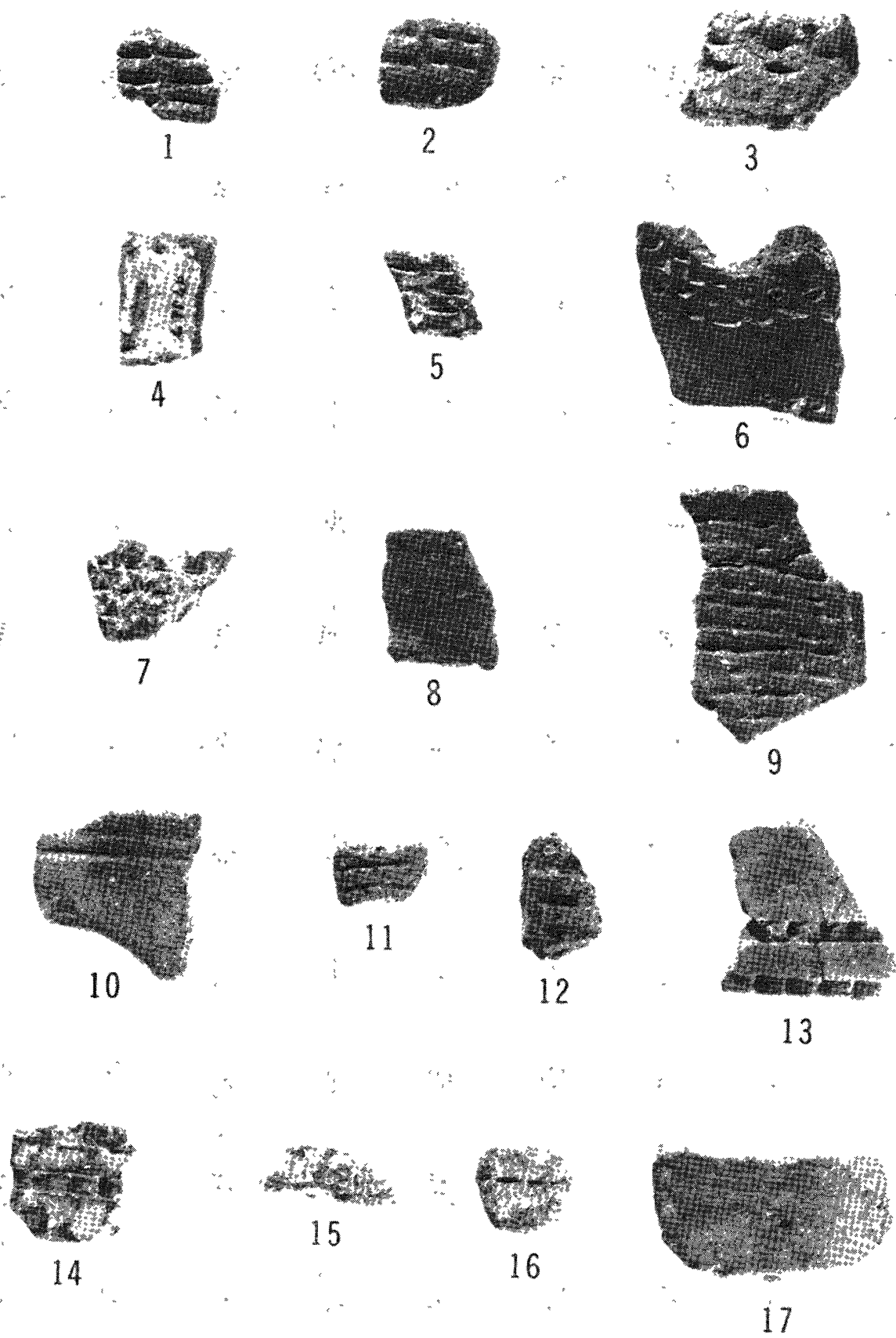
PL. 14 T. P. 区出土の石斧



PL. 15 T. P. 区出土の石器

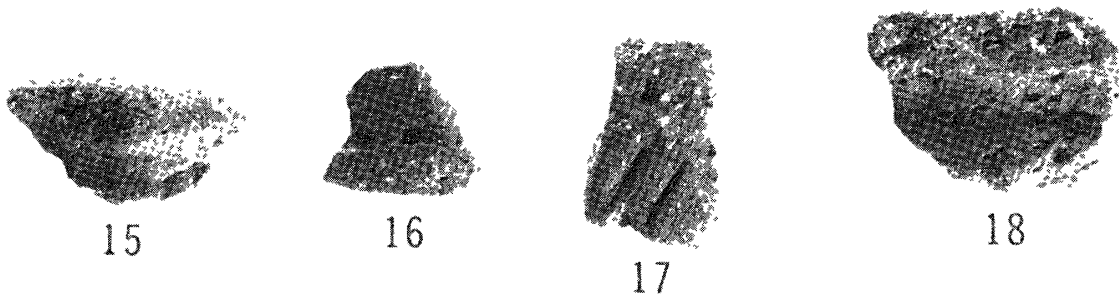
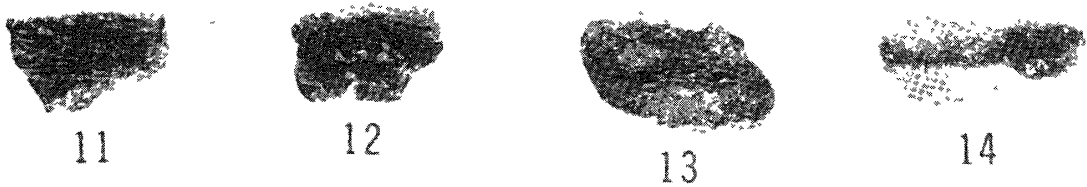
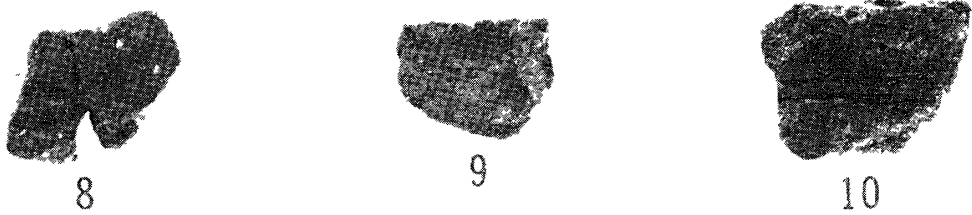
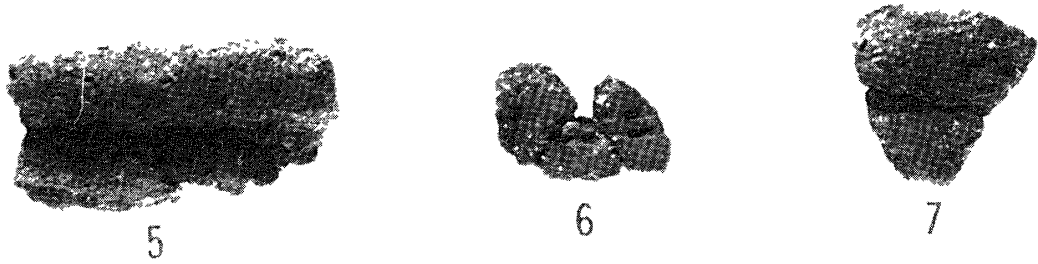
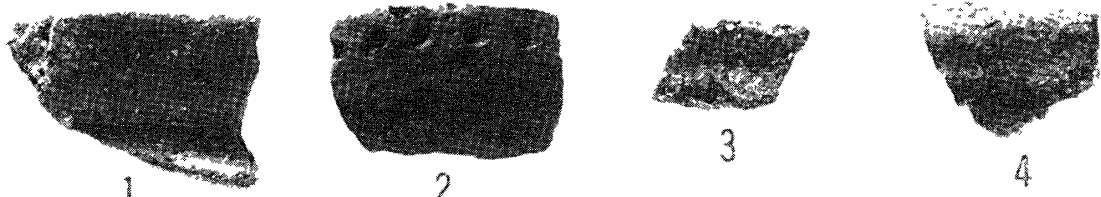


PL. 16 T. P. 区出土の石器

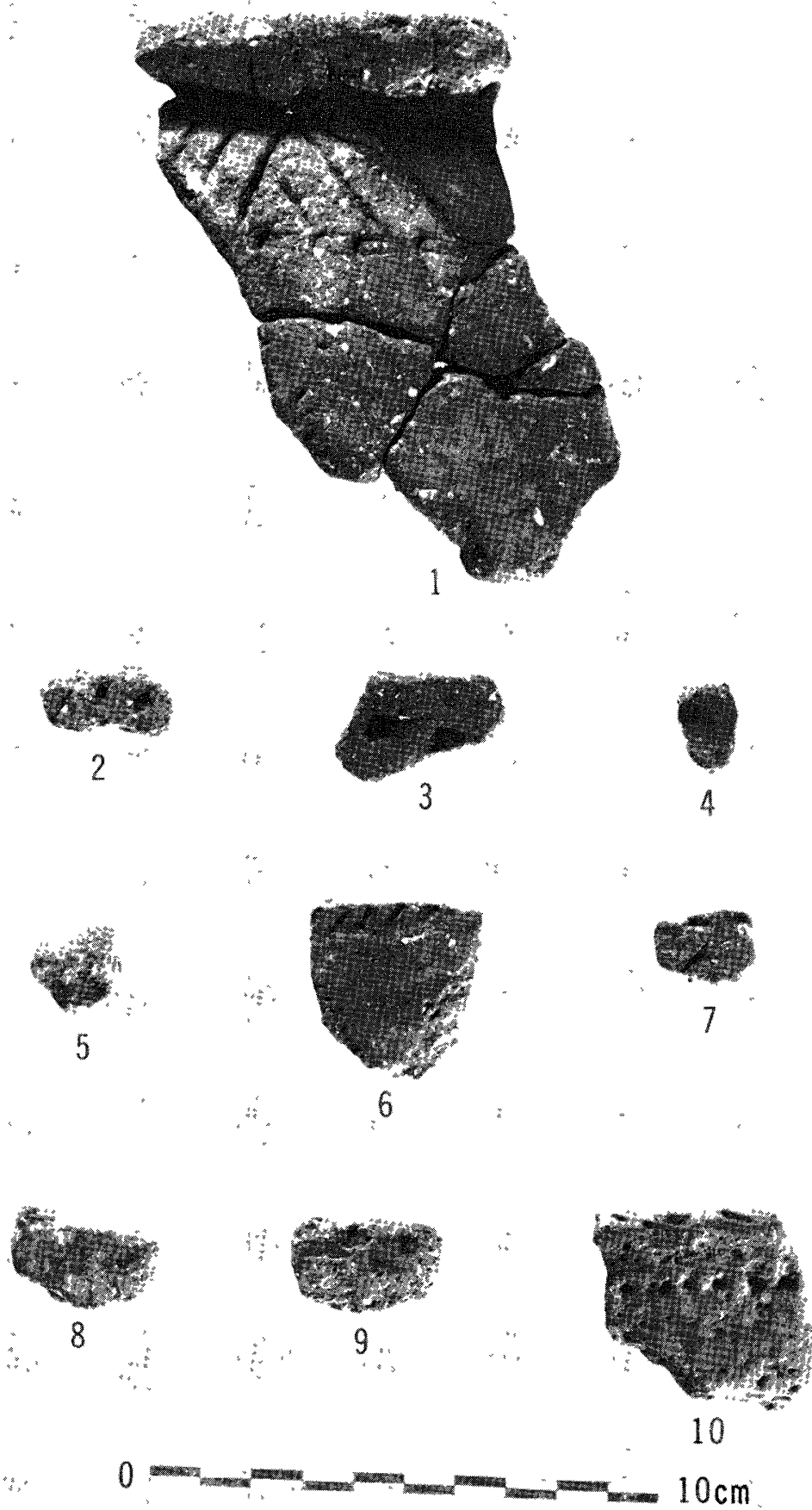


0 10cm

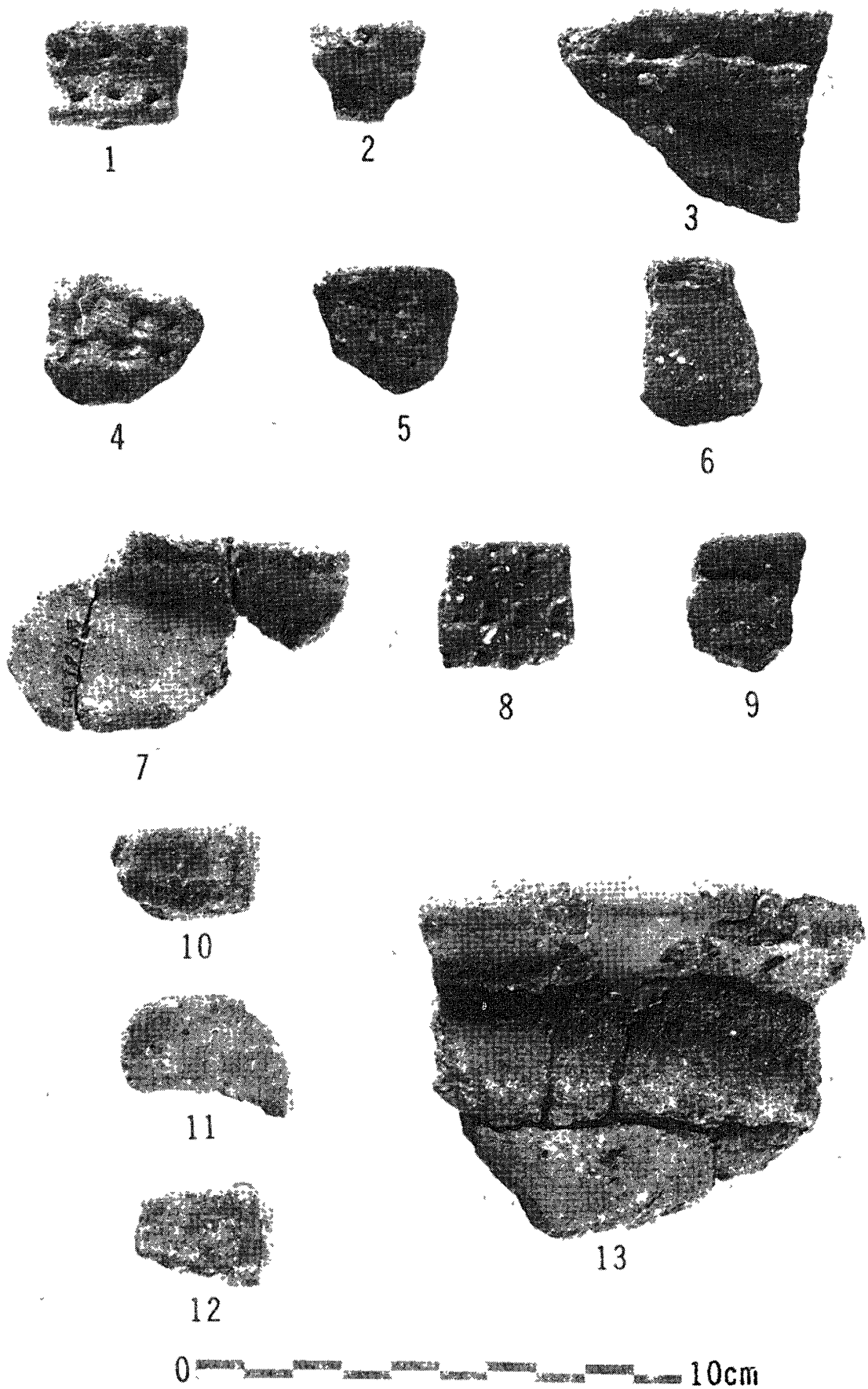
PL. 17 T. P. 区出土の土器



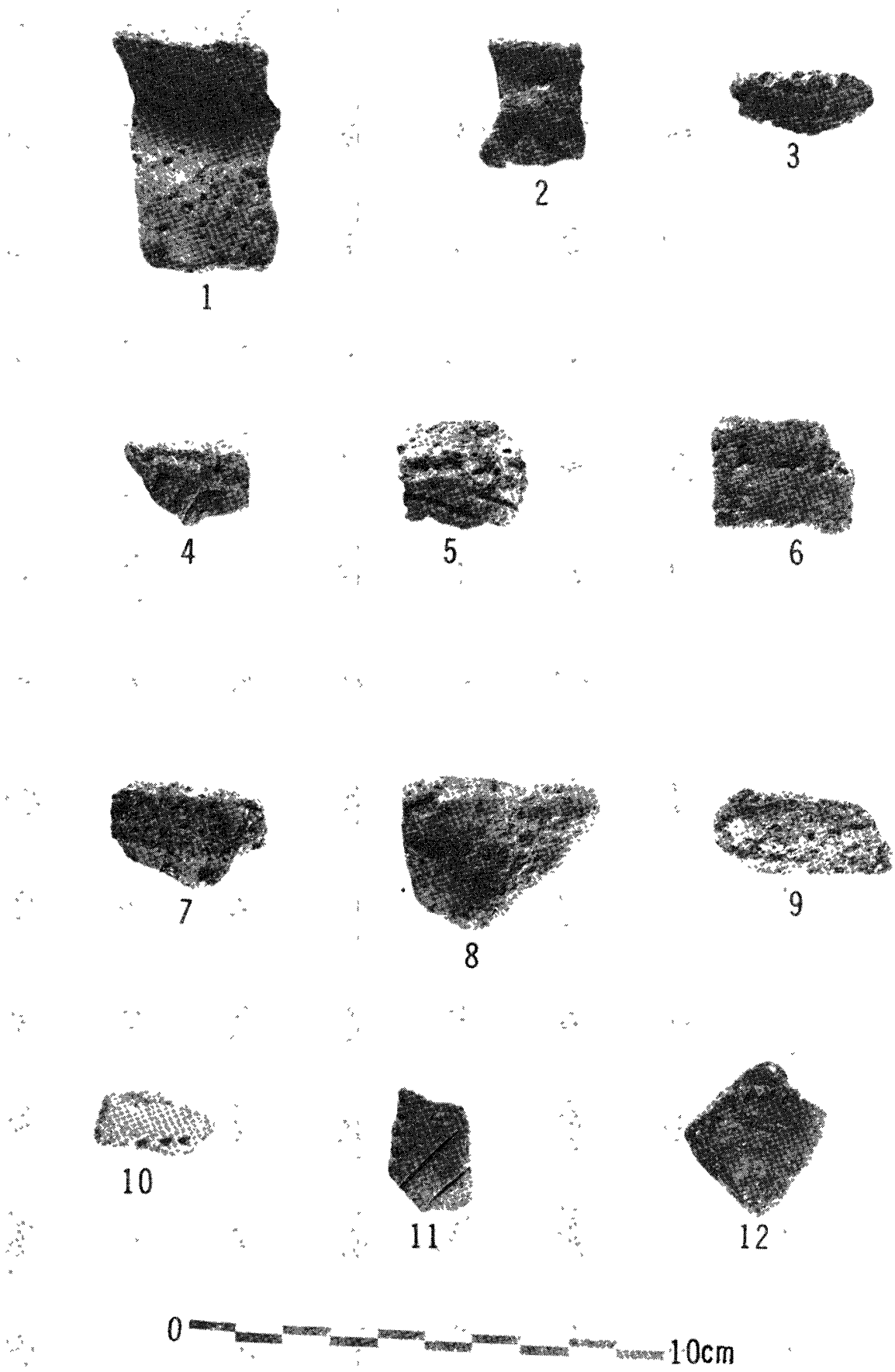
PL. 18 T. P. 区出土の土器



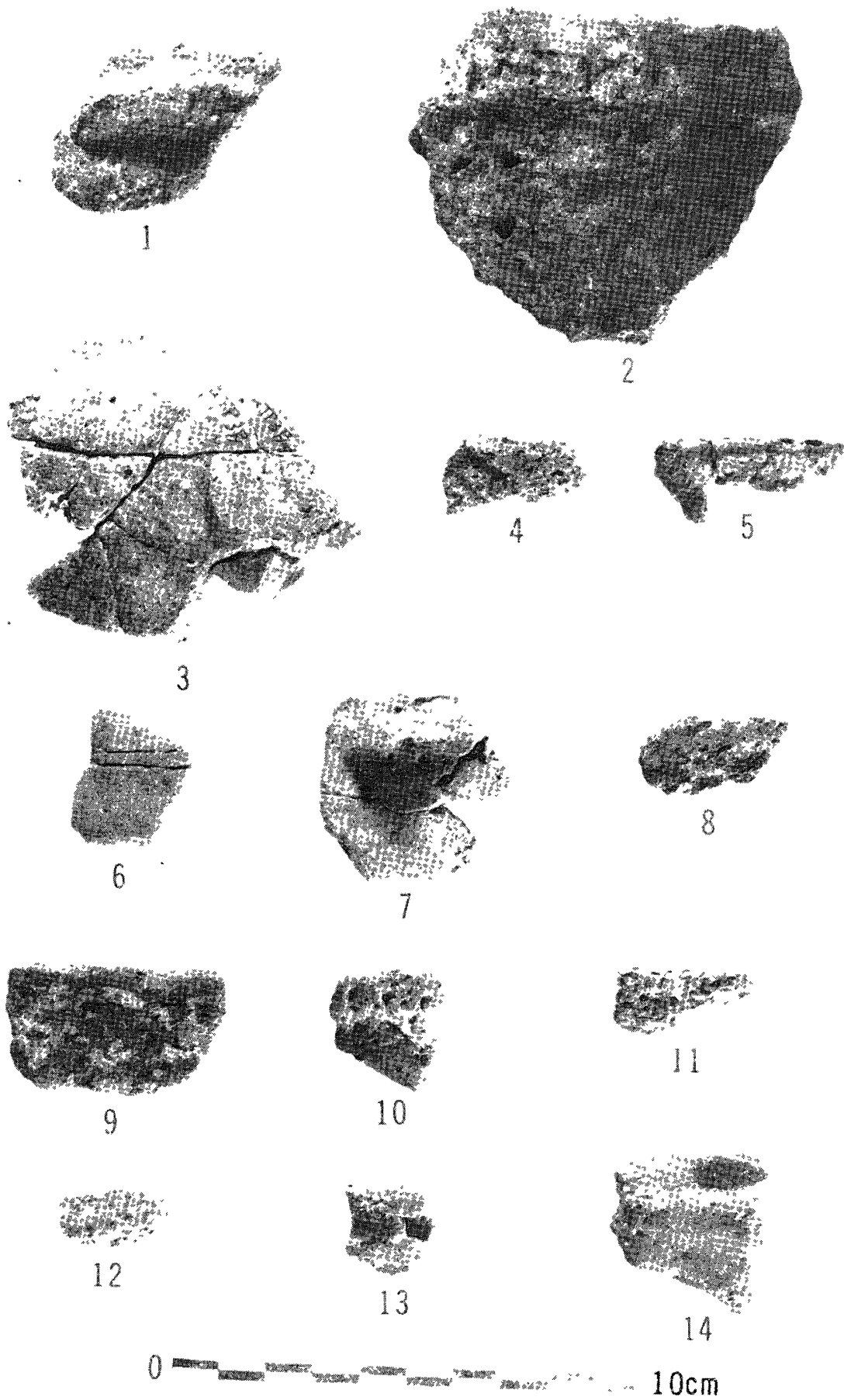
PL. 19 T. P. 区出土の土器



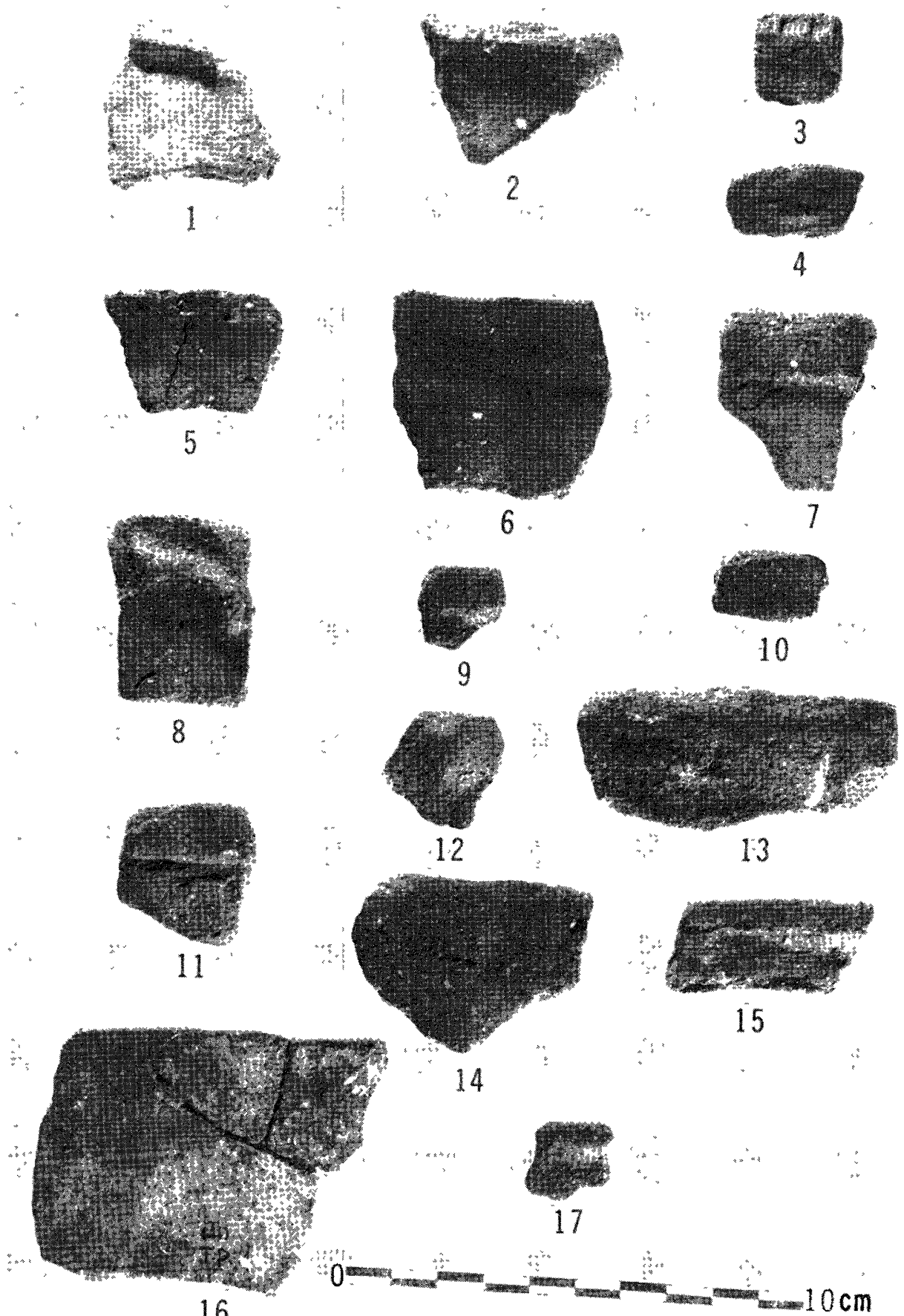
PL. 20 T. P.区出土の土器



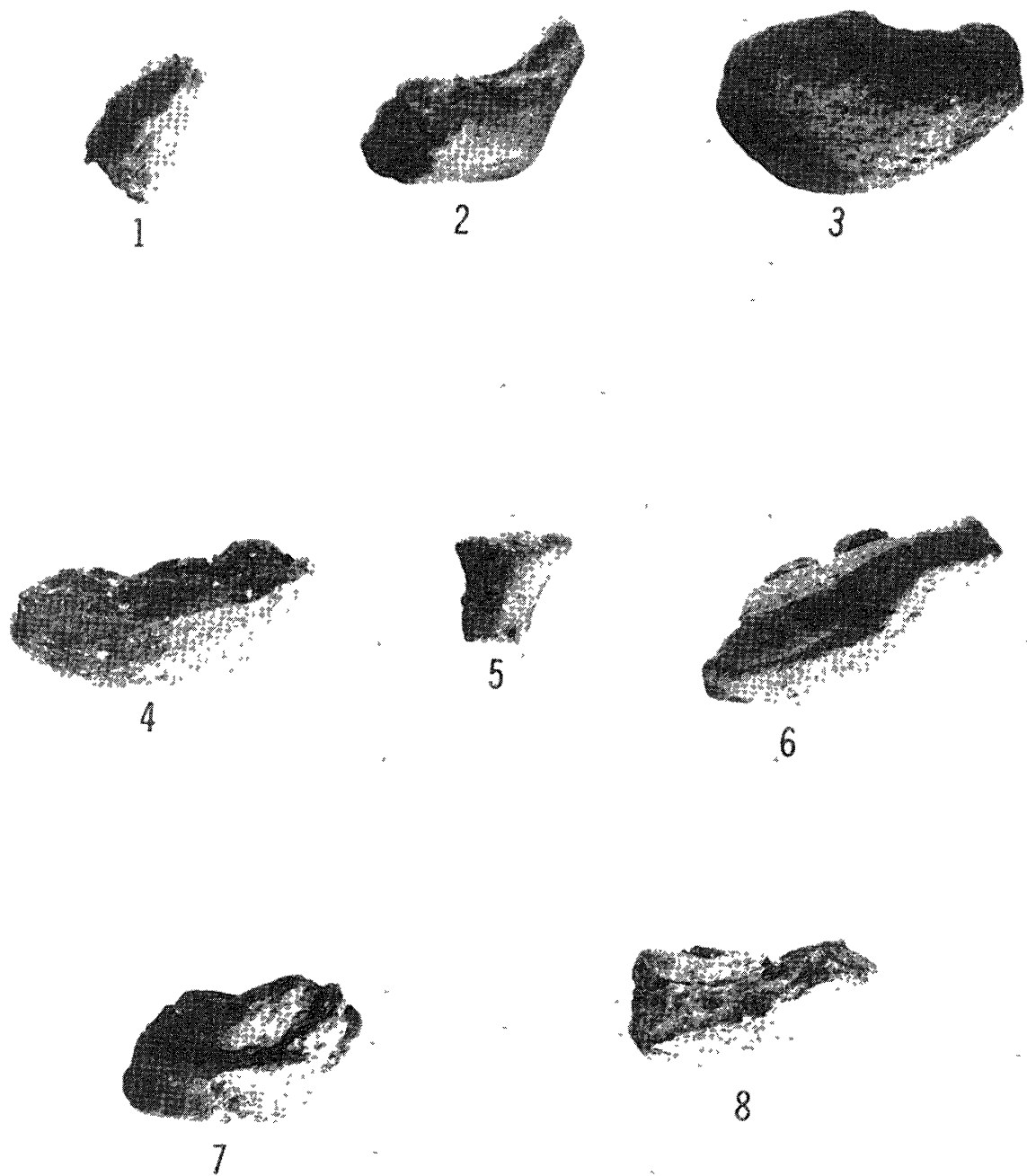
PL. 21 T. P. 区出土の土器



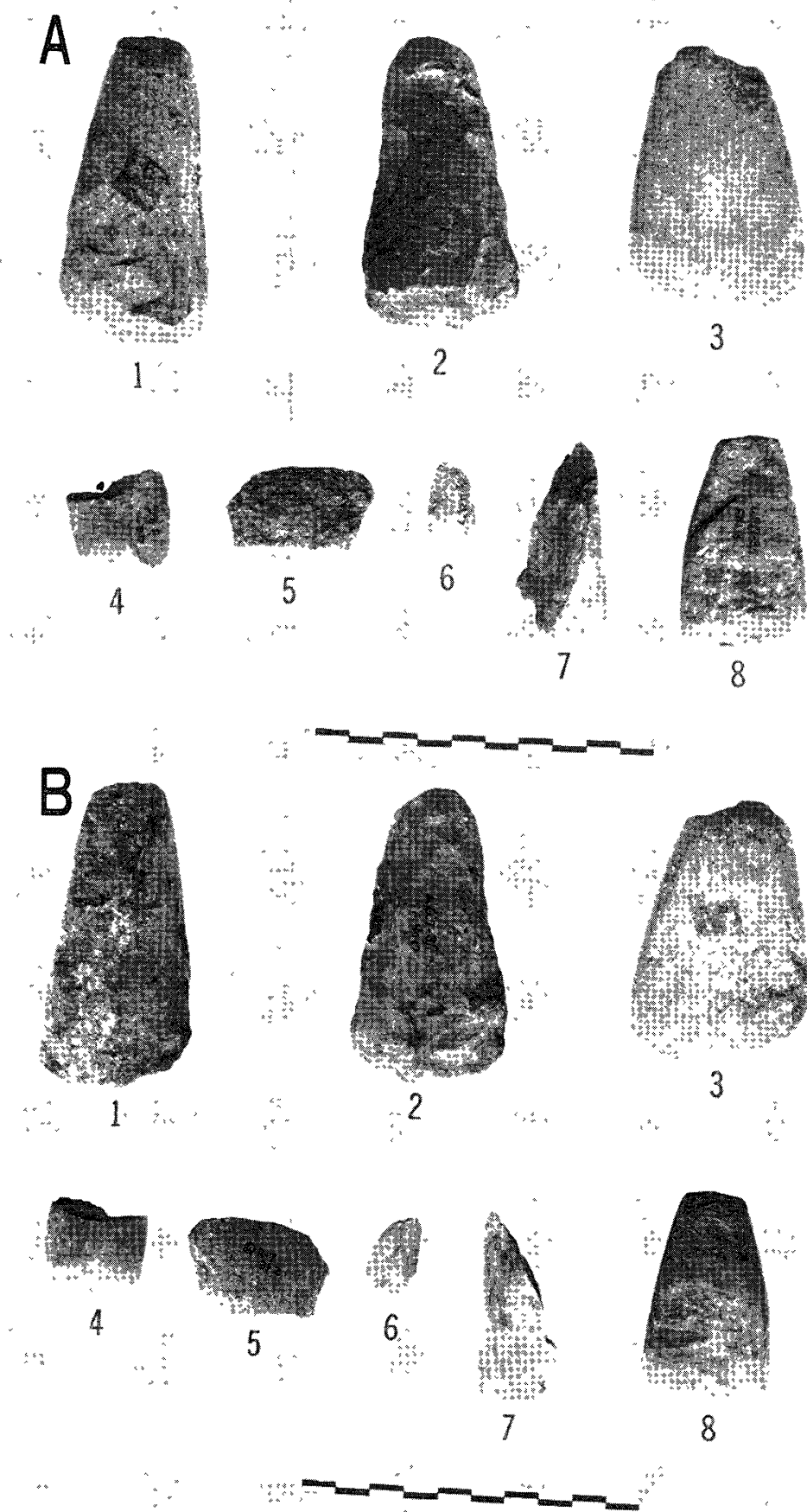
PL. 22 T. P. 区出土の土器



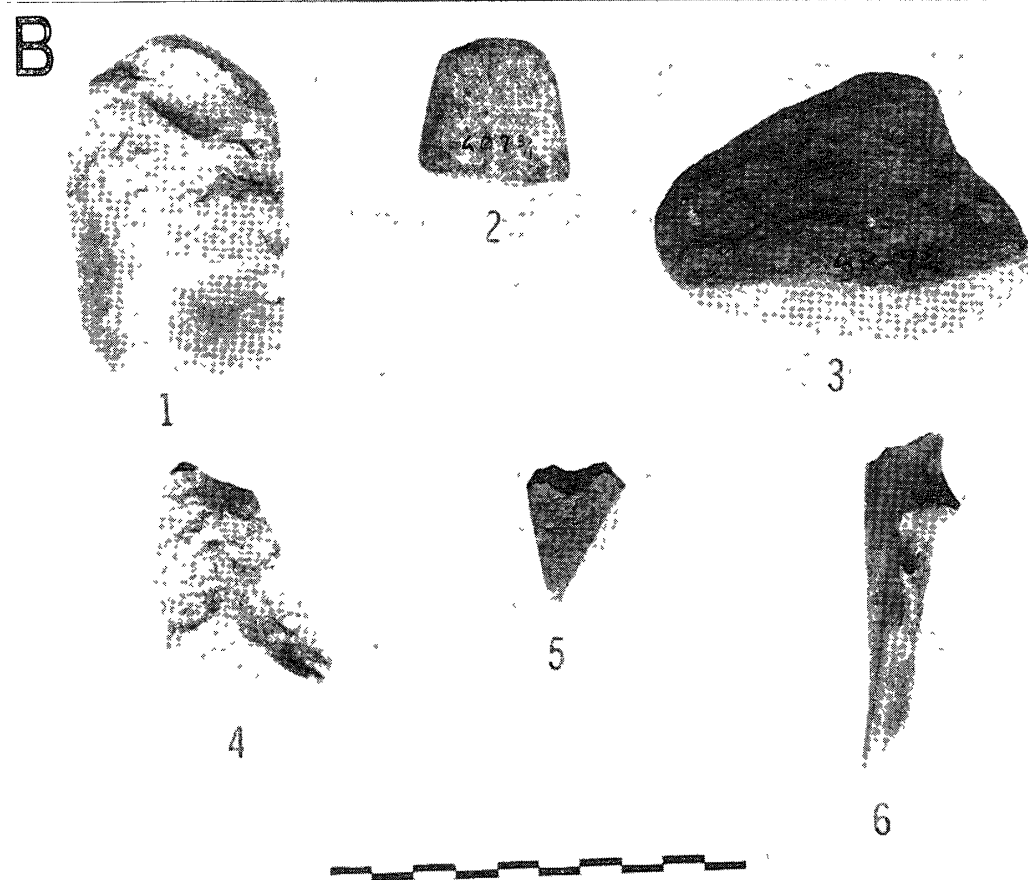
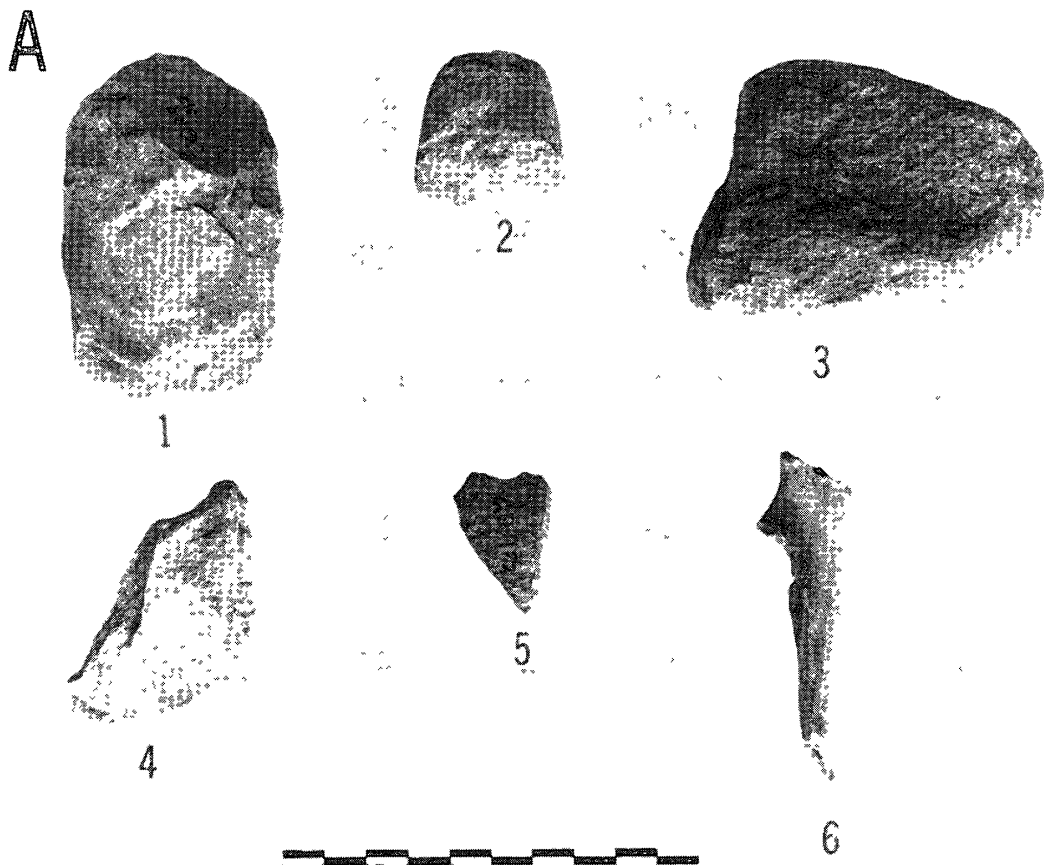
PL. 23 T. P. 16 区出土の土器



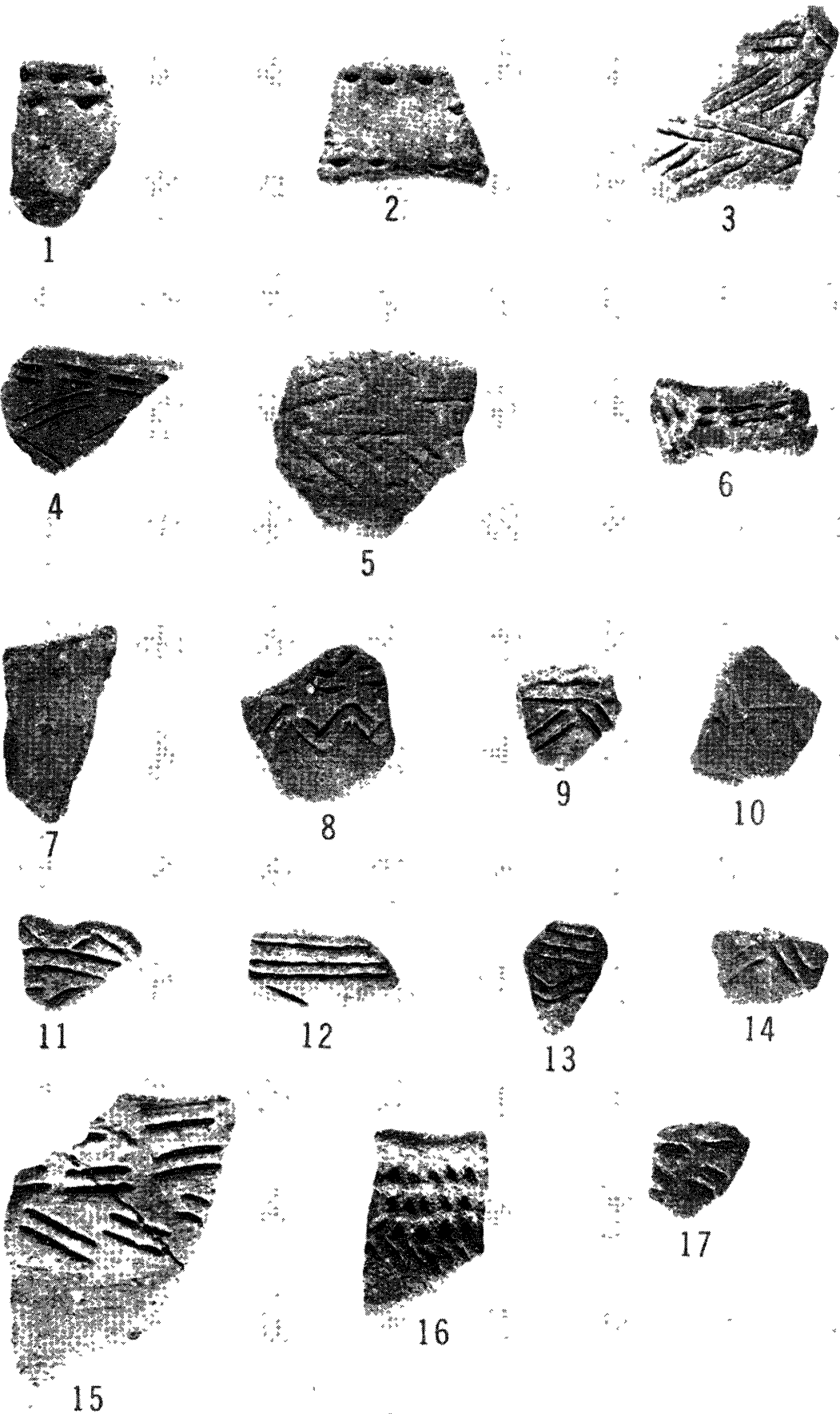
PL. 24 T. P. 区出土の土器



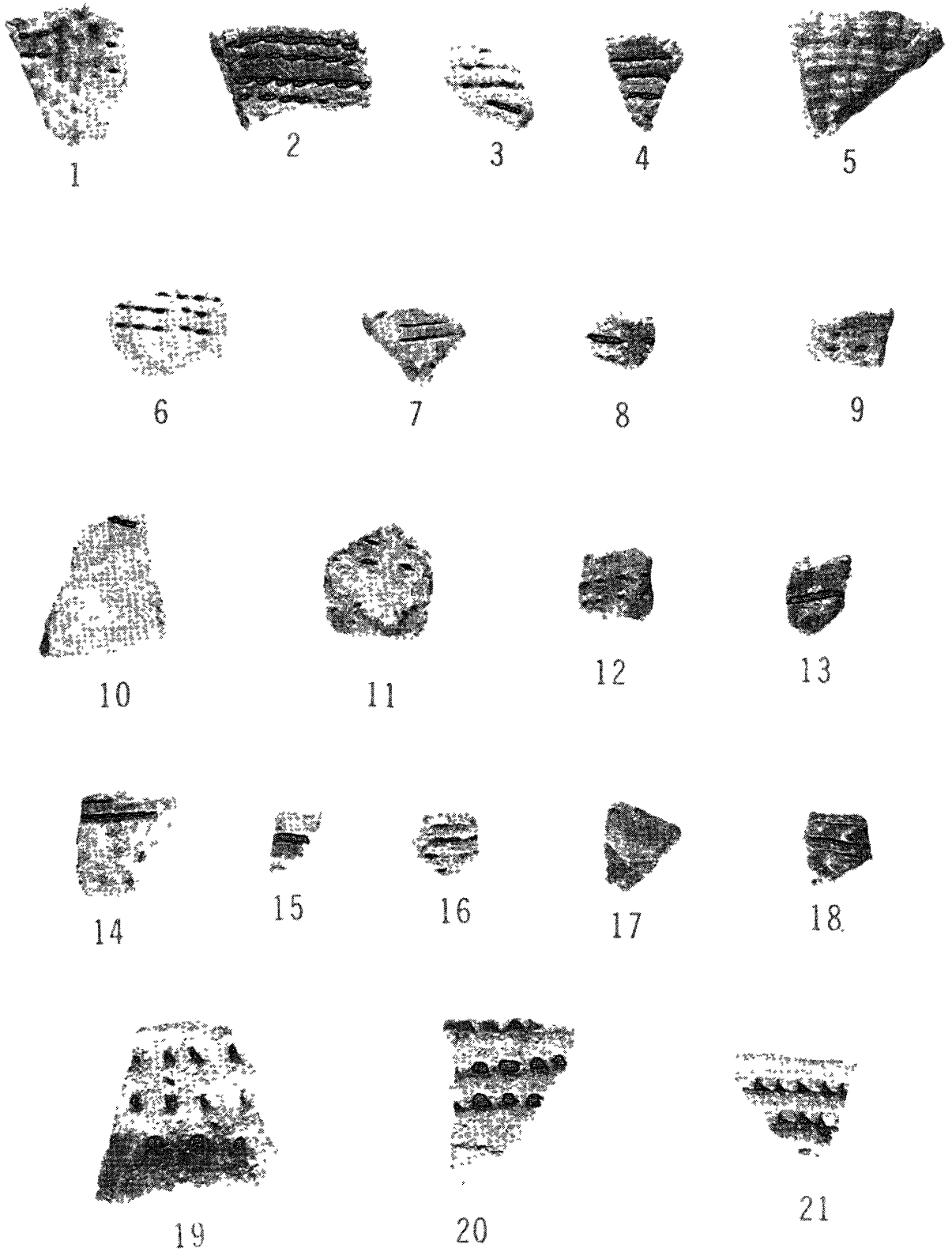
PL. 25 Q·R-7区出土の石斧



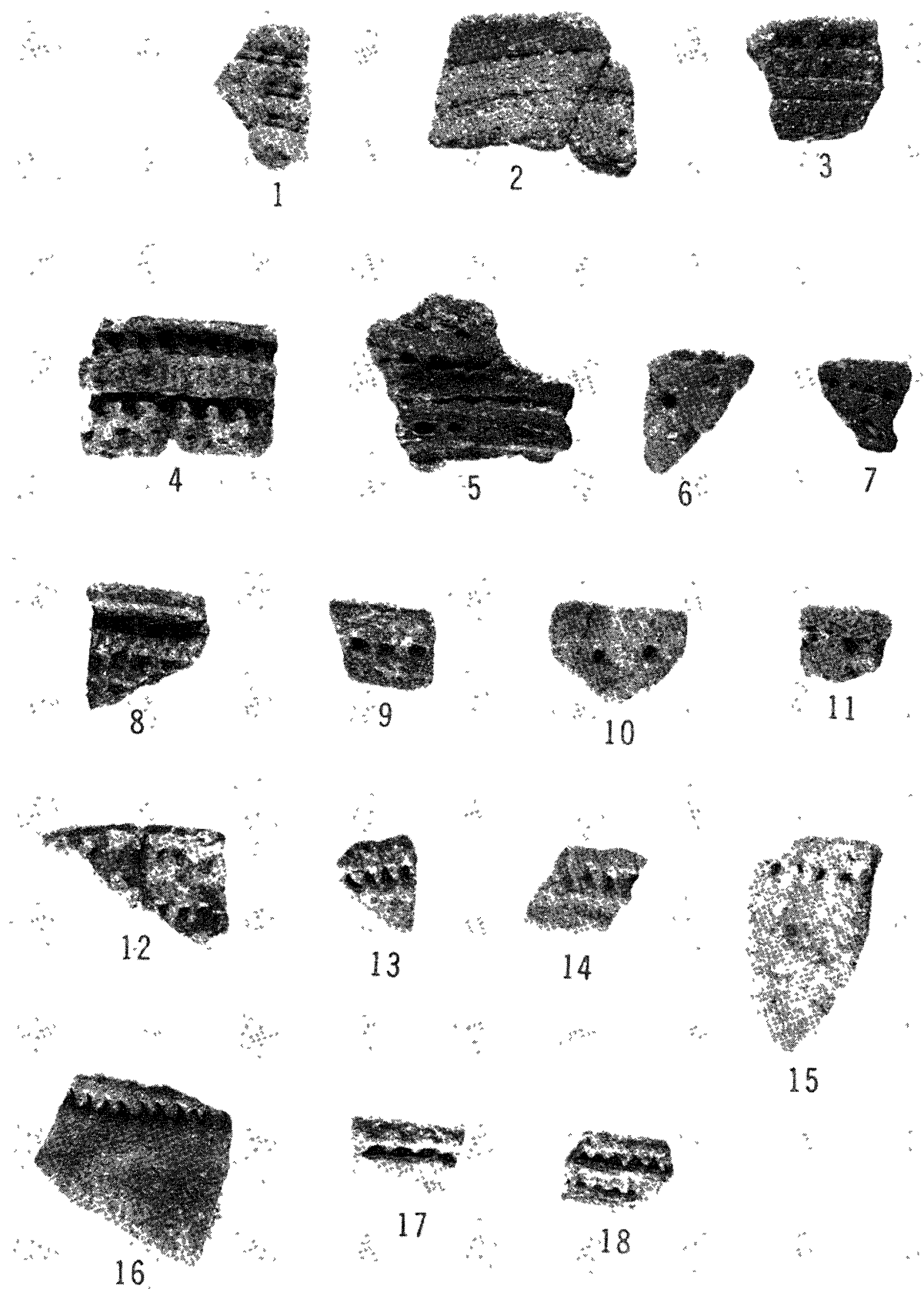
PL. 26 Q・R - 7区出土の石器および骨器



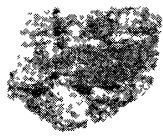
PL. 27 Q·R - 7区出土の土器



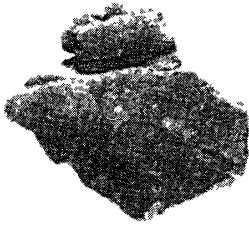
PL. 28 Q・R - 7区出土の土器



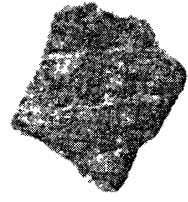
PL. 29 Q・R-7区出土の土器



1



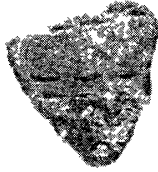
2



3



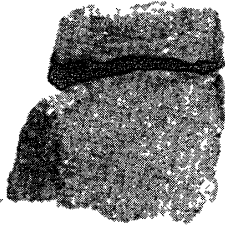
4



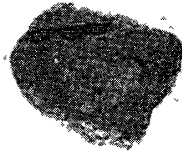
5



6



7



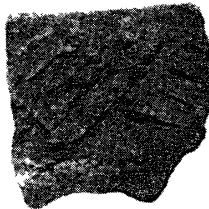
8



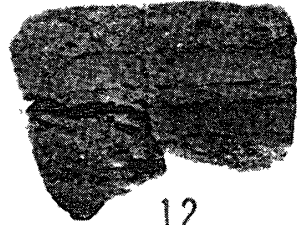
9



10



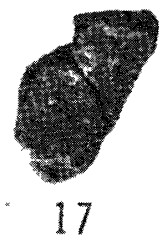
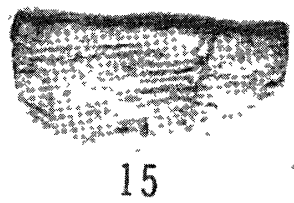
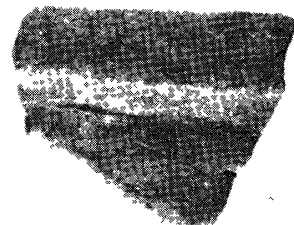
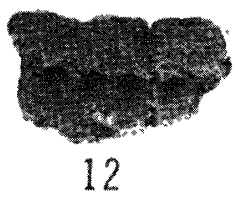
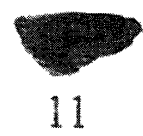
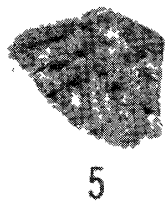
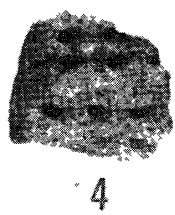
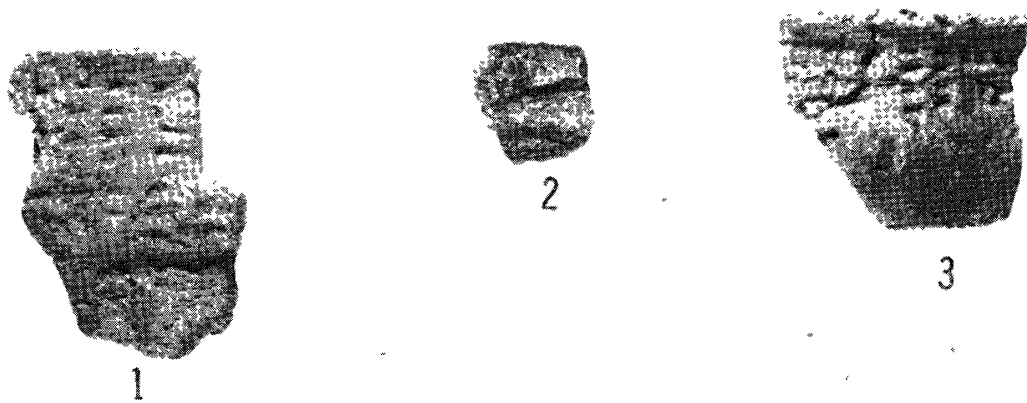
11



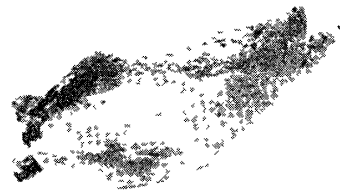
12



13



PL. 31 Q・R - 7区出土の土器



1



7



2



8



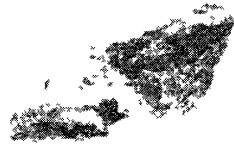
3



9



4



10



5



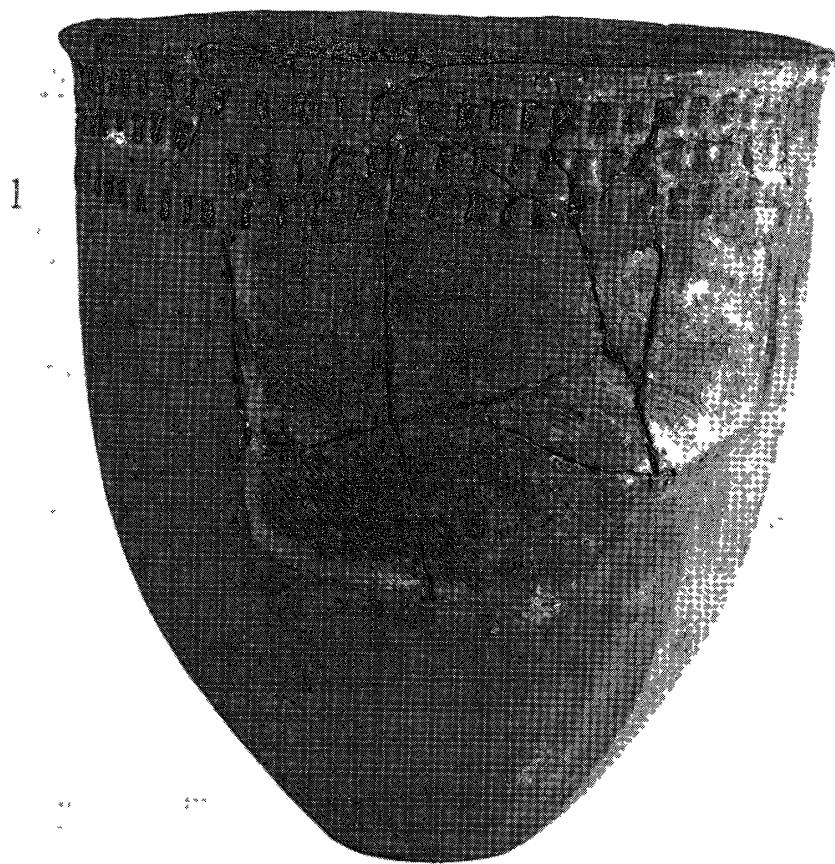
11



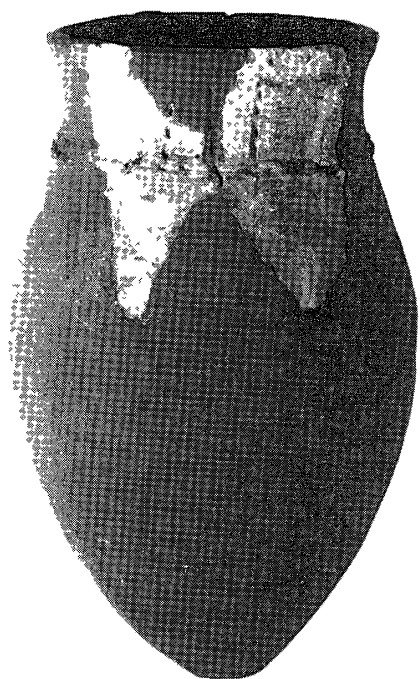
6



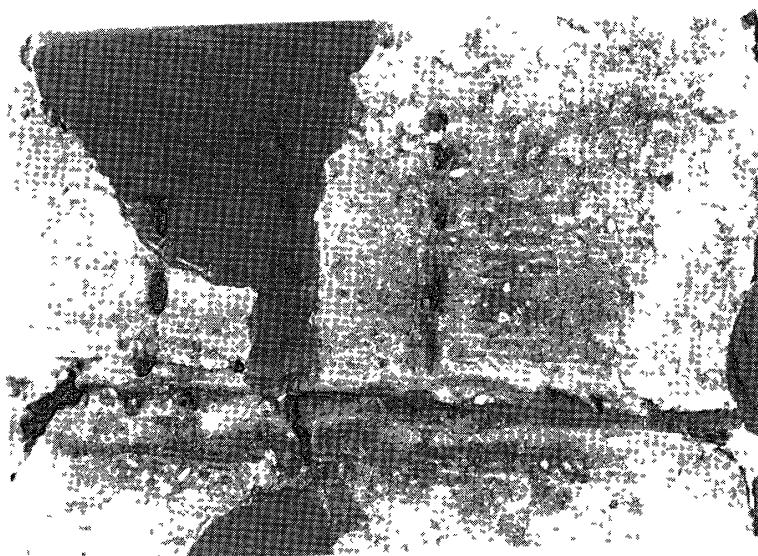
12



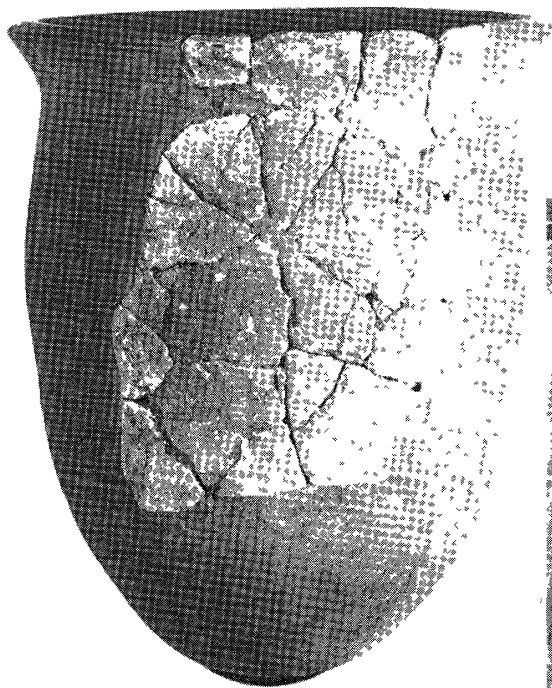
PL. 33 大山式土器(1=Q·R-7区第3層、2=Q·R-7区第3層)



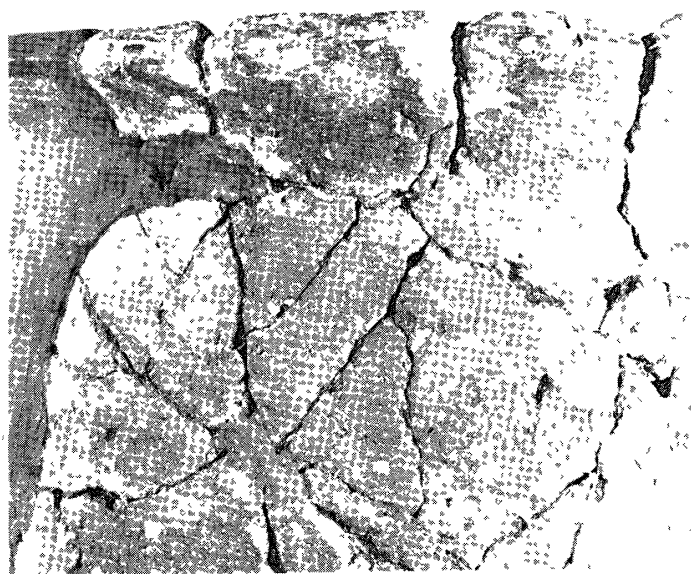
A



a

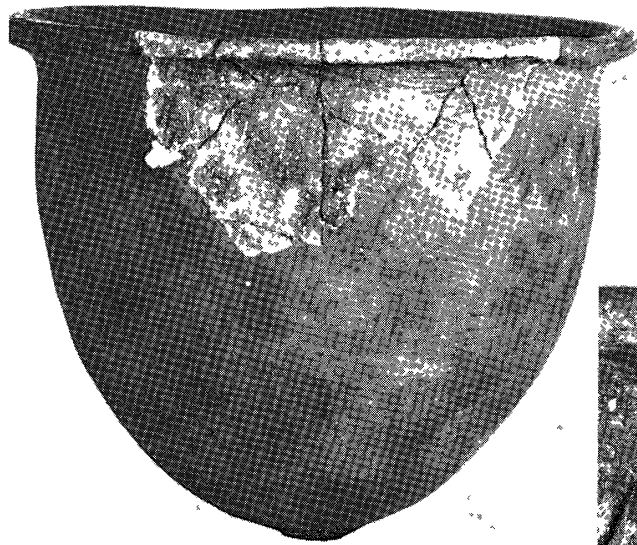


B

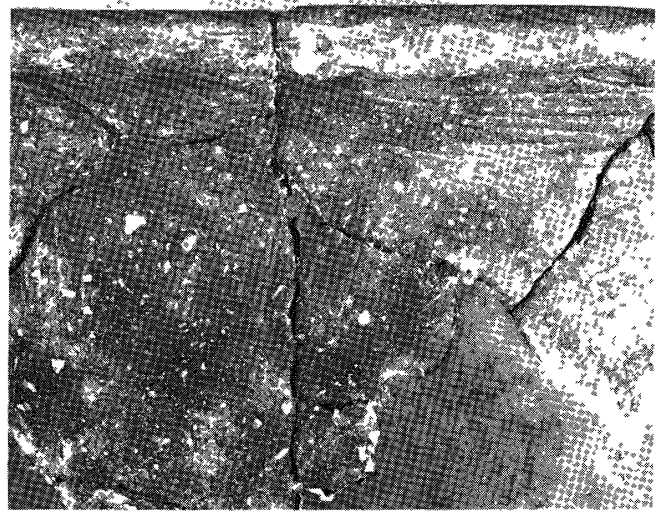


b

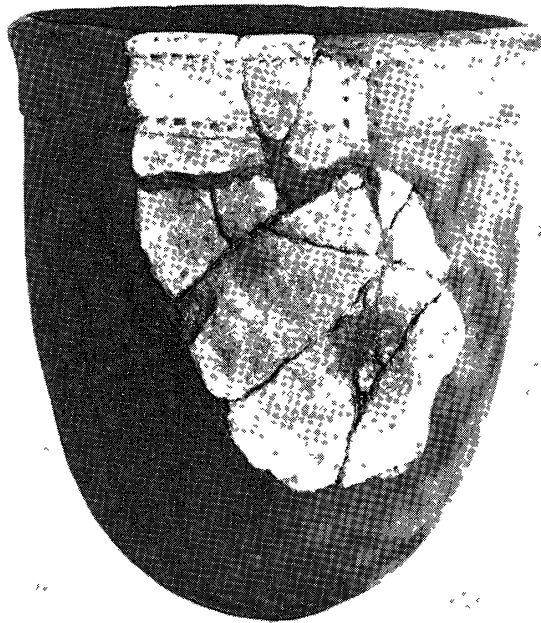
PL. 34 A=室川式A(T.P.区第Ⅸ層)、B=室川式B(T-16・17区第Ⅷ層),右列は拡大



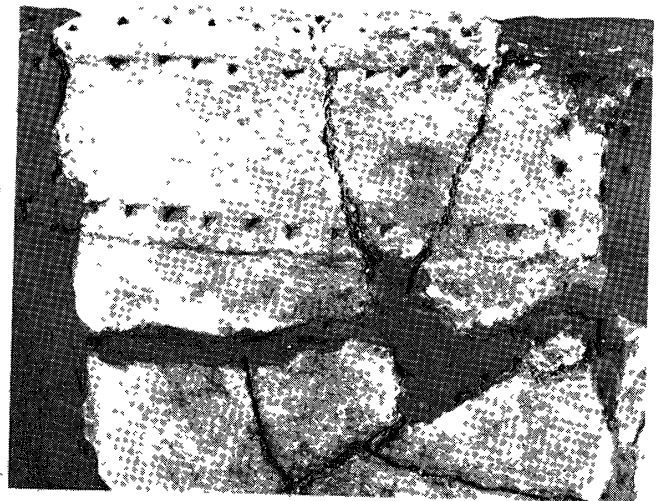
A



a



B



b

PL. 35 A = 室川式B(T-16・17区第Ⅶ層), B=室川期のカヤウチバンタ式(T-16・17区第Ⅷ層). 右列は拡大



A



a



B



b

PL.36 A=室川上層期のカヤウチパンタ式 (T. P.区第Ⅵ層), B=室川上層式A (T. P.区第Ⅶ層) 右列は拡大

冲国大考古第3号正誤表

頁	欄	行	誤	正
6	右	33	西半分に	西半部に
20	左	25	未だ	未だ
29	右	13	口縁型態が	口縁形態が
30	右	10	深鉢型である	深鉢形である
36	右	8	壺型は	壺形は
39	第16図	説明	16 シルト質泥岩層(基磐)	16 シルト質泥岩層(基盤)
49	左	19	室川式下層式土器	室川下層式土器
55	左	6	器食は	器色は
58	左	37	第23図1は	第23図159は
63	第20表		計 11 46 12 997 1,066	計 11 49 12 994 1,066
71	左	8	全然把厚しないもの	全然肥厚しないもの
71	左	11	口縁部の把厚するもの	口縁部の肥厚するもの
71	左	18	はザラザラである。	のザラザラである。
71	左	30	瘤状の突起	瘤状の突起
76	第22表		第Ⅲ層 20~30 の計 $\frac{20}{798}$	$\frac{20}{828}$
76	第22表		黒色千枚岩の計 $\frac{14}{330}$	$\frac{14}{360}$
76	第22表		総計 $\frac{140}{3079.65}$	$\frac{140}{3109.65}$
78	右	7	輝緑岩製	輝緑岩製
78	第23表		251 石斧 粗粒角閃岩	251 石斧 粗粒角閃岩
78	左	33	とり揚げること	取り上げること
80	左	5, 6	乳棒状石斧	乳棒状石斧
80	左	24	R-7 第3層	R-7 第2層
80	左	29	R-7 第2層	R-7 第3層
80	右	19	ようとしたかは不明である。	たかは不明である。
85	右	11	部で破損している。	分で破損している。
86	左	9	深鉢型の	深鉢形の
86	右	19	半截竹管工具	半截竹管工具

PP. 88、95、96、98、101、102 の深鉢型、壺型は深鉢形、壺形に

第16表 土器の型式別出土状況

層序	型式	伊波式	荻堂式	伊・荻不明	大山式	カバンウタチ式	室川式	室川上層式	宇佐浜式	奄美系	合計
表探							2	1	1		4
I								1	1		1
II		2	1	1				2	4	1	11
III		1	1	1	1			15	4(1)		24
IV		1			1	(1)	2	(1)	3	1	10
V											
VI		1		1(1)	(1)		11(1)	6(1)	2(1)		26
VII		2			1	1	19	1	1		25
VIII											
IX											
X											
XI		1					6(1)	1	1	1	11
XII							1				1
XIII											
XIV							1				1
XV											
XVI											
計		8	2	4	4	2	44	28	19	3	114

※ () は底部、伊・荻不明は伊波式か荻堂式か不明のもの。